

ダンジョンに英雄を、伴侶を、名声を、正義を、混沌を。果ては出  
会いなどを求めるのは間違っている

七海香波

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

潜れ、地の底へ。

探せ、誰も知らぬ最果ての奥を。

地の上を揺らす細波オラトリアに心囚われるな。

炎の海を渡り、電の雨を駆け、毒の風を掻い潜り。

前人未踏の真実最下層へ至らんとするものこそ、真の冒険者なり。

## 目次

### 『深々層』 攻略編

ダンジョンに英雄を、伴侶を、名声を、正義を、混沌を。果ては出会いなどを求めるのは間違っている	1
だから今日も俺は迷宮に潜る	15
第239層『遊毒怪廊』、そして	25
やれるもやれぬも、等しくやり遂げねばならぬ	38
「冒険者は冒険をしてはならない」	45
【漆黒の雷弾】、カッコ良い詠唱は必要じゃよネ！ b y変態工○好々爺	50
熾天の蝕毒と英雄ならぬ冒険者	61
『暗黒期』編	
決戦の予定と好ましからざる知らせ	80
神は踊らせ、人は踏み外し、歴史はまた巡る	90
【神々の給仕（ゴッズプライド）	97
「連中は俗に、一匹見れば百は居るといふ」	111
最善を目指す『正義』と最短の『外道』	121
クレス・■■■■と古の英雄紀行	134
「崇高なるもの、汝の名は『食』なれば」(サラ視点)	145
「餓える者は満ちるまで、食べぬ者は無理をしてでも——」(サラ視点)	152
点)	
グルメホリックな戦闘給仕と偽典恩恵(サラ視点)	162
真の心を引き出す(サラ視点)	174
神意を食らう悪意、それを食らう熱意	182
「——出来なければ貴様らに次の朝食がないまでじゃ」(サラ視点)	

狂乱の精霊は食卓へと還り、死の槍が空高く飛翔する(サラ視点)

198

他力本願なぞクソくらえ、『運命』なぞ超えてなんぼの冒険者道

Y 迷宮馬鹿

荘厳なるかな九つの鐘、闇夜拓く明星剣

「——悪いな、気が変わった」

さあ謡え。彼らは今日も、明日を征く……

【おまけ】クレスの三分(大嘘)??悪派闊クツキング!

×××もある

よ

244

間章：2023冬イベ

フロンティア☆クリスマス〜深々と降り積もれ、甘雪の祝福よ

257

『カリギュラの船』編

プロローグ：夜天に囁く + 静養の冒険者

264

変態どもと怒れる乙女たちの、ちよつとした一騒ぎ

272

搜索依頼：【消えた少女の行方を追え】

282

「罪人狩り(クライム・ハント)の開催をここに宣言しよう」

288

吟遊詩人マーカス・ダルサス(マルクス・ドウルースス)

300

水平線が太陽を呑み、世界は月の祝福に満たされる

312

古の情景、実るは奇妙な『事実』

320

月下の号令

326

汝、星を穿つ白銀

334

《エーゲリアの受胎儀式》

345

189

【君よ、一を拓く炎熱たれ（アナムネシス・イーリア）】—— 352

エピソード：かくして筆は置かれ、名もなき英雄は次の冒険へ向か

う—— 364

幕間：それは希望が実る霊峰の巡礼—— 373

『双花魔人譚（モンストルム・オラトリア）』編

絶対至死領域ドウアト・アヌビウム—— 382

恩恵封印—— 392

## 『深々層』 攻略編

ダンジョンに英雄を、伴侶を、名声を、正義を、混沌を。果ては出会いなどを求めるのは間違っている

誰が呼んだか、オーバーロード・デッドライン死線を超えた死線——『深々層』。

第一級冒険者でさえ気軽に潜ることを許されない深層域の、更なる先。

迷宮都市オラリオにおけるかつての二大双傑、ゼウスとヘラのファミリアでさえ手の届かなかった、人知の及ばぬ迷宮の奥深くを示すそのような言葉がある。

だが、それも考えれば可笑しな話だった。

この名称の存在を一般人が知れば、彼らは「ただ一括りに『深層』と呼称してしまえば済む話だろう」と首を傾げるに違いない。

されどこの名は、確かに誰かが存在意義を認めたからこそ生まれたのだ。

かつての最強さえ届くことのなかった、アシノウン未知。

それと既知の領域とを明確に区別すべき理由があったからこそ。

そう……公には決して語られないことがない、秘匿されし冒険がそこにあつたから。

天より鳴り響く無数の轟雷と、見渡す限り大地を占有する灼熱の溶岩。

阿鼻叫喚の振動が空間を絶え間なく震わせて、焼け爛れ歪まされた大気が蜃気楼を生みだす。

空前絶後の災厄に挟撃された悪環境、未だ公的な名のないフェスティバル『雷火祭天』——ダンジョン迷宮第238層。

その辛く険しい世界を、かの冒険者はただ独り、己の葬ったモンスタードロップアイテムの遺した素材を足場に疾く駆けていた。

外見上は、20代後半ほどの男子。

揺らぐ炎の如く明滅する金と朱の外套を羽織り、背中に多種多様な武装が顔を覗かせる巨大背囊を負っている。

周囲に満ちる高熱から身体を守るためか、一切の素肌を見せないよう外套と同じ素材を由来とする布を顔面にまで巻き付けており、その表情は分からない。

しかし、唯一外に出した両の灰瞳だけが、注意深く世界を観察していた。

ぴり、と彼の肌に伝う僅かな刺激。

それを感じるや否や、反応が神経を伝って脳に届くより早く、彼は足場にしていた炎竜『バハムート・ルティヤ』の鱗から飛びのく。

刹那、落雷——眩い光と衝撃が、つい一瞬前まで彼の居た座標目掛けて降った。

それに目もくれず、彼は即座に撃ち落とした怪魔鳥『ガルーダ・フェノメノン』の落下中の身体を足場にして、少し離れた位置で溶岩に沈みかけていた炎竜の頭骨に飛び乗った。

文字通りの『雷 雨』、怒濤の雷が雨粒の代わりに降り注ぐ地獄絵図。されどこの程度は彼にとつての日常茶飯事であるが故に、慌てることもない。少なくとも十数層前の、一面が鏡張りの階層『鏡面世界』にて虹色の光線をやたらめつたらに放ってきた難敵を前にした時に比べれば楽な方だと、彼は内心想っていた。

そんな彼の隣に、また別の炎竜の個体が溶岩から姿を見せる。

その目は煌々と赤く血走っており、嘴をカチカチと打ち付けながら、目の前の小さき狼藉者に対して怒りを露にしていた。

「……メスカ。番の敵を取りに来たと見える」

先に葬り去っていた個体との僅かな違いを看破し、クレスは察する。

彼女は襲撃者によつて殺された夫の、敵を討ちに来たのだと。

モンスターを抱く復讐心。地上を闊歩する人間と何ら変わらぬその感情を前に、彼は同情より早く己が武器を引き抜き様に振るう。

敵は溶岩を鎧代わりに身に纏う竜。這い出たばかりで熱を保つそ

の鎧は柔らかく重く、斬撃より打撃の方が効率的と見える——となれば。

彼は背囊から選んだ名もなき大槌……地上の鍛冶師が見れば卒倒するほどの高級素材を惜しみなくつき込んだ金属塊を、口から熱線を吐こうとしていた炎竜の横つ面目掛けて叩きつけた。

——雷鳴と同等の重さを誇る衝撃が、空間に罅を入れ、竜の頬骨を粉微塵に砕く。

グギャ、と悲鳴を上げて溶岩に倒れかけた竜だが、それでも竜種らしい頑丈さで構わず口腔にため込んだエネルギーを解き放たんと、ヒレのような脚で溶岩の海をしっかと踏みしめ体勢を立て直す。

だが、すでにクレスは彼女の目前から姿を消していた。

果たしてその姿は彼女の背中にあり、次なる攻撃への準備を終えていた。

「——《プロメテウス》」

無詠唱。

加えて背後に展開した四重の魔法円を経て発動した炎が彼の指先に凝縮・装填され、極小の太陽が出現する。それを彼は一本貫手の要領で、冷えかけていた炎竜の背ヒレの溶岩鎧目掛けて解き放った。

溶岩に住まう炎竜の鱗は当然、高い炎熱耐性を持つ。されど彼は魔法で、冷めて頑丈になっていた鎧を吹き飛ばせればそれで十分だった。

既に槌をしまった右手に改めて握った純緋々色金製の槍を、生み出した弱点目掛けて滑り込ませる。

幾重にも重なった鱗と肋骨を潜り抜けた切っ先が、核たる魔石を穿った。

そうして炎竜の雌はあらゆる魔物の例にもれず息絶え、発達部位であつた嘴を残して黒い塵となり消えた。

「…………ふむ」

地上にあればあらゆる魔道具作成者にとって垂涎の的となるそれに、クレスは只の足場としての価値しか見出さなかった。炎竜の嘴を踏んづけて着地したクレスは、それが溶岩に沈むのを放つておい



て、次なる足場目掛けて跳ぶ。

そうして辿り着いた先で周囲を見渡し、またつられてやってきたモンスターを撃破して仮の足場を作る。

それがここ一か月近くの、彼のここ238層における探索冒険だった。彼が探しているのはむろん、下層へと続く階段。

しかし、この階層全体を覆う高熱による陽炎と蜃気楼がそれを妨げているのだ。

見渡す限り溶岩の平地、されど熱により光が歪められているせいで、正確に遠くを見通すことが難しい。

一歩間違えれば溶岩へドボンということもあつて彼の攻略は遅々とせざるを得ず、そのおかげで半年近くその存在を発見できず足止めを強いられているのが現状なのだった。

「……ちっ」

舌打ちを漏らしたクレス。

再び肌を襲った先走りの電流落雷の前触れから身を翻した彼の眼には、上階237層の足場たる黒鉄雲アンククラウドからぬるりと降り立った積嵐蛇『サンダース・スリザリン』の群れが映っていた。

無数の鉄粒子が互いに擦れあうことで静電気をまとい、磁力を帯びて宙に漂う。それが積み重なって形成された雲の中を悠々のごとく泳ぐ彼らもまた磁力を纏っているのは自明の理。

あれらを敵にするには、金属製の武器は邪魔になる。

彼らの周囲に浮遊する鉄粉が刃に纏わりつき、切れ味が落ちてしまうが故に。

よつて、クレスはまた別の武器を取り出した。

生物由来の素材を糧に生み出された『呪武器』、魔剣「ネガ・ファトム」。

己が生存の可能性を代償に目前の勝利を手繰り寄せるといふ、異質な魔剣。

しかしもとより、冒険者とは黄泉路に張られた蜘蛛糸よりもか細い勝機をつなぎ渡る者。

そのように考えるクレスは、必要とあらば躊躇なくこの剣を振る

う。

「ネガ・ファトゥム」の効果は運命属性、斬った相手の運命を敗北に収束するというもの。

その力を開放して一振りで五十の群れを黒塵と化した彼の身体が、今度は強い横からの衝撃に押され吹き飛びかける。

「ぐっ——!?!」

ちらりと見えたその攻撃の正体は、金剛石の巨兵『オベリスク』の拳。

その質量と速度を過剰に伴った一撃がクレスの身体を弾丸の如く階層に端まで吹っ飛ばしかけるが、そうは問屋が卸さなかつた。

残心からすぐさま剣を納刀したクレスはその強固な腕を回避するとともにむんずと掴み、武の理を以てその巨体を投げ飛ばした。

溶岩に背を打って倒れ込んだ巨兵、対して背負い投げの反動を利用して宙に飛んだクレスは再び大槌を取り出し、重力の勢いと更に縦回転を加えてその心臓部目掛けて衝撃を打ち込む。

敵の膂力を利用し隙を生み、残った余剰の力を注いで弱点を打ち据える。

その必殺技の名は。

「『グラウンド・ゼロ』」

破碎。

超高密度の鉱石の身体を豆腐のごとくひしゃげさせ、内部の魔石を槌の柄より伝えた浸透勁により粉々に打ち砕く。

素材も残さず消え去った魔物巨兵だが、残った所で足場にしかないので大した落胆もない。

適当に近くを泳いでいた炎魚を次なる足場にして、一休みする。そうしてしばしそれが泳ぐがままに身を任せていると——突如、彼の眼が色めき立つ。

彼の視線の向かう先に存在していたのは、溶岩流の流れ込む滝壺だった。暴力的なまでに水飛沫が、否、溶岩飛沫が飛び散り舞う火炎の大瀑布。

「……あれは」

その淵に立ったクレスが目を凝らすと、流れ込む溶岩流の僅かな隙間に、ちらりと色の異なる黒い穴が見え隠れしていた。

それはようやく見つけたこの灼熱世界の異物にして、恐らくは次なる階層へと繋がる出口にして入り口に違いない。

そう考えたクレスは何の躊躇もなく、紅蓮の滝壺に自ら飛び込んだ。

「……！」

この階層に潜るに相応しいステータスを以てすれば、大気を蹴るのも訳はない。

まるで大砲のような音を鳴らしながら何も無いように見える空中を二歩ほど踏みしめ、彼は見えていたその場所へと立った。

そしてそこに存在していたのはやはり、階段であった。

本来ならば躊躇なくそこを下るつもりであったクレス——だが。

そろそろ主神より命じられている帰還の時であることを体内時計で察した彼は、ここでキリ良く冒険の中止を決定した。

「戻るか」

『深々層』においては、あまりに深すぎるが故に神ファールナの恩恵の繋がりによる感知が困難となる。だからこそ、彼は己の生存を知らせるため、一年に一度は地上へ戻らなければならない。

それが彼に自由な探索を許している主神との、数少ない約束の一つだった。

「【我は此処にありて、尚あらざる者なり】——【シユレディンガー】」

その名を詠うとともに、彼の輪郭が徐々にぼやけていく。

存在が希薄化し、虚ろのように宙に溶け、やがてこの階層から完全にクレスの姿が掻き消えた。

「——という訳でようやく次への階段を見つけた。ロイマン、次からは2339階層の探索を開始する」

「あああふざけるな貴様というやつはまた！ 聞こえんぞ、私には何

も聞こえんかったからなあ！」

迷宮都市オラリオにおいて冒険者たちを統括するギルド、その実質的な支配者とはすなわち都市の長とも呼びかえられる。

しかしその肩書きに似つかわしくないほど醜悪に肥満化したエルフ族のロイマンは、かろうじて己が種族の証拠として残っている長耳を必死に両手で押さえつけ、目の前の常識外の言葉を記憶から忘れ去ろうとした。

しかし彼からして目と鼻の先に座り呑気に茶を啜っている件の冒険者及び、その身に纏う今のオラリオには縁の遠すぎる素材たちの放つ圧倒的な存在感が、彼の優れた知能にどう足掻こうと現実逃避を許さなかった。

「おまつ、お前、お前というやつは！ いったいいくら私に胃薬を買わせれば良いのだ!? ゼウスとヘラのファミリアがいなくなつて停滞しつつある今のオラリオにて、平然と一歩どころか二百歩も前を歩いておいて！ まだ先へと平然と進んでいくんじゃない！」

「知らん。冒険者とは冒険するものだ。ならばダンジョンを攻略する俺のどこが間違っている？」

「時代を先取りしすぎなところがだ アンタツチャブル 【禁 忌】！」

それが彼、クレス・カラストロフ——過去現在、そしておそらく未来に至るまで比肩する者のいないであろう、現オラリオ最高にしてレベル21の冒険者であった。

「まあた貴様のせいで秘匿しなければならなくなった情報が増えた！」

これもそれもあるもどれ第一級冒険者どころか神々にさえ隠し通さなければならぬものばかり！ こんなもの一々持ち帰ってくるなこの迷宮ダンジョン・ドラゴンカー狂いが！」

「何故だ。『深々層』の情報を持ち帰れと言ったのはお前だろう、ロイマン」

「持ち帰られても今のオラリオでこれを活用できるのが貴様だけな以上、その存在価値は無どころか負マイナスだからだ！ それが分かつて以降余計なものは何一つ持つてくるなど言ったはずだが——」「ちゃんと

われた通り、余計そんなものは捨ててきたが」——まだ配慮が足らぬのだと分かれ！ 良いか、今の停滞しつつあるオラリオにとつてお前とそれに付随する全ては劇物でしかないのだ！」

クレス・カタストロフの名とその偉業は、徹底的に隠蔽されている。彼の存在を知るのは彼本人と彼の主神、ギルドの真の長たるウラノス、そして他のファミリアへの情報漏洩を完璧に防ぐために他のギルド員を使うことができず、否が応でも彼の担当にならざるを得なかったロイマンのみである。

ロイマンはクレスの提出した書類を全て読んだ後、彼の<sup>プロメテウス</sup>火によって焼却させている。後は口頭でウラノスにその内容を伝えて、これで彼らの頭の中になしかクレスという冒険者の情報は残らない。

こうでもしなければ、どうなるか。

次なる覇権を求めるロキとフレイヤのファミリアの両方は彼を取り込もうとするだろうし、そしてクレスがそれらに対して反応する——それは控えめに言つて、オラリオの終焉である。

ロキはまだいいだろう。天界での評判はともかく、今の彼女はクレスに断られれば表立つての勧誘を諦めるほどには穏当な女神だからだ。

しかしフレイヤ・ファミリアはそうもいかない。アポロンほどではないにせよ、あの女神の見せる執着心は並々ならぬものだ。そんな彼女がひとたび彼にちよっかいをかけ、誤つて逆鱗にでも触れてみれば……これまでの秩序がドミノ倒しの如く崩れ去っていく。

そんなことが容易く想像できてしまうがゆえに、これまで通り甘い汗を吸い続けていたいロイマンはなんとしてでも現状を維持すべく、全てを己一人の身体に抱え込まなければならなかったのだ。

そりやあもう、肥満体になるのも無理はないストレスだった。

そしてそれを顧みることなく、今度は『深々層』から持ち帰ったのであろう未知の果実をお茶請けとして悠々とかじる馬鹿<sup>クレス</sup>。

「ぱくぱく……いっつくん……ふうー……そうか」

ロイマンはこの礼儀知らずな冒険者に、いつも通り内心で当たり散らした。

——これだから冒険者は！<sup>愚か者ども</sup>

「そうか、ではない！ 貴様はいつもいつも……自分が地上に与える影響を考えろ！」

「そうは言われてもな。俺は冒険をするだけだ。俺と同じだけの熱を迷宮に注げばこれほどのこと、他の誰でも出来よう。それをしない連中の怠慢の責任を俺に押し付けられても正直……困る」

今のオラリオに蔓延っている空気のことを、クレスは主神づてに聞き及んでいる。

そのどれもが、彼にとつては些事だつた。

【英雄】、【伴侶】、【名声】。【正義】、【混沌】、【出会い】。そんなものを目的としている限り、迷宮の攻略はいつまで経っても終わらない。冒険者は本来、ただそこにある迷宮を攻略する者だ。その過程でついでに拾えるものを目的として、冒険者の意味をはき違えている限り、連中が俺に追いつくことはない。……それで、悪いのはどちらだ？」

これで報告は終わりだと言わんばかりに、クレスは飲み切った湯呑を置いて席を立つ。

その背をロイマンは引き止めない。引き止められない。

何故ならギルドの権威を笠に着て言うことを聞かせられる相手ではないのだから。

今のギルドが率いることのできる最大戦力を、クレスは片手間に蹴散らすことが出来るのだから。

三大冒険者依頼すら「面倒だ」の一言で断ることを許される、傲慢。それこそが触れてはならぬクレス・カタストロフという存在だから。

「ふんっ！」

ロイマンが一つ瞬きをした次の瞬間、クレスの姿は彼の前から完璧に消え失せていた。

どうせ来た時と同様に転移魔法で姿を消したのだろうと、鼻息荒く椅子に背中をぎしりと沈み込ませたロイマンは、愛用の胃薬を飲み込みながら今日も毒づく。

「好き勝手しおつて。……誰もが貴様ほど真面目になれるわけではないのだ、【アンタツチャブル禁忌】」

これほどのストレスに晒されているのだから、やはりちよつとくらの不正など許されてしかるべきだ。

そう考えて手慰みに帳簿上の数値を弄びながら、ロイマンは次に彼が帰還することになる一年後に備えてひと時の安寧に精神を委ねるのだった。

なおこの後の主神との適当な約束で半年後に突然戻ってきた彼の面会に不意打ちを受けることを、今の彼はまだ知らない。

ギルドが存在するバベルには、その利便性から数々の神が居を構えている。

クレスの主神もまた、その例に漏れなかった。

ただし彼女は「馬鹿と煙はなんとやら」と言い放ち、その他大勢が好む高層階とは真逆の地下20階をファミリアの本拠地として指定していた。

ウラノスの祭壇のほぼ真上に存在する、通常の昇降機エレベーター操作では辿り着くことが出来ない階に降りたクレスは、一年ぶりによく己の家たる『アラモス時空の狭間』へと帰還した。

そこにあるのは、こじんまりとした二階建ての家だ。

彼が迷宮ダンジョンから持ち帰ってきた疑似太陽アナザーサンによって、地上と変わらぬい明るさが広がる地。

その中を家へと向けて歩を進める彼を、恩恵の近づく気配を察した主神が出迎えた。

「おかえりだね、クレス。今回も五体満足で帰ってきてくれて嬉しいよ」

「ただいま、我が主神カオス。幸いにして貴女の恩恵を上回るモンスタ―に出くわさなかったからな」

漆黒の長髪に波打つ青と赤の摩訶不思議なグラデーションが特徴的な、女神カオス。

彼女が地上に初めに降り立った原初の神々たちの一柱にして、クレスの主神だった。

「では恩恵の更新を」

「ええ……それより先にご飯にしない？ 私の手作りだよ。冷めちゃうともつたいないじゃないか」

「いや、先に更新だ。更新後のステータスに慣れるための時間は、一刻でも惜しい。それに、以前買った魔道具があれば元通り温めなおすこともできるだろう」

「そうだけどき……出来立てを食べてほしいのは神も人も変わらないんだからね。それでも君の我儘を優先してあげるんだからさ、もつとこの寛大な女神に感謝を捧げなよ」

「いつも感謝しているとも。だから俺がいない間に贅沢をするだけのお金をちゃんと残していつているだろう」

「そういうことじゃないんだよ！ ホント、どこで育て方を間違えたんだか……」

ぶつくさ言いながら、地べたに座り込んだクレスの背中にカオスが神血イコルを垂らす。

女心をまるで知らないド畜生だがそれでも愛してやまない眷属の前に、彼女はパパッと恩恵を更新する。

「……はい、終わったよ」

神聖文字ヒエログリフを転写した紙を受け取り、クレスはざっと流し見る。

クレス・カタストロフ

L v . 2 1

力：B 7 6 7 耐久：C 6 5 0 器用：S 9 8 9 敏捷：B 7 8 8

魔力：B 7 0 1

耐異常：A 精癒：B 回避：B 暗視：A 耐■：S

適応：C 心眼：A 合気：B 魔導：C 神秘：B

鍛冶：D 集中：B 耐魔：C 挑戦：D 節睡：E



『スキル』

アルミギア・ミリフレクス

【斬打巧撃】

・適正属性による近距離攻撃威力上昇。

・弱点特攻

ダンジョンアタック

【強魔弱人】

ダンジョン

・迷宮産魔物との戦闘時、ステイタス能力の大幅な上昇。

・地上における人間種との戦闘時、ステイタス能力の大幅な低下。

カタラスモノ

【寡黙不語】

・魔法の詠唱破棄可能。

・詠唱破棄時、魔法威力の減衰。

オデユツセイア

【深淵踏破】

・未知の環境を冒険する時限定で、幸運アビリティを一時発現。

・既知の環境を冒険する際、幸運アビリティを一時喪失。

ソロ・アタッカー

【孤高独学】

・仲間の不在時、迷宮攻略における能率超上昇。

・同じ信念を背負う真の友を得た時、このスキルを喪失する。

???

???

???

『魔法』

【プロメテウス】

・火属性。

詠唱式：『原初の火よ、人理の歩みを照らせ。大神より磔刑を受けし

貴神あなたに敬意を捧ごう。精神こころ在る限り我が歩みは終わることなどなく、

やがて英知の指し示す果てへと至らん』

【シユレディンガー】

・非被観測時限定転移魔法。

・魔力消費量の多寡により移動可能距離変化。

詠唱式：『我は此処にありて、尚あらざる者なり』

【■■■■■】

?????

詠唱式：『■■■■■』

??????

「相変わらず無茶苦茶なステイタスだねエ君は。神会デイトゥスで下らない言い争いをしている連中に見せてやりたいよ。本当は私の眷属はこんなにすごいんだー、ってね。まあそんなことはしないけど」

「そうか。まあ、俺の関知するところじゃないし好きにすればいい。したところで俺の冒険は何も変わらないしな」

「ははっ、まさか。冗談さ。君の邪魔をするところは私の本意じゃないからね」

顔を揃えてステイタスを写した紙を見ながら、カオスは思案する。

クレス・カタストロフは彼女にとつて最初にして最後の眷属だ。

それは他の子どもたちを彼という劇薬に触れさせないため——そして彼という神時代の異物を誰よりも近くで見張るため。

クレスの恩恵フェルトは最初期に作られた、試作型プロトタイプにして実験体テスト。最近の洗練されてきた恩恵と比べて複雑かつ、一歩間違えば子供を壊しかねない粗悪な設計となっている。

神々さえ意図しなかった不具合バグも多く含まれており、それが下界に存在する未知の可能性と運よく噛み合った結果が今の彼を形作っている。

四百年ほど前から不老にほぼ等しい存在となった彼は今、段々と地上ヒトの生き物の枠組みを超えて天上カミの領域に近づきつつある。

そんな彼に対して抱いている胸の重みは、罪悪感か、それとも愛に由来するものなのか——自身の感情を図りかねながら、彼女は彼の腕を自らの胸中に絡めとり立ち上がった。

「さ、用事も済んだしさっさと食事にしよう！ 年に二度の、大事な眷属との時間なんだ。これ以上削られるといくら温厚な私でも怒っちゃおうよっ」

「ああ、すまない。それで、今日は何なんだ？」

「ふふん、驚きなよ。今日はタケミカツチから教わった極東料理さ。何しろあそこの子どもたちは食に関して是人一倍うるさいからね、

きつと君も気に入ること間違いなしだよ！」

「なら楽しみだ。なにしろ我が主神の飯はどれをとつてもうまいからな。それと元々うまい文化が合わされば、よりうまいことには間違いあるまい。それが楽しみで戻ってきているところもあるからな、たっぷり一年分味わわせてもらおう」

「……！　そうそう、こういうことなんだよ！」

「なにがだ？」

「さーてね？　ふんふーん、ふふーん！」

それでも、こうして馬鹿正直に主神の手作りの料理を褒め称えられるあたり、彼はまだひねくれた神自分たちとは違って人間なのだろう。

——残念なことに、まだまだ彼は人間男としては失格に等しいけどね。

そんなことを想いつつ頬を緩ませながら、カオスはクレスとともに愛しの我が家に戻るのだった。

これは青年が潜り、女神が引き留める、【迷宮攻略記】ライブ・ダンジョン。

だから今日も俺は迷宮に潜る

迷宮第188層、『古骸戦場』。

それは迷宮に数ある闘技場の一つであり、最大の特徴は拓かれていること。

焼け落ちた紅色の空。吹き荒ぶ黄土色の砂風。そして、階層の端まで広がる巨大戦場。

かの『白宮殿』のように『大円壁』によって各種の戦いの広間に区切られていることが一切ない、階層の最端までを一目で見通すことのできる砂塵の平野。

次層への階段は何一つ隠されることなく、沈黙を貫きながら平野の中央に窪みのように鎮座している。

では、そこへの道程を隔たる障害とは？  
語るまでもない。

無限に戦い、争い続ける、二陣営の竜牙兵軍団だ。

『『オオオ——フフフオオオッ!!』』

『『キエエエエ——ッ!』』

東西に分かれた、各々の竜牙將軍を頂点とした二勢力。

この地を攻略する冒険者は、彼らの勢力が衝突しあう最前線を突破しなければならぬ。

肉を持たない骨の身体ゆえに疲労を知らない彼らは、永遠に戦い続けることで経験を延々と蓄え続けている。そのようなモンスターたちによる左右からの挟撃を耐え忍びつつ、階層中央の階段を目指すのが、この階層における正当な攻略法だ。

そして、そこにふらりと訪れた異邦の者が一人。  
「今日も元気だなお前は。では、俺も混ぜるか」

下層からの階段を昇ってこの階層を訪れたクレス・カタストロフは手始めに、目の前で真つ向から骨剣で罅迫り合いを演じていた二体の『スパルトイ・シニアエリート』の魔石をその緋槍で以て穿ち砕いた。

その断末魔は、普段であれば戦場の剣戟の音に紛れて消えていく些末な雑音ノイズだった。

されど今回のそれは、教会の天辺に据え付けられた鐘の音のように戦場の末端まで届き——それまで争いあっていた全ての兵力が動きを止め、その視線をただ彼一人に向けた。

モンスターの怨敵である人間異物の出現。ダンジョン母を攻略する無礼な輩を前にして、彼らは虚ろな眼窩で以て互いの顔を見合わせ、頷き、団結したように見えた。

この場に存在する自分以外の全ての敵意が己に向いたのを自覚しつつ、その光景を睥睨しながら、クレスは己が武装を構える。

「収穫の時だ。そろそろ前の乱獲の損害も癒えてきたな？ 育ったお前たちの果ドロップアイテム 実は、今回もさぞ良い素材となるだろう。……では、死ね」

その一言を切っ掛けに、再び古戦場の空気が爆ぜた。

乾ききった死の大地にて、死モせる戦士スたちと生きる人間者による闘争が花開く——。

正面から迫る骨槍の連続刺突を掻い潜り、懐に迫ったのち左手に握る剣を一閃。

同時に背後から斬りかかってきた骨長剣の一撃を接近前に右手の緋槍で薙ぎ払い、肋骨の隙間に除く心臓部を寸分たがわず突く。急所を穿たれた竜牙スバルトイ・シニアエリート 強兵は滾る戦意むなく爆散し、戦場の塵となった。

すかさず迫る別個体の群れに相對しながら、両手の剣と長槍を構える。

ワン・ソード・ワン・スピア  
一 剣 一 槍

それがこのような人型モンスターとの乱戦時における、俺、クレス・カタストロフの最適解だ。

『キイイッ!! ——グゴッ!?!』

『クカカカカカ——ッ!! ——ガキュッ?!』

『キキツ、クケケケケエエ——ゲキツ!?』

迷宮ダンジョンにて生まれ育ったモンスターは通常、初めて覚えた戦法を愚直ダシに使い続けて極めていく。

天然武器ネイチャーウェポンの剣を手に入れた個体なら剣術ばかりに執着し、弓を手に入れた個体ならば狙撃ばかりに拘泥する。取り扱いの異なる別の武器種について、奴らは自ら手を伸ばそうとしない。現状の自分の攻撃手段が通じない相手がいたとしても、無謀ゴリに呐喊押しするか素直に撤退を選ぶかの楽な二通りに逃げる。

言わば、井の中の蛙。

現在いまの自分に出来ることはしても、出来ないことを無理に克服しようとするのではない。

発展や応用を行う知性こそあれど、まったく趣の異なる分野を学ぼうとする理性はない。

だからこそ、連中が己に残したままの弱点をつけるこの戦一い方一が面白一いように決まる。

剣や槌、もしくは発達した鉤爪を振るう接近戦主体のモンスターについては、槍を以てその攻撃が届かない位置から牽制しつつ迎撃する。

戦斧ハルバードや大鎌デスサイズなどを振るう中距離戦主体のモンスターについては、剣を以てその得物が満足に振るえない位置にまで近づき攻め立てる。

利点を奪い、不利デメリットを押し付ける。

それはモンスターには不可能な、冒険者人間だからこそ出来る戦い方。

【斬打巧撃】——敵の性質に応じて適切な武装と技を使い分けることで威力を向上させられるスキルをこの一対多の場において最大限発揮できるのが、これら剣と槍の組み合わせなのだ。

『ガキヤキャッ!』

迫る短柄の骨槌スパルトイ・シニアエリートを持った竜牙強兵が跳びかかってくる。

確かに、落下のエネルギーを加算した強打撃は『深々層』相応の脅力を伴って凄まじい威力を生むに違いない。

しかし空中に跳んだとなれば足の踏ん張りがきかず、自然と攻撃の軌道は固定されるものだ。

迫る槌の一撃から目を逸らさず、俺は相手の攻撃が完了するより早く、その魔石を槍で突き壊した。モンスター<sup>スバルトイ・シニアエリート</sup>の摂理に従い、その身体は灰となって素材<sup>スバルトイの骨片</sup>が残る。

それを拾う間もなく迫るのはまた別の、巨大な馬上槍<sup>ランス</sup>を掲げ突進を行<sup>スバルトイ・シニアエリート</sup>う竜牙強兵だ。

『キエアアアッ!!』

金切声にも似た猿叫を上げながら迫る竜牙強兵<sup>スバルトイ・シニアエリート</sup>、その側面に回り込むように身体を仰け反らせ回避しながら、すれ違いざまに剣を振るう。

槍を引き戻す間もなく宙を舞う塵となった敵からは、発達部位である上腕骨が残った。

そこへ降り注ぐ、骨の弓兵<sup>アーチャー</sup>からの矢の豪雨。

「ふん」

槍の柄の中央付近を持ち、指先の動きで回転——疑似的な円形盾<sup>ラウンス・シールド</sup>を形成して身を守る。

それを隙と見て襲い掛かってきた連中の獲物の軌道を、残っていた剣を用いて軽く誘導してやって相打ちにもつていかせる。互いの矛先で互いの魔石を貫いた骨兵らは、思わぬ同士討ちをさせられたことに苦悶の声を漏らして消滅していった。

そうして時折降り注ぐ矢雨の中を駆け抜けつつ、縦横無尽に戦場を駆ける。

切り裂き、貫き、薙ぎ払い、打ち砕く。

一撃必中。魔石という鍛えようのない明確な弱点をひたすらに、執拗に付け狙いながら。

軍と呼べどもその実態は単なる個の寄せ集めにすぎず、連中には訓練された連携など存在しない。協力、その出来ない軍勢などむしろ互いの足を引っ張るだけにすぎないということを、彼らは知らない。

隙間だらけの波状攻撃を俺という異物に喰い破られ足並みの乱れた彼らの一部には、互いに足を絡ませてすっ転んでしまい、知恵の輪のように骨の凹凸が噛み合って動けなくなってしまうものさえ見受けられる。それは俺にとっての絶好の的であり、足元に落ちていた

骨片を戦いの最中に蹴り飛ばしてやれば、奴らは抗う術を持たないまま新たな素材を残して二体同時に消えていった。

戦いの趨勢は、どう見ようとこちら側に転がっていた。

俺が乱入するまでに骨勢が轟かせていた関の声は既に、蹂躪されるだけの悲鳴の重奏に変化している。

地面にまき散らされる数々の骨の欠片。やがて地を満たさんとする朋友の墓標の上に、新たな骸が次から次へと積み重なっていく。

その光景にはいくらモンスターと言えど、畏怖の念を抱かずにはいられなかったのか。

奴らの中に怯えの空気が醸成され、徐々に及び腰になりつつある輩が生まれてきたのを見て取って、

「……そろそろ頃合いか」

打倒したのは三百と少し。これ以上の素材は、今回は不要か。

ならばあとは回収するだけなのだが、それを邪魔されると鬱陶しくて仕方がない。

続けて剣での立ち合いを挑んできた威勢のいい竜スバルトイ・シニテアエリート牙強兵の魔石を槍の穂先で弾きながら、並行詠唱を開始。

「――【原初の火よ、人理の歩みを照らせ】」

振り下ろされた斬馬刀を踏みつけてその上を駆けあがり、一瞬獲物の自由が利かなくなつて硬直した相手の魔石を肋骨ごと蹴り砕いて。

「【大神より磔刑を受けし貴神あなたに敬意を捧ごう】」

打棘棍棒モーニングスターを扱う相手の一撃を跳び退つて回避してから反転、急前進し切り裂いて、

「【精神こころ在る限り我が歩みは終わることなどなく、】」

飛来してきた投げ槍をすかさず弾いて下から上へ跳ね上げ、宙でくるくと弧を描きながら落下してくるその尻を右足の甲で蹴り飛ばし相手先へと送り返して――。

「【やがて英知の指し示す果てへと至らん】――【プロメテウス】」

解き放たれるは、人に扱うことを許された規模の小太陽。

この古戦場の上空に満ちる陰の落ちた紅色を白く塗り替える、極光の顕現。



それは間を置かず地上へと向けて隕石の如く落下する。向かう先に存在しているのは東方の勢力だった。

彼らは慌てて矢を射かけ槍を投げつけて太陽を打ち崩そうとするが……それは叶わなかった。

接地した巨大火球は瞬く間に炸裂し、その場にいたモンスターらを余すことなく焼き払った。スバルトイ：シニアエリート 竜牙強兵も竜牙隊長も、スバルトイ：コマンド 竜牙士官だろうが竜牙將軍だろうが、構わず、灼熱の波濤で全てを呑み込んで消滅させる。

更におまけとばかりに、余波たる熱波が西側勢力の一部をも溶融させていった。

「こんなものか」

上級冒険者を越えた、言うなれば超級冒険者の長文詠唱から生み出される戦略級魔法。

地上であればまず放つ機会の訪れない【魔法】は、一応迷宮が崩壊しない程度に威力を抑えていたものの、軽く三方はいた片側の兵力の全てを文字通り消し炭にした。

——それだけには留まらず。

「何を呆けてる？ 次はお前らの番だぞ」

長年の宿敵を刹那の間に失って啞然としていた西方の骨兵たちを、天に浮かぶもう一つの疑似太陽が睥睨していた。

デュアル・ソング 二重詠唱。口内で詠唱を反響させ、同時に二回分の魔法を唱える特殊技法。

そうして顕れた二つ目の落陽が、今ここに永年の戦争の終焉を告げた。

爆裂、そして碎震。

火と光の交わりあう二度目の大爆発が階層を満たし、それまでに骨々が軋み奏でていた戦慄の歴史の一切を無に帰した。

「よしよし、今日もそれなりの素ドロップアイテム材が採れたな」

階層は変わり、第201層。

『深々層』の安全地帯であるこの場所に設けた一軒家に帰り、あの戦場から持ち帰ってきた大量の骨ドロップアイテムを下ろして安堵の息を吐く。

これらの骨には極微量な神珍鉄シエンジエンチエが含まれており、それがここ最近の俺の武装の主な構成源となっている。先ほどの戦いはこれの回収作業だった、というわけだ。

次はこれを精製する段階であり、というわけでこれまた別の階層から獲ってきた加工道具を連れてくる。

『——グギャガアツ!?』

「やかましい」

捕まえる時に一度懲らしめたはずだがまた暴れようとしていたので、殴りつけて黙らせる。

このモンスターは通称——とはいえ俺くらいしか呼ぶ者はいないが——光金龍『ゴールドデン・ワイアーム』。

翼のない代わりに黄金の鱗を持ち、そして生まれ持った宝ストレージ・オーガン袋と呼ばれる特殊な内臓に珍しいモンスターの素材や天然武器ネイチャー・ウェポンを貯め込む習性を持っている。とはいえそれらを自前の火息ブレスで溶かしてしまふという少々残念な一面もあるのだが……今回はそれが役に立つ。

「そら食え」

『アギヤオツ!? ……ウグゴオオオオオオツ?!?!?』

拘束具で無理矢理顎をこじ開け、そこに今回集めてきた骨を放り込んでいく。

喉奥に存在する宝ストレージ・オーガン袋へ目掛けてぽいぽいと投入していけば、時折変な呻き声とともに火息ブレスを伴う盛大なくしゃみを暴発させるのだが、それをひよいと避けつつまた投入を再開する。

後はこいつが勝手に体内で素材を溶解かして、生まれた不純物を火息とともに吐き出し、最後に純粋な神珍鉄シエンジエンチエの塊が残るといふ訳だ。

【プロメテウス】でやってもいいのだが、いかんせん、火力の調整に失敗すると神珍鉄シエンジエンチエ諸共全部吹っ飛ばしてしまうから困る。事実188層にて魔法で焼き払った連中の居た場所には、一切の素材が残っ

ていなかっただけからな。

その点、絶妙な火力を吐ける光 ゴールデン・ワイアーム 金 龍はここ数十年の俺にとってかなりありがたい存在だった。

「よし、全部食ったな。後は二週間ほど放置して、取り出すだけと……」

間違っても眼の届かないところで吐き出さないよう開口具をきつく締めた後、連れてきた時と同様のわずらわしさを覚えることのないよう、先に殴って気絶させてから拘束部屋に放り込む。

後できつと怒りを覚えて暴れ散らかすだろうが、そうしようとするばするだけ竜の体内温度は上がり、より早く素材が出来上がる。

恐らくこの光景をガネーシャ・ファミアリなどに見られればその残酷さに問い詰められたり本 アイアム・ガネーシャ 部に連行されたりと面倒が生まれるのだろうが、あいにくとここを訪れる人間は俺一人だけ。よって最も効率のいいこの作業を止める理由は、どこにもなかった。

「……さて、次の攻略に備えて携帯食料も作っておかないとな」

龍のことはさておいて、他の準備へと思考を巡らせる。

新たに潜ることになる第239層になにが待ち受けているのか、俺は当然知らない。

故に、想定されるあらゆる障害を乗り越えられるだけの準備を済ませておくのは冒険者として必然のことだ。

先ほどの行為についてもその一環で、238層の攻略中に破損した武器を修復するために必要なことだった。決して無意味な虐待を行っているわけではない。

そして栄養の補給について考えることもまた、俺が生き物である以上は避けては通れない課題だ。いくらレベルが上がっても、根本的な欲求を捨てることはできないのだから。

更には地図作成用の魔道具 マジックアイテム についても一度分解して整備する必要があるし、防具についてもあらゆる局面に対応できるよう、最低十種類は整えておかなければならない。

他にも回復道具 ポーション類 の調合など、やらなければならぬことは数多く積み重なっている。

「急ぐ」

地上オラリオで買い揃えられる品々の質は残念ながら、現状の『深々層』攻略には全くと言っていいほど間に合っていない。

必要な攻略準備の全てを、俺は自分一人で済ませなければならぬのだ。

そのために求められる知識は昔、他のファミリアの主神らに頭を下げて回って叩き込んでもらった。

武具の修繕から薬品の精密な調合まで、彼らから受けた恩恵は今も変わらずこの身で覚えている。

なればこそ。

「より深く、底へと潜るために」

彼らからの恩により生じる感謝もまた、迷宮ダンジョンの攻略へと帰結する。その行為から外れた雑念を抱くつもりはない。それらは、いざというときに迷いを生んでしまう厄介ものだから。

俺は冒険者だ。だから迷宮ダンジョンに潜る。今日の天気は悪くない。だから迷宮ダンジョンに潜る。

何かを斬るのは心地よい。だから迷宮ダンジョンに潜る。主神の持たせてくれた弁当がうまかった。だから迷宮ダンジョンに潜る。

昨日の夢は山登りだった。だから迷宮ダンジョンに潜る。実は猫を飼いたい。だから迷宮ダンジョンに潜る。

最近の趣味は武器に特殊機構を組み込むこと。だから迷宮ダンジョンに潜る。

雨は嫌いだし雪は大嫌いだ。だから迷宮ダンジョンに潜る。そういえば今日は土曜日だった。だから迷宮ダンジョンに潜る。

なんか迷宮ダンジョンにも飽きてきたな。だから迷宮ダンジョンに潜る。

明日もきつと良い一日になるだろう。

だから今日も、俺は迷宮ダンジョンに潜る。

それが俺、クレス・カラストロフの人生哲学であり行動論理。

「ふあーあ……少し眠いな。じゃ、攻略準備の続きといくか」

身に纏っていた第238層『雷火祭天』フェスティバル攻略用装備である、耐熱耐雷性に優れた『赤王竜の膜外套』ドレイグ・クロックを脱いで家の中へ入る。

眠気をこらえて薬剤の調合を始めようとするが——その前に、中にいた影から声を掛けられる。

「おかえりなのじゃ、主殿。待っておったぞ?」

「……帰れ」

人一人訪れない『深々層』の仮拠点。

そこで勝手に柵から取り出した高級茶を啜りながら俺を出迎えたあまりに図々しい客人に、俺は思わず脱いだばかりの外套を投げつけた。

## 第239層『遊毒怪廊』、そして――

新階層へと赴く時は、いつもこの胸中が震えてやまない。

未知へ足を踏み入れる興奮と、死の淵へまた一步近づいている恐怖。

子供心さながらの無謀ワクワクと成熟した大人の精神こころが訴える躊躇いが魂の奥底でない交ぜになり、拮抗して丁度よい塩梅となる不思議な感覚――この状態こそが俺、クレス・カラストロフという冒険者のベストコンディション絶好調だった。

奮い立つ身体で階層を繋ぐ階段を一步ずつ噛みしめるように下りながら、逸る気持ちを抑えつつ俺は自らの身に纏う攻略装備をもう一度視線でなぞって確かめる。

耐炎、耐雷、耐氷、耐光……耐魔法・特殊攻撃用最外装『赤王竜の膜外套』。

耐斬打突及びその他諸々の耐物理攻撃用金属鎧『極光石の軽鎧』。

そして肌着兼、耐毒耐渴耐酸……耐悪環境用装備『樹精霊の護布衣』。

加えて背中に担ぐ巨大背囊には、各種の回復薬と最低ひと月は持つ携帯食料一式、そして遠・中・近と全ての距離に対応できる武器がそれぞれ予備を含めて最低五種ずつ詰め込んである。これらを身に纏うその重みは、いつものように昂る俺の身体を落ち着けて深慮と安心感を与えてくれる。

何よりも己の生存を最優先に、かつ並行して攻略を推し進めることの出来る超級冒険者用の未踏破領域行軍用装備。

点検・修復を済ませたこれらの装備にはやはり出発前に何度も見返した通り一つの綻びも見当たらず、領きの代わりに両手を叩いて気を引き締める。

つまり、自身の準備に内面外面ともに瑕疵はない。

まさに絶好の攻略日和だ、素晴らしい。

そう結論付けて、俺はとうに辿り着いていた階段の最下段から、

第<sup>2</sup><sub>3</sub><sup>9</sup>層  
未知の階層へと恐る恐る足を踏み入れる。

最初にクレスを出迎えたのは、彼の視界一面を余すことなく満たす紫色の濃霧だった。

確かな視界が確保できるのは5 M<sup>メートル</sup>ほど先まで。それより先はぼんやりとした霞のカーテンが幾重にも重なって朦朧としており、奥に何が蠢いているのか真面目な判別がつかない。

視覚の疑似的な遮断。

さっそく迷宮<sup>ダンジョン</sup>が繰り出してきた厄介なそれ<sup>ギミック</sup>に舌打ちする間もなく、首元に巻き付けていた『樹精霊の護布衣』のスクーフを鼻の所まで引き上げて顔の下半分を覆い隠す。

「……毒霧だな。それも、可燃性か」

鼻奥の粘膜がピリリと焼かれる辛い感覚と、甘ったるい腐敗臭の組み合わせ<sup>ゴ</sup>。その意味をここに至るまでの経験で直感的に察し、彼は目を細めた。可燃性<sup>ガス</sup>気体が満ちている、つまりこの階層<sup>第<sup>2</sup><sub>3</sub><sup>9</sup>層</sup>はどうやら火気厳禁のようだ。

となれば初手<sup>開</sup>「プロメテウス」<sup>幕</sup>による露払いはずと控えられる。さて、どうしたものか。

悩みながらも、ひとまずクレスは足を先に進めようとして——ずぶり。

軟泥性の感触を以て彼を出迎えた地面に、その膝までが一息に沈みこんだ。付け加えれば、それでもなお確かな足場を踏みしめた感触がなかった。

「視覚封じに加えて、進もうとする脚まで封じるか。ふん、なるほどな」

すぐさま埋まった脚を引き抜いたクレスは、背囊から槍を取り出して足の代わりに地面に突き刺してみた。

しかし彼の身長を優に超えるその長物を尺代わりに用いてもなお、その底を見出すことが出来なかった。

つまり、底なし沼。

地上にも度々見られ、数々の人命を容易く奪っていく危険地帯もこの階層には存在しているようだ。しかもこちらもまた溶解性の毒性を持っているらしく、槍の汚泥が付着した部分から細かな気泡がしゅわしゅわと発生していた。

それらの僅か一步、されど決して小さくはない一步で得た手掛かりを前に、クレス・カラストロフは。

「――よし、撤退だな」

己の準備不足を悟り、その場から上階へ向けて颯爽と逃走を開始した。

それは、もし迷宮ダンジョンに会話能力があるとしたら「えっ、ちよっ、待つ……は？」と思わず呟いて呆けてしまいたくなるほどの、目にも鮮やかな撤退だった。

「改めて、再挑戦だ」

撤退時にしれっと採取していた大気と地面の一部を拠点第201層に持ち帰り分析した上で、それらへの対策を身に着けたクレスがもう一度第239層に降り立つ。

前回に比べ、三倍の量を用意した解毒薬はもちろんのこと。

『樹精霊トライアド・クロスの護符』の余りをフィルターとして詰めた鳥ベの嘴スを模したような被り物トに、鮭型モンスターから取れる弾水性の皮から作った水上歩行用足装備『跳鮭エツレド・ブーツの長靴』。これらによって毒霧を防ぎ、底なし沼の上を歩こうという心算だった。

そこには見た目の統一性などなく、美神は「美しくない」と軽蔑唾棄し、冒険者であればすわ「モンスターの一種か」と勘違いしてしまうような珍妙な装いフォルムがあった。

されどこの階層においてはこの格好こそが最も効率が良からう、とクレスは判断した。

なればこそ彼は迷うことなく、今の死神にも似た姿で以て進軍を再び開始する。

「……」



背中フアルナの恩恵が、装備の内側でじんわりと熱を持つ。

スキル【深淵踏破】オデユッセイアによる幸運アビリティの一次的発現。

それに導かれるようにして、彼は聴覚を主感覚、視覚を補助的感覚として慎重に歩を進める。評価値Aにも達する暗視アビリティがクレスにはあるが、彼はあえて見えないものを無理に視ようとはしなかった。それより楽に周囲の動きを捉えられる聴覚を素直に頼り、余った脳の労力を警戒により多く振り分ける。その方がここでは効率的だと、積み重ねてきた過去が考えるまでもなく彼にその手法を選択させた。

「……！」

果たしてこの階層で最初の違和感を捉えたのは、彼の眼だった。

ただ見るだけでない、観察することの余裕がクレスに気づかせた変化。

それは、極僅かに盛り上がった地面だった。

液状毒を多く含んで粘性を得た泥の地面なら、通常、重力に慣らされて平坦になっていて然るべきだ。

しかし凸状になっていいる箇所がある……となれば、それは通常ではなく明確な異常である。

「(ならば、まずはこれで様子を見よう)」

この第239層は現状、前の層と違って一般的な洞窟型だ。ベージック

彼はその壁面から少々拝借した土をこねこねして団子を作り、異常目掛けて投擲する。

毘であれモンスターであれ、まず何らかの衝撃を受ければ反応を見せるだろうと考えて。

『……ズ。ズ、モオオオ……』

異常のド真ん中にびったり着弾したクレスの土団子。それは、触れている部分からゆつくりと捕食されていった。

急な攻撃をたわいなく受け止め、呑み込むように捕食しつつ、異常の正体がのそのそと動き始める。

起き上がったその姿は、地面と同じ濁った土色に染まっていた。

滴る雫のような輪郭を形作った汚泥が遅々としながらも蠢き、目の

ない顔でクレスを睨みつける。それは他階層でも見られる粘性体モンスター『スライム』に近い外見だが、色と質感がこの階層相応のものへと変貌を遂げている。

「(正確には『マッド・スライム』だな。物理よりも魔法に弱いモンスター。本来なら魔法で焼却してやるところだが、火気はここではよろしくない。ついでこの泥を取り込んでいるせいで、原種の液状体よりも粘性を増していそうだ。となれば奴に最適な武器はこれか)」  
クレスが耐泥粘体用に取り出したのは、先ほど地面の深さを測るのにも使った長槍だった。

打撃が効かないは言うまでもなく、斬撃もあの身体に囚われて途中で止まってしまう可能性がある。その点刺突であれば、一点集中で肉を貫いて核たる魔石を打ち抜きやすそうだと彼は見た。

脇の下に柄の後方を通す形で、重心より拳三つ分ほど穂先に近い部分を右手に握えて構える。

「……」  
不定形である泥粘体の魔石の位置は恐らく、他の同種に倣って重心に近い場所にあると考えられる。例外も多々あれど、第一に狙うべきはそこだろう。

ずるずると這うように距離を縮めてくる敵の動きを慎重に見定めつつ、その弱点の凡その位置にあたりをつけて。ちようど穂先が魔石に至る位置まで泥粘体が近づいた、その時。

クレスは腰を振るようにして勢いをつけ、槍を一息に打ち込んだ。そして固い何かを砕いた感触を得ると同時に、すぐさま引き抜いて残心を取る。

万が一狙いが外れた時に備えて距離を確保しつつ、彼は泥粘体の変化を見逃さないよう観察する。

『……ズ、ズ……』

どうやら貫いたときに彼が得た手応えは正しかったようで、刺突によって開けられた穴から泥粘体の全体に罅が走り、輪郭が解けて崩れる。そのまま泥粘体の死体は地面に同化するように消えていった。

それ以上の変化——例えば死に際の自爆だとか——が起きる様子はなく、クレスは安堵して警戒態勢に戻った。

「(環境に適応した特性はあれど、急に方向性の異なる進化を遂げたような特異性はなかった。ひとまずこれまでの常識が通じるとみてよさそうだが……油断せずに続けよう)」

耳を澄ませ、目を凝らしながらクレスは先へと進む。

迷宮ダンジョンの気まぐれはいつでも冒険者の既知を未知へと変えて襲い掛かる。

加えて先例のない未攻略階層での進攻……どこまでが知っているものなのか、どこまでが知らないものなのかさえ現状理解できていない。

不安に駆られる身体を勇気で以て前に進めつつ、クレスはまず第一にこの第239層におけるその二つの境目を見極めようと集中する。

「……！」

今度は、鼓膜を震わせるかすかな大気の流れの騒めきを察知。

その一部が先ほどから自分を追いかけてきていることを察して、クレスは振り向いた。

もうもうと視界を覆う毒霧……その一角に覗くやたらと濃度の高い霧が、標的に察知されたことを理解して急に速度を上げて襲い掛かってくる。

『……ゴ、オオオツ……！』

唸るような叫びを上げて突進してくるそのモンスターは、意思を持った毒霧『スモッグ・ゴースト』。

実体のないかの怪物は呼吸を通して標的の体内に潜り込み、内側から毒と呪いで以て喰い殺す。

されどモンスターである以上は、魔石という弱点を持つことからは逃れえず。

他の層で同種お仲間に遭遇した覚えのあるクレスは、慌てず懐から別の武器を取り出した。

「(……一点だけ存在する、やたらと霧が濃い場所)」  
すなわち、防御弱膜。

そこに狙いを定めた彼は、手に取った棒手裏剣に手首の捻りを加えて投げ放った。

流星のように宙を駆けた金属の閃光が、カキンと小気味良い音を立てて奥に隠れた魔石を破壊する。

散り散りになつてほつれていく魔霧の身体。

それは本来、黒い塵となっていない以上ドロップアイテム素材『ゴーストリー・スモーク』——地上の呪術師シャーマンが使う神事道具リチュアル・アイテムとしての価値を持つのだが、今は回収している余裕がないので放置。

脳内のメモに既知「知ったものだ」の一言だけを書き加え、クレスは更に先へと行く。

それから彼が出会ったのは毒芋虫ポイズン・ウエルミス、痺蜘蛛パラライズ・スパイダー、翼針竜ドラゴニック・ヴァイパー、蛇などなど、どれも他の階層で遭遇したことのある毒虫系・爬虫類系モンスターだった。

むろんそれぞれにはこの階層に適したが故の少しばかりの変化が見受けられた。だが、戦い方に大きな転換を強いられるほどではなかった。

「環境こそ厄介極まりないが、これならば。モンスターに邪魔されることなく次の階層に辿り着けそうだ——」

——などという甚だしい思い上がりダンジョンが迷宮では死を招くことを、クレスは忘れない。

慎重に慎重を重ね掛けして、かつ時には大胆に後ろに下がることも忘れず、彼は遅々としながらも自分の視界の及ぶ範囲を懐に入れてある光の導線が走る水晶へ着実に地図化マップビグしていく。

魔道具マジックアイテム『ミラージュ・クリスタル』。魔力を込めることで記録した迷宮ダンジョンの構造を幻影として映し出すことの出来る、彼が魔法大国アルテナの古き知り合いに作らせた便利な魔法地図だ。

その最大の特徴は、指やペンによる物理的接触が不要であり、魔力による直接操作が行えること。

これによって攻略の手を止めることなく、行動アクションと並行しての記録レポートが可能となる。

『深々層』の行軍においてはまず欠かせない逸品に発見した情報を

魔力の光で書き綴りながら、躊躇せず進行を続ける。

「……これは」

地図の作成と同時に襲い掛かってきた漆黒の毒サソリ『ダーカー・マンティコア』の群れをクレスが掃討し終わると、今度はかすかな甘い香りが覆面を通して鼻についた。

念のために確かめようとそちらへクレスが顔を向けると、途端に視界が揺れる。

「……くっ！」

ここまで毒霧対策に開口による発言を控えていた彼が、初めて声を上げる。

咄嗟に効果を発揮したのは『耐異常』アビリティと、それをなお貫通して異常をもたらす現状への『適応』アビリティ。その二つが自身の崩れかけた平衡感覚を持ち直したのだと神の恩恵と魂の結びつきから直感したクレスは、新たな敵の正体をそれから顔を背けつつ理解する。

迷宮内に自然発生的な地震はなく、先ほどの揺れは何か別の要因によってもたらされたもの。つまりこれは恐らく、モンスターによる攻撃――。

「――先ほど見えていたのは腐敗樹。そして、その果実に止まって汁を啜っていた……巨大な蛾。この状態異常の原因は、奴が背の翼に生やしていた二つの眼だ」

自然界に多々存在する眼状紋。

蝶や蛾などに主に見られるそれらは一般的に、見かけ倒しの威嚇に過ぎない。

だが、たった今彼と相対したものは文字通り格が違っていた。

「(この階層に満ちる毒霧を平然と貫通して効果を及ぼし、睨まれたと察知したとほぼ同時に射撃められるような感覚を抱かされた。レベル21である俺が、一瞬とはいえ世界が震えるような錯覚に強制的に陥らされる……危険だな)」

それはかつて何処かで読んだ英雄譚に登場し、また迷宮にもモンスターレックス階層主として存在する【魔眼将】を想起させる、『未知』のモンス

ターだ。

「(名づけるなら睨羽蛾『バロールウイング・モス』、もしくは『モス・バロールビュウ』か。決定は今度主神カオスにでも委ねるとして。まずは奴を仕留め、情報を得よう)」

幸いにも名前の元となる予定の『バロール』とは違い、あの睨羽蛾モンスターには階層主特有の威圧感がなかった。

彼の目測にはなるが、レベルにしておおよそ16から18、高くて19程度。

となれば面倒臭さこそあれど、クレスに倒せないことはない。

彼は再び背囊から別の武器を取り出し、その弦に矢をつがえた。  
ロングボウ  
長弓。

速射性に優れた短弓とは異なり、威力に優れたそれでクレスは未知のモス  
睨羽蛾を狙う。

『キユキユオオオツ……!』

毒鱗粉を舞い散らせながら飛び立った仮称：睨羽蛾は素早い動きで翻弄しようとしながらクレスに迫りくる。

対して彼は目を閉じ、視覚を覆い隠しながら後ろへ下がった。

未把握の地形が広がる先ではなく、地図作成で調査を終えている後方へ。

魔眼模様の影響を鑑みれば、瞼を下ろし、視覚を完全に封じながら戦うことが求められる。

ならばより把握している情報の多い場所で戦闘を行う方が、少しでも不利を減らせると見込んでの行動だった。

今回頼るのは此処に至るまで活用してきた聴覚、そして盲目戦闘における各種補正アビリティだ。

「(回避と適応、集中に挑戦そして幸運か？ 毒を食らわず、まだ正常に戻らない平衡感覚のまままで矢を的中させる。一見して難題だな。だが、それでこそ迷宮を攻略している実感があるというもの)」

目を瞑りながら器用に後退するクレスの先には、当然新たに出現したモンスターがいる。されど彼は、それらに衝突することなく間をすり抜けていく。既に彼らの気配は覚えているから、睨羽蛾を意識

する片手間でその位置を把握することも容易い。

クレスは戦いの邪魔になるからと、彼らを殺すようなことはしなかった。

『キユ、キユ、キユツ……！』  
ドロッパアイテム  
そも、素材 目当てや情報回収などの明確な目的がなければ、クレスはそれほど積極的にモンスターを手にかけない。

冒険者の手口を覚えた迷宮が、より強力なモンスターを産もうとするのを防ぐためだ。

一部の例外を除いて、彼女の子が理性を持たず愚かなままでいてくれれば、力を振るうだけの木偶の坊でいてくれれば。弱者たる冒険者は優位を保ちやすいのだから——このように。

『キユキユツ……キユウンツ?!』

蜘蛛型モンスター、痺 蜘蛛。

クレスは先ほどそれらと遭遇した際、あえて彼らの巣のみを破壊して討伐そのものは避けていた。

当然彼らは得物を捕食するため、すぐさま新たな巣を作る。

『深々層』のモンスターに相応しい、強靱な糸と素早さで以て。

そして、以前とは異なる位置に設えられた彼らの巣のことを、その先に生息していた睨 羽 蛾はまだ知らなかった。

クレスを追おうとするあまり速度を上げすぎて、毒霧に視界を遮ら  
パロールウイング・モス  
ていた睨 羽 蛾は、彼の予想通り新たな痺 蜘蛛の巣に突っ込んで  
パラライズ・スパイダー  
しまう。その間をすり抜けた彼とは異なり、その身体は瞬く間に糸  
に捉えられて動けなくなった。

『キユ、キユ、キユツ……！』

「(無駄だ。蜘蛛の巣は逃れようと暴れるほどに絡まって、動けなくなる。そして連中は、哀れな得物に瞬く間に群がる)」

近くにいた三匹の蜘蛛が囚われの睨 羽 蛾に殺到し、その身体を糸でぐるぐる巻きにしていく。  
パロールウイング・モス  
睨 羽 蛾も必死に彼らを追い払おうとするが、その度に逆に動けなくさせられていく。

捕食者と非捕食者の関係——そこにいる彼らの眼に今、クレスの存在は映っていない。

その隙を狙って、力を溜めに溜め込んでいた彼の矢がようやく射出

された。

「……隙だらけだ！」

風を切る四つの鏃が毒霧に風穴を開けて、蜘蛛と蛾の胸中にそれぞれ存在する魔石を寸分違わず打ち抜く。

悲鳴を上げて命を失ったモンスターたちの肉体が滅び、死骸の一部だけが残った。

「よし」

今回残ったのは巣として張られた蜘蛛たちの糸と鋏角、そしてパロールウイング・モス睨羽、蛾の翼だった。初見のモンスターから素材を取れるのは結構有難いもので、後々持ち帰って活用の路を探すのに役立つだろう。

「その為に蜘蛛糸を割くのは面倒だが、まあいいか。これも幸運アビリティの賜物と思っておこう」

クレスはねばつく糸を丹念にはがし、残された翼膜を折り畳んで回収する。

それなりに凶悪な効果を持っていたパロールウイング・モス睨羽、蛾がその実希少種レアモンスターだったという可能性も否めない以上、ここで手間をかけて手に入れる必要性はがあると彼は考えていた。実はそうでもなかった、としてもそれは後の笑い話にでもすればいい。

「あ、鋏角が一つ下に落ちたな。……まあ良いか。こいつは何度か見かけたやつだし」

回収過程で足元の底無し毒沼に落としてしまった痺パラライズ・スパイダー蜘蛛の鋏角を少しだけもつたいなく思いながら、クレスはお腹をさする。

そういえばそろそろ昼飯の時間か、と腹時計で察した彼は背囊から手の平ほどの大きさの弁当を取り出して食器に力チャリと装填する。

「(行動食6号。食事をしている実感はないが、仕方がない)」

気体の圧力を用いて、濃縮した栄養素を直接体内に打ち込む形式の食事。

これまた魔法アルテナ大国で開発させた拳銃型の食器を活用して、ものの数秒で彼は食事を終わらせた。

この階層で通常の食事を行おうとした場合、周囲の毒霧と一緒に取り込んでしまうことが考えられる。もちろんその毒は『耐異常』アビ



リテイで無効化できるが、それでも蓄積の果てにアビリティの許容上限を超えてしまったり、他の魔物の毒と組み合わせると凶悪な効果を発揮する可能性がある。

なんでもかんでも恩恵頼りファルナで突破するのではなく、自分の知恵で避けられるものについてはなるべく工夫で避ける。常に余裕をもって攻略すべし、クレスの迷宮ダンジョン探索における拘りがここに現れていた。

「(……?)」

そこで、クレスははたと気づいた。

足元に落ちていた鉢ドロップアイテムの位置が、食事前と比べて少しだけズレている。

じーっと見つめていれば、それは徐々に汚泥に沈みながらも南の方  
向……未だ彼が探索していない迷宮ダンジョンの先へと移動している。

第238層「この地面は滞留しているのではなく、何かしらの潮流を持って  
いるようだ。」

では、その流れの向かう先には何があるのか？

もしかしたら一つ上第238層のように滝壺があつて、その中に次層への通路があるのかもしれない。

もしくはそれとは逆で、未知のモンスターや罠が待ち構えている可能性もある。

「(いずれにせよ……向かつて確かめる以外に真実を得るすべはない)」

階層そのものの仕組みギミックが攻略の手掛かりになる事例も多い。

この謎を解き明かすこともまた、次へと進むために必要な鍵の一つになるかもしれないというのなら。

ならば行こう、とクレスは進む。

恐れつつも尚、先へ。

ひしめくモンスターたちを時には回避し、時には打倒して、退路を確保しつつ……先に潜む深淵の、その奥へ。

ダンジョン迷宮を潜れば潜るほど、階層ごとに探索しなければならぬ面積

が増えていく。

加えて単独冒険者として仲間の救助を期待できないために慎重な立ち回りが求められることから、彼の攻略速度は決して早いものではない。

クレスが第239層の探索を開始してから、およそ半年と二か月。

それだけの時間をかけてようやく、毒沼の潮が行く先を突き止める彼の旅が終わりを迎えるのだった。

階層の南方にぽっかりと開いた大穴。

そこにとめどなく流れ込む汚泥の濁流は、とある一匹のモンスターの食事場へと繋がっていた。

毒沼に沈むモンスターたちの骸と魔石。それらを残留する無念ごと優しく抱擁し、甘く咀嚼し、王の名の下に嚙下する、澱んだ泥の大海に浮かぶ巨体が、確かにそこにいた。

彼はそれを知っていた。

その真なる名を知らずとも、その同属が保有する特有の威圧感を、彼の肌が覚えていた。

——それは、醜悪なる腐肉の塊だった。

上層より滴り落ちる汚泥とほぼ一体化した、ぬらりと輝く猛毒色の皮膚に覆われた身体。その体表の一部には、腐り落ちているかのように溶けた箇所と、ふつつつと気泡が弾けては膿のような体液を噴出させている箇所が見受けられる。

視点の定まらない無数の眼は天と地を平等に見下しており、全身を這う触腕のような力強い血管が不気味な脈動を伴って震えている。

彼の意識がクレスへ向いているかは、分からない。

されどクレスの方は、その内包する古き星の如き重厚な存在感に、強く意識を惹きつけられざるを得なかった。

新たななる迷宮の孤王、『毒沼の怪塊』が、こちらを覗いている。

やれるもやれぬも、等しくやり遂げねばならぬ

第239層直下、満ち満ちる<sup>ポイズン・フィールド</sup>猛毒の底無し沼にひっそりと鎮座する  
腐肉の塊王。<sup>モンスターレックス</sup>

揺蕩う毒霧の奥に顔を覗かせるその巨体のなんと悍ましきことかと、吟遊詩人は恐怖に怯え感動にうち震えながらも謡うだろう。

とめどなく流れ出る黄褐色の膿とともに、腐蝕した血肉が周辺のまだ無事な部位を巻き添えに自重でずり落ちる。かと思えばすぐさま内側からその欠けを埋めるように肉体が膨張し、無事を取り戻して……そしてまた、腐りゆく。

死と再生、命の輪廻を単体で完結させるが如きその在り様は<sup>デウスデア</sup>超越存在にさえ許されぬ、モンスターであるからこそ成立し得る冒瀆的光景だ。

だが、この世に生を受けて以降永い時をかけて二百層もの<sup>ダンジョン</sup>試練を踏み越えてきたクレスの<sup>レベル21の</sup>変容した精神は、もはやその程度では揺るがない。

烏頭が如き<sup>ガスマスク</sup>防毒仮面に嵌め込まれた水晶のレンズを通して、彼は感情の波が立たない平坦な眼差しで新たに出現した<sup>ダンジョン</sup>迷宮攻略の壁を観察する。

「……動かない。それも、微動さえしないか。モンスターの天敵にして宿敵である冒険者が、こんなにも近くにいるというのに」

モンスターは冒険者を軽んじない。ごく一部の例外を除いて、彼らはひとたび母たる迷宮を侵す<sup>ウイルス</sup>冒険者の存在に気づけば全力で以て抗体の役目を果たそうと襲い掛かってくる。それは迷宮の<sup>モンスターレックス</sup>孤王であるうと例外ではない。

されど、目前の怪物は動かない。

体表に無数に浮かぶ瞳の視線は忙しなく空間を行き交っており、クレスの姿を既に幾度となく捉えているように見える。だというのに、その本体は何一つ変化を見せることなく沈黙を守っている。

「(仮称を『<sup>キング・ポイズンスライム</sup>紫毒の巨塊』とでもして。奴はもしか、俺のことを見て

いるようでその実見ていない……俺という異物に気づけていないのか？ 確か魚類など、目を開けたまま寝る生物もこの広い世界にはいるが……奴もその類かもしれないな」

もしくは提燈鮫鰈のように、そうして油断させてから近づいてきたところをぱくり！ と捕食する習性なのかもしれない。

いずれにせよ、不意を打たれないよう、かついつでも逃げ出せるように細心の注意を払いつつクレスは相手に近づいた。

穴の淵から跳び、キング・ボイスンスライム紫毒巨塊と同じ地面に音もなく降り立つ。

「(いつそう異臭が強まったな……このマスク内の詰め物もそろそろ換え時か)」

呼吸を最小限に控えながら、取り出した盾を構えた彼はにじり寄るように相手に接近して、その様子をより近くで伺おうと試みる。

体型はおおよそ球体状。もし体表がグズグズに腐敗していなければ、かなり真球に近いだろう。

その下部三割ほどは、第239層上層から流れ込む毒沼の地面に沈んでいる。

そしてその毒泥の流れがキング・ボイスンスライム紫毒巨塊を中心として渦を巻くようにうねっている——その事実気づいたとき、クレスの頭に天啓が走った。

「(腐り果て、再生し続ける。その根源はこれか)」

プレデター・リカバリ  
捕食回復

キング・ボイスンスライム

紫毒巨塊は地面に接している足元の部分から——そこに見て分かりやすい口が隠れているのか、それとも彼の思い至ったスライム仮称のように体表が捕食器官を兼ねているのかは不明だが——汚泥を嚼り、それを栄養へと変えて、腐り落ち続ける肉体の補修に充てている。

だとすれば、無限にも見える再生行為にも納得がいった。

食らい、そして傷を癒す。足元の泥には上で死んだモンスターの魔石が無数に紛れているに違いなく、その栄養を吸収することで自己強化を行う……それは強化種と呼ばれるモンスターの出現と似た原理であり、また通常の生き物の道理にも通ずる話である。

「(だとしたら厄介だな。こいつにダメージを通そうと考えるなら、まずはこの無限に等しい再生能力を奪うことが前提になる。しかし、言

うは易いが行うは難しいぞ……?」

紫毒 巨塊の体長はおよそ15M<sup>メートル</sup>。

加えて腐敗した肉体の隙間からはみっちり凝縮された筋繊維が顔を覗かせている。

決して見掛け倒しの風船などではない、超質量の隕石が如き肉塊だ。

その摂食行動を止めるには、地面との接触を完全に断つ必要がある——しかし、どうやって?

「(持ち上げる、なんて単純なのはまず通じんだろう。そもそもあの常時腐敗状態で漏れた血やら組織液やらに塗れている肉体に触れて動かそうとしたところで、ズルっと手を滑らせるのがオチだ。そのまますっ転んでついでに弾みで腐り落ちた肉の塊に、上から押し潰されて毒沼に諸共沈む……ふっ、笑えんな)」

冗談を鼻で笑いながら、ならば逆転の発想をとクレスは考える。

紫毒 巨塊ではなく、毒沼の方をどうにかしてしまおうのはどうだろうか。

——しかし、その思いついた手法は多少現実的であろうとも階層主を相手にしながら取るべきものではないと彼は諦めた。

「(上の穴を封じ、下に無理矢理新たな穴を開けて、毒沼を全て次の階層に排出してしまう……だが、そこまで大規模な破壊をすれば必ず迷宮がキレて刺客を送ってくる。破壊者や殲滅者程度ならともかく、偽神<sup>デミ・ゴッド</sup>なんかを呼び出されたら正直やってられん)」

偽神。ひとたび出現すれば死ぬまでその司る『概念』による崩壊を無制限に撒き散らす、クレスにとっての迷宮<sup>ダンジョン</sup>における疫病神ならぬ厄介者の一つである。

前に出現した時には三十層にも渡る阿鼻叫喚の地獄を創り上げた挙句、彼の文字通り死中に活を見出した逆転の一手によって討たれたわけだが、それはさておいて。

「(さて……適当にいくつか案を論<sup>あげ</sup>つてみたものの、どれも良案とは言えんな。となればひとまず、ここは引くか)」

前にクレスが安全地帯<sup>第201層</sup>で休んだのは、もう三か月前のことだっ

た。

どこを見渡しても毒、毒、毒の第239層に徐々に体を慣らしながら、彼は潜るたびに滞在期間を増やしていた。しかし、前回の二か月半という記録をまあまあ超えた今、そろそろ健全な状態での活動の限界が近づいてきていると彼は冷静に自覚していた。

ダンジョン迷宮の攻略とは、決して限界への挑戦ばかりを意味するものではない。

必要とあれば休み、迷わず撤退する。軟弱だ臆病者だと誹られようが、クレスはそうした他人からの評価を気にすることなく着実に一步を積み重ねていく。その地道な努力エクセリアがあつてこそ、いずれ遭遇する限界レベルアップを超える時に初めて死力を尽くせるのだと彼は理解している。

「今の段階で得られる情報ものだけ得て、あとは一度拠点まで帰ってから考えよう。熱い風呂にじっくり入って、飯をたらふく食って、ベッドでぐっすり寝る。そうすれば、きっとこの凝り固まった頭も良い案を思いついてくれるさ」

そのためにも「あと少しの我慢だ」と気合いを入れ直して、クレスは紫毒巨塊キング・ボイスンスライムの分析に意識を戻した。

ぷちゅ、ぐぼっ……と弾けては零れ落ちる薄汚い大理石マーブル模様の体液。

ぐじゅり……どろり……と腐り果て落ちては再生を繰り返す、完治を知らない禿肌。

常人であれば精神が軋み狂い、その不協和重音コーラが脳を揺らすような錯覚に囚われる光景。

それを前にクレスは平然と自分もまた食事注射を行いながら、紫毒巨塊キング・ボイスンスライムの周囲を回るように歩きつつ探索を続ける。

「(お、良いものを見つけたな)」  
それはひと際多く濃み出た、紫毒巨塊キング・ボイスンスライムの体液から出来た水溜まりだった。

毒沼の上に浮きながら強い悪臭で存在感を放っているその『未知』に、彼は物は試しと第239層で回収してきた素ドロップアイテム材の余りをいくつかぽいぽいと放り込んでみる。

粘つこい水音を立てて沈んだそれらは間もなく、断末魔のような気泡を発しながら形を失っていった。

「やはりと予想していたが、溶けるな。第239層に適応したモンスターの肉体系えをも軽く溶かしてしまう、凶悪な溶解毒……捕食した沼の毒素を濃縮して、肉体に溜め込んでいるのだろうな。さながらこの膿は溜め切れなくなった分が噴き出た、間欠泉みたいなものでもあるのかもな」

それだけでなく、今度は少し離れたところに落ちていた自壊部位の下へも歩み寄る。

ほぼ腐敗し果てたその肉片の中には、まだ僅かに無事な部分が残っている。

その一か所を見据えたクレスは、手持ちの武器からいくつかを選んで攻撃してみた。

「叩けば固く受け止める。突くか切ろうとすれば今度は柔らかく受け止めてくる。剛柔兼ね揃えた性質とはこれまた面白く、かつ面倒な。腐りかけでこれとなれば、本体はより物理が通りづらいと見える。……ならば、今度は魔法でどうだ？」

クレスは背囊から四種の魔剣を取り出して、一振りずつ実験的に振るってみる。

水・土・風・氷と、この階層では大爆発を起こしかねない火属性及び雷属性を除いた一般的な属性の魔剣たち。それらは彼が『深々層』で採取した素材を元に、鍛冶・神秘・魔導アビリティを掛け合わせて無理矢理鍛った自作の武器だ。

打ち手が本職ではない故に、品質は低い。それでも希少な素材をふんだんに注ぎ込んだだけあって、寿命は短いもののそれなりの火力が保証されている。

咲き乱れる水刃、岩石流、真空波、そして吹雪——かの『クロツゾの魔剣』ほどではないにせよ強力な攻撃の数々が、色とりどりの軌跡を描いて標的たる肉塊に着弾した。

「……なるほど。これでも、ほぼ無傷ときたか。だが、無意味ではなかったようだな」

残念ながら、紫毒<sup>キング・ポイズンスライム</sup>巨塊から剥がれ落ちた肉体の一部は、並みのモンスターであれば十分消滅させられるだけの勢いを持った魔剣の攻撃を見事耐え抜いてみせた。

切り裂かれず、穿たれずの堅牢な肉片。

されどクレスの眼は、今のやり取りでその一部が僅かながら削れたことを見抜いていた。

「(良し……今回の戦い方の方向性だが、僅かだが見えた。これは良い収穫だな)」

攻略の掛かり口を見出せたことに、クレスは仮面の下で満足そうに笑みを浮かべた。

後は推測される攻略手順から逆算して、必要な装備を入念に整え、万全の準備を潤沢に拵えるだけ。

手持ちの通常階層攻略用装備は、ほぼ総取っ替えしなければならぬいなとクレスは頭の中で算盤をはじく。

複数種の雑魚<sup>モンスター</sup>に対応できる汎用装備から、一体の迷宮<sup>モンスターの</sup>の孤王を徹底的かつ執拗に殺し尽くすための専用装備<sup>マードメイト</sup>へ着替える——そのためには久々に、物づくりとしての腕を鳴らすことになりそうだ。

「(素材回収、道具作成……いくつか装備の改修もしなければな。最近眠らせっぱなしの連中の錆も落とさなきゃならんし、こいつは大変だぞ。だが、やらねばならん。やれるもやれぬも等しくやり遂げねば、迷宮<sup>ダンジョン</sup>最奥の攻略など夢のまた夢)」

クレスの直感<sup>モンスターレックス</sup>は「この迷宮の孤王は放置しておく<sup>タイプ</sup>とヤバイ系統だ」と警鐘を鳴らしていた。

外敵に侵されることなく、ひたすらに食事<sup>ストック</sup>を続けて肉体に毒と栄養を貯蔵<sup>ストック</sup>していく……時間が経つにつれ成長していく、将来的な危険性をこのモンスターは孕んでいる。ならば放置して先へ進むよりも、早々に討ち取ってしまつて後顧の憂いを断つ方がいいに決まっている。

触らぬ神に祟りなしというが、どうせ迷宮<sup>ダンジョン</sup>の最奥を目指していればいずれ戦う羽目になるのが目に見えている。

「(ならばさっさと始末をつけるのが賢明というもの。そのための算



段、二重三重四重五重に立てて多少無理やりにも嵌め殺す。この階層の毒も鬱陶しかったが、その礼代わりの意味も込めて。俺の手持ちの毒を、こいつにはたっぷり馳走してやるとしよう」

「悪知恵 猛毒地帯の踏破で積もりに積もった精神疲労は、やはり階層主攻略で発散するに限る。」

そう言わんばかりに疲れた全身に活気を漲らせながら、クレスは勢いよく跳躍して紫毒巨塊の穴倉から上層へ、そして自らの拠点へと撤退するのだった。

「冒険者は冒険をしてはならない」

毒霧の奥に悠然と佇む異形の王。その御前に再び辿り着いたクレスの瞳には、揺るぎない自負の光が瞬いていた——「為せるだけの用意は全て終えてきた」と。

今の彼が五体に纏う武装はいずれも、目前の迷宮モンスターレックの孤王ただ一個体のためだけに用意したものだ。深緑と白銀入り混じる戦闘衣バトルクロスも、腰と背にそれぞれ吊り下げられた数種の武器群も、ポーチ及び防具裏のスロットに収納された薬品類も……その全てが対紫毒巨塊戦キング・ポイズンスライムに備えて念入りに調整を施された逸品だ。

それらの階層主征伐用装備をかつちりと着込んだクレスが、纏わりつく毒霧を肩で切つて前へと歩み出る。

四肢に勝利への確信を。臍はらわたに生き残ることへの執念を。

そして気骨へと、迷宮ダンジョンの完全なる攻略への渴望を十全に漲らせて。いざ開戦の銅鑼ゴングを鳴らさんと、掲げた左手を垂直に振り下ろす。

「取っ掛かりだ。まずは総数100振りの魔劍豪雨——これで環境を整える」

天蓋に開く、本来ならば紫毒巨塊キング・ポイズンスライムに餌を与える用途で迷宮ダンジョンが設えた大穴。

しかし今この時において、それは彼が用意した戦場の仕掛けとして機能した。

穴の外側、現在クレスと紫毒巨塊キング・ポイズンスライムがいる下部の大広間とは逆の方に展開された簡易弩砲群バリスタ。彼の放った合図魔力を受けたそれらが、予め弦に装填されていた氷属性魔劍の矢を雨霰の如く戦場に射出する。

その光景はまさしく、藍氷の劍雨。

こと対迷宮モンスターレックの孤王戦において、出し惜しみなど愚の骨頂。

持てる力の限りを以て、お前を圧殺する——そう言わんばかりに容赦なく降り注ぐ青輝の魔法劍群は、着弾すると同時に砕け散り効力を発揮する。

魔劍にして低位スベリオルズの特殊武装。『一撃で使用不能となることを代償に

その威力を増大させる』という極めて単純な足し引きを付与された刃の時雨が、瞬く間に戦場を塗り替える。

猛毒の沼が、霧が。

階層そのものが——極冷の白氷に閉ざされる。

「(疑似顕現、『凍棺氷獄』。かつてはその猛威に苦しめられたが、今回はお前に助けてもらうぞ)」

『凍棺氷獄』とは、『深々層』の一階層を形成する氷海環境。その氷山奥部より採取した白棺鉱を原料に打ち出された魔剣の数々は見事、クレスの思惑通りに仕事を為した。

足を絡めとる毒沼はぶ厚い氷層に覆われ、肺を侵す毒霧は冷気の流れによって払われ……今や一変した環境において、この階層最大の障害であった猛毒の脅威はほぼ意味を失っていた。

「ふう、寒いがこれでようやくマトモに息が出来るな」

副作用として呼吸制限と視野の狭窄をもたらしていた鬱陶しい被り物を脱ぐ。

ここ暫くの友人であった閉塞感から解放され、気分と合わせて少しばかり身軽になった彼は続けて腰の両方からしゃらん、と双剣を引き抜く。

美しき虹色の刀身を持つ姉妹剣『アブソリユート・デュオ』。

無論特殊武装であるそれらの柄頭に色合いの異なる二種の魔剣を

それぞれ取り付けて、彼は周囲の環境と同じく凍り付いた紫毒巨塊の足元を目指し駆けだす。

「魔剣装填完了、属性刃出力開始。——行くぞ」

紫毒巨塊は外側こそ氷の層に封じられたように見えるものの、芯まで凍り付いているわけではない。その肉体は相も変わらず内部で接触している地面から食事を続け、内側から膨れ上がることで自身を覆う氷牢を破壊しようとしている。

それが為されるより早く第一の作戦目標を達成しようと、敵の懐へと潜り込んだクレスは猛烈な勢いで左右の剣を振るい始めた。

虹色から、藍と翠の単色へとそれぞれ色合いを変えて——透き通る氷と渦巻く風を一時的に宿した二つの魔刃。

鋭く振るわれたその二連斬が、モンスターの巨体に確かな瑕を刻み込む。

「柔らかく、されど硬くもある異質な肉体。だが、冷やし凝固化させた上で衝撃を与えれば攻撃は通るのだったな！」

初回会敵時における実験情報収集において、クレスは土の魔剣より放たれた岩石の一つが階層主の落下物の一部に傷をつけたことを見て取っていた。そしてそれは、コンマ数秒の差で先に氷の魔剣による一撃が着弾したことで凍り付いていた場所でもあった。

つまり、氷結＋物理攻撃。

その組み合わせを用いた時のみ、この強固なモンスターの肉体にダメージを通すことが出来る。

それを知った彼の選んだ武器が、双剣着実に紫毒巨塊の肉体を傷つけていく。

『アブソリュート・デュオ』。通常魔剣の芯に用いられる触媒金属『虹色鉱』を刃に転用した特殊武装。その効果は、『柄に装着した魔剣に応じた力を引き出し刃に纏う』というもの。

左の姉剣が司る今の属性は氷。絶対零度の刃が、接した面を刹那のうちに凍らせる。

右の妹剣が司る今の属性は風。唸る疾風の刃が、凍結した紫毒巨塊キング・ポイズンスライムの肉を華麗に切り刻む。

また、『過剰共鳴』——振るう一瞬にのみ担い手の魔力を込めることで、瞬間火力を増大させる絶技。

それらの複合した魔刃ブレイドダンスの双舞が、孤独なる王の柔剛重なる紫の腐肉を容赦なく抉り削る。

弱点が存在しない？ ならば作り出して叩くのみ。

「冒険者は冒険無謀をしてはならない」。その原則に基づいた彼の計算通り、瞬く間に紫毒巨塊キング・ポイズンスライムの肉体は地面との接触を断たれていく。

「(切断面をすかさず再度凍らせることで、肉体と地面との間に氷の層を挟み込む。……こうすれば、その厄介な捕食回復は中断せざるを得

まい)」

紫毒巨塊キング・ポイズンスライムからの反撃がないのを良いことに、クレスの振るう左

右の連撃は勢いの留まるところを知らず突き進む。

猛吹雪ブリザードの如く吹き荒れる二属性の刃が、微かな軌跡の残光だけを残して彼の手元で閃く。

その勢いのままに、クレスはモンスターと地面との接合部を素早く剥がす。

外側から内側へと、着実に。抜かりの無いよう細心の注意を払いながら掘り進めて、肉体と毒沼の接する面積を徐々に狭めていく。

そうして切削し尽くした果ての、最後の一点を断ったところでクレスはばつと飛び退いた。

モンスターの肉体と地面との間に彼が作りだした空間、それが最後の支柱を破壊されて圧壊する。重量のある肉体が落下したことによって大きな衝撃が生まれ、小規模の地震ステーションが戦場を揺らす。

その衝撃は同時に、限界を迎えつつあった紫毒巨塊キング・ボイズンスライムの氷による封印を解いてしまった。

『……り、りりりいー……』

「それがお前の鳴き声か。漸く聞けたが、さて……」

元より内側からの圧力で破碎寸前だった氷が、細かい飛沫となって散り果てる。

その向こうから漏れ出る、甲高い鳴き声。

それは、ついにこの空間の主が活性化したことを示していた。

クレスが粘性体スライムのようだと評した肉体が、彼の視線の先でするすると名残惜しむように食事を探して氷の大地を這い回る。されど、それは百の魔剣が生み出した氷の壁に阻まれており手が届かない。

——このような残酷な仕打ちをしたのは誰だ？

——住みやすい寝床をいつの間にか荒らしていたのは、いったい誰だ？

ここまででは視線を散乱させるばかりでまったく意味を成していなかった、紫毒キング・ボイズンスライムの巨塊の肉に浮かぶ百の目玉が一齐にクレスを凝視する。

『……りりり、ケリ、りりり・りりり……』

ようやく邪魔な羽虫ウツの存在を知覚した紫毒巨塊キング・ボイズンスライムが、それを排除

しようと動き出す。

ぐにゆりぐにゆぐにゆグチユグチユぐじゆり、と奇怪な音を響かせる悍ましい肉の蠢きを以て、その身体に蝟や烏賊のような触腕を生え揃う。——その総数、太長細短あわせておよそ200と少し。

どれ一つ取っても同じ縮尺のものが存在しない歪な手足の先端が、緩慢な動きで宙を揺蕩うように這い回る。その姿は生物としてあまりに異端と言う他なく、見る者によっては恐怖による一時的行動不能スダンや何かしらの精神的異常が呼び起こされるかもしれないだろう。

それらの触手をクレスに向けた紫毒巨塊キング・ボイズンスライムが、啼く。

『ケリ、リリリ、テケリ・リリリリリ……テケ・リ・リ……！』

胎動する紫毒の巨塊。

その変化した異様な威容を前に、クレスはその攻撃形式パターンを見極めるべく一度双剣アフソリユート・デユオを引つ込めた。

続けて背から取り出した盾を右腕に構えて、防御・回避体勢に移行する。

「ここまででは実質準備運動。ここからやつと、本番が始まるな……！」  
何が来ようと対処出来るよう、クレスは形態変化後の初動に備えて様子を伺う。

紫毒巨塊キング・ボイズンスライムの一挙一動を見逃さぬよう、ひたすらに凝視する。

その視線が、まばたきで極僅かな間だけ遮られた——それは稀によくある、『深々層』における命取りの一つであつて。

『リ』

気づけば既に加速を終えていた触手による強烈な横薙ぎが、次に眼を開いた彼の視界いっぱいを占領していた。

【漆黒の雷弾】、カツコ良い詠唱は必要じゃよネ！  
Y変態工〇好々爺 b

意識の間隙を穿つ一撃。

その不意打ちをクレスが凌げたのは、ひとえに積み重ねた経験の賜物だった。

「っ！」

直感的に、迫っていた紫毒巨塊キング・ポイズンスライムの触腕と身体の間盾を持つた右腕を差し込む。それで防御を間に合わせた彼は、その衝撃が肉体の芯を捉えるより先に盾の角度を僅かに変えて攻撃の伝播する方向を側面へと逸らした。

しかし音速を超えた暴威は凄まじく、それだけで完全に威力を打ち消しきることはできなかった。

残った分の勢いを逆利用してクレスは、弾かれるような形で後方に距離を取ろうとした。

『テ・ケリ・リ！』

「……………」

されど紫毒巨塊キング・ポイズンスライムの持つ触手の数は優に百を超えており、その内のたつた一本を使った程度で相手が満足するはずもなく。

うねり騒めく数多の触手が続けざまに彼の下へ殺到、大気を引き裂く雷鳴のような音と共に衝撃波を撒き散らして四方八方からクレスへ襲い掛かる——！

『テケ・リ・テケリリイイ……ケケ・リリイイ——ッ！』

先ほどまでの「沈黙は金」を表した態度を脱ぎ捨てて、鞭と化した触腕の数々を恐るべき速度スピードで振りかざす紫毒巨塊キング・ポイズンスライム。

視界どころか空間そのものを埋め尽くす勢いで迫るその飽和波状攻撃に、されどクレスは落ち着きを以て目を凝らした。

「これだけの手数、先ほどの微塵切りの意趣返しのももりか？　しかし階層主であるのなら、まあ……これくらいは普通だな」

レベル21ともなれば、音速を目で捉えることなど赤子の手をひねるより容易い。

左右上下、左左上上下下右右。

右上左下右下左上、前方後方斜め正面2時3時7時8時……！

『テケ・リリ・テ・ケリケ・ケリリリ・リイイ……！』

「まだこの程度なら問題ない。さては奴さんやつこ、まだ本気ではないと見える」

寄せては寄せる怒濤の連撃は、例えるならば一つの荒波を乗り越えた先にまたそれをまるつと呑み込む大荒波が口を開けて待ち構えているようなものだ……と揉まれる側の立場にあるクレスは呑気に思った。

様々な角度から迫る触腕の勢いは振り回されるたびに徐々に勢いを増し、常人の眼にはもはや残像さえ捉えられない速さとなっている。もしその打撃が命クリンヒット 中した場合、標的を挽肉ミンチより挽肉ひでえや状態に変えるであろうことは想像するに容易い。

しかし、その渦中に置かれた彼の五体は未だなお健在だった。

俊敏かつ破壊力抜群な触手の豪連打ラッシュだが、彼に言わせれば「まだ避けるだけの隙間がある」。

触腕ツヅミと触腕ツヅミの間に存在する小さな隙間へと身体を捻じ込むことで、クレスは絶妙な立ち位置を維持しながら生き残っていた。

視覚のみならず、聴覚や嗅覚など五感の全てを動員して回避、回避、回避。

襲い掛かってくる触腕の中から完全に避けるべきものとそうでないものを見極め、一部の攻撃をあえて盾で受けて流すことで威力を掠め取って己の機動力に転化する。

評価値Sの器用アピリティは伊達ではない。一見して死地のような肉鞭の檻に身を置きながらも、彼は針の穴を通すような繊細な立ち回りで傷を負わないでいた。

またそうして逃げ続けながら、クレスは紫毒キング・ボイズスライム 巨塊本体の動向を少しずつ探っていた。

「――触腕はそれなりに動かしても、本体は未だ元の位置からほぼ動



かずか。完全に固定砲台タイプそういう型なのか……いや、まだ決めつけるには早い。そして……」

『リリリリ……テ・テケリ・リリリ・テ・ケリリリ……!』

クレスは降り注ぐ触手の流星雨の中で、観察した触手攻撃の特徴を記憶に書き留める。

触手そのものは伸縮自在にして強靱無比。

本体に星の数ほどある目のおかげで彼を見逃すこともなく、一度得物に狙いを定めたならば決して逃がそうとせずぐんぐんと迫ってくる。

そして人の両手両足を合わせた指以上の数が並行して動かされているが、それら同士の衝突は今のところ一つも起きていない。

総じて、猟犬のような執念しつこさと蛇のような柔軟さを兼ね揃えていると言ったところか。

しかし、どうやらその万能さにも限界がないわけではないようらしい。

回避と防御に専念しながらクレスが分析したところによれば、一つの触手の伸縮距離は最大30Mメートル。それ以上腕を伸ばそうとすればキング・ボイスンスライム紫毒巨塊の操作可能範囲を逸脱してしまうようで、その先端がぐずりと崩れ落ちるような兆候が見て取れた。

それを悟ったクレスが試しに攻撃の圏外に脱してみると、それでようやく、本体が追いかけてようとして鈍々のろのろと動き出す。

「二応、本体がまったく動かないわけでもない。……しかし意外だが、そちらの自己崩壊の様子は捕食が途切れても前と頻度ペースが変わらないな」

当初の光景と変わらず、あまりに巨大なその凶体からは肉片が剥離を続けている。捕食が出来なくなったからと崩壊が自動で止まるわけではないようだ。

そして落下した肉片は残る魔剣の冷氣によって凍り付いて、そのまま氷の床に張り付いてしまう。

再吸収の出来ない自壊、となればこのまま「耐久戦で紫毒巨塊あつちが勝手に死ぬのを待つ」という手も考えられるが——クレスはその考えを

一蹴する。

「そう都合のいい展開ことなど迷宮ダンジョンにあるはずもない。……ああ、やはりな」

クレスの予想した通り、なかなか彼を排除できない紫毒巨塊キング・ポイズンスライムが業を煮やして次なる一手を打つ。

『テケ・リリリ……テケリテケリ・ケリ・リリリイイ——!!』

一度触腕を全て体内に戻し、新たにぎゅるりと四つの触腕を生やす。それまでと比べて一回りも二回りも太く逞しいそれらは、どうやら特別製のものに見える。

更にその先端にはしっかりと、新たな攻撃手段が用意されていた。

「見覚えのある奴ドロップアイテムらがいるな……モンスターが一丁前に武装とは。だが、こと階層主モンスターレックスに至ってはそれくらいする方が逆に不思議ではない」

記憶の中から各々の名称を引っ張り出したクレスが、納得と共にそれらを言葉にする。

「ウダイオスの黒王剣」に「クリユオサルの黄金帝剣」。あとは「セイリュウの厄潤胸核」と……最後の一つは初見だな。俺のこれまでの地図作成に見落としがなければ、更に深い階層の素材ドロップアイテムか？」

ウダイオス、クリユオサル、セイリュウ。

それらはいずれもクレスが知るところの、悪名高き迷宮の孤王モンスターレックスだ。

となれば自ずと残る一つも、同程度の力量を持つモンスターなのだろうと判断をつける。

今名を上げた彼らが自らこの階層を訪れたのか、逆に紫毒巨塊キング・ポイズンスライムの方から遠征に乗り出したのかはクレスには分からない。いずれにせよそれらは最終的に此処の主の贄となつて、骨の髄まで啜られつくして……使える、と判断されたのだろう。

「黒王剣のはまだ良い、頑丈なだけだからな。しかし黄金帝剣には斬撃を飛ばす能力があるし、厄潤胸核セイリュウのといったらあれは代名詞の高圧水流刃アクアジェットの発動に使う器官だぞ……まあ、わざわざ引っぱがして取っておくくらいだ。当然そいつも使えるんだろうな」

ひとまず高圧水流刃アクアジェットには気を付けなとな、とクレスは気を引き締める。

なにしろあれは軽く20階層分を貫く威力があり、初めてその存在を知った時には自らの身体を以てであったという苦い経験が彼にはある。幸運にもその時には右腕を吹っ飛ばされただけで済んだが、敵の正体を判明させるまでいつまた水流が来るか分ならず、ひととき慎重な攻略を強いられた。

飛翔する斬撃ストライクアウェイと高圧水流刃アクアジェット、この二つによってここまでの紫毒巨塊の弱点だった『触手の可動範囲による攻撃制限』は失われた——そして。

「最後の一つは未知数……あれの効果を見るまで下手な反撃の手は打てんな。外観は鱗と結晶の生えた翼の膜部分、形状は蝙蝠のそれともドラゴンのそれとも見えるが。はてさて、どう動く？」

『アケリイ——……』

視線の先の紫毒巨塊キング・ボイズスライムが、武具の着心地を確かめるかのように腕を小刻みに振るわせる。威嚇のようにも見えるその動き——次の瞬間、黄金剣の斬撃と水流の刃がクレス目掛けて遠慮なしに振るわれる。

「ちっ、早速か！」

彼の所見によると、その威力は本家本元同様オリジナルなんら侮れるものではなかった。

現在の対毒重視装備で受けるのは厳しいと判断し、すぐさまその場を飛び退く。

独特の振動音を以て宙を駆ける高圧水流の方は容易く氷を切断し、浅くない傷を残す。

黄金剣による斬撃の方もまた、氷床にクレス2人分くらいの深さの凹みクレターを刻み込んでいた。

「威力は間違いなく、先の触手攻撃を軽く上回っている。喜ばしいことではないな」

いずれもあまり乱射されると、当たり所次第では氷のフィールドの崩壊を早めることに繋がってしまう。

氷下の毒液がそこから漏れ出したら元の木阿弥になりかねない……となれば。

「早々に決着を狙うべきか……いや、焦るな俺よ」

割れたり薄くなつた氷床に控えの魔剣を振って補強しながら、クレスは隠された残り一つの能力を見極めようと前が出る。

キング・ボイス・スライム  
ドロップアイテム  
紫毒 巨塊は割と簡単に誘いに乗ってきて、彼に對してその謎の素材が纏われた腕を振るってきた。開いた翼が鎌のように展開し、黒板をひつかいた時のような甲高い音を鳴らして迫る。

しかし、斬撃が飛んでくるわけでも、水流の刃が飛んでくるわけでもない。

その一撃をなんなく避けたクレスは首を傾げた。

「特殊能力がない？ いや、そんなことはないだろう……ふむ」

ひとまず背面に回つた触腕から迫る一撃黒王剣を避けるべく、更に前に踏み込もうとしたクレス。

そちらは先ほど謎の触腕攻撃が通つた後の場所であり、そこに近づいた瞬間。

彼の胸元が、ぱっくりと裂ける。

「これは……！」

すかさず、傷を生んだ原因となる場所に目をやるクレス。

音速を見切る彼の眼が、結晶翼纏う触腕の軌跡に残っていた微かな空間の違和感を捉えた。

僅か一筋の黒い線が、そこに走っている。髪の毛の何百万分の一よりも細い、空間に刻まれた罅。

クレスは傷に回復薬をかけて止血しながら、その黒線へ向けて試しに足元に転がっていた氷の破片を蹴飛ばしてみた。

「む」

その線のような空間の歪みに触れた瞬間、氷は真っ二つに割れた。まるで斬られたかの如く美しい切断面を見せて落下するその様子を見て、クレスはやはりかと頷いた。

「名づけるなら『設置斬撃』か。見えんことはないが、戦いの中で気を配るのは面倒なやつだ……ここは、後で出てくる厄介なモンスター

の攻撃手段を知れたと楽観的に捉えておくか」

何はともあれ、これで敵の新たな攻撃手段は一通り知れた。

ただ頑丈な剣 飛翔斬撃 水流斬撃 設置斬撃  
黒王剣に黄金帝剣、厄潤胸核と結晶翼。

四種の斬撃の間を掻い潜りながら、それらを踏まえた上でクレスは変化した戦いを決着に導く方法を考える。

「とにかく、一番厄介なのは斬撃を置いてくる奴だ。いつまで残留するか……少なくとも一、二時間で消えてくれるほど生易しくもなからう。となれば、長期戦は不利。短期決戦を狙うべきだ」

ほぼ不可視の斬撃結界が完成した場合、それへの対策を持たない今のクレスは身動きが取れなくなってしまう。

その状況に陥るより先にこちらが紫毒巨塊を仕留めなければならぬ。キング・ポイズンスライム

そう暫定的な方針を見据えた彼は、反撃にうって出るべく再び『アブリュート・デュオ』を抜いた。

触手の数を減らした弊害で、先ほどまでの特徴だった恐るべき手数も失われている。

着実に攻撃を避け、迫る触手をすれ違いに斬ろうとするが、凍らない「効かないだろ？」

氷属性を宿した刃は、先ほどまでと違いほぼ効果を発揮することなく弾かれた。

激しい触手の動きが熱を持って、魔剣の冷気を以ても凝固点を下回れないのか……なんにせよ、氷に対する耐性が変化しているようだ。

そうなれば、クレスは攻撃手段を考え直さざるを得ない。

しかし彼の顔には、悲観的な感情は写っていないかった。

「……曰く、世の中に完全な無敵ってやつは存在しない。あるなら最初からそれを作ればいいだけの話だからな。どんな奴にも弱点はあるし作れる。そうじゃないから、迷宮は多種多様なモンスターを揃える……」

どこかで聞いた話を思い返ししながら、クレスは冷静な面持ちで改めて遭遇時に試した実験を執り行う。

発火性の毒煙を封じた今、火と雷を含めた全属性の魔剣を振って試

す。

——その中で効果を示したのは、雷だった。

「雷撃による一時的な硬直。こいつを介せば攻撃は通るみたいだな。なんでもって、速攻を狙う……ならば今の紫毒巨塊お前に相応しい武器は決まった。こういうこともあるのかと持ち込んでおいてよかったな」

双剣をしまったクレスが、腰の後方から取り出した折り畳み式の武装をガチャンと展開し構える。

その全長、およそ5Mメートル。

長槍にも似たその形状だが、しかしこれは弓であった。

電磁加速式重弩、『ブラック・ブレット』。

その銃身には、かつて雷神ゼウスが妻ヘラにお仕置きされていた中で流した神血イコルをしれっと拝借パクッてして練り込んでいる。魔力を込めることで電流と磁場が発生し、装填された専用弾——神殺アンタレスの蠍の近縁にして深淵種である『ブラックロック・エスコルピオの重殻』から削り出したもの——を加速して撃ち出す。

問題なのは先の魔剣と同じく、一発限りのじゃじゃ馬であること。一度撃つと銃身がプラズマ化して焼け付いてしまい、作り直しに近い整備メンテナンスをしないと次弾が撃てない。

しかしその威力は、好々爺ゼウスの保証ドン引き付きでもあった。

「最大充電まで最速十分。それまでにお前が俺を仕留めるか、そこまで至った俺がお前を仕留めるか。鬼ごっここと行こうか」

紫毒巨塊キング・ポイズンスライムに、その提案を拒むことは許されなかった。

パチパチと弾ける電子の嵐が、クレスの手の中で荒れ狂う。

その有様に秘められた威力を本能で察したのか、モンスター側からの攻撃頻度が更に上昇する。

なんとしてでも充電チャージを中止させようとする紫毒巨塊キング・ポイズンスライムの反応に、クレスは確信する——どうやらこの一撃は、奴を仕留めるに値するようだ。

やたらめったらに振るわれる触手剣には通常冒険者の使う剣技の術理が存在せず、軌道は複雑で読み辛い。

しかしその動きにまったくの規則性がないと言われれば、その認識

には語弊があるとクレスは思う。

染み付いた癩、肉体の特性に寄る甘え。これまでは『深々層』の階層主相応のステイタスによるゴリ押しで乗り切ってきたであろうことがありありと読み取れる、素人の剣捌き。

刃筋を立てるだとか残心を取るだとかをロクに知らない動きは、彼にとってどうぞ手玉に取ってくださいと言われていたようなものだった。

脅威であつた設置斬撃も、それを振るう触腕が常に一定の範囲から抜け出さないように立ち回ることと封じられる。一部に危険地帯を集中させ、そこに踏み込まないようにする。

その他激しく猛追してくる攻撃の中を、クレスは宙に舞う木の葉のような動きで避け続ける。

決して、無理になるような機動は行わない。常に数手先の自分が無事である道筋を見定めて、そこに至るまでの道程を踏み外すことなく駆け抜ける。

彼の手中で脈動する疑似神雷の輝きが、幾千の鳥の囀りのようにけたたましく鳴く。

舞い散る電子の奔流がその手を焼くのも構わず、クレスは惜しむことなく魔力を注ぎ込み続ける。

器用さを主としながら満遍なく能力値を鍛えてきたクレスの魔力は、近接戦闘手ながらも熟練の魔導士のそれに匹敵する。

己の作った武器の限界を見極めながら、潤沢な魔力を注いで。

注いで、

注いで、

注いで——来た。

「さて、あの好々爺エロジジイが言うからには事後承諾の条件は「儂の血を使うからにはカッコいい詠唱が必要条件！ それが出来んのなら使うのダメ、絶対じゃもん！ 大神わしに相応しい、超絶カッコいいの頼むから——！」ときているのでな。ここで本邦初披露だ。理解できるかは知らんが、冥途の土産にでも聞いていけ」

古代には一時期、詠唱破棄の技法が流行った時期もあった。

しかしそれは自然と廃れた——何故か。

なにかと一部の冒険者と神どもが「それじゃキメられねえだろ！」と騒いだのもあるが、その本質は『魔法円と同様、詠唱には魔法威力の向上にある』と認められたからだ。

声に出して詠うことで、戦いの空気に酔いしれる中でも魔力の流れを練習した通りに整えられる。その澱みない魔力の流れを用いることで、魔法の過剰消費が減少しかつ威力が向上するのだ。

そんな当時最先端の『学区』の研究成果を投資者の権利としていち早く手にいれていたクレスは、いざ必要となれば惜しみのない全霊の声で詠う。

「盟約により我が手に迸れ天空の王よ」——雷装銃身、充填完了」

散々大神とその眷属に駄目だしされた詠唱だが、彼は作り手なだけあつてそれなりに気に入っている。

「招来するは神意を滅ぼす魔蠍を穿つ嘶光」——三眼演算式、照準固定」

連中の要望として苦渋を噛み締めながら取り入れた詠唱外の文句も練習を経た結果、我ながら感心するほど流暢に詠えているものだとクレスはふと過去を懐かしんだ。

「万雷折り重なりて宙を征けよ浄火」——射出準備、完了……」

ほぼほぼ光の塊と化した銃身を構え、紫毒巨塊の本体を正面にして。

そう言えばと試射の折、かつて建設途中だった巨塔を吹っ飛ばしてしまい「神の怒りだ」なんだと騒がれる黒歴史を生み出してしまった記憶がふと思い出されて——。

「——ブラック・ブレット」、発射ア！」

引き金が引かれ、撃鉄が落ちる。

その合図とともに、装填された弾丸が溜め込まれた力場の影響下へ。

物理法則と魔法法則の累乗が常識を超えた加速を生み、漆黒の銃弾は雷鳴の如く銃身を駆けて光となる。

超神速にして亜光速。



神域の狙撃に達した弾丸は、咄嗟に防御態勢を取った四つの触手をその装甲武装ごと纏めてブチ抜いて。

疑似的な長文詠唱に見合うだけの威力を以て、一瞬にして紫毒キング・ポイズンスライム巨塊の肉体を打ち抜き——風穴を開ける。

『!!!』

風穴より伝わる余波熱により、全身が瞬く間に沸騰。

内側から気化して膨れ上がる体積、その圧力に巨体が耐え切れるはずもなく。

超新星の如き大爆発が、洞窟内を白一色に染め上げた。

咄嗟に壊れた銃身を投げ捨て、身体を丸めて防御態勢に移行したクレス。

彼は光と衝撃が収まるのを待って、眩く。

「……やったか？」

## 熾天の蝕毒と英雄ならぬ冒険者

魔鏡「ブラック・バレット」の齎した極光が収束するまで、たつぷり十秒程度を要した。

神アルカナムの力に限りなく近しい電力エネルギーの暴嵐が徐々に落ち着き、世界に色彩が戻って。

——そこには、何一つ残っていないかった。

見る者に不吉な予感を抱かせて止まない醜悪なる肉塊の姿は、影の一つも見当たらない。

ただ水分と言える水分が蒸発し尽くして、干ばつ地帯のように罅割れた元毒沼だけが在る。

「……ちい、また作り直す必要があるか。少し調子に乗りすぎたな」

その中に一人佇むクレスは、熱雷の反動でほぼ炭と化して加護を失った樹精霊ドライアド・ネクロスの骸衣を破るように脱ぎ捨てた。

晒された彼の上半身、そこには融けて捲れ上がった皮膚とその下に無数に走る惨たらしい樹状の火傷跡があった。

レベル21の耐久を易々と貫く、偽の神雷ケラウンスの代償。神経までもが焼き切れているおかげで逆に痛みはなく、その閲覧グ注意な自分の肉体に対してクレスは肅々と収納袋スロットから引き抜いた回復薬ポーションを振りかけて治療を施した。

——このくらいの代償は安いものだ。恩恵ファルナと『深々層』製の薬があれば、冒険者の身体はちよつと死の淵を乗り越えたとしても戻ってこられるのだから。

大事カオスにされている神に聞かれたら大目玉を食らうような、これまでの実体験に基づく認識の下で。

彼は修復の始まった肉体が次第に生氣を取り戻し、またその過程でじくじくと痛みが復活していくのを堪えながら、今の今まで相対していた階層主紫毒の巨塊について思考を巡らせる。

「五体は無事、走馬灯死にかけてもも見えていない。使ったのは精々魔剣100本と、双剣に盾に重弩ポーションに回復薬数本……」

その、大戦果と呼んでも差し支えない今の自分の状況を振り返って彼は顔を顰める。

「少ない。あまりにも少なすぎる。だって、まだ用意した装備の半分も消費していないんだぞ？」

これで決着がついたとすれば、いくらなんでもあつけなさすぎる——そう、有り得ないほどに。

もし、今の戦いが予め情報を仕入れた上で挑む『既知』の階層<sup>モンスターレックス</sup>主相手であれば分からないでもない。徹底的に分析した敵の戦闘思考<sup>アルゴリズム</sup>を誘導し、状態異常<sup>毒・麻痺</sup>や拘束罠などを活用して動きを封じ、露出させた弱点を粉碎する。そのような周回<sup>素材集め</sup>行為の時ならば、どれだけ強大なモンスターであろうとクレスにとって鎮めるのは容易い。

しかし、今回は話が違う。

『未知』の迷宮<sup>階層</sup>の怪物を相手にしておきながら、大して苦戦もせず倒してしまえるだなんて。

そんな都合のいい話があるものか？——ああ、もちろんそんな訳がない。

クレスの直感が、これまでに積み重ねてきた経験が、叫ぶ。

思考回路に鳴り響く警鐘<sup>サイレン</sup>が、神の加護<sup>ファウルナ</sup>越しに甲高く訴える。

まだ、終わっていないと。

「——っ！」

彼の予想を、親愛なる迷宮<sup>ダンジョン</sup>の悪意は裏切らなかつた。

一滴の潤いもなく干上がり切り、生命の鼓動が消え失せたはずの洞窟が突如鳴動を始める。

乾燥して固まった毒沼の直下から……迷宮<sup>ダンジョン</sup>の奥深くから。

神の一撃<sup>フラック・ク・プレット</sup>に等しい暴拳を受けてなお健在であった、心胆を寒からしめる声がクレスの耳をつんざく。

「——イイイ・リ・ティキリ・リリリイイ——」

それを聞いた彼が「やはりか」と納得するや否や、それは地面から盛り上がるようにして姿を現した。

「……随分と様変わりしたな」

少しばかりの間をおいて彼の目の前に姿を見せたもの。

それは、光沢放つ美しき真球体だった。

一切の瑕疵が見当たらない、理想的な玉体……しかしそれから感

じられるおどろおどろしい気配はまさしく、この場所の主である

紫毒巨塊のものであった。

「第一形態、第二形態ときて第三形態か。まだ変化を残していたとは

驚きだ。それにしてもあの黒雷弾を受けて、まだ核が無事だったと

は。予想はしていたとはいえ、そちらもまた信じがたい」

とはいえ、クレスのやることに変わりはない。

また動きを一通り観察して、それから討伐までの手順を組み立てる。

そのために改めて取り出した盾を構えて、様子見の体勢を整える。

『……リリリリ……テ・ケリ・リリ……リリリ……』

彼の視線の先で、真球体の表面にぴしりと一筋の罅が入る。

それを起点として、紫毒巨塊が徐々に変貌を遂げていく。

先ほどまでの触手による猛攻が嘘であるかのような、どこか余裕さえ垣間見えるゆつたりとした変態行為。

色合いだけは相変わらず不気味な紫色のそれが割れて、中身に隠れていたものが見えてくる。

紫毒巨塊の移ろいゆく様子を観察するクレスはなんとなしに、

あの形状が意味している所を悟った——あれは、繭だ。

外敵から身を守る盾。絶対不可侵の防御膜。

それを今になって解くことの意味——それは。

「——まさか、これからようやく起きたのか?」

先ほどまでの形態はいずれも、孵化前の未覚醒状態。

破れる殻の隙間から漏れ始める、これまでとは比べ物にならないほどの重く粘つくような殺意。

魂の根底を凝視し揺さぶってくる深き遠きもの意思……それを目の当たりにして、クレスはようやく「ここまで怪物は目覚めてすらいなかった」のだと理解した。

そしてついに、分厚い泥の揺籃を破って。

紫毒巨塊の真体が、ここに降臨する。

「あれは……天使？」

それは、とある神話体系に語られる主神デウスデアの御使いの姿に酷似していた。

軋み擦れるような不協和音を立てて回転する汚泥の光冠。

滲み滴る体液に濡れ、ぬらぬらとした悪意の輝きを放つ八枚翼。

それらを生やす、見た目こそクレスと同じ人ヒューマンタイプ型であるもののか、か畏怖を禁じ得ない黄金比の肉体——。

繭の中から生まれ出でたその在り様は相変わらず悍ましく、そして——美神が聞けば怒りに満ち震えること間違いなしだろうが——クレスが思うに、理性を超越して万人を納得せしめる『美』をそこに感じさせた。

「……ヤバいな。あれは間違いなく、ここまでのより段違いで強いぞ……！」

ここへ来て、クレスは自身の内側から鳴り響く警鐘が最大限に稼働しているのを察した。

肉体面の負傷は既に治療を終えている。構えた盾の裏で残る魔力不足を補うべく精神力回復薬マジックポーションを急ぎ飲み干し、彼はここまで以上の集中力で以て相手の初動を見切ろうと目を凝らす。

その冒険者の姿を前に、繭の残骸を振り払った紫毒巨塊キング・ポイズンスライムだったナニかが鎌首をもたげて。

何の前触れもなく、全身が爆ぜるかのように全方位全距離への弾幕を撒き散らした。

「くっ!!」

放たれた弾幕は超高速かつ、超高密度。

それは一つ前の形態において振るっていた触手攻撃の乱打よりも更に緻密に過ぎて——回避不可。

かつ、直感的に防御ではなく切り払うべきだとの判断を下して、クレスは盾と入れ替えにして咄嗟に引き抜いた魔剣「ネガ・ファトゥム」を一閃。

超級冒険者の能力値ステータスを全乗せした斬撃が、弾幕の一部に辛うじて彼一人分の隙間を作り出す。

その隙間を目掛けてクレスは身体を滑り込ませ、  
そこには既に照準を合わせていた元紫毒巨塊の姿が先回りし  
ていて——!

「——ちいっ!」

——それが何の兆候なのかは分からない、ただ確実に何かをするつ  
もりには違いない!

すかさず回避行動に移ろうとしたクレス。

しかしそれが実行に移されるより早く、焼け付くような感覚と共に  
右胸の下を貫かれる。

「ぐうっ!」

クレスの眼が捉えた攻撃の正体は、ウォーター・カッター 水圧砲。

しかも、これまた前の形態で「セイリユウの厄潤胸核」を司る触手  
が扱っていたアクアジェット 高压水流刃より威力が高い。

その一撃は迷わずクレスの脇腹を喰い破っており、すんでのところ  
で心臓への直撃こそ避けたものの肝臓が傷ついている。傷跡からど  
くどくと流れ出す血液、それを意識して抑えながら彼はすぐさま不死  
鳥の涙を溶かし込んだ最上級治療薬を呷った。

それで事なきを得たと一安心したのも束の間、傷跡に目をやった彼  
はすかさず追加でポイズン・レジスト 解毒薬を飲む。たった今塞がったばかりの傷跡  
……その周囲を侵食していたドス黒い変色部分が、薄れていく。

ウォーター・カッター 「水圧砲の中身はその腐った体液か? 血か組織液か、なにを飛ば  
しているのかは知らんがここでの暮らして厄介な病原菌を相当種体  
内に溜め込んでいるようだな。放置すれば俺でさえ敗血病である世  
へまつしぐらとは——がつ!」

その厄介さに舌打ちするより先に、クレスは続く側面からの衝撃に  
よって吹っ飛ばされた。

いつの間にか真横に移動していた紫毒巨塊が、左足を振り抜い  
ていたのだった。どうやら蹴っ飛ばされたらしい。

しかも最悪なことに、その直前の動向を彼は一切捉えられていな  
かった。

「く……っほっ。ついに本体が動くか、それも眼の追いつかない速さ

でだど？ もう俺の転移魔法シュレディンガーと変わらないじゃないか。なあ？」

これまでの戦いは全てお遊びに過ぎなかったのだと、その行動で以て語る紫毒巨塊キング・ポイズンスライム。

受け身を取って衝撃を殺したクレスが口に溜まった血を吐いて体勢を立て直す。

再び盾を構えながら相手の方へ目を向け直すと、なんとその姿が3つに増殖していた。

「分裂？ いや、残像か。器用な真似をするものだ」

その輪郭が微かにぼやけていることから、恐らくは高速軌道による残像だろうとクレスは見る。

レベル21の眼で以てしても捉えきることのできない、超加速移動……しかもその上、よくよく見れば本体からは細い糸のようなものが垂れていて常に泥沼と繋がっているときている。

「なるほどな、ここへ来てついに始まったか神回避と高耐久と超回復の絶望的階層主戦ハイパークソッゲー。それだけじゃない、どうせまた耐久も上がってるんだらう？ 神々でもこんな試練は与えてこないだらうな普通……いや、やっぱやるかもしれんな。あいつら、自他ともに認めるロクでなしだし」

そうまでして迷宮母の奥に辿り着かせたくないのか、とクレスは自身を取り囲むように周囲を飛び交い始めた紫毒巨塊キング・ポイズンスライムの姿を前に呆れるように独り言ちる。

されど彼の眼には臆するだとか怯えるだとか恐怖だとか、そういった類の負の感情は映らない。

「だが、神の試練を打ち破ってこそその人というものさ。迷宮ダンジョン、また今回もお前に教えてやろう。どれだけ高い壁を用意しようと、人間は諦めさえしなければいつかそれを乗り越える。そしてその中でも特に諦めが悪いのが、冒険者俺たちというものなんだとな！」

常人ならば絶望・失禁・発狂の三連続技コンボを返礼し、命を以て領域に土足で踏み込んだ無礼を速やかに詫びるところ。

しかしクレス・カタストロフという人間は——どうしようもなく救えない冒険者であった。

そこに苦難があるならば乗り越える。

足を引つ張ろうとする奴がいれば踏んづけて引つpegし、立ち塞がる奴がいれば殴り飛ばして。

諦めようとする己さえ燃料にくべ、手が千切れようと足がもがれようと構わず、前へ。

それこそ命を取られようが、未練たらたらに現世にしがみついて先の見えない明日へと挑む。

そうやって歩みを止めず進んできた。

そんな、これまで通りの冒険譚の二頁をここでもまた書き綴るだけ。

——それが迷宮ダンジョンに心囚われた者の定めなのだ、クレスはとうに覚悟を決めている。

「よし、行くか」

これまでと変わらず、クレスは頭を回転させる。

まず、絶対に避けるべきは汚泥光線だ。触ればすぐさま回復のために余計な行フナクション動を挟まなければならなくなる。だが発射前にわざわざ人差し指を向けてきたりするなど、前兆が見切れるのならば理論上その後の攻撃も避けられる。

それ以外の単純な物理攻撃においては、先ほどの感触からして即死はない。

受け損ねても精々が内臓破裂くらいで済むと、口の中に隠していた濃縮最上級治療薬ハイパー・ポーションの密閉容器カプセルを噛んで考えを纏めたクレスは紫毒巨塊キング・ポイズンスライムの前に立つ。

その目に宿る不屈の意思を叩き折らんと、本領を發揮した紫毒巨塊キング・ポイズンスライムが複雑な軌道を描いて彼へ襲い掛かる。

『テ・ケリリリ……テケリ・リリ……！』

汚泥の天使が、毒の窟に舞う。

音も光さえも置いて宙を駆ける孤独なる王の歓待は、その渦中に身を置いたクレスの肉体を思うがままに痛めつけ存分に弄ぶ。

迫る紫毒巨塊キング・ポイズンスライムの手刀・殴打・蹴撃・体当たりタックル・噛みつき等々……神秘的な見た目をしている割に野生的な荒々しい攻撃の嵐に、なんと





死守。

額から流れてきた生暖かい血で赤く染まる視界の中、クレスは少しずつ慣れてきた眼で観察する。

「(……どうやら、俺の方からこの速度に合わせるのは正直言って無理だ。おそらくレベルにして2つ分は、敏捷のアビリティが違う。そんなのに正面から向き合うことほど、無意味なものはない……だが、それはそれでやりようがある!)」

ここへ来て、クレスは防御一辺倒だった方針を変える。

殴られながらも己の内側で練り上げた魔力怒りに、スキルで以て点火する。

【寡黙不語カタラスモノ】、効果発動。

「——『プロメテウス』!」

詠唱を破棄された「プロメテウス」が、火花を散らして爆ぜる。

それは更に破れた氷の封印の向こう側から再び流れ込んできていた毒煙ガスを巻き込んで、大爆発。

激痛に苛まれる身体が紫毒キング・ポイズンスライム巨塊諸共焰に吞まれ、焼き焦がされて——その中で、クレスは乾く喉の奥から続けてその名を叫ぶ。

「——『プロメテウス』ッ! 『プロメテウス』ッ! 『プロメテウス』ッ!」

詠唱破棄の四連打。

落とされたはずの火力は環境効果可燃性ガスによって再び上方修正され、瞬く間に生み出されたその四恒星が空間全体を光と熱の暴威に溶融させる。

いくら炎に耐性があると言え、流星の紫毒キング・ポイズンスライム巨塊もその火力の中で無暗に動こうとはしなかった。否、動けなかった。

自爆覚悟という『未知』。本来生き物であれば取るはずのない不可解な動きを前にモンスターは踏み止まってしまい、その苛烈だった攻撃が一時停止する。

そして対照的に、自らの炎に燃やされる感覚を知っていたクレスはおお平気な顔で動いていた。

「——そら行けッ!」

消えゆく焰光の中から姿を現したクレスが、いつの間にかその両手の指の間に握っていた都合八つの小さな球をばら撒く。

その速度は紫毒巨塊の平均速度と比べればお粗末にも早いと言えるものではなく、当然のように相手は自らの方に跳んできたその球を払い除ける。

それにも構わず、クレスは懐から更に同じものを取り出しては投げ、投げて投げ続け——紫毒巨塊は困惑しながらもそれを防いで。

ようやく投げ終わったクレスを再び攻撃しようと瞬間移動した、その時。

紫毒巨塊の肉体が、七つに裂けた。

『L i l l i i y i y i ——テ・K e r l i l l i i ……?』

すぐさまその身体は泥の補充によって元通りの形に戻ったものの、紫毒巨塊は続けて動こうとはせず不可解そうに立ち止まる。

それを前に、クレスはようやく今の一方的な死合に一区切りつけてやったと不敵に笑った。

「追いつけないなら、追いつく必要をなくせばいい……。今の俺は動けないが、お前ももう動けない。気を付けるよ、なにせ此奴は千切れないことに定評があるからな。下手すれば体内の魔石が細切れになるかもしれないぞ?」

紫毒巨塊は気づく——己の身体を切り刻んだものの正体に。

それは一つ前の形態で自分が使っていた、『設置斬撃』に近いもののだと。

よくよく目を凝らせば、この空間一帯にきらきらとした細い線状の何かが張り巡らされているのが分かる。

自身の目の前にあったそれを指先でピンと弾いたクレスは、親切にも説明を口にした。

「俺がさっきそこらに撒いたのは「キプト・アルウイン」。昔のそのま  
た昔に鍛冶アビリティの実験で作った玩具の一つで、その時は  
不壊属性がどんなものに付与できるか色々試しててな。こいつはその過程で出来た不壊属性を付与した緋々色金製の弦糸を、何重にも巻

きつめた球ボールなんだよ。投げれば糸が解けて伸びて、周りの地形に引つ掛かつて即席罫トラップを作れる。今みたいにな。どうだ、面白いだろうか。」  
「何がいつ役立つかわからないものだな」と、これを作ってかつ捨てていかなかった過去の自分を褒め称えていたクレスは雄弁に語る。

ただ、これはあくまでも実験おもちゃ作に終わったものだった。  
興が乗って当時のギルド長に見せびらかしたところ、邪神イザイルスの眷属による悪用と撤去困難による二次被害を防ぐためにとその場で直々に使用禁止を言い渡されてしまったからだ。

クレスはそんな大昔の己の発明品を、先の「プロメテウス」による光を目晦ましとして「シユレディング」で拠点から回収してきていたのだった。

無論、持ってきたものはそれだけではない。

『テ・ケリ・リ……Teke——lilililii——!!』

「はっ、段々その五月蠅い声の聴き分け方も分かってきたぞ。そうかつかと焦るなよ。さて、ここからのお前の取れる行動は二択だ。また触手を出して糸の隙間を潜り抜けさせるか、もしくは水圧砲ウォーター・カッターを使ってくるか……」

キング・ボイズスライム  
紫毒巨塊の取った選択肢は後者だった。

構えた両手両足の指先から、広げた翼に生える羽のようなものの先端から。身体の内側で圧力をかけた体液を無数に射出し、周囲に展開された糸に構わず遠距離攻撃を放ってくる。

デュランダル  
不壊属性を付与された糸はもちろん切れないものの、水はそれを擦り抜けてクレスの下へと飛来する。

それらに対して彼は、「キプト・アルウィン」のほか回収してきていた大盾の内側に身を隠して水流攻撃を防ぐ。銘こそ与えていなかったものの、下部の杭パイルを地面に打ち込んで固定化する特殊な機構を持ち合わせている盾だ。それは同じ不壊属性デュランダルによって、見事キング・ボイズスライム  
紫毒巨塊の砲撃を防いでのけた。

『テ・ケ——リ・リlililii……』

悩むような鳴き声と共に、砲撃が止んで場が静かになる。

「……………」











それで毒沼の底に隠れてるお前の魔石を貫いた、ってわけだ」  
乾いた泥の地面をよく見れば、水圧砲の跡が妙に少ない区画があった。

まるで意図的に狙いを逸らしているかのような、不自然な一帯。  
そこにクレスは疑問を抱いた——攻撃をしないだけの理由がそこにあるとすれば、それはなんだ？

攻撃を当ててはならない、当てたくはない……当ててしまつては困るような場所。

それはつまり、弱点と同義ではないのか。  
そう考えた時、クレスの脳内で点と点が繋がった。

「全身が爆散しても魔石が無事……つまり、だ。今のお前の身体の中には魔石はないってことだ。じゃあどこにある？ その答えはお前と毒沼を繋いでる線にあつた。俺はてつきり毒を補充するための食道に過ぎないと思つてたが、違うんだろう？ それは外に出ている天使型の触手と毒沼の奥なる本体の魔石を繋ぐ、神経でもあつたんだ」  
少なくとも第一形態の時には、まだ魔石は体内にあつた。  
でなければ毒沼との接触を断つた際に、見えていた身体が崩壊していたはずだから。

恐らく、魔石の位置が動いたのは第二段階になつてからとクレスは読んでいた。

素早い触手の動きで相手を翻弄し、そちらに目を惹きつけておいて。その裏で強かに、動いていなかった肉体の下でこっそりと氷を掘り進めていたに違いない。そうして魔石をやられる可能性の高い地上から地下へと移したのだ。

「目に見える姿から、地上の天使が本体だと騙されていたよ。いやはやこの年になつても勉強になることはあるものだな。……その様子からして、長くはもつまい。俺は怪物趣味でも、ましてや加虐主義者もない。せめて介錯くらいはしてやろう」

とはいえ、敢えて近づくような危険を冒すつもりもない。

クレスは二振り目の葬呪用メスを取り出して安全と見立てた距離から投擲の構えに入るが、それを見た紫毒巨塊ののたうち回る





的に毒を抜いて耐毒の防具として運用するのもありか……となる  
また毒消しの素材をかき集めてこなきやならなくなるか。ううむ、解  
毒薬でその手のものは大概使い果たしたからなあ、また一からとなる  
と少々面倒だ。やはりかねてより考えていた迷宮開拓計画を……  
しかし……」

ぶつくさと言いながら手際よく戦利品の回収を進めていくクレス。  
その頭は既に次回以降の討伐手順の策定及びギルドへの報告書を  
どう書こうかといった内容で占められており、最後に紫毒巨塊が  
見せた足掻きについての想いは既に消えていた。

——死んでもことを為そうとする。

その行為を否と断じ続けてきた結果が、今の彼なのだから。

自分の願いを誰かに託すことほど無責任なことはない。

己が願い、己が背負い、己がいずれ叶えるのだ。

かつてクレスを「英雄の戦いを知らぬ愚者、死の誉れを知らぬ臆病  
者」と誹る神がいた。

彼は答えた——「死した程度で終われるとは、英雄とはなんと気楽  
なものだな」と。

諦めることなく夢を追い、神の定めた終わりを超えてなお己が両足  
で歩み続ける者。

それこそが冒険者なのだ神時代と背中で語りながら、荷物を担いだクレス  
は拠点に帰還する。

幾度の絶望を乗り越えてなお歩みを止めない冒険者。クレス・カタストロフ

彼の想いを共に背負う者  
その隣に肩を並べる仲間は今、誰一人として存在しない。

その孤独な背中が、大きく見えるか小さく見えるかは定かではない  
が。

その歩みが明日もまた続くことだけは、確かなことだった。

## 『暗黒期』編

### 決戦の予定と好ましからざる知らせ

——正義とはなにか。

——悪とはなにか。

それは数多の人間が、神が問い続け……未だ純然たる一の解答が示されない難問。

ある者は静かに考える、「正義とは怪物を殺し尽くすこと」だと。

またある者は捻くれ様に語った、「正義とは犠牲を許容し、救えるものを救うもの」だと。

そしてある者は高らかに宣言した、「正義とは巡り受け継がれるもの」だと。

ある者は嘯く、「悪とは気持ちの良いこと」だと。

またある者は叫ぶ、「悪とは血の宴に酔い、恐怖の戦慄を刻むこと」だと。

そしてある者は求めた、「悪とは世界を美しき赤に染めること」だと。

まさに十人十色。

それを掲げる人によって千差万別に姿かたちが異なる解答であり、それらは決して譲れぬ彼らの魂であった。

故に、時に異なる『正義／悪』が交わり、言葉や刃となって衝突することは世に必然の理と言えよう。

その道理がひと際大きく揺れ動いた激動の時代——英雄の都、暗黒期。

神はまた、問う。

「正義とは何ぞや?」「悪とは何ぞや?」と。

冒険者は答える。

「そんな下らない問答に時間をかけるくらいなら迷宮へ潜れ、全ての答えはそこにある。」

迷宮だ。  
ダンジョン

迷宮だ。  
ダンジョン

迷宮だ。  
ダンジョン

迷宮へ潜れ——話はそれからだ」

主神とその妻という巨蓋を失った当時の迷宮都市には、  
流行っていた。

その名を『悪派閥』。

神に与えられし恩恵を悪用し弱者を虐げる、冒険者にあつてはならない悪徳を極めし者たち。破壊活動、人身売買、薬物密輸等々、有り余る罪を重ねてなお憚ることを知らない逆賊どもが、そこかしこに跳梁跋扈していた。

しかし、そこに先立つ『悪』があれば、後に対抗する『正義』が立ち上がるのも世の道理。

心に秘めた義憤を燃やし、世に混乱を齎す悪を討つべく一堂に会した『正義』側の者たち。

彼らの、これが最後になるであろう作戦会議が今まさに——終わろうとしていた。

「作戦の開始は——三日後」

数多の眷属に見守られる中で、『勇者』フィン・デイルムナが宣言する。

数え切れない犠牲を積み上げてついに掴んだ敵の拠点三つ、それらを同時に叩いて今後一切の禍根を断つ。強力な冒険者を有する『ロキ・ファミリア』『フレイヤ・ファミリア』『アストレア・ファミリア』『ガネーシャ・ファミリア』を核に据えた、失敗の許されない作戦。

その実行日を力強く宣言した彼の碧眼には、「これ以上自分たちの街に邪悪なる者たちをのさばらせることを認めない」という意志が爛々と輝いていた。

「それでは、解散」

会議の主導者たる彼の決定を受けた各々が、覚悟を胸に秘めて席を立つ。

迫る決戦に備えて戦意を滾らせながら、彼らは会議室の出口へと姿を消していった。

その裏では本来非公開であるはずのこの会議を傍聴盗聴していた間諜スパイも上司へのたった一度きりの報告に向かうべくこっそりと去つていき、そしてそれに誰も気づくことはなかった。

ただ、不幸中の幸いとして。

間諜スパイの上役である悪派閥イヴィルスの女幹部は、彼らにとって最も重要な情報をこそ得られなかった。

部下が「既に会議の結論は下された」と判断してしまい、聞き逃してしまつた一幕。主題の後に続く些細なそのやり取りにこそ、彼らの今後に多大な影響を及ぼす兆候しるしが秘されていたというのに。

「——む。なんだ、あれは？」

その気配に目敏く気づいたのは、フィンの横に控えていた『九魔姫ナイン・ヘル』リヴェリア・リヨス・アールヴだった。

天井を見上げた彼女の眩きに続いて、場に残っていた上級冒険者たちは一様にそちらに目を向ける。

彼らの集う会議室の一角、装飾魔石灯シヤンデリアの光が僅かに届かない暗所に眼を光らせていたもの。

闇の中に姿を浮かばせるその生き物の正体は……一匹の蝙蝠だった。

「あら、可愛い迷い蝙蝠さんね！ まさかギルドの中に侵入しちやうなんて、おつちよこちよいなのね！ それともこの強く可愛い私に惹かれて付いてきちやったのかしら!? うーん、私ってば罪作り！」

「アリーゼの言うことはともかく。こんなところに入ってきて、ひとりを出ていけないのか？ ……こちらで捕まえて、外へ放してあげた方がよいのではないでしょうか」

「けっ、たかが小動物如きにきやーきやーと……女共メスが。やかましいんだよ」

「流石、一々他人の言うことに噛みついてばかりのやんちゃな猫様が





その様子は誰がどう見ても、普段の傲慢かつ凶々しい在り様とは異なっていた。

あまりに精細さを欠いた彼の様子に、会議室の雰囲気<sup>イヴェイルス</sup>が切り替わる——すなわち、詰問の時間へ。

「その台詞で「なにもない」、はないだろう。悪派閥との関係でなにかあったのか。もしそうだとしたら、この場で共有してもらいたいんだけどな。もしかしたら作戦に修正を加える必要が出てくるかもしれない」

「違うッ、その類では断じてないわ！ 貴様らは気にせず先に説明した作戦の遂行に努めれば良いのだ！ 分かったらさっさと拠点に戻って整備でもなんでも——」

「誤魔化そうとするな。その遂行のためにも、教えてほしいと言っているんだ。この親指の感覚……恐らくその手紙は僕らにとつて大きな影響を齎すものだ。君も知つての通り、この作戦は決して失敗できない。だからこそ前もってあらゆる不安の種を取り除いておかねばならない。分かるだろう？」

ピリピリとした雰囲気<sup>イヴェイルス</sup>を漂わせるフィンの真剣度合いに、周りの者たちもまた俄然中身が気になってきたようで鋭い眼を向ける。

彼らの視線を四方から浴びながら、ロイマンは少しずつ距離を縮めてくる小人族<sup>バルウム</sup>から距離を取ろうとするが——残念なことにこの場に逃げ場はなかった。

「……くっ、仕方あるまい。少し待て」

観念したように、ロイマンは一度しまった手紙を取り出した。

その封を切り、中に書かれていた文字を一読する。

「やはり……やはりそういうことかッ！ ええい、この忙しい時になんと忌まわしい！」

息を荒げ、手紙を瞬く間にくしゃくしゃにしたロイマン。

その目を素早く周囲に走らせた後、彼は怒り心頭と言った面持ちのまま丸めた手紙を口の中に放り込もうとした。

「——なっ!? か、返せ！」

「馬鹿が。俺たちの前でテメエ如きに隠し事が許されると思うな」

それがすかさず都市最速の手によって掠め取られてさえないなければ、彼の隠滅は間に合っていただろう。

しかし事実として、手紙はいつの間にかロイマンの隣に立っていたアレンの手中に収められていた。

「ありがとうアレン。それで、中にはなんと書いてあるんだい？」

「なんで俺が読み上げてやらなきやいけねえんだ。そつちで勝手に読みやがれ」

アレンから投げつけられた手紙を受け取ったフィンは、その中身に素早く目を走らせる。

「……まさか呑み込もうとするとは」

「あの我執の怪物がそうまでして隠したい秘密……俄然気になりますねえ」

どこか呆れたようなリユーと、面白いものを見たと目を光らせる輝夜。

彼らへの情報共有の意を含めて、フィンは手紙に書かれていた一文を読み上げた。

「……神聖文字で、『三日後に向かう』とある。作戦と同日だね……しかし一番大切な宛名がない。さて、誰が来るんだい？」

「……っ」

フィンの向ける厳しい視線に、ロイマンは逃げ場を探すべく視線を右往左往させる。

しかし悪派閥への対策関連で疲労困憊の頭ではうまい言い訳が見つからなかったのか、彼はやがて己の失態を心底悔やむようにため息交じりの重い口調で言葉を絞り出す。

「……今のお前たちには知る必要のない相手だ」

「その言い分が今この時において通じると思っているのか？」

「だろうな。だが、通じてもらわねばならん。こちらから言えるのはそれだけだ、それ以上のことは何一つ言えん。もし更に知りたいのであれば、貴様らの主神からウラノスへ話を通すが良い」

「ウラノスに関わる案件か。なるほど、重大だな……うん、分かった。君の言葉を信じるとしよう」

「ちつ、最初からそうしていれば良いのだ！ まったく、これだから――ごほんっ！ 分かったらこれ以上余計なことは考えず悪派閥イヴァイルスの討伐に注力しろ！ 良いな！」

どたどたと捨て台詞を残して去っていったロイマンを見送ったのち、一部の冒険者から不審がる声が漏れる。

「結局お相手は誰だったのかしら？ 賢く可愛い私でも分からないわ！」

「はっ、つるし上げて吐かせりや良かったんだ」

「いや、残念だがそうもいかない。あれロイマンを吊るしてじっくり問こんがり詰焼きめ上げたいのはここにいる大抵の者の本音だろうが、ここへ来て統率機関であるギルドを敵に回すようなことをすれば結束の崩壊を招きかねないからな。……それに」

漂わせていた雰囲気ロイマンの割にあつさりロイマンと引いたフインの意見を、リヴェリアが補助する。

「万が一ここで我々が敗北を喫した場合、それはギルドの魔石利権も終わることを意味する。それをあの俗物ロイマンが易々と放棄するのをよしとするはずもない。共有すべきことがあれば奴は包み隠さず共有するだろう」

「うん、ここはリヴェリアの言うとおりだ。みんな、ロイマンのことははいつたん置いておこう。余計なことは考えず自分の役割に集中してくれ。この決戦で、僕たちの都市の命運が決まるのだから」

彼の言葉にひとまずはこの場に漂った不穏な空気は解消されたかのように見えた。

しかし、ロイマンへ抱いた彼らの不信が完全に拭い切れたわけではない。

一つの黒い染みを残すような結果に終わった会議はその後、今度こそ自然と解散するのだった。

一方、痛む腹を摩りながら廊下を走るロイマンの顔は途方もない焦りを孕んでいた。

すれ違う職員に奇異の眼で見られるのも構わず、彼は一直線に自分の執務室へと戻ってその内側から嚴重に鍵を閉める。

「くそ、すっかり忘れていた……そろそろ奴が帰ってくる頃合いだということを。あまりに直視したくなかったせいか、前回から一年が経つ事実をすっかり頭から消していた……くそつ、【禁 忌】め！」

ぶつぶつと独り言を漏らしながら自室の中をあてもなく彷徨い歩く彼だったが、やがて諦めたかのようにソファアに腰を下ろした。

そう、先ほど彼が受け取った手紙とはクレスからの帰還の知らせだった。

一年に一度の『深々層』からの出張報告。それだけでも十分頭が痛い出来事だというのに、今回はよりにもよってそれが自身の膝元における一大決戦と同日というのは何の冗談か——ロイマンは割れそうなほどに痛みを訴える頭を両手で押さえつけるように抱え込んだ。

「もし奴がフィンらと遭遇した場合……まず敵対はない、はずだ。今回の作戦は迷宮攻略に利するもの、協力はせずともそれを妨げようとはしない。ただ……」

今度はぐるぐると不穏な音を鳴らし始めた自身の腹を懸命に摩りながら、想像する。

——それはクレスとフレイヤ・ファミリアが衝突するという、最悪の可能性。

ただでさえ血の気の多い連中が文字通り我が道を征くクレスと出くわした場合、どうなるか。

売られた喧嘩に買う喧嘩。つつかかる馬鹿アレन्द्रと真正面から反抗する馬鹿クレス、そこから燃え広がる作戦そっちのけの戦争遊戯ウォーゲーム……その光景が容易く想像出来て、ロイマンは泣きそうだった。

「奴のことだ、どうせ女神フレイヤの威光も知らんとばかりに自然と言葉で連中を煽るに決まっている！　そこから先は……ああ、考えたくもない！　一応事情は説明して念押しするとして……」

——無駄だろうな、と吐きかけた言葉を飲み込む。

一度口にしてしまえばそれが真実になってしまいそうだから、と。

「……願わくば、先に悪派閥イヴィルスの方から喧嘩を売ってくれば助かるの

だが」

そんな都合の良い妄想と異国から取り寄せた高級胃薬で頭やら胃やらその他諸々に走る痛みをなんとか抑えながら、彼は唸る。

知らせを聞いてからまだ十分も立っていないのにもう精神的疲労で体重が三分の一は落ちたような気がする、そんなロイマンであった。

彼の気苦労が杞憂に終わるか否か、それはクレスのみぞ知る。

そんな地上の様子も知らないまま、火が消えて窓を閉めたことを確認したクレスは拠点を入念に施錠した。

結界型魔道具による異界化——一日で階層主三体分の魔石を消費する代わりに不可視かつ自動反撃機能付きという物騒な戸締り。

透き通るように姿を消していく自分の家を見送り、彼は報告用の荷物を入れた袋を背負った。

『ダーク・ヒュドラ暗黒毒竜』素材の毒抜き。『キング・ポイズンスライム紫毒巨塊』肉の浄化。『サザンカース千呪巫王』の杖と『セブンアークス七天光君』の剣の密封……ちやんとやったな」

一部の下処理に時間がかかる素材の準備に、放置しておくだけで危ない特級素材の嚴重封印。

それらに忘れたところがないかもう一度思い返して、これで自分がいない間の一日も大丈夫だろうと彼は満足げに頷いた。

「よし、そろそろ行くか」

そして振り返った所に、声がかかる。

「——むう、遅いぞ！ わらわ妾をいつまで待たせるつもりだったのじゃ！」  
「そんなに待たせた記憶はないが」

「い・ち・ね・んじや、一年！ 前の時からもう一年も経つのはじゃぞ！  
その間妾がいくら駄々を捏ねても全部「また今度な」で済まされておった、その願いがようやく叶うのじゃ！ 逸るのも仕方なからう！

……ふふふっ、それにしても久々の地上オラリオは楽しみじゃのー！ いざ行かん、約束されし楽園の地へ！ なのじゃ！」

星のように透き通って輝く銀の髪をたなびかせるその人影を横に、

クレスは呟く。

「最近は地上もキナ臭い。……一応準備はしたが、使う機会がないことを祈っておくか」

神は踊らせ、人は踏み外し、歴史はまた巡る

地上への帰還を果たし、胃痛を抱えるロイマンとの間で報告を兼ねたいくつかのやり取りを終え、そして主神カオスの手料理をいつも通りたらふく平らげて。

拠点たる『時空の狭間』の自室で安眠から目を覚ました翌朝のクレスは、先に起きていた主神カオスからの熱烈な誘いで街中へと繰り出すこととなった。

「主神とその眷属が親睦を深めるのは絶対にして必然の宿命！ とう訳でさあ始めようクレス君！ 古来より語られし、人と神とで執り行う神聖かつ不可侵の儀式——私と君との逢引きをね！」

「ふむ。別に付き合ってもいない只人の男と女神の組み合わせをそう呼ぶのが正しいのかは知らないが、それがお望みならば付き合おう。それが今日一日の存在する意味だからな」

「——ぐふうっ?! くっ、朝一番からきつつい一発をキメてくるねエ君は。ここまで女神を徹底して軽んじる下界の子どもはそうはいないよ？」

「軽んじているつもりは微塵もないが」  
「それを特に申し訳なくしようともせず無表情で言えるところが軽んじているって言うんだよッ！ ……ホントにまったくこれだから、君ってやつは。ええい、それ以上余計な口を開く前に兎に角準備をしてさっさと出るッ！ 今日の夕方にはもう君は帰ってしまっただから、時間は有限！ 急げや急げ、さあ急げ！」

そんな三文芝居を繰り広げつつ、準備を整えていざバベルの外へ。青と赤の反射光が走る神秘的な黒髪を一本の馬尾のように纏めた主神に付き従いながら、クレスは素顔を晒さないようフードを目深に被って久々となるオラリオの主要道路を歩いていた。

世界の中心と呼ばれるだけあって発展目まぐるしいこの街は、一年経てばそれなりに見違える。その活気ある変化を適当に眺めながら、積もり積もった女神のご要望に一つ一つ応えて機嫌を取っていく—

―それが普段の、帰還した彼の地上での主な過ごし方だ。  
しかし、今回は少しばかり様子が違っていた。

「……なるほど、ロイマンの言っていた通りか。カオス、失礼するぞ」  
「おや、なにかな? ――つて、ちよつ!」

主神の身体を半ば強引に引き寄せ、彼女と自分の腕を強引に絡ませる。

手つなぎから一つ段階を超えた、男女人と神の腕組み。

――「これは逢引きデートなのか」などと戯けた言葉を吐いていた男のする行為か、これが!?

言葉と行動の伴わない眷属による突然の不意打ちに、カオスの思考回路が混乱ショートに見舞われる。

「い、いったいこれは何のつもりなのかな? まさかこんな人通りの多い往来でこんな、所有権を主張するような行為など……ハレンチな! そんなに私が君神の女であることを周りに知らしめたいのかい!! そんなに君からの愛が深かったなんて……もちろん応えるつもりはあるんだが、その、実際にその場面に遭遇すると心の準備がだねっ!」

「何を慌てている? 俺眷属が貴女主神を愛大切にするのは当然のことだろうに。それよりも気をつけておけ。俺の側から離れるな」

「う、うん。もちろんだとも、私が君から離れることなどたとえ天地を切り裂く一撃を受けようと有り得ないよ! とうるか今さり気無く聞き捨てならない宣言をしていたような……クレス君?」

まさに頼れる男、と言ったような深いクレスの声色にカオスは感極まって彼の顔を見上げる。

だが、そこに浮かんでいたのは彼女の期待したような甘い甘い恋愛劇ラブコメチック的な表情ではなかった。

それとは真逆の真剣な目つきを受けて、彼女は緩んでいた己の頬を引き締める。

「懐かしい、絶望の匂いがする」

「……」

「何度も嗅いだ、鼻奥が焦げ付くような嫌な空気。ここ暫くは臭うと



言つてもまだ薄かったが……今回ののはひと際濃い。あの時代と同じだ。モンスターという破滅と隣り合わせにあつて、皆が息を潜めつつ必死になつて暮らしていた時代と。かつての都会イルコスや王都ラクリオスを思い返す……ロイマンから聞いてはいたが、これほどとはな」

クレスの厳しい眼には、今の街に表れている人々の不安が余すことなく映し出されていた。

店先に並べられた品が一つもない寂し気な商店——それは、外に置いておけば盗まれるから。

腰に、脇下に、背中に刃を潜ませて街を行く人々——それは、いつ襲われるか分からないから。

擦れ違つたたびに血と汗の臭気を漂わせる警邏パトロール——それは、水浴びすらも満足に行えないほど彼らが切羽詰まつているから。

その哀しき光景を前に、クレスは黙考する。目を閉じれば蘇る、古き悪しき時代の記憶が彼にはあつた。

怨嗟と殺戮、絶望と崩壊が連鎖を呼んだ時代。人が人を支えるのではなく、競つて相手の梯子を外そうと目論んだ過去。

過ぎ去つたはずのその歴史が再び顔を覗かせつつあるのが、今のオラリオだつた。

「この神時代。極まつた先に恩恵を背負つた者が新たな脅威となることは火を見るよりも明らかだつたし、事実これまでも何度もそういつたことはあつたが……今回ののはひと際だな」

そう呟く彼の瞳に映るのは——義憤でも、はたまた諦観でもなかつた。

世の中とは所詮そのようなものだという、年を重ねればいずれは誰もが悟る一つの境地だつた。

長き戦争と短き平和。その繰り返しが今再び、破壊の方に大きく振れているだけのこと。

また面倒な時期がやってきたな、とクレスはその現実に向き合ひながら周囲に見えない警戒網を張り巡らせる。

恩恵という何よりも優れた鎧を着込んだ彼はまだ、どうとでもな

る。

しかし全知零能となつた今のカオスは、襲撃に巻き込まればひとたまりもない。

そんなか弱き主神を守護するべく目を光らせる眷属クレスの溢していた言葉に、彼女は同調した。

「……そうだね。今はもう語る者もない、八百年前の『封神大戦』、五百年前の『巨災戦役』。そして直近だと、三百年前の『鍊魔戦線』か。どれも神とその恩恵を受けた人が起こした戦争だった。一応どの時も最後には「このような愚かな争いはもう止めよう」と手を取り合っていたはずなのに……またあんなことが起き始めている」

「今は爆発寸前と言つたところか。前の痛みを忘れた馬鹿のタガが外れ、周囲を巻き添えに暴発する……その三步手前くらいには空気がヒリついている。戦後の再建に必死になつて貢献したあの時の連中は、今頃子孫の愚かしさを嘆いているだろうな」

「かもね。一つの脅威を退けた先の平和は人々子供たちが信じるよりずっと淡く儂くて、泡沫の夢に過ぎない。寿命の無い私たち神々と例外の君クレス君は実体験として戦争の齎す悲劇をずっと覚えていられるけれど、普通の子どもたちは宿命だから……世代を重ねるにつれて、悲劇の経験を単なる知識に風化させてしまう。だから、繰り返してしまふ」

一年の九割九分九厘を迷宮ダンジョンで過ごすクレスよりも、地上で活動するカオスはずっと人々のことを知っていた。

だからこそ、彼女は哀れに思いながらも、下界の人間たちのことを愚かだと責めはしなかった。

悲しいことを忘れて前へと進む、それは間違いなく子供たちが持つ美德の一つでもあつて。

そうして過ちを繰り返しながらも、彼らは小さな一步を刻んで着実に前へと進んでいるのだから——と。

されど、そこに与する一部の同胞神々については別だった。

表情を一転させ、彼女は今のオラリオの裏で蠢く悍ましき邪神たちについて明確な嫌悪を示す。

「だけど、今回は少し話が違う。神々デの井戸端会議トウで小耳に挟んだん

だけど、今回は複数の邪神が積極的に裏で糸を引いているらしいんだ。神が人を思いのままに踊らせて……それがまともな結果に終わった試しはない。君も知っているようにね」

「ああ……」

その時、これまで仏頂面だったクレスの顔がはつきりと歪んだ。

眉間に皺を寄せ、立ち止まり、瞑目。

——唾棄すべき邪悪。追放すべき悪辣。自らを正しいと信じて止まぬ賢神が犯した愚。

それに振り回された昔日の愚かな自分が、瞼の裏に蘇る。

ダンジョン迷宮に囚われていたクレスが唯一地上に残っていた心残りとして、それにまつわる悲劇。英雄譚

人と『異端』の交差。隻眼神の謀略。そして——終焉の時。

「そうだな。嫌な過去だ」

「思い返させてしまつてごめんね。でも、この今のオラリオを取り巻く現状を語る上で敢えて避けたところで、君は否が応でも思い出すだろうから」

「いや、構わない。あれは確かにあの時の俺が選んだ選択で、負うべき咎は貴女ではなく他の神にこそあるのだから。……しかし、道理でやたら嫌な予感を覚えるわけだ」

とはいえクレスには、今のこの街で起きている変化に介入するつもりはなかった。

彼がロイマンから聞き及んでいる、『正義』と『悪』の戦争。

それは一度入り込めば深く足を囚われてしまう泥沼のようなものだと、彼はその身に深く学んでいた。

善と悪の争いは、始まつてしまえば相手を徹底的に叩き潰しきるまで終わらない。

ほんの指先一つ分でも関わつてしまっただけで、際限なく迷宮攻略ダンジョンの時間が削られて行つてしまうことが目に見えている。

自らの身に関わつてさえ来なければ、構わない。

やりたい奴が勝手にやっつていれば良い——それが迷宮第一主義者ダンジョンナリストたる彼の立ち位置であつた。

「まあ良い、どうせ俺たちが積極的に関わることもないんだ。この話はここまでにしよう。それに、せつかくの一日をこんなつまらん空気で過ごすのも我が主神の望むところではないはずだ」

「……うん、そうだね！　こんな話をしてたつてなんにも変わりはない！　今日は一年に一度の私たちの絆を深めるための日なんだから、もつと有効活用しないとね！　そのための逢引きデートなんだし、もつと明るくいこう！　気にしない気にしない！」

ここはクレスの言う通り、下界の子どもたちに倣おうとカオスは笑う。

暗い過去はさておいて、明るい今の時間をこそ楽しもうと。

その輝かしく尊い神意に従うように、彼もまたフードの下で意識の矛先を転じるべく頭を働かせた。

「そうだとも。貴女にはそちらの笑顔の方がよほど似合っているからな。という訳で話題を変えるか……そうだな。カオス、そういうえば今の俺たちはそもそもどこへ向かっているんだ？」

「ああ、言つてなかつたつけね。今向かっているのは食事処さ。たまには君も私以外の料理以外も食べたいかなーって思つて、今のオラリオで一番人気なお店を予約してあるのさ！　……つて、ん？」

「ほう、そうなのか。しかしだな。その心配は杞憂だし、なんなら我が主神の手料理が俺の中で最も美味であつて感謝こそすれ不満など何一つないのだが……まあ良いか。その想いは想いでありがたく受け取るとしよう」

「やつぱり聞き間違いじゃ——かふつ!？」

そして、先ほどまでの真剣味シリアスは何だつたのかと言わんばかりの眷属の一言にまたもやぶん殴ノックアウトられる主神。

「き、君はまた……っ！　また平然と私の心を射抜いてくるなんて……このカオス、一生の不覚だよっ！」

「？」

「なんでそこで分からないといった顔が出来るとかなあ!!　もう、はあ……なんだ。君は一度、いや五十回くらい刺されてきた方がいいと思うよ」

「そんな神ゼウスのような扱いをされるような話をしていたか、今の俺は？」

「たぶんアレよりもっとたちが悪いよ……」

訳が分からないよ、といった様子 of 真面目腐った顔に戻ったクレスを一度ぶつ飛ばしてやりたい衝動に力オスは駆られた。

しかし殴った所で自分の手が痛むだけ。むしろそれどころか労わられながら「大丈夫か？ 今朝からやたら情緒不安定に見えるが予定を取りやめて治療系ファミリアで診察でも受けてくるか」などと変な心配をされるのが目に見えていたので、すんでのところで彼女は超必殺☆マジカル女神パンチ（今命名）を取り止めたのだった。

そうこうしている内に、二人の足は目的地へと辿り着く。

その酒場には、一つの立派な看板が掲げられていた——『豊穰の女主人』。

「聞き覚えがあるな……ああ、ここがあいつの言っていた楽園か」

騒がしい隣人の声かふと耳元にちらついたような気がして、クレスは興味深そうにフード下の眼を揺らした。

## 【神々の給仕（ゴツズプライド）】

「へえ、驚いたよ！　ここは君が来るようなところじゃないだろうに、よく知っていたね？」

まるで『豊穰の女主人』を予め知っていたかのようなクレスの口ぶりに、カオスは驚く。

それもそのはず、彼が迷宮ダンジョン以外のことに興味を見出すのは並々ならぬ一大事であり、カオスにとってそれは天変地異にも等しい衝撃ショックであったからだ。青天の霹靂にして前代未聞、明日はクロツゾの魔剣でも降るのではなからうか……などなど、ついつい失礼な印象すら思い並べてしまうほどに。

「てつきり君が地上オラリオに帰ってきて足を運ぶなんて、精々がゴブニユかデアンケヒトのところか、後はいくつかの商業系ファミリアくらいだと思っただけけど……」

「いや、それは間違いなく正しいさ。ただ、ここはあの騒がしい馬鹿のバイト仕事先だと聞き及んでいてな。なにせ迷宮で顔を合わせるたびに「また連れていけ」としつこく連呼してくるものだから、流石に覚えてしまったんだ」

「……あー、彼女の影響か。そういえば、ちよくちよく噂にもなつたっけ。そういうことか」

クレスの語る理由に、カオスは先ほどまで抱いていた驚愕とは裏腹にすんなりと納得した。

——なぜなら、彼女以外にクレスに影響を与え得るその存在は、カオスもよく知るところだったから。

恩恵こそ与えていないものの、自身の眷属かぞくに等しい娘子。

カオス・ファミリアがウラノスにさえ存在を秘している、謎多き下界の『未知なる可能性』の一つ。

主神を除けば最もクレスと触れ合う時間が長い、あの子の影響ならば……と、カオスは七光に瞬くその虹の瞳セブテクロミアに理解の色を示す。

「せっかくだ、奴のここで働いてる様子も見ていくか」

開かれている入り口から中に歩を進め、クレスは主神に先んじて酒場全体の様子を伺う。

彼らを出迎えたのは果たして——静かな外からは想像も出来ないほどの大盛況ぶりだった。

行き交う喧噪、むせかえる酒精の匂い。その隙間を忙しく往来するウエイトレス。

イヴェイルス悪派閥の脅威による経済的委縮が嘘であるかのような活気が、そこには満ちていた。

「はい、いらっしやいませー！ と、予約のお客様ですね！ カオス様と、その……お連れ様？ どうぞあちらの席へお進みください！」

ちやうど出来立ての料理を運んでいた獣人のウエイトレスの一人が彼らの姿を認め、『予約』の札が置かれていた席に案内する。

どうやら顔を覚えられる程度には、カオスはここに足繁く通っているようだ。

一方、店内に入ってもフードを脱ぐ様子を見せないクレスにウエイトレスは時期もあつてか一瞬顔を顰めるものの、常連である彼女の知り合いならばと特に問い詰めてくることはなかった。

「ご注文は適当なウエイトレスを捕まえてお願いします！ それとこちらがお冷になりますね！ それではどうぞごゆるりとお過ごしください！——あ、いらっしやいませー！」

すかさず案内を引き継いだ別のウエイトレスがさつと説明を済ませて、流れるように次なる客を出迎えに小走りで入り口に向かう。

その背中を見送って、他の客の奏でる騒々しさから離れた壁際の席に座らされた二人はテーブルに置かれたメニュー表を揃って覗き込んでいる。

「ごほん、それでクレス君。何が食べたい？ ここは季節にもよるけれど、古今東西大概の料理が揃っているんだ。メニューになくても言えばたぶん出してくれるし、好きなものを頼みなよ」

「なんでも良い……と言うと、こういう時は困るんだったか。ならばとりあえず肉と炭水化物系統のものを希望しておこう」

「オツケー！ うんうん、やっぱり男の子だねエー。よしそれな・

ら・ばつと……あつ、ちようど彼女がいたよ！　おーい、サラ君！  
こつちこつち！」

「——はーい、なのじゃー！」

カオスが手慣れた様子で呼びかけた一人のウエイトレスが、ちようど相手をしていた男神の下を離れてクレスたちのテーブルに近づいてくる。

腰まで伸びる穢れなき銀髪を最後にリボンで纏めた少女。

前髪の隙間からは鮮血のように赤い瞳を覗かせており、染みのない肌は新雪のように白く、またその四肢は神々から見ても思わず感嘆の息を漏らしてしまうほどに均整が取れている。

そして、現在着用している女中の制服から溢れ出る雰囲気オーラは素朴な町娘のそれよりも、流離する亡国の貴族に近いものを連想させ、ドレスと宝石で飾り立てられて豪華な椅子にふんぞりかえっていた方がよりらしいのではないか——見る者によつてはそのような感想を抱くこともある、可憐なウエイトレス。

そんな彼女は素早く二人の席に近づいたかと思えば、クレスの方を見て意外そうに目を丸くする。

「待たせたのじゃカオス様よ！　それと……我があるモゴツ！」

「ここでその呼称を使うな、目立つだろう」

すかさずクレスがグラスの中から飛ばした氷が喉奥に見事命中して、少女は刹那の苦悶に喘ぐ。

やや少し経って喉の調子を落ち着け、改めて彼のことを「いらつしやいませなのじゃ、クレス様……けほけほつ」と彼女は涙ぐみながら呼び直した。

それから彼女は『男と女の二人が仲良く席を同じにしてここにいろ』という揺るぎのない事実から、主にカオスの方を見ながら察したかのような素振り手で手を打つ。

「何故ここに来たんじゃ、と思ったがアレか。カオス様に誘われてきたんじゃな、となれば逢デ引トきの最中かの？」

「ふふん、そうだよサラ君。君は実に見る目が良い、まさにその通りだとも。という訳で今日は私たちのことをそのようにもてなしてくれ



たら嬉しいな」

「分かったのじゃ。だがのう、しかし……」

と、サラと呼ばれた少女はちらりとクレスのことをもう一度見る。

その疑るような視線を受けた彼はとりあえず、思った通りのことを素直に口にした。

「なんだ？ ……ああ、随分とここに馴染んでいるみたいだな。その制服もよく似合っているぞ。その様子で今後も頑張ると良い」

「……やはり、そういうことかの」

「……うん、そういうことさ」

——駄目この林念仁めだこりや。

二人揃って溜め息を吐くその様子に、クレスは不可解そうに首を傾げた。

「どうした二人とも、そんな呆れたように首を振って。幸せが逃げぞ」

「なんでもないよ」「なんでもないのじゃ」

「そうか、ならば良いが」

「いや良くないのじゃ！ どうしてそう変なところで鈍いんじやか……というか、その、じゃな。なんでもなくとも一応伝えておくが、あれじゃ。正直妻はお主より世間知らずで、そんな身で語るのもおかしな話じゃが……女の服を褒めるのは時と場所を選んだ方がいいと思うのじゃよ」

彼女らの言葉を真に受けてさらっと話を進めようとした彼に待ったをかけるサラ。

詳細はカオスの名誉のために伏せつつも、善意で「気づけ」と念を送るようにジト目でクレスに助言を送ろうとする。

しかし、迷宮馬鹿に女の心は分からない。

「ん、今はなにか拙かったのか？」

「拙いのう。拙い、拙過ぎる。ぶっちゃけ絶品のチョコレートケーキにいきなり醤油をかけるくらいに冒瀆的なことをしたという自覚を持った方が良いのじゃ、今のは」

「……？ よく分からんが、気分を害したようですまなかつた。それ

はそれとして注文をしたいのだが、口頭で伝えればいいのか？」

「あー、うん。そうだね……しようか、注文。ありがとうねサラ君、私のことを気遣ってくれて。クレス君の方はもうそれで良いよ。とりあえず、私は季節の魚料理を頼むね。彼の方は肉とご飯や麺系統をご所望とのことだから、ひとまずメニューの……ここからここまで」「カオス様がそう言うのなら妾は構わんが。——はいはい、奈落と変わらなすクレス様は大食漢じゃの。承りましたなのじゃ！ そうしたら妾の腕によりをかけて作ってくるからの、楽しみにしておれ！」

ささつと手元に注文内容を書き留めて、サラは厨房へと引つ込んでいく。

しかしその様子に待ったをかけるかのように、他の席から大きな悲鳴が上がった——主に、うだつの上がない男神どもから。

「あ、サラちゃん!! その前にこっちに来てくれよおおっ！」

「サラちゃん！」

「サラちゅわあああん!!」

「あー、申し訳ないがこれから妾はしばらく調理に入るのじゃ！ 皆の者、すまんのう！」

「「そんなあー?!?!」」

手を振って消えていった彼女を見送った情けない彼らから響く、見苦しい嘆き声の数々。

だが、それも仕方のないことなのかもしれない。

なにせ、見目麗しい彼女からの酌を受けられなくなった今、周りにいるのは同じような目的で集まった馬鹿どもばかり。

そのむさ苦しい空気から目を逸らすようにひとしきり泣いた後、彼らは揃って手元の酒を浴びるように呷り始めた。

どうやら彼女という存在は本当に、この酒場で愛される存在であるようだ……それがいい意味か悪い意味かは別として。

欲望に忠実な神々の無様な姿をよそに、二人は水で口を潤わせながら銀髪の少女について話す。

「騒がしいな。しかし、ここまですぐ溶け込んでいるとは思っていませんでした。連中、あいつの正体には一切気が付いていないのか？」

「うん、まあね……ほら、男神連中ってタケミカツチみたいな一部の生真面目な連中を覗いて基本馬鹿ばかりだし。非公式で【神々の給仕】<sup>ゴッズブライド</sup>なんて二つ名で呼ばれてもいるらしいよ？ なにせ私たちがみたいな『美』の権能を持たない一般女神の容貌に軽く並んでくるくらいには綺麗だし、なにより一年に一度しか現れないってまるで誰かさんみみたいな物珍しさが、彼女の価値を彼らの中で最大限高めているみたいだね」

サラの消えていった厨房へと熱い視線を向ける男神たちの様子を伺えば、彼らは一転して先ほどの泣きつ面はなんだったのかと言わんばかりの様子でやんややんやと酒杯を片手に騒いでいる。

「くそう、早く戻ってきて俺にアーンってしてくれー！」

「ずるいぞ！ 俺にもケチャップでオムライスに『愛しの神様へ♡』って書いてくれ！ そしてラブ注入してくれエー！」

「気持ち悪いぞお前たち……はあ、愛しのサラたん。こんな馬鹿どもの相手なんかしてないで、早く俺の拠点<sup>ホーム</sup>へ来て俺だけの給仕になってくれればいいのに」

「二は？ テメエは今ここで処す!! サラちゃんの笑顔は俺の物だー  
ーああアーン!!」

「——やかましいよお前たちイッ！ 飯食わずに騒ぐだけならとっと勘定済ませて出ていきな！」

「二サーセンっしたあーっ！ あと酒お代わりでお願いしまーすっっっ！」

雷鳴一喝。

馬鹿騒ぎしている男神たちを、厨房の奥から姿を現した大柄な女性が一声で封じ込めた。

「……ほう、旨そうな匂いだ」

その彼女は逞しくも美しい腕にたくさんの皿を載せて、クレスらのテーブルの元へ近寄ってくる。

「はいよ、注文の品さ！ たアーンと召し上がりよー！」

酒場にしてはらしくない、繊細な盛り付けのされた魚の煮つけ定食をカオスの前に。

そして逆に頭の悪<sup>ジャ</sup>そう<sup>ン</sup>な、いかにも冒険者ウケしそうな挽肉たつぷりの山盛りパスタと巨魚の丸揚げをクレスの前に。

それぞれ並べた彼女こそは、この酒場の主人ミア・グランドだった。「そっちの女神サマの注文通り、残りの皿も今あの娘<sup>サ</sup>が作ってるけど。本当に食べ切れるのかい？ こいつはまだ序盤で全体の一割にも満たないし、ウチは持ち帰りとかやってないからね。お残しは許さないよ」

「分かっている。俺も素材を無駄にすることは嫌いだ」

初見の客であるクレスを探るような眼で見る彼女の前で、彼は一緒に置かれたフォークとナイフを手にとってさっそく食事を始める。

最初に手をつけたのはパスタ。人の頭一つ分はあろうかという山の、その三分の一を軽く一回で団子状に巻き取ってまるっと頬張る。

次に魚の揚げ物をぎつくりと三等分に切り分けて、骨やヒレごと構わずばくんつ！ と喰らう。

勢いの良い食べっぷりは一見して野蛮に見えるものの、汁の一つも飛ばしてはいない。

そこには確かな目の前の料理に対する礼儀と、それを平らげるだけの旺盛な食欲が店員の問いに対する答えとして映し出されていた。

「——へえ、面白いじゃないか。良いだろう、じゃんじゃん持つてきてやるよ！」

その様子はどうかやら彼女のお目になかったようで、ミアは鼻を鳴らして厨房へと戻っていく。

それから少し遅れて、他のウェイトレスが立て続けに注文した通りの料理を運んでくる。

ハンバーグにステーキ、牛すね肉の煮込みから、魚介スープ、激辛麻婆豆腐など多種多様な料理が彼の前に並ぶ。そしてそれらはまた順番に、彼の胃の中に消費されていく。

まるで海の大食<sup>カリ</sup>らい<sup>ユ</sup>のように皿の中身を次から次へと頬張っては呑み込んでいくその様子に、お代わりを運んでくるウェイトレスは空いた皿を回収しながら目を丸くしていた。

「……よく食べますねー、お客さん」

「ああ、美味いからな。それに作り手サハラからの心配りもある。こういう気配りも出来るようになったか、成長しているようだな」

「気配り、ですか？」

ちやうど今ある皿を開け切って一息ついたところで、クレスは側にいた鈍色の髪をしたウエイトレスの疑問に答えた。

「そうだ。持ってこられた中であつたトマトクリームパスタ、巨黒魚ドトバスの稚魚の南蛮漬け、ボルシチ。これらには共通して、通常のレシピより酸味が足されている」

「ええと……それにどんな意味があるんですか？」

「酸味には食欲増進の効果がある。それで俺の胃がもたれないようにしているんだ。こうした小さな心遣いが客にとつては店を選ぶ際の決め手にもなるくらいには、大切なことだな」

「なるほどなるほど、よくご存じなんですな！」

「まあ、自分でも作ったりするからな……それより良いのか？ あつちから「出来上がった次の料理をさっさと持っていけ」と目で言われているが」

「はっ！ そうでした、すみません！ では私はこれで！」

サラや他のウエイトレスからの「サボるな、○すぞ」という視線に射抜かれて、彼女は颯爽と己の戦場に戻っていった。

——それにしても、とクレスは去り行く彼女の内に潜む気配を見て思う。

「珍しいものを見たな」

「なにが？」

「気づいていないのか、貴女ともあろう神が。……いや、なんでもないさ」

「そう言われるとなおさら気になるんだけど!？」

そんなやり取りを挟みつつも注文した分を一通り胃袋に収めて、クレスは口元をナプキンで拭う。

その満足げな様子を見て、厨房から出てきていたミアは呆れたような声を漏らすのだった。

「ははっ、まさか全部食べちゃうとはねえ！ 驚いたよ、見覚えはない

「がアンタも冒険者かい？」

「まあそんなものだから、これくらいは訳ないさ。今日の所はひとまず健康のために腹八分目と言ったところだ。本音を言うともまだ食べ足りないが、これ以上厨房の稼働率を上げて他の客の邪魔をしても悪いからな」

「本気で言ってるのかい？ たまげたね！ とんだ健啖家じゃないか、【暴喰】の奴を思い出すよ……」

「【暴喰】？」

「知らないのかい？ 最近オラリオこっちに出てきた新人だったか……ならどのみち気にしなくていいよ。それよりも、こいつはあたしからの面白いモンを見せてもらった礼さー！」

最後に彼女が持ってきた皿がドン！ と二人の間に置かれる。

クレスとカオスの注文した記憶のないそれは、たつぷり一ホールの林檎パイだった。

じっくり砂糖で煮詰められた黄金色の林檎が所狭しと敷き詰められ、さらにはその隙間を埋め尽くすように濃厚なカスタードが注入されている。

上には網目状にかけられた蜂蜜が煌びやかにその存在を主張しており、焦げた糖分の香ばしさがぷうんとクレスの鼻をつく。

「と、出しておいて今更だけど甘いものは苦手だったかい？」

「いや。大好物だ」

「大好物もなにも、クレス君は基本なんでも喜んで食べるからねー。

あ、私にも一切れくれよ」

「もちろん。美味しいものは共有した方がより美味くなるからな。……ああ、世の中の大抵の食べ物がありがたくいただくさ。他の連中が嫌悪するような臭みや苦みも見方を変えれば旨味の一つ、俺は食らわないう気にはなれん」

主神の下命に従ってパイを切り分け、小皿に分けて渡す。

その流れを滑らかにこなしながら、「ただ、しかし」と前置きをつけてクレスは後半の台詞を続ける。

「さすがに素材を無駄に捏ね繰り回した挙句不味くするような、料理

とは名ばかりの奇天烈なモノが出てきたらキレることもあるかもしれないがな」

「あー、そんなこともあったねエ。ディーテったら、肉付きのいい尻を百回も叩かれた挙句みつともなく普段の二倍近くに腫らして泣き喚いてたっけ……」

「あれはせっかくの新鮮な生野菜をくたくたになるまで煮込んだりウナギを下処理も味付けもせずゼリー寄せにしたりして、結果魔女の暗黒儀式みたいなフルコースを出してきたからだ」

「……なるほど、そいつは確かにアタシでも拳骨を落としたくなるね」

隅っこで様子を伺っていた鈍髪の少女がなぜかびくつと身体を震わせる謎の光景をよそに、クレスはさっそくパイを切り分けて口元に運び、よく味わったところで一緒に持つてこられた紅茶を呑む。

茶特有の渋みが残っていた林檎の甘さを引き立てると共に洗い流して、また舌が次の甘さを求める。その癖になる味わいに、彼の手は立て続けにパイへと伸ばされた。

そうしてクレスが自分用に残した8分の7を別腹に収め切ったのは、ちょうどカオスが分け与えられた8分の1の最後の一口の余韻を紅茶で流しきった所だった。

食った食ったと彼が腹を撫でおろしていると、注文を全て運び終えたはずなのにまだミアが側に残っていた。

「お粗末様。……ところで一つ聞きたいんだが、良いかい」

「なんだ？」

「サラとアンタ、どういった関係性だい？ それなりに深い繋がりがあるんだろうが、それがアタシには分からなくてね」

「む……流石に雇い主ともなれば誤魔化せないか」

「当たり前だよ、あんだだけ熱烈な視線を送りあってたらね。厨房のあの娘とアンタとでちらちら互いに様子を伺いあってたことくらい、こっちにはお見通しだよ」

彼女は側にあつた空き椅子に腰かけて腕を組み、クレスと向き合う。

サラが厨房から出てくる時を待って酒を呑み続けていた男神たち

はつい先ほど財布の中身が消え、泣く泣く帰っていった。

その他の客もいったん途切れており、店の中は落ち着いている。

その余裕の中で、ミアはこの短時間で観察したクレスとセラの関係を並べた。

「男と女の関係性じゃあなさそうさ。見てた感じだと、あの娘は自分よりそっちの女神さまの方を優先してたしね。とすれば、それ以外の関係で男と女がくつつく理由が思いつかない。じゃあ一体なんなのか、って気になっちまってね」

「そうだな……では聞くが、貴女はあいつのことをどこまで知っているんだ？」

「サラ・ブラッドルーラー。出身不明年齢不詳、種族は自称只人ヒューマンの女。あとは初めてアタシの料理を食べた後に突拍子もなく「弟子入りしたいのじゃ！」なんて頭を下げてきた馬鹿娘、ってことくらいだね」

「であればそれだけで十分だろう。俺とあいつの関係を貴女に語る必要性が見当たらないな」

ミアの問いかける視線に、カップに残っていた紅茶を呑み切ったクレスはすぱつと断言する。

——単に酒場の経営者とその従業員として見るならば、それ以上の深入りは不要だ。

彼女の事情を知る者としてそう回答したクレスに、されどミアは引き下がらなかった。

「……そうだけだね。アタシだって普段ならこんな野暮な真似はしないさ。だが最近はどうも世間が騒がしいのをアンタらも知ってるだろう？」

「悪派イヴァイルスか」

「そうさ。そして、そいつらを含めた一部の色ボケ共がああ娘を狙ってるって噂がある。一年に一度しか現れない、神をも魅了し得る謎の店員。使い道は色々あるだろう。それをアンタが守るのか、守らないのか。アタシが知りたいのは率直に言ってそれだけだよ。 magari なりにも弟子入りを認めた師匠として、覚えのいい意欲のある娘の安全を気にするのは当たり前さ」



「そういうことが、では答えよう。俺はあいつを守らない」

すんなりと放たれたクレスの言葉は、ミアの予想とは完全に真逆のものだった。

一瞬呆気にとられながらも、すぐに持ち直して彼女は理由を問うた。

「……それはどうしてだい？」

「その心配が無用だからだ。そもそもの勘違いを正しておく、サラ・ブラッドルーラーという生き物は貴女が予想しているような弱者ではない。そして美味かった食事の礼としてもう一つ教えておこう。それに気づけないのは、貴女自身があいつを恐れるが故に本能的に目を逸らしているからだ」

「……！」

彼の有無を言わさぬ物言いは、それ以上ミアの耳を近づけさせない。

一切の陰りのない言葉。心の底から疑うまでもないとサラを信じ切っている、クレスの眼。

そこから放たれる圧力は、デミ・ユミル上級冒険者の心配を真つ向から否定してのけた。

「詳しく知りたいのなら、まずは正しくあいつと向き合うことだな。

——以上、もういいだろう。会計を頼む」

「……そうかい。分かったよ、よく分からないってことがね。だが今はアンタのその、真面目腐った態度に乗せられておいてやる。——サラ、交代だよ！　こちらのお客様がお帰りだ、おあいそして見送って差し上げな！」

「はいはい、今行くのじゃー！」

厳しい顔で厨房に戻っていったミアと入れ替わりで、手についた水分を拭きながらサラがぱたと駆け寄ってくる。

「えーと、合計で10万と8千ヴァリスなのじゃー！　また随分と食べたのー。それで、さっきまでお師匠となにを話してたのじゃー？」

「保護者と師匠との内密な世間話さ、気にするな」

「ほーん……まあ、後でお師匠に聞けばいいだけの話じゃな。で、勘定

はどつちが持つんじや?」

「それはもちろん、私が誘ったんだしここは」

「俺が持とう」

財布を取り出そうとした主神を差し置いて、クレスが懐から取り出した金貨をサラに手渡す。

「クレス君? ふつ、やつぱり君ってやつは——!」

「間違えて単位の大きい貨幣を持ってきてしまったからな、後で商店を回る時のためにこういう所で少し崩しておきたかったんだ。助かるカオス、この不測の事態にも対応できるよう予定を組んでいてくれて。やはり貴女は最高の主神だ」

「——君ってやつはア……! ホントに親孝行過ぎて困っちゃう息子だよツ!」

「主様あ……少しはその口を閉じた方がよいと妾は思うぞ? いやマジで」

「なぜだ。これ以上ないまでの感謝を示しているというのに」

「その口クすつぽ考えずに口を開く癖を止めろと言うとるんじや!人を褒めるならなんでもそのまま言えばいいと思つとるんなら大間違いじゃからな!」

呆れた顔でお釣りを持ってきたサラに見送られ、酒場を出る。

なぜかその際、疲れた様子のカオスの肩を彼女が支えていたのだが……その姿に、クレスは首を傾げるより他になかった。

どうしてただ食事をしていただけで疲労してしまう事態になり得るのか、彼には心底さつぱりだった。

「それではありがとうございしました、なのじや。また来てくれると嬉しいぞ」

「ああ、また来よう。ここの味は気に入ったからな。それと」  
立ち去る直前。

クレスは周囲には聞こえない小さな声で、サラへ囁いた。

「後で裏に荷物を置いておく。見つからないうちに回収しておけ」

「——分かったのじや。しかし、良いのかの?」

「構わん。あと、場合によっては迷わず封印を解け。カオスに傷をつ

けさせるような事態には決してさせるな」

「ほう……それは血が滾るのじゃ。あい分かった、事態はそれだけ切迫しているということじゃな。地上は妾に任せよ。主様はいつも通り、存分に迷宮ダンジョンに集中するがよいぞ」

「無論。……あと、飲食店は衛生管理が第一だ。ゴミ処理をしたら、最後まできちんとやっておけ」

そう言い残し、一人と一柱は去っていく。

その姿を見送ったサラは、店の中に戻る前にちろりと舌なめずりをした。

「此度の主殿は随分と気前が良い。まさか封印を解いてもよい、とは。よほどの何かが起きるといふことか——面倒ごとは妾も嫌いなんじゃないの。それよりも旨い飯で腹を満たしておる方が、よっぽど楽しかろうに。のう、お前もそうは思わんか？」

いつの間にか手先に止まっていた、黒き小翼へと彼女は微笑む。

その美しき支配者の姿を、側の路地裏にてこと切れていた狂信者の虚ろな瞳だけが見ていた。

「連中は俗に、一匹見れば百は居るといふ」

まだ、神々が下界に降りて間もない頃。

地上に蔓延るモンスターたちを一掃すべく形成された彼らの派閥ファミリアの間には、今のような政治的・神話体系的な軋轢は存在しなかった。皆が一体となって下界に平和を齎そうと奮闘したあの時代においては、本来ならば相容れぬ他派閥であろうと頭を下げて助力を請うことが何一つ恥ではなかったのだ。

だが、それでも。

鍛冶の神ゴブニユに、武の神スカサハに、医療の神ディアンケヒトに……現代においておおよそ冒険者に必須とされる技能スキルを司る数多の神々に対して、いつそ厚顔無恥と呼べるほど節操のない弟子入り懇願ドゲザ・アタックを敢行した大馬鹿者はクレス・カタストロフを置いて他にはなかった――。

「――久しいな。良かろう、炬を貸してやる。……進歩を見せろ」

「――ふははははっ、さあ今回は何を手に入れたか早速見せてみる!! そのついでに貴様の腕もなまっておらんか見てやらんでもないぞ、ほんのちよびつとくらいならばな!」

「……久しい師との顔合わせも済ませた。ならば後は資材の買い込みだけ、商会のある第六区画へ向かうぞカオス」

「うん、クレス君。……しかしいやア、二神ふたりとも相変わらずだったねエ」

現在のオラリオにおいて未だ健在であるゴブニユとディアンケヒト。

かの偉大なる二柱から久々に教えを受けた後、クレスはカオスを通じて残る目的地であるオラリオの商業区画へ向けて歩いていった。

その道中で話題となるのは必然、先ほどまで彼らが顔を合わせていた神々のことだった。

「ゴブニユは寡黙で職人気質で、ディアンケヒトの奴は底抜けの

守銭奴根性で。ホント天界にいた頃からそのままだったよねエ……。特にディアンケヒトの方なんか、クレス君の持つ『フェニクスの涙』をあの手この手で買い取ろうとしてくるあのしつこさったら」

保護者気分で神々とクレスとのやり取りを眺めていたカオスが、特に片方の神について呆れたように言及する。

一方は水の如く静かに弟子の腕を見るのに対して、一方は猛火の如く弟子に詰め寄りその持ち物を強請る。その性格は正反対にして、両極端。

そんな彼らがクレスという共通の弟子を認めている——その理由は偏に、彼がそれぞれの要求に対して誠実に向き合い続けているからだ。

ゴブニユの求める、『真摯に己が剣と対話する』こと。

ディアンケヒトの求める、『派閥の運営資金の三倍を支払う』こと。

求められたそれらの供物を一切の嘘偽りなく捧げているからこそ、彼らもまたクレスの求める神の在り方を順守する。鍛造修行や調査の相談を請け負い、時に褒め時に慈愛の眼を向け、時に叱り時に唾を飛ばしながら、彼の進歩を各々なりの態度で見守る師匠として。

しかし弟子と言っても、なんでもかんでも師匠の意に沿う従順な機械ではない。

カオスの語る印象に同意するように、クレスもまた声になかなからぬ面倒臭さを含ませる。

『深々層』素材の個人的な売買はウラノスとの契約で禁止されていると、こつちの口にタコが出来るほどには何度も言っているんだがな。『身に余る力はやがてその身を滅ぼす。今のオラリオの冒険者に与えることは好ましくない』……せめて誰か一人でも今の奴らが100層を突破してくれれば、この契約も緩くなるんだが」

「神時代以来一番進んでたゼウスとヘラの派閥も、黒竜にやられちゃったからねー。それが叶うのもまだまだ先の話、チートで近道しようたってそうは問屋が卸さないってね」

「ここはウラノスに正当性があるからな。過ぎたるは猶及ばざるが如し、薬も転じて毒薬となるとはよく言ったものだ。事実、それで身の

程を弁えずに結果無念の屍を晒した連中は昔からよくいた。今もそれは変わらんだろうからな……いい加減にしてほしいものだ」

時刻はそろそろ夕方に差し掛かる頃。

暮れかけた夕日が空を茜色に灼いて、深まった影を伸ばしながら二人はオラリオの中で第六区画と呼称される地帯に踏み入った。

ここでのクレスの目的は、迷宮内では入手不可能な香辛料などの一部消耗品を入手すること。

雲菓子ハニークラウドに代表されるように、過酷な迷宮環境ダンジョンに生息する動植物の中には生命力が強すぎて逆に身体に合わないものもある。そういった類の劇物を無理矢理活用しようとするくらいならば、クレスは素直に便利な既製品に頼って楽をする派だった。

しかし、ここ暫く彼が「好みの品揃えをしている」として懇意にしていたとある商会の拠点だった巨館は——既に放棄されて久しい廃館となって、今年の彼らを出迎えたのだった。

「ここもついに潰れた、か。次は南方の珍しい乾物を取り揃える予定だというから、期待していたんだが……残念だな」

「というよりも、「潰された」の表現が正しいね。見なよほら、襲撃の跡がいくつも残ってる。可哀そうに」

クレスの記憶にある、かつて店員が声を張り上げて活発に集客を行っていた商会の姿は影も形もない。

そこにあるのは、賑やかな人だかりが消えて代わりに埃と瓦礫が辺りに散らばるばかりの廃墟。

野晒しとなっている陳列用の木棚には焼け焦げた跡が散見され、また館の壁の至る所には穴が開いて、雨水が溜まり腐蝕している様子が伺える。

恐らくは略奪目的の暴徒にでも襲われて、拳銃焼き討ちの憂き目にまで遭わされたのか。

そうして残された、ただひたすらに虚しさを感じさせる灰色味があった夢の跡。

闇派閥イヴァイルスが頭角を現しているこの時代、このような光景はままよくあることだ。

しかし今日この場所に限っては、建物を取り囲む周囲の様子が他とは異なっていた。

「……あれはガネーシャと、アストレアの所の子たち？」

物陰に身を潜めながら廃館を取り囲む、なにやら物々しい雰囲気の間者集団。

複数の眷属ファミリアが徒党を組んだ彼らが、鼠一匹すら逃さぬといった剣呑な瞳で館を睨みつけている。

その光景を彼らに気取られない場所である近場の屋上に移って、クレスたちは見下ろした。

「なんだかいつにも増してピリピリしているみたいだけど、もしかして何かあったのかな」

「……そういえばロイマンのやつが、今日がちょうど『計画』の日なんだと言っていたな。思い出したぞ、ここがその実行場所の一つだったのか」

クレスは、年に一度の面会で必死に彼へと向けて叫んでいたギルド長の様子を思い出す。

ギルドを中心とした秩序側の派閥連合ファミリア・ユニオンが一挙に悪派閥イウィルスの拠点を攻め滅ぼす、一大計画。

ロイマンの説明によれば、激戦になること必死のその計画は計三つの手に別れて行われ、それらの趨勢がオラリオの今後を決めるとのこと。故に「協力しろとは言わん、ただ決して邪魔だけはしてくれないよ——馬鹿ども神々の如く暗にやれと言っているわけではないからなッ」と、クレスは目を血走らせた彼から念入りに言い含められている。

しかしそんな警告など我関せずとばかりに、彼は今ここに至るまでさっぱり忘れていた。

そもそも今更言われるまでもない。自分から何かを仕掛けるつもりなど無いのだから、と。

こうして眼下の後輩たちが意気込む姿に遭遇しても、それは変わらない。

クレスには彼らの邪魔をするつもりもないし、進んで協力を持ちかける意思もない。

ただ自分の目的を果たすためだけに、彼は動く。

「その『計画』？　について私は詳しくは知らないけどさ。こうなったらもう、買う場所を変えた方が良いんじゃないかな。どうやらこのままだと、私たちはお邪魔虫になってしまいそうだし」

「……いや。連中が突入する際に紛れて、俺たちも行くぞ」

「ええっ、正気かい!?　いったい何しに行くのさ、まさか彼らに協力するような殊勝さを思い出したわけでもないだろう?」

しばし逡巡するように顎に手を当てていたクレスによる思いがけない言葉に、カオスは彼に向けていた目をぱちぱちと瞬かせる。

その失礼な疑問について、彼は裏切ることなく「もちろん」とさも当然のように頷く。

「貴女の読み通り、そんなつもりは更々ないさ。ただ、よく見てみる。商会の連中、よほど慌てていたのかここを去る際に商品のいくつかを捨て置いていったようだ。壁に開いた穴の奥に、積み上がったままの木箱がいくつか見える。そこで運よく保存状態の良いものを見つけられれば、今回俺が欲しかった品を回収できる可能性がある」

「ええ……火事場泥棒かい?」

やはりか、とジト目を浮かべる彼女にクレスは今度は首を横に振った。

「違うな、無駄なき再利用と言え。なに、いずれまたここにいた連中もしくはその後継と出くわす時もやってくるだろう。その時にきつちりと耳を揃えて代金を支払うさ。本来ならば失うはずだった利益を上げられるのだから、向こうからしても悪くない話だろう?　――

と、ちやうど突入する所らしい。準備しろカオス、漁る際には貴女の手も借りるからな」

「遠慮なく主神に手を汚させるねエ君は……はいはい、エスコートは丁寧によろしく頼むよ」

差し出されたカオスの手を取り、素早くその腰に手を回して華奢な身体を胸元に抱え込む。

それからクレスは眼下の冒険者たちが一斉に突入する瞬間タイムミンゲに合わせ、立っていた高所から跳躍。高レベルの脚力によるひとつとび



で、廃棄商館の上階側面に開いていた大きめの穴へと飛び込んだ。

身体を襲う一瞬の浮遊感、そして着地。

足元に散乱していた木片とガラス片を無音で踏みしめながら、クレス一行は内部への侵入に成功した。

「しかし、どうやってこの広い中を探すつもりなのかな？ 外から見ただけでも地上部分は五階あるのに、ここは地下だってあったはずだけども」

「なに。大概どんな建物だろうと、大事なものを保管する部屋の場所はそう変わらん。その辺であたりをつけて回れば、そう時間もかからないだろう」

クレスは最初に入った部屋にめぼしいものがなさそうだと踏んで、そのまま廊下へと進み出る。

もちろん、闇派閥イヴァイルスの拠点として改造された館の内部には彼らの手によって様々な罠が設置されている。

警報を鳴り響かせるもの、侵入者を拘束するもの、通路を障害で塞ぐもの。

それらを手早く解除しつつ、既に階下で乱戦を始めている連中に見つからないよう気を配りながら、クレスはカオスの安全を最優先にすいすいと進路を確保していく。

「……」

「!?」

その中で、気配を捉えた見回り役らしき悪派閥イヴァイルスの背後へぬりど回り。

瞬時に悲鳴を漏らされないよう口を塞いで、そのままクレスは相手の懐から抜いた短刀で持ち主の延髄を躊躇なく断つ。

相手は下手人の顔を見ることも、その存在を味方に伝えようと声を上げることも許されず、自身の身に何が起きたのかすら分からないまま、糸の切れた人形のように脱力した。

一瞬の無力化を終え、その場に抱きかかえた相手をゆっくりと下ろした彼は呟く。

「この手に限る」

「うわあ、エゲつない。これじゃどつちが悪派閥イザイルスだか、傍から見れば分からないね」

「知るか。なんとも言え。……さて、こいつを使って少しばかり楽をさせてもらうか」

クレスは手早く相手の装備を剥ぎ、武装解除ついでにその上半身をはだけさせる。

その過程で相手が女だったことが判明するが、彼が反応したのは身体イザイルスの前方ではなく後方だった。

女悪派閥イザイルスの背中、そこには不吉な気配の漂う骸骨と鎌を基にした神ファナルナの恩恵が刻まれている。

「まだ恩恵は生きているな。主神との繋がりも保たれている、よし」  
クレスは彼女の首から短刀を引き抜いてそのまま拝借し、刃についた血を剥ぎ取った布で拭う。

露になった刀身を指先で軽く撫でながら、目と並行においてその業物度合いを測った。

「レベルにして2から3用の代物か。ここで使い捨てる分にはちよほど良い。——カオス、神血イコルを一滴くれ」

「ン、なにかな唐突に。別に良いけれど……こんな所で何をするつもりなのさ？」

「こういった連中は俗に、一匹見れば百は居るといふ。ならば効率的に、大元から叩こうと思つてな」

カオスから頂戴した神血イコルと『深々層』から持ってきていた素材の粉末を近くで見つけた皿の中で混ぜ合わせ、その中に指を浸す。

そうして簡易的なペン先とした爪を用いて、彼は手に持った短刀の腹に呪紋を刻んで詠った。

「——【契約に応えよ、原初の呪よ。我が意の下に血鎖を穿ち、命脈を枯らせ】」

刻まれた血紋が、焦げるように煙を上げながら紫に輝く。  
神ファナルナの恩恵に頼らない、古式の呪詛カース。

その呪われし刃を、クレスは無防備となった悪派閥イザイルスの恩恵目掛けて振り下ろした。

「ストライク・ブラッド」

その効果は——『チェインブラッド連呪属性』。

恩恵越しに心臓を貫かれた女の身体が一度大きく跳ねたかと思えば、階下の冒険者たちから次々に困惑の声が響き始める。

「——なんなのこの人たち!? みんな、一樣に心臓を抑えて……?」

「動きが悪くなった? ——構わん、これを好機として一気に畳みかけろ!」

クレスは続けて、目前で苦悶に喘ぎ空呼吸を繰り返す女性の臍を切り裂く。

その結果、今度は悪派閥イヴァイルスの側から驚きと困惑の悲鳴があがる。

「ぐうつ!? こ、これはいったい何が——!」

「手が、足が、思うように動かぬっ!? 何故だあああっ!!」

——「ストライク・ブラッド」。

その効果は、『同じ神血イコルを受けた同胞ファミリアへ対象の苦痛を伝播させる』というもの。

今、階下の悪派閥イヴァイルスたちの多くが心臓と四肢を襲う謎の幻痛によって動きを鈍らせている。それは彼らとの戦いに心血を注ぐ冒険者たちにとって、あまりに致命的な隙に過ぎた。

次々に捕縛されていく悪派閥イヴァイルスの怨嗟の声と、それを上回る冒険者側からの歓声。

それを一顧だにせず手元の作業を続けるクレスに、カオスは「おいおい」と目を見開いた。

「恩恵を介した共鳴りの呪詛カース? そんなもの、いつの間に身に着けていたんだい?」

「だい昔の話だが、地上に戻るのが面倒くさくなって、迷宮ダンジョンの中で貴女の手頼らず恩恵が更新できないかと試行錯誤したことがあってな。結局は最後の最後で、わざわざ背中に手を無理矢理伸ばしてまでするもんじやないかと気づいたが……これは、その過程で得られた成果の一つだ」

効力を発揮した短刀は、やがて呪詛の強さに刀身が耐え切れず砕け散る。

しかし、その効果は既に大元の発生源——すなわち女の恩恵全体に根付くように張り巡らされている。

彼女が生きている限り、その仲間は暫く身体の低下に悩まされるだろう。

そして、たとえ延髓を断たれようとも神の眷属はすぐには息絶えない。

故に呪いを最大限活用しようと、クレスはあえて中途半端に彼女の傷を治したり栄養剤をその口に突っ込んだりして延命の処置を完了させた。それから彼は、彼女の身体を簡単に見つけることの出来ないように側にあつた壁の割れ目に押し込んで、どこからか持ってきた大きめの絵画を以て全体を覆い隠した。

「神聖文字からして、能力値はレベル2の後半。こいつの気力にもよるが、これから先の三日間は死なんだろう——これで良し。さあ、探索を再開しようか」

それらの外道を難なく済ませて手の汚れを打ち払ったクレス。

その眷属の在り様に、カオスはもちろんドン引きしていた。

「……君さア、もうちよつと手心とかないの?」

「加えたが? 本来想定していた使い道に従えば、さっきの女を公衆の面前で磔にして被害者に石を投げさせているところだぞ。きつと俺程度では想像もつかない凌辱の限りを尽くされて、尊厳を冒された連中はようやく自分たちの犯した罪の重さを知るだろうとな。そこまですなかつたことが、俺の手加減の証明だよ」

「……それって実は面倒くさかつたからだった?」

「そうだな」

「いやいやいや……えー? 本当にどこで教育を間違えちゃったかなあ、私ってば……おつかしいな?」

悩むカオスをよそにクレスは新たな部屋の扉を開けて、その中を一通り物色していく。

釘で封じられた箱の蓋を次から次へと素手で引っぺがし、内側を除いては無事そうなものを探すの繰り返し。

下の騒がしい剣閃の響きを置いて、彼は呑気ががさごそと積み重な

る木箱の中を漁るのだった。

「——ぐっ、くううつ……！　まだ終われるものかッ！　死ねえ冒険者！」

「——死なないわ！　だって伝説的に可憐な私の伝説は今後も美しき冒険者として続くもの！」

「むう、中々良い感じの物は見つからないな……」

しかし残念なことに、中身があったとしてもその多くは消費期限が切れていたり、雨風の浸食を受けて腐っていたりと役に立たないものばかり。

お目当ての希少な調味料なども中々見つからず、彼らは次第に商館の奥へと進んでいく。

しかし秩序と悪の決着もまた、同じようにそちらへともつれ込んでいたのだった。

「おっと……まだ終わらないのか。相も変わらずしぶとい連中だ、この様子だと探せないな」

彼らが最後に辿り着いた貯蔵庫では、一足先にこの商館における決戦が始められていた。

冒険者と悪派閥イッイルスが一堂に会した乱戦。

複数の戦いが一度に行われている、元は商会の品々を補完することが存在意義であっただろう空間を覗き見てカオスは目を細める。

「うわあ、流石にあそこには行けないかな？　どう隠れようとしたって巻き込まれちゃいそうだし」

「そうだな。とは言えそれなりに手付かずの箱も見える、雨漏りもしていないようだし一切探さないのも惜しい。しかし他の所はもう粗方探し尽くしたし、ここは退散して後でまた——いや」

突如言葉を区切ったクレス。

その視線の先では、今まさに剣戟を繰り広げようとしていた一組の冒険者と悪派閥少女がいて——。

「クレス君？」

「何を呑気に手を伸ばして……いやまさか、連中、気づいていないのか……っ。」

## 最善を目指す『正義』と最短の『外道』

「——ダメだ、君みたいな子供がこんな悪い大人たちの言うことを聞  
いちやいけない！ 武器を捨てて！ 私たちと一緒に来よう？」

ガネーシャ・ファミアリア所属、【象神の詩】ヴァイヤルサアーディ・ヴァルマは語  
りかける。

貴き精神性の持ち主である彼女は、たとえ大事な殲滅作戦の最中だ  
ろうと、そこに救いが与えられるべき子供がいるなら当然のように手  
を伸ばす。

その刃を向ける小さな身体が、イヴァイルス悪派閥を示す白濁色のローブを纏っ  
ていても。

その隠れた背中に、悪しき神の恩恵が輝いているとしても。

——その心が、邪神と交わした契約に抱擁縛されていたとしても。

人は一度『悪』に落ちたとしても、誰かの優しさで再び『善』に戻  
れるのだと信じているから。

己が信念に基づいて片手セイクリッド・オース剣を下ろし、闇に堕ちた幼き悪派閥の  
少女を再び光の道へ連れ戻そうと、親身になって言葉を投げかけた。

しかし、彼女は気づかなかった。

邪神が親を喪った少女に齎した心の安寧は、如何に優しい冒険者の  
言葉であろうとも、容易く覆せないほど強固に魂に染み付いていたこ  
とに。

彼女は知らなかった。

『冒険者を道連れに死ねば、あの世で父母に会わせてやる』という  
……邪神と少女の間で秘かに交わされていた、耳を蕩かすような甘く  
柔らかな約束を。

アーディのかけた優しさに一瞬、少女の瞳が潤むように揺れて——  
その懐に手が伸ばされる。

「……かみさま」

胸の辺りに隠された、盗品である火炎石と撃鉄装置から作られた簡  
易自爆装置。

最後に脳裏によぎった邪神かみさまとの約束が麻薬のように少女の頭を犯して、その手を動かす。

「おとうさんとおかあさんに、あわせてください……」

その様子を傍から眺めていた【殺帝】アラクニア ヴアレツタ・グレーデが、これから起こるであろう悲劇祭の幕開けを未来視して秘かに嘲笑する——『善』の失墜、『悪』の喝采。これよりオラリオに地獄の窯が開く、その華々しい幕開けがここから始まるのだと。

少女の孤独に惑う瞳を受けて、アーデイが硬直する——相手の眼から、一步先に自分の死が待ち受けているのだと悟ってしまいながらも。それでも少女を救いたいと思つて……その場から、逃げ出せなくて。

動く少女の指が、そして。

今まさに神と結んだ契約を履行するべく、爆弾の起爆スイッチに吸い込まれる——。

「会いたければ一人で会いに行くんだな」

「——え？」

光が、走った。

己の死を予感して動きを止めてしまったアーデイの横を、閃光が通り過ぎる。

その上級冒険者レベル3の眼では一切を捉えられない光は、彼女と相対していた幼い悪派閥イヴァイルスの姿を一瞬のうちに視界からかき消して——遙か空高くから、何かが炸裂したような轟音が響く。

突然の衝撃を受けて建物が揺れ、誰もが咄嗟に倒れないよう踏み止まらなければならなかった。

「くっ、なんだ——!？」

「爆発? でも、なんで真上で急に……っ!？」

剣戟が一時的に鳴り止み、誰もが爆音の正体を探そうと周囲を見渡す。

そして彼らは、アーデイの目前に新たに姿を現していた一人の異物へ目を止める。

その視線の中で、光の正体だったフード姿の男——立ち止まったク

レスは、背後で動けないでいる後輩<sup>アーデイ</sup>へと忠告を送る。

「何を呆けている。たった今死にかけてんだぞ、お前は。狂信者を相  
手取る時に自爆や道連れの可能性を忘れるな」

「あ、えつと……えつ？」

アーデイは今日の前で何が起きたのか、すぐには呑み込めなかつ  
た。

気づけば自分が救おうとしていた少女が消えていて、そして爆発音  
が鳴り響いて。

見慣れない人影が立って、自分に言葉をかけている。

何がどうなっているのか——頭がうまく回らず、反射的に彼女の口  
をついて出た言葉は、自分のことではなく今の今まで相対していた  
悪派閥<sup>イギリス</sup>の少女のことだった。

「今の、娘<sup>こ</sup>は……？」

「死んだ。今の爆発がそれだ。お前を巻き添えに死のうとしたあの娘  
は、空高く俺に蹴飛ばされて死んだ——もうどこにもいない」

彼女が彷徨わせる視線の、向かうべき先。

たった今起きた現実を指し示すかのように、クレスはその指先を真  
上へと掲げた。

天井に空いていた、ちょうど少女一人分の穴——その向こう側から  
偶然か、焼け残った少女のローブの切れ端がゆつくりと落下してく  
る。

それは己が救おうとした少女の死を、明確に示している。

その事実を自覚してアーデイが呆然とする中、最も早く自意識を取  
り戻したヴァレッタが叫んだ。

「——オイオイオイ!? 何だっつんだよ今のはア!? なんでその女が  
生きてやがる!？」

「下らん問いだな。俺が間に合ったから、この女は生きている。それ  
だけだ」

気持ちのいい企みを潰されて怒りを露にするヴァレッタに、お前の  
気分など知ったことかと淡々と言いつつクレス。

罪悪感の欠片も含まれていない彼の声に、事実をようやく察した他



の者たちは皆、冒険者も悪派閥イヴァイルスの構成員も等しく啞然とする。

「はッ、冒険者サマを救うために簡単に悪派閥こつちを切り捨てるたあちつと驚かされたが……その冷血ぶり、テメエまさかアバズレンフレイヤところの隠し玉か？ ヒヤハハッ、まさかこんな奴がまだ隠れていたとはなア!? 大事な大事な作戦、いよいよ奥の手を投入する気に——」

「勘違いするな。俺はお前の言うどこぞの女神の眷属じゃない。だが、お仲間を殺されたのがそんなに不思議なことか？ 『悪神の眷属は見かけ次第即斬り捨てよ』くらい、今の時代も普通に標語としてあるかと想像していたが……」

「……はア？ なに言ってるんだ、テメエはよ？ んな野蛮な価値観、今のオラリオのお優しい冒険者どもとは到底思えねえな……何時の時代の人間だ、ああ？」

「無論、お前たちと同じく今を生きる人間だが。しかし、そうか。他者を平気で害する連中などいくら雑に扱ったところで非難されることなどないと思っていたが……そうでもなくなったのか。覚えておこう」

ヴァレッタに対して敵意を持つことなく語らいあい、率直に「悪なぞいくら殺しても問題ないと思っていた」とさえ言い切ったクレス。

人の命を天秤にかけて片方を選ぶ……その辛い偽善に対して、自問自答自虐自嘲を重ねつつ真つ向から向き合ってきた者たちも。また、その覚悟を嘲笑ってきた者たちも。そのあまりに端的な彼の態度に、どこか自分たちとは違うものを見て——共通の恐れを抱かされる。

——なぜああまで、何の躊躇もなく。

——貴いハズの……それも、未来ある幼き命を簡単に手にかけて平然としていられる!?

数多の恐怖の視線を受けながらも、その中心にいるクレスに委縮する様子は見られなかった。

「亡き親に会いたいと願う子の心を利用する悪派閥イヴァイルス。かつての知り合いどもなら「許せんツ！」と即刻弾劾しにかかるところなんだろうが、俺は別にそうは思わん。

むしろお前たちの描く悪辣さには、割と感心させられることが多い

よ。——人の悪に終わりなどなく、煮詰め凝縮された闇はやがて神を凌駕する一つの星となる。その力もまた、迷宮攻略の糧に出来るからな。とはいえ今回ののは正直、微妙だが」

身内の呆気ない末路を受けて、嫌に良く響くクレスの独り言を聴いて、周囲の悪派閥の雑兵たちはどうすれば良いのか迷い、動けないでいた。

大した訓練も受けていない、ヴァレッツタ曰く「ただ恩恵を刻まれただけの捨て駒ども」は思う。

——あのような、幼い少女ですら躊躇なくぶつ飛ばす怪物を前に、自分たちの願いが叶えられるのか？ と。

冒険者たちの優しさや甘えを前提とした無理心中作戦ががらりと破綻する音を聞いて、彼らはどう動けば良いのか分からなくなっている。

そんな様子の連中を見渡して、クレスは溜息を吐いた。

「さっきの娘の遺言からして、どうせお前たちも「愛する者と冥府で再会したい」などと邪神に願ったクチか？ ……凶星だな。なら止めておいた方が良く。どうせあの連中にはそんな、七面倒臭いことに手を煩わせるような気概はない。

断言しよう。邪神どもはただお前たちの耳に気持ちの良い嘘八百を並べ立てて、自分の思い通りに命を捧げるお前らの妄信を見て、「可愛いなハッハアー！」などと仲間内で下品に笑い転げたり自慰してるだけだぞ」

ただ流石にその暴言は聞き逃せなかったのか、一人の邪神信者が憤りを覚えて前に踏み出る。

冷たいクレスの視線を受けながらも、彼は反骨的に己が胸中に燃える信心の暗い熱を昂らせて声を張り上げた。

「——何を知ったかぶりに、嘘をつくな！ あの方々は確かに我々に約束されたのだ！ 『冒険者を巻き添えに死した暁には、あの世で妻に再会させてくれる』と！」

「いいや無理だよ。あの連中に神としての誇りがあるのなら、なおさらな。……だって、よく考えてもみる。自分の望みのために他人を殺

すようなお前たちの魂と、お前たちの愛する恋人や家族みたいな無垢な魂。それらが死後、同じところに送られるわけがないだろうに。

連中は無駄に職務に忠実だからな、そう言ったところだけキチンとして「ゴメンなーお前たちと約束したけど仕事の方が大事だからナー」とかなんとか言つて平気で約束なんか破るぞ。

そつちのお前たちの絶望した顔で二度美味しいなー、とか考えながらな」

「そ、そんなつ……いや、そんな訳がつ……！」

クレスは澱みなくつらつらと男性邪神信者の希望を否定し、更に相手が膝を震わせ始めたのにも関わらず続ける。そこには嘘を述べているような軽薄さはなく、ただ淡々と事実を語る確信だけがあった。

——そこまで言うか？ という周囲の冒険者たちの視線は残念ながら、フードに遮られているせいで届かない。

「覚えておけ。神だからと無条件に信じて、奴らの薄っぺらい言葉に簡単に流される愚かな信者など、あいつらの一番好き嫌いな餌に過ぎないとな。

唆されただけで簡単に動く人形なんて、道楽者の連中からしたら面白みがなさ過ぎる。すぐに存在を忘れて、約束もほっぼりだして次の玩具を探しに行くだろうな」

否定、否定、否定。

邪神の信奉者たちが抱いていた今際の理想を、クレスはボロクソに叩いて砕いて踏み躪る。

お前らの絶望なんて知らないし、どうでもいいのだと……。

そう、自分たちからしてみれば大切な希望を平然と軽んじられたという怒りが、折れかけた男性信者の思考を最後に奮起させた。

「く……くそつ！ くそつ！ くそおつ！ ふぎけるなつ、ふぎけるなあーっ！ 貴様がどこの誰かかは知らんが、我らが神を、我らが理想をことごとく侮辱するなど——その思い上がりがどういふ事態を招くか、我が命を以て教えてやる！」

「いや結構だが」

クレスのずけずけとした言い分に怒髪天を突くといった様子の男

性信者が、すかさず自らの胸元に手を伸ばす。

しかし、この時の彼の頭からは怒りのあまり、完全に先ほどの光景が吹っ飛んでいたのだろう。

——彼らが自爆するよりも早く、目の前の異端者<sup>クレス</sup>は動いてしまえるというのに。

「……まあ、なんだ。どうせ爆発するのなら、最後まで人々の心を和ませて散れ」

「——ダメ、待っ……！」

これからクレスが何をしようとするのか、察したアーデイが引き止めようと声を上げる。

しかし、彼女の望みが全て言葉になるより早く。

「——がっ!?!」「——ぐわっ!?!」「——きゃっ!?!」

「——どうおっ!?!」「——ぎゃっ!?!」「——なあっ!?!」

「——うわあっ!?!」「——げっ!?!」「——ひいっ!?!」「——くっ!?!」

「——いやあっ!?!」「——ああっ!?!」「——そんあっ!?!」

「——えっ!?!」「——なっ!?!」「——ひぐうっ!?!」

「——げふっ!?!」「——どうわあっ!?!」「——ぴぎやああっ!?!」

再び閃光となったクレスが、全てを終わらせた。

周囲で揃って白濁色の装束を着ていた連中の胸ぐらを、足首を、腕を。

握り潰す勢いで掴んで、地上約500M<sup>メートル</sup>の高さにまで腕力ただ一つでブン投げる。

幸いだったのは、あまりの勢いに撃ち上がる道中で彼らの意識が絶たれてしまったことか。

彼らは痛みを感じることなく、焼けつく大気との摩擦熱によって懐の火炎石を着火させて——。

——連爆。

咲き誇る怒涛の連続花火が、天井に開いた風穴の向こうで紅蓮色の炎を吹かしながら派手に散っていった。

「……惜しむべきは夕方だったのと、色の種類がそんなになかったことか。花火としては微妙な出来だったが、しかし人殺しにはならず

済んだのだから、まだあの世で望みの相手と出会える確率も上がっただろう。恨むのなら、まずそこまで堕ちた自分の心の弱さを恨むんだな。それでもまだ足りないのなら、また来世で喧嘩を買ってやらんでもないが」

残るのは、自爆装置を唯一持つていなかったが故に見逃された【殺帝】<sup>アラクニア</sup>一人。

それ以外のここにいた全ての悪派閥が、彼らを止めようと奔走していた冒険者たちの目前から……そしてこの世から、姿を消した。

あまりに乱暴で、それでいて至極単純な解決策。

たった今日の当たりにした光景を、それでも「誰も死ななかつただけマシなのかもしれない」と成熟した冒険者たちは愕然としながら葛藤してしまう。

ただその中で、唯一未熟故に現実を認めようとしなかったエルフの少女だけが彼に詰め寄った。

「——貴様ツ！　なんという非道を！　何を考えていればこのようなことが出来る!?　人の命を『花火』などと、玩具のように批評して……こんなことが許されるものか！」

「非道であることは認めるが、これが遺恨を断つのに一番手っ取り早いからな。そんなに生かして捕まえた方が良かったのか？」

「当たり前だ、そうに決まっているだろう！　それだけの力があるのなら、連中の自爆装置だけ解除してしまうことも出来たはずだ！」

「ああ、それなら出来たな」

「ならば何故！　救えるはずの命を救わないなんて、そんな『正義』が有り得るものか！」

「別に俺は『正義』を掲げたつもりはないんだがな……」

責める【疾風】リユー・リオンの言い分について、クレスは先の悪派閥とのやり取りのように正面切つての否定という手段を取ろうとはしなかった。

<sup>舞夜やライラ</sup>彼女の仲間に言わせれば、青臭過ぎる『正義』。

——しかしそれは『悪』に立ち向かうべく剣を取った人が最初に抱く原風景にして、穢れなき純粹無垢な想い。

人々の根底に共通して宿る彼女の気高き志は、彼の嫌いな愚かさを  
持ち合わせていなかったから。

であればこそ。

今の彼女に足りないものについて、クレスは純真な心を持つ後輩へ  
向けて語る。

「だが、俺のやり方がお前たちを救ったのが事実だ。俺がいなければ、  
お前たちの幾人かは自爆の犠牲となっていた」

「……っ！ それは、そうだがっ！」

「お前の言うことは正しい。お前の理想に比べれば、俺の手法など下  
賤にして下種。下策にして外道だ。連中を生かし更生に導く『最善』  
を面倒だからと放り投げ、冥府の神々に魂の漂白をさせる『最短』を  
選んだからな。

しかし結果的に多くの人命を救ったのは、お前の正義ではなく俺の  
外道だ。——それは、お前に『力』が足りなかったからだ」

悔しさに歯を食い縛る彼女に、彼は親切心から説明する。

クレスが最も嫌うこと、それは他人の下らない思惑で自分の意志を  
歪められること。

もしこの後輩が、自分と同じだけの強い信念『正義』を掲げようを持とうとしているの  
なら……そこに激励の一つくらいは与えてもいいと、彼は思ってい  
た。

「力の伴わない『正義』は偶像に過ぎん。『正義』は語るものではなく、  
その背中で示すものだ。俺は示した、お前は示すだけの力がなかつ  
た」

「……！」

「強くなるための道はそこ迷宮にある。先達ゼウス・ヘラによる舗装知識の積み重ねもあろう。な  
らば積み重ねろ。そして至れ。如何なる『悪』をも屈服させられるだ  
けの、絶対的な『力』に……それが、お前の語る『正義』に足りない  
ものだ。

——「清濁を知れ」などという雑音もあろうが、惑わされるな。

強くあることだ、名も知らぬ後輩。その白き『正義』を最後まで貫  
き通したいのならな」

その善意100%の助言には、悪意や皮肉は欠片も混じっていないかった。

フードの下に覗くクレスの瞳に宿る光を、リユーは見えてしまった。疲れや諦めを眦に滲ませながらも、それでも強く前に向かって突き進む意志の輝き。

それは人の可能性を突き詰めた先に遥か遠き神へと至る、夥しい昇華レベルアップの歴史であった。

その瞳の持ち主は、いつの間にかぽんぽんとリユーの頭を撫でていた。

クレスの眼に一瞬吞まれてしまっていた彼女は一泊遅れて事態に気づき、彼の気さくな手を振り払って射殺するような視線で睨みつけた。

「っ、私に触れるなア！」

「……ああ、エルフはそうだったな。すまない、どうも昔の知り合いの姪に似ていてな。なにぶん久々に決まりきった相手以外と話しているものだから、距離感が分からなかったんだ。謝罪しよう——と。どうやら他でも自爆が始まったみたいだな」

話の終わりを告げるかの如く、遠くから聞いたばかりの爆発音が順に鳴り響く。

同時に叫ばれる、民衆と仲間の冒険者たちの悲鳴。

阿鼻叫喚の地獄が繰り広げられているらしい外のあちこちから、連鎖的に爆発の音が響いてくる。

それを聞いて、すっかり蚊帳の外に置かれていたヴァレッタが思い出したかのように哄笑を上げた。

「ははッ——そうだ！　ここは失敗しちまったが、外ではまだ祭りは終わっちゃいねえ！　連中は皆そいつの言った通り『花火』！　オラリオ中で爆ぜて、このクソくらえな平穩を吹き飛ばす！　ひやはははっ、そんな奴と話してる余裕がお前たちにあんのかア！」

「そうだな。俺を睨んでいるよりも、外の仲間の応援に向かわなくて良いのか？」

他人事のようにリユーへ語るクレスに、ヴァレッタは少しばかり目

を丸くする。

「なんだよ、テメエは行かねえのか、ええ!?!」

「俺とて暇じゃない。元々ここには別の用事で来ていたんだ、目の前に困る連中を助けるくらいはするがわざわざ遠くにまで手を伸ばすつもりはない」

「は? ……ははっ、とんだロクデナシだなお前! 平気で自己都合のために他人を見捨てやがるたア、なんで冒険者側そつちに立ってるか分からねえな!」

「見知らぬ他人のために時間を使うほど、俺の心は高貴じゃないものでな……さてと」

クレスは当初の目的を果たすべく、近くにあつた箱に歩み寄つてその中身を確認し始める。

作業の邪魔となる特攻隊はもうこの場所にはおらず、もはや一対多となった現状、残った上位格らしき女ヴァレットもそのうち素直に退散するだろう。冒険者たちもそれを追いかけて出ていって、探索の邪魔をされることはなくなるに違いない。

そう踏んで動き始めた彼に、リユウはまたもや近づいて手を引つ張ろうとする。

「何を言っている! 人の命がかかっているというのに——」

「——無理だよリユウ。たぶんあの人、本当にそうだったことに興味がないみたい。今は説得するよりも、外へ出て皆を助けに行かないきゃ」

しかし、この短期間で何となくクレスの人となりなりを掴んだアーデイがそれを制止した。

「アーデイ! ですが彼の力があれば、もつと多くの人……!」

「いい加減にしろ青二才! 貴様には分からんだろうが、あの類の間は他人の言うことなどまったく聞かん破綻者だ! 拘おうとするだけ時間の無駄、いいから行くぞ!」

和装を纏う【大和竜胆】ゴジョウノ・輝夜に叱咤され、彼女は半ば無理矢理外へと引きずり出されていった。

他の冒険者たちもクレスを勧誘することは不可能と理解したのか、



悲鳴の止まない外への対処へ次々と向かう。その中で、残ったアーデイがクレスに頭を下げる。

「あの、ありがとうございました！ 貴方のおかげで私は死なずに済んだから！」

「気にするな、次から気を付ければいい。今回のことで懲りただろう……連中に情けをかけたのなら、まず連中のことを一通り知れ。仲間を捕まえたら一度身に纏っているものを全部引っぺがしてから、口から尻の中まで一通りさらって妙なものを隠し持っていないか確認しろ。本人が自覚していなくても、周囲の手で妙なものを仕込まれている可能性もあるからな。」

敵を知り己を知る、そのためにやれることは全て行うよう徹底する。でなくては、代償として自らの、時には他者の命を支払うことになるぞ」

「は、はい！ 分かりました！ ……あの、じゃあ私ももう行きます。でも、出来れば最後に貴方の名前だけでも教えてもらえませんか？

私はアーデイ・ヴァルマ、ガネーシヤファミアリア所属のレベル3！

二つ名は【象神の詩】ウイヤーサ なんだけど……」

その言葉に、一瞬手を止めてクレスは考える。

ここで実名を晒したところで、あとで厄介ごとが舞い込むのは目に見えている。

とはいえまったく名乗らないのも彼女からしたら困るだろうし、何かしらの呼び名がある方が良さだろう。

とすればここは適当な仮の名を教えるに留めておこうと、彼は昔懐かしい己の初期の二つ名を頭の奥から呼び起こした。

「それは無理だが、呼びたければ俺のことはこう呼んでくれ。読みは忘れたが、こう書いたはずだ……【烈日卿】とな」

【烈日卿】……はい、それじゃあまたいつか！ 今度会えたら、お礼をさせてくださいね！」

「ばびゅーん、と素早く先に出て言った仲間たちの元へアーデイは飛んで行った。

それを見送ることもなく、いつの間にか消えていたヴァレッタのこ

とも忘れて、クレスは安全な場所に一時避難させていたカオス連れ  
てきて捜索を続けるのだった。

## クレス・■■■■■と古の英雄紀行

最終的に商会の廃館からそれなりの成果を得たクレスは、重くなった鞆を引つ提げてカオスと共にバベルへと向かっていた。

一日の終わりが近くなり、いよいよ彼が迷宮ダンジョンに戻る時がやってきたのだ。

「悪くない収穫だった。次にシーラック商会の連中と顔を合わせたら、礼を言わねばな。流石の品揃え、九割がたが駄目になっていようと残りは価値のあるものばかりだった」

「うう……まさか私のような神が泥棒に手を染めてしまうなんて。クレス君の手で汚されてしまったなあ……あはは」

「人間きの悪いことを言うな、有効活用と言え」

よよよ……と鳴き真似をする女神の口を嗜めながら、彼は常に彼女の前に立って、周囲の喧騒から降りかかる火の粉をその辺で拾った剣で払い道中の安全を確保する。

「——誰か、助けてよおおおっ！」

「——死ねい衆愚共、我らが神の栄光を示さんがため！」

「——やらせるな！ 民衆を守れエ！」

先の連鎖爆発を発端として、オラリオはいよいよ地獄の様相を呈していた。

響き渡る、親の亡骸に抱き縋る幼子の悲鳴。

積み重なる、栄華の象徴であった雅な建築の瓦礫。

打ち捨てられた、抵抗虚しく命を散らした冒険者たちの遺体。

崩落した歴史の残骸が地を満たし、燃ゆる破滅の炎が天を舐めんと盛り吠える。

それは冒険者たちの『作戦』の失敗をこそ雄弁に物語っていた。

「本当に騒がしいな……悪派閥イヴィルスの連中め。狂犬の方がまだ理性を感じさせるぞ」

次から次へとひっきりなしにくべられる怨嗟と言う名の薪を燃やして、憎悪の業火が猛る。

無論その炎はクレスたちの元へも這い寄り迫り来るが——彼は全てを払い除ける。

建造物の破片が降ってくれば、剣圧を放ってオラリオの外壁の向こうまで吹き飛ばして。

襲い来る闇派閥イヴァイルスがいれば、足元の煉瓦を蹴り飛ばし頭部エキサイティン!に命中・爆散させて。

立ち塞がらんとするありとあらゆる障害を屈服させて、彼らは家バベルへと進む。

——その歩みが、不意に止まった。

「生まれカオス」

「クレス君? どうした——」

先に足を止めた眷属に、思わず前につんのめりそうになりながらもすんでのところで立ち止まったカオス。

彼女はなんなんだよ一体、と文句を言いたそうにしながらクレスの見ている方向に目を向けて。

そこに、迸る『悪』の源流を見た。

崩れ、煤けた建物の隙間。

日が落ちて光の届かなくなった裏路地にありありと覗く、黒く蠢動する神意。

ゲラゲラと醜悪なる嘲笑を金属の軋むような耳障りな音と共に響かせて、突如としてその闇はぐわりと大口を開けるように彼らの下に襲来して——。

「あれはっ——待て、殺すんじゃない!」

カオスがそう叫び、金属同士の衝突した音が弾ける。

闇の中に潜む黒銀のナイフを、瞬時に抜き放たれたクレスの魔剣「ネガ・ファトゥム」が刃の向かう先を切り替えて打ち払った。

押し返されて裏路地に戻った形なき闇を注意深く見やりながら、彼は剣を握る腕を下げることなく闇の向こう側に問いかける。

「随分な挨拶だな、神ともあろうものが。カオスの言葉がなければそのまま送り還すところだったが……何用だ?」

「ネガ・ファトゥム」——運命に介入するその属性刃フエイタリテイは、振るい方に

よつては神にさえ届く。

その切っ先を何の躊躇いも遠慮もなく向けた彼に神殺しの本気を見たのか、蠢く闇の一部が次第に輪郭を為して口を開く。

「……嘘じゃないな。本当に俺神を手にかけるつもりだったのか、下界の人間風情が」

「人様の庭を踏み荒らす強盗風情が無礼を語るかよ。犯罪者に貴賤なし、人も神も俺の邪魔をするなら容赦はしない。斬り捨てる、もしくは俺の糧にするのみだ——此奴のようにな」

ふとその時、クレスの構える黒紫の刃にゆらりと朧げな光が映る。

そのちかちかと輝く微かな明滅は、何らかの意思を持っているようにも見えて——陰に潜む襲撃者の正体である神は一瞬漏れ出た気配に射竦められたかのように、纏う常闇のローブの端を揺らめかせる。

漂う、一瞬即発の雰囲気。

それを止めたのは、前に歩み出て一人一柱ふたりの間に立ったカオスだった。

「いや、だから待ちなさいと言っているだろうに。剣を下げるとは言わないけど、逸るんじゃないよ。彼と少し話をさせてくれ。……それで、私を殺して何をするつもりだったのかな？ 我が子エレボス」

「——決まっているだろう、我が母カオス。なんてことはない、ただの俺たちの気まぐれさ。この身の司る『原初の幽冥』の通り、下界に破壊を齎送そうと思って絶賛暗躍中だね。その過程で、悪いが貴女には死送んでもらいたかった。……この通り、失敗してしまっただがね」

彼女の呼びかけを受けて、いよいよ闇の中から一人の男神がその全貌を見せる。

一見して、冴えない青年のような立ち姿。灰を被ったように艶を失った黒髪は所々が跳ねており、その外面は没落貴族を出身とする情けない優男のようにも見える。

されど、その瞳に映る仄暗い情念は本物だった。

只神と見るにはあまりに悍ましい、有り余る邪な情念を存分に湛えた陰を映し出す眼。

常人の精神であればすぐさま呑み込まれてしまいそうなドス黒い

視線をクレスたちに向け、エレボスと呼ばれた神は、たった今彼が母と呼んだカオスに突き立てようとしていた黒銀のナイフを懐にしまい、ヘラヘラと嗤う。

そうして多少大げさな身振りを以て降参を示すかのように両手を上げながら、何時でも彼を討てるようカオスの守護に立つ眷属のことを称賛してみせた。

「それにしても驚いたよ、またとんでもない忠義者を見出したものだ。神をその手にかける禁忌さえ一切厭わない破綻者。彼以外の眷属を取るつもりがないとかつて公言していた貴女がまさか二人目の眷属を作り、しかもそれが更には前任者と同じイカれ具合を兼ね揃えているとはな。よくもまあ、ここまで同じ資質を持つ人間を見出せたものだ。もしかして子孫かい？」

興味深そうに様子を伺う彼に、カオスは「そう言えば」と手を打つ。

——数百年ぶりに姿を現したこのどら息子は今のカオス・ファミリアについて何も知らないのだった、と。

「ああ、まだお前には話したことがなかったっけね。……悪いけど、勘違いしてくれるなよ我が息子。この私に二言など無いさ。我が眷属は過去数千年に渡って、そして未来永劫、彼一人だよ——見せてあげるんだ、あの子になら構わない」

「そうか」

カオスの指示を受けて、クレスは目深に被っていたフードをおもむろに脱いだ。

鼻まで引き上げていたスカーフも下ろして、眼を隠していたサンングラスを外し、完全なる素顔を外界に晒す。

——現れたその相貌に、エレボスの目が限界まで見開かれる。

「は——嘘だろう……ッ！ まさか、君が生きていただなんて!？」

脈動する溶岩のように黒く、また燦る炉のように灰色に、そして沈まぬ恒星のように白く、光の加減によって灼けるように三様の色を映し出す赤髪。

永年の歴史を累積させてくすんだ灰色の左眼と、その中で希望の行く末を見抜く金色の右眼。

その、とうの昔に失われたはずだと自身が思い込んでいた顔に、彼は大きく身を仰け反らせて驚嘆を露にした。

「俺を知っている神は限られる。……貴様、古き神の一柱か」

「ああ、ああっ……そうだととも！ 知っているぞ——」

【†獄火の使徒†】、【烈日卿】、【電火崩刀】、【活火戟伐】、【噴炎装】、

【光焰皇】、【朱き紅の緋なる赤】……

そしてかの偉業、【影葬王冠】と【黄昏を超え征く者】！

新しき神時代の到来を告げた英雄！

かつ最も古かりし英雄の一人でもある、『冥洞一灯伝』の主人公！

鉄と勝利の精霊『ユーリ』を従えた【冒険家】、クレス・

テラティアリエー！

「ふん、懐かしい……その名はくれてやった。今の俺はクレス・カタストロフだ」

エレボスからの賛美を下らないと断じるかの如く、クレスは冷たく切って捨てた。

遠き歴史の塵と消えたはずの過去。

それを今更未練がましく高らかに語る男神を、その二色の眼がじろりと睨む。

そこに込められた純粋な殺意に、エレボスは心底分らないといった風に首を傾げる。

「なぜ機嫌を損ねる？ 英雄と呼ばれたことがそんなに嫌か？」

「嫌だよ。その呼び名にお前らは勝手に期待を抱いては、勝手に失望して石を投げる。俺にとっては邪魔以外の何物でもない。俺は俺のやりたいようにやるだけだ」

「そうか……分かったよ、先の軽率な称賛は詫びよう。しかし、このようなれば我が母をこの英雄都へと生贄に捧げる計画は本格的に取り止めだな。本人を目の前にこう言うのも良くないが、なにせ君はマジのマジで俺たちを殺しにくる真正の気狂いだ。だけどまだ俺は死ぬわけにはいかないものでね。確か、手を出さない分には襲ってこないんだろうっ？」

「さあな」

「辛辣だな。……え、大丈夫だよな？」

突き放すようなクレスの回答に、エレボスは思わず不遜な態度を崩してその主神たる母を見る。

「あー、流石に母私の前でその子を殺すほど非道ではないと思うけれど、完全な保証は出来ないかな。だってたつた今殺神未遂を犯したばかりだろう？　あまりうつかりしていると、つい彼の刃が滑っちゃう可能性も無きにしても非ずってやつだねエ」

「いやいやいや、勘弁してくれって。誓ってもいい、もう俺にはそちらの邪魔をするつもりは微塵もないんだってば。信じてくれよー？　ほら、信じる者は救われるっていうジャン」

「信じる者が馬鹿を見るのが世の常だ、嘘をつけ。やはり殺すか」

「だから待ちなさいってばクレス君。……とまあ、こんな調子だからね。死にたくなかったらこれ以上変な動きは見せないようにねエレボス」

「ええ……いや、うん。分かったよ」

今の自分が割と真面目に崖つぶちに立っていると理解した漸くエレボスには、カオスからの忠告に従うほかなかった。

思わず彼の考える『計画』を破綻させかねない怪札ジョーカーを引いてしまったことを嘆きながら、エレボスはガシガシと頭をかく。

「はー、まさか君がまだ生きていただなんて、この俺の眼をしても見通せなかったよ。何年にも渡って下準備をようやく終えたってのに、どうしてここで驚愕の事実が判明しちゃうかなー。クレス君さ、寿命とかどこへほっぽっちゃったのさ？」

「迷宮ダンジョンを攻略するまでは死んでも死にきれん、そう考えている内に今日まで来ただけのこと。理屈については知らん、カオスに聞け」

「とまあ、なんかこんな調子でいつの間にか不老を獲得しちゃってさー……試作恩恵フェアナの中で出来た混沌バグのかけらが無茶苦茶に組み合わせさって奇跡的に調和バランスが取れた結果というか、ぶっちゃけ本当はどうに崩壊してるはずなんだけど、どうしてかうまく機能してるんだよね。つまり私にもよくは分からないんだ、彼の魂こころに聞いた方が良いんじゃないかな」



「うははっ、なんだそれ。主神と眷属揃って仲良すぎだろ。だけど恐ろし素晴らしいなあ、まったく俺たちの愛する『下界の可能性』というやつは。——だからこそ、試したくなるってものだ」

一瞬、エレボスの瞳に先ほどまでとは色の異なる感情が過った。

それを受けて、察したかのようにカオスが問う。

「……もしかして、それだけのためにこんなことを？」

「おや、我が母上様には気づかれてしまったか。……そうさ。他の連中はともかく、俺はそのためにこの惨劇を引き起こした」

ぱつと両手を広げ、今のオラリオを抱擁するかの如く彼は深い笑みを浮かべる。

「英雄は惨禍の中からこそ生まれ出づる。だからこそ、この最も英雄の卵が集う都を地獄へと変え、新たな英雄候補が孵る揺り籠にする。それが、この邪神エレボスの描いた英雄設計図さ」

その壮大に見える宣言に、神々の中ではどちらかと言えば良識派だと自称するカオスは眉を顰めた。

下界を救うために、下界を犯す。

本末転倒、盛大なる矛盾に満ちた、自己中心的なふるまい。

今そこに生きる住人たちの意志を侮辱すると言ってよい、大罪中の大罪。

しかしエレボスはどこまでも本気で、下界の子どもたちを想うからこそその非道を為そうとしている——だからこそ、なおのことたちが悪い。

「本当に、そんな都合の良いことが叶うと思っているのかい」

「思う思わないじゃない、やらなければならぬのさ。迷宮は今か今かダンジョンの時を待っている。我々も下界の人間もちんたらしていられないんだ。革命が必要なんだよ。俺たちの用意する地獄くらい軽く乗り越えてくれて、世界を救うに至る立派な英雄を生み出すためにはない——いくら貴女に言われようと、俺はこの計画を止めるつもりはないぜ。俺は俺なりのやり方で、英雄を呼び起こす」

カオスの向ける非難の視線を意に介さず、ここでエレボスはクレスに目をやった。

「そこで問いたい、参考までにな。なあ、クレス・カタストロフ。最も俺たちの理想に近くて遠い君にとって、『正義』とはなんだ？」

「己が意志を貫き通すこと」

一切の逡巡なく返す彼に、神は重ねて問う。

「では、『悪』とはそれが出来ない弱者のことを指すのか？」

「違う。『悪』とは、『正義』に向かおうとする誰かの勇気を己がために虐げることだ。人の夢を噛い、努力を踏み躪り、足を引っ張るような、そんな行為を平気で行う真正の屑をこそ俺は救いようのない『悪』と呼ぶ。そして、そういつた連中が俺はいつとう気にくわない」

彼はエレボスへ向ける視線の圧を強め、語気を強める。

隠すつもりのない軽蔑と敵意を腹の中に滾らせて、クレスは断じる。

「つまり貴神きびは紛れもない『悪』だ。世のため未来のためと謳い、現在いまを切り捨てる極悪神。何の瑕疵もない誰かの意志を、平和を、大義のためと進んで踏み躪る屑。果てには彼らの犠牲は無駄ではなかったなどと言い放ち、勝手に罪を背負ったつもりでいようとする傲慢な輩。俺の最も嫌いな神種しんしゆだ」

「酷い言われようだな……だが、否定はしない」

三日月のような凶笑を浮かべるエレボスに、反省の色はまるで映っていないかった。

しかし、そこにはもはや相手に自分たちの前に立ち塞がるつもりも見えない。

ならば、クレスは剣を引いた。

「——俺の邪魔をしないなら、知らん。好きにしろ。ただ一言だけ……疾く死ね」

「ありがとう。ここは君の寛大な心に見逃されて、俺はみつともなく尻尾を巻いて逃げ帰るとしよう。実はそろそろ次の所に行かなくてはならないからな、あまりちんたらと昔話に花を咲かせてもいられない身なんだ。——では、さらば我が母とその眷属よ」

エレボスは影に呑まれるような形で姿を消し、波が引くようにその影も奥に消えていく。

遠ざかる彼の気配——その先で、極大の光の柱が立つ。

神々の送還が連続して行われ、オフリオに響く悲劇は更なる加速の一途を辿る。

「神の送還……しかも、あんなに。エレボス、それほどまでに君は……」

長生きしようとしたに見られないその光景に、しばしその場に足を止めて二人は様子を見守った。

その中で、戦火を瞳にぼんやりと映し出すクレスは呟いた。

「英雄作成か、馬鹿馬鹿しい。そんなものは理想ですらない、妄想の類に過ぎん」

誰かが言った——人の手によるものを、人に破れないわけがないと。

ならば何者かの仕組んだ神為的な悲劇にも、必ず打ち崩される切っ掛けとなる瑕疵はある。

そのような易しき悪意程度によってなぞ、彼らの望む英雄が見出されるものかと彼は鼻で笑った。

「英雄なぞ誰かが意図して作るものではない。ただ敵わない現実に立ち向かうことを諦めなかった愚か者がいて、それを後の世の誰かが勝手にそう呼ぶようになるだけのこと。……俺程度でも分かるその簡単な理屈を、俺より長生きしていて何故分らないのか。哀れだな」  
目と鼻の先で好き勝手にふるまう邪神たちとその眷属のことについて、それ以上思考を割く余地はないと彼はカオスの手を引いて再びバベルに向けて歩きだす。

「——ああ、言った通り俺の方から手を出すつもりはないさ。しかし、あの娘についてはどうかかな？」

あえて先ほどは話題に出さなかったサラのことを思い浮かべて、クレスは最後に小さく笑う。

「お前の立ち振る舞い、盛大にやつ地雷を踏んでるぞ。精々ご自慢の崇高（笑）な考えをブチ壊されて、悔し涙に憤死するがいい」

『豊穰の女主人』前には、惨劇が広がっていた。

この暗黒の時代に安穩と飯を食らう平和ボケした客を、血祭りにあげようとした悪派閥たち——彼らはその愚かさの代償として、自らの血肉でこの場所にお望み通りの屍山血河を刻むことになった。

「——聖なる食卓を汚さんとする痴れ者どもめ。せめてその命を以て、己が罪を贖うがよいのじゃ」

砕けた石畳の上に突き立つ、数多の墓標。

その正体は全て、内側から飛び出した自らの血に身体を十字に縫い留められた悪派閥だった。

肉と皮膚を喰い破って姿を現した鮮血が、主人の肉体を串刺して磔刑に処する。

その光景を返り血一つ浴びずに成した酒場のウェイトレス——  
【神々の給仕】サラ・ブラッドローラーは、クレスによって授けられた三叉の魔槍を一振るいして周囲の熱波を裂き、塔まで続く避難経路を作る。

「師匠よ、これで客を安全地帯まで連れて行けよう？ さあさ、早く行くがよい」

その手を汚させるまでもないと、後ろで店の客を守らせていたミアにサラは首を振って合図する。

店の外に広がる地獄絵図——数多の邪神の眷属の死体によって彩られた百の十字標に、ミアはようやくクレスの残っていた言葉の意味を知るのだった。

「あの女神の連れの男が言った通り……ここまでとはね」

ミアは背中に冷や汗を流しながら、目前の惨劇を改めて見渡す。

酒場を取り囲んでごちゃごちゃと前口上を喚いていた悪派閥のリーダー格は、今やその口から血の杭を生やして息絶えている。ミアの記憶が正しければ、ギルドの手配書に載っていたその顔は元オシリス・ファミリアのレベル4の猟奇殺人鬼だった。

上級冒険者すら抵抗を許されず命を捧げさせられる、サラの理不尽さ。

それを開店前の店前の掃き掃除と何ら変わらぬように為した彼女

の態度は、明らかにミアの常識から外れるものだった。

しかし今という非常事態において、その常識外れは心強くもある。「分かったよ。アタシはこいつらを連れていく。だが、アンタの方はこれからどうするつもりだい？」

「妾はこれより、この食事の尊さを知らぬ野蠻で下劣な人間どもに等しく誅伐をくれて回る。止めてくれるでないぞ？ 食を軽んずる者に生きる価値無し——奴らはこれ以上にならないほどまでに、妾を怒らせたのじゃからな」

「崇高なるもの、汝の名は『食』なれば」（サラ視点）

【暴喰】<sup>ザルド</sup>の剛剣が、【猛者】<sup>オツタル</sup>を。

【静寂】<sup>アルフイア</sup>の音魔法が、【九魔姫】<sup>リヴェリア</sup>と【重傑】<sup>ガレス</sup>を。

ゼウスとヘラの残した昔日の亡影が、邪神の意に倣ってオラリオを打ち砕く。

その他悪派閥<sup>イヴァイルス</sup>の幹部勢もまた己が牙を振るい、相応の敵と見定めた冒険者たちに容赦なく屈辱と泥の味を教え込む。

戦いの趨勢は今や完全に、『悪』を語る者たちの手に落ちたと言えよう——そんな中で。

「——ぬわあああつ!？」

「——うぎやあああつ!!!」

「——ひでぶつつつ!!!」

合唱<sup>コーラス</sup>。全域が戦場と化したオラリオにおいて踏み鳴らされる、醜い悲鳴の

逃げ惑う民衆及び、それを守る冒険者たちの喉笛からのみ奏でられていたはずのその中に——徐々に、悪派閥側<sup>イヴァイルス</sup>の断末魔が混じり始めていた。

それまでは正しく狩人であったはずの彼らの中に、いつの間にか狩られる側に回る者が出始める。

その小さな戦場の変化において台風の目となっていた存在こそは、クレスが迷宮<sup>ダンジョン</sup>から連れてきた異常<sup>イレギュラー</sup>。

戦える給仕こと、サラであった。

「御機嫌よう皆の衆——妾、参上なのじゃ」

「ハッ、酒場の給仕まで駆り出すとはな！　いよいよ貴様らも万策尽きたと見える！　今だ同志たちよ、畳みかけ——みぎゆつ」

『豊穰の女主人』の制服のままにどこからともなく現れた彼女に、これまで戦場を支配していた邪神の使徒たちはせせら笑う。

本来ならば戦えぬ存在であるひ弱な給仕さえ駆り出すほどの、オラリオ側の人手不足。これこそまさに我らが優位を示す、蹂躪における

絶好の機会だと彼らは嘲る。

そしてその口は最後まで嘲笑を完結させることなく、喉奥からせり出た血の杭によって貫かれた。

「騒々しいのじゃ。食を分かち合えぬ口などいるまい？　ならば塞がれたとて文句は言うまいな」

「はっ？　えっ……あつ、ど、同志っ!？」

戦場に有り余る悪派閥イヴァイルスの下っ端たちとはいえ、その最高位はレベル3にも達している。これまでに冒険者たちと鎬を削ってきた幹部勢に比べれば雑兵かもしれないが、その積み上げてきた偉業に嘘偽りはなく、彼らは平穩を害する『悪』としてこれまでに多くの弱者民衆を平らげてきた。

彼らは語る——「強き者が弱き者を蹂躪して、何が悪いのだ」と。ならばそれ以上の強者が現れた先に——彼らが平らげられる側になろうと、文句を言える筋合いはない。

「何を慌てておるか。そら、貴様たちも仲間入りじゃ。悪質客クレイマーは即退店、また来世でのご来店を心よりお待ちしております♡」

あつけなく自らの末路を記す墓標となった同胞の骸に、その場に入った悪派閥イヴァイルスたちの足が止まる。

その明確な隙をサラは見逃さず、指揮棒のように魔槍を一振り。

絶対なる支配者として彼らの血液に下知を与え、瞬く間に体内より咲く数十の赤十字架を量産した。

「あ、えっ……はっ？」

状況がすぐに呑み込めなかったのは、それまで劣勢に立たされていたその場の冒険者たちも同様だった。

突如として目の前に現れた給仕姿の美女によって、本来自分たちが果たすべき役割を全てあっけなく終わらされてしまったという事実。

いかに絶望に打ち克とうと奮起し諦めないでいた彼らであっても、理解の遠く及ばない光景を前にしては、「なんだこれは」と思考を彼方に飛ばしかけてしまうのも無理がなかった。

「無事かお主ら。臍はらわたに穴が開いたりだとか、明日の食事が取れんよ  
うな命の危ない者はおらんじやろうな？」

サラのかけた心配の声に、咄嗟にこの場を仕切っていた一人の男性冒険者が気を取り直す。

「あ、ああ……大丈夫だ。今生きている連中に、そこまで大きな怪我を負ってる奴はいないはずだ」

「ならばよし。疾くバベルまで下がれ、今は大半の者がそうしておるようじゃ」

「確か【勇者】<sup>ブレイバー</sup>からの指示だったな、分かっている——おいお前ら、さつさとここからズラかるぞ！ アンタも……確か『豊穰の女主人』のサラちゃんだろ？ 俺たちと一緒に……」

「すまんがそれは出来ん約束じゃ。妾は他の連中も急ぎ仕留めねばならんのでな」

その言葉に彼女と話していた冒険者は思わず「無茶な！」と叫びかけたが、すぐに思いとどまった。

彼らが手を焼いていた悪派閥<sup>イヴィルス</sup>たちを刹那の内に全滅させた、未知の戦闘力。

それは自分たちの護衛として遊ばせるよりも、遊撃として好きに振るわせる方が遥かに大きな価値となる。

このいつ死ぬか分からない時代において今日の今日まで無事生き抜いてきた彼の計算は、弱い女は男が守るものと言う煩惱<sup>ブライト</sup>をすぐに脳の奥に弾き飛ばして頭を下げた。

「いや、すまない。そうだな、他の連中をよろしく頼む。それと、俺たちを助けてくれて感謝する」

「うむ。この戦いを生き抜いた暁にはどうぞ我が『豊穰の女主人』を御鼻<sup>ミヅ</sup>に、じゃ。感謝はその時の金払いで示してくれば、師匠<sup>ミヅ</sup>も喜ぶじやろうて。では、またの！」

サラは別れを告げると同時に、とぷんつ、と己の足元の陰にその身を沈ませる。

種族特性の影渡り——夜の帳が落ちつつある今、彼女の色に染まりゆく世界を、その陶磁器のように白く艶めかしい脚が次なる戦場へと向けて疾駆する。



「ぐぴやあつ!」

「ほぎよおおおつ!」

「ぎゅごっ!」

「すまん、助かった!」

「今後も主神共々『豊穡の女主人』をよろしくなのじゃ!」

例のアレ黒い虫の如く有象無象と蔓延る闇派閥<sup>イヴァイルス</sup>たちを、白銀の影がひたすらに狩る。

今にも冒険者たちを葬り去ろうとしていた彼らの前に、影から颯爽と姿を現すサラ。その髪が弧を描き、月の如く閃いたかと思えば――全てが終わる。

嘲笑と剣戟が消え、失われゆくはずだった命が呼吸を繋ぎ、深紅の十字が聳え立つ。

それらを為す今の彼女はまさに、神出鬼没。

影を媒介として転移に近い高速移動を行い、縦横無尽に戦場を駆けては闇派閥<sup>イヴァイルス</sup>を墓標に変え、無事助かった冒険者たちに『豊穡の女主人』の宣伝をうって影に溶ける。

懐の六文銭を確かめる間もなく彼岸に渡された悪派閥<sup>イヴァイルス</sup>は勿論のこと。

救われた側の冒険者も、何が起こったのかすぐに呑み込める者はいなかった。

——見目麗しい女給仕に目を奪われた次の瞬間には、血の十字架が立っている。

それがサラの現れた戦場の全てで、それだけで報告を完結された【勇者<sup>フィン</sup>】は「なんだかよく分からないが僕たちの背を押すものならヨシ!」と次の指示を下し、【白妖<sup>ヘディン</sup>の魔杖】は「報連相の一つもマトモに出来んのか貴様らは揃いも揃ってオウム以下かそうだったなクソが!」と癩癩交じりの雷撃を飛ばした。

そんな冒険者側の混乱もつゆ知らず、クレスに似て好き勝手にサラ<sup>イヴァイルス</sup>が闇派閥<sup>アンダーテイキング</sup>相手に墓標作りに励んでいると、やがてオラリオの中に神の送還を示す光の御柱が立ち始める。

「——くそっ、主神の馬鹿野郎が送還されて力が……っ！」

「ふははは？、神を失った冒険者など恐れるに足ら、うぎやあああ  
あっつっつ?!?!」

「注意を怠った阿呆なぞ格好の的よ、愚か者め」

その過程で恩恵を一時的に封印された冒険者たちが慌てて隙を生  
んでしまい、闇派閥イヴァイルスたちは喜び勇んで虐殺を開始しようとするが——  
それもまた隙に他ならぬと、サラが穿つ。

トドメを確信した時にこそ敵は弱くなる……クレスに負けず劣ら  
ずの経験を積んでいる彼女はその学びを良く活かして、釣られた連中  
を悉く始末する。

「そら、神ファレルナの恩恵を封印された者はそうではない者の補助に回るの  
じゃ！ 力を失えど培った経験を生かさなか！ 格上を相手に戦う  
ことなぞお主冒険者らにとっては日常茶飯事じやろうが！」

ついでとばかりに、叶わぬ現実に屈して膝を折ろうとする冒険者が  
いれば激励を送って次の戦場に発つ。

全ては明日の食事で彼らの胃と心を満たさんがため——サラは己  
の『正義』を以て戦場に舞う。

『——聞け、オラリオ』

やがて響く邪神エレボスの声も、彼女が足を止める理由にはならない。

むしろ、その宣言に陶醉するあまり判断力の弱まった闇派閥イヴァイルスを愚か  
な得物と位置付けて、浮足立った彼らを容易く仕留めていく。

翻るはウエイトレスの証たる深緑のスカート、振るうは武骨な  
擬神晶鉄製の槍ハイフラグメント。

月下の女中が暗雲を裂くように戦場を荒らし、『悪』の根を枯らして  
いく。

『……滅べオラリオ——我らこそが『絶対悪』！』

都合九つ、長きオラリオの歴史を見ても類のない多くの神の送還を  
背景に邪神は嘲笑を湛える。

されどそれを冷静に俯瞰する視点を持つ者にとって、その在り様は  
これ以上ないまでの隙だった。

「終わったか。ならば貴神きさまは用済みじゃ、散るが良い」

サラの感想はただ一つ、「狩り時ポーナスタイムが終わったならば後は邪魔になるだけ」であった。

では、ここで演説を終えた邪神エレボスの現状を書き起こしてみよう。

——自分こそが諸悪の根源である、と態々姿を晒して自己紹介してくれている神バカが、一柱。

「——邪悪も暴力も静寂も、なべて等しく煮炊きの薪となれ」  
手元に握られる魔槍、【86式連結式葬槍レギンレイザ】。

それが担い手の意志の下にありつたエネルギーの血液を纏い、螺旋の暴威を描いて嵐と成る。

赤き鮮血の極大槍を構えたサラが力任せに放つ、その一撃の名は——

「崇高なるもの、汝の名は『食』なれば。——プレリユード・ファイナーレ！」

『序曲にして終曲なるもの』、それはサラの持つ必殺技にして初撃決殺を語る大技。

火は小さな内に消せ——戦いは本格化する前に終わらせてしまえ。至極単純な大技で以て、争いの種火そのものを燎原へと派生する前に消し飛ばしてしまおうという、ある種の面倒臭がり屋の極致。

それがありつたステイタスの理不尽を乗せて、バベルの屋上諸共諸悪エレボスの根源を打ち抜こうとするが——。

「ちい、しくじったか。ステイタス能力が劣るとはいえ、使い方は連中のほうが一枚上手だったようじゃの」

とある理由により、彼女の戦場における必殺技は魔法もスキルも乗らない場当たり的な一撃に過ぎない。

その自覚があったからこそ、サラは邪神の側に侍る二人の冒険者が放った炎と音の双撃によって攻撃が天高く逸らされても思考を止めたりはしなかった。

代わりにすぐさま手元に引き戻した槍に次弾を装填して、こうなれば仕留められるまでぶっ放してやろうと意気込むのだが……残念なこと、彼らは衝突の際に生じた爆炎に紛れてとうに姿を消してい

た。

「一般市民に紛れられれば巻き添えにしかねんしのう。まあ良いわ、今はあつちは諦めて、兎角雑魚狩りに集中するのじゃ。主様曰く、侵略的外来生物は卵一つ残さず駆除せねばならんらしいからのー」

ここで主犯格を討てなかったのは残念だが、釘を刺すことくらいは出来ただろうとサラは思う。

——【巨悪】だとかなんだとか、民衆足元の見えぬイデオロギ妄想主義の走狗ごときが調子に乗るなよと。

まあ一泡くらいなら吹かせられたじやろうと、過ぎ去ったことは忘れて。

今は撤退の様相を見出しつつあるイヴァイルス悪派閥の連中を見える内に一匹でも多く掃除してしまおうと、サラは絶望の底に沈んだオラリオの街並みに踊るのだった——。

「餓える者は満ちるまで、食べぬ者は無理をしてでも——」（サラ視点）

住む家を追われ、着の身着のまままで放り出されたオラリオの民衆は迫る窮状に喘いでいた。

身を守る壁はなく、ろくに休むことの出来ない極限状況。迷宮でダンジョン野営慣れした冒険者とは違い、一般人の彼らはいつ殺されるか分からない負の興奮によつて精神と体力を大いに削られていた。

このままではそう遠くない内に暴動が起きるのは必死だと、誰もがそう予想していた。

しかし事実として、避難してきた彼らの間にはある種の統制が保たれていた。

それはなぜか。

——三大欲求の一つである『食事』だけは、『豊穰の女主人』を筆頭とする料理人たちによつて辛うじて保証されていたからである。

「はい、温かくてお腹に優しいミルクがゆはこちらニャー！」

「がつつり腹に溜めたい連中はこっちへ来な！ 魚団子と豆のごった煮だよ！」

「腹が減つては戦は出来ぬ！ 力を蓄えたくば我が芋と肉のごろつと揚げに集うがよいのじゃ！」

悲嘆に憂う人々の中に、活発に響く配給の声。

身内を失い、財産を失い、暗雲漂う未来に枯れる涙を流す中。

それでも彼らの鼻腔に、宙を漂う旨そうな匂いは訪れる。

その誘いに、彼らは亡霊のようにのろのろと足を伸ばして、与えられた簡素な器の中に盛り付けられた暖かな食事を前に手を伸ばし——食らいつく。

食って、食って、食って……器が空になれば、お代わりを求めて次の列に並ぶ。

そうして手先と心が冷えようとする中で、体の芯を温めてくれる旨

い食事だけが、なんとか彼らの理性の綱を繋ぎ留めていたのだった。  
「うめえ、うめえよお……！」

「この皿、なんでこんなしょっぱいのに、手が止まらないの……？」  
「くそ、ふざけるなよ俺の腹つ……なんでこんな悲しいのに、鳴りやがるんだっ……！」

彼らの本能が向かう先、避難用の仮施設に設けられた臨時の炊事場にて。

師匠ミアと並んでひっきりなしに手先を動かす、この場の立役者の一人であるサラは全ての避難民に届くよう声を張り上げる。

「餓える者は満ちるまで！ 食べぬ者は無理をしてでも、食うのじや！ オラリオの興廃はお主らの一皿にありと心得よ——悲嘆にくれる前に、まずはお残しをせぬことじや！」

「みな、儂等があれだけの醜態を晒したというのに……今日は思った以上に落ち着いておるな」

ギルドの作戦指揮室にて、机に広げられたオラリオの地図と睨みあうフィンにガレスは語る。

彼の想像では、ゼウスとヘラの遺産に手酷くやられた拳句にアレクトやルドラなど邪神の使徒にも良いようにされた昨晚の冒険者側の大失態が、民衆の間に抑えきれない暴動を齎すと考えられていた。

しかし、それがどうか。

一夜明けてみれば、彼らは暗く落ち込んだ雰囲気を残しながらも、予想ほどには荒れないでいる。

良い意味で裏切られたものだと、腕を組んで意外そうに語る彼にフィンはその理由を語る。

「彼女たちのおかげだね」

「ミアの所のか」

「ああ。【小巨人デミ・ユミル】を始めとするオラリオの料理人たち。彼らが交代しながら民衆の腹を満たし続けているおかげで、彼らは最低限の理性を保っていられる。本当に最低限度だが、文化的な生活がギリギリのと

ここで維持されているからこそ人々はまだ獣にならないでいられる……」

そこで漸く彼は顔を上げ、疲れた目をほぐすようにこめかみを軽く指で揉み込みながら、今現在もギルドの入り口付近で行われている配給のことに意識を向ける。

ずっと宿敵の<sup>ヴァレット</sup>ことばかりを考えていたおかげで、その腕が生み出す血溜まりばかりが脳裏に浮かんで酷く不快だった。その暗い気分を振り払うように、フィンは人々に活力を与えようと腕を振るう彼女のすることを考える。

その中でいち早く顔が思い浮かんだのは、サラだった。

「特に、サラ・ブラッドルーラー。【<sup>ゴッズブライド</sup>神々の給仕】、彼女があの中でも一番大きな主役だろう」

「あの娘っ子か。……そうじゃな。」とにかく飯を！」の一点張りです。儂等が「ないものねだりをされても困る」と言えば、自分から腹黒い商人連中の所へ食料とついでに配給所の建材まで諸々引きずり出させに行きおつたからの」

現状、守勢側に回らされたフィンたちの手元にはあらゆる物資が不足していた。

武装・治療薬はもちろんのこと、食糧もまた例外ではない。

その中で薄く広く……満足な味付けも量もない清貧な食事で我慢してもらおうと考えていたギルド及び冒険者たちに対して、真っ向から異を唱えたのがサラだった。

とはいえ、彼らとて余裕があればもちろんそうしている。

余裕がないからこそそうせざるを得ない、と諦めるよう諭そうとしたフィンたちを前に「ならば」と彼女は自らの足で食料を確保すべく単身オラリオの商会連合に乗り込み、こう言い放った。

『買い手たる民衆の窮状に手を差し伸べずしてどの口が商いを語るか！』

不当に値段を吊り上げ、よもやいつまでも自分たちだけは吊られぬと思っておるのか!?

ここぞと言う時に物を売らぬ商人など路傍の石にも劣るわ！

秩序が回復した暁には、今の貴様らのもとで物を買おうとする者は誰もおらぬじやろうよ!』

——と。

その時の光景を思い出し、ガレスは呵々大笑する。

「あれを聞いて瞬く間に顔を青くした連中の顔、なんと胸がせいせいしたことか! どいつもこいつもあの娘の言い分に何も言い返せないどころか、蜘蛛の子を散らしたように自分の所に帰って蔵を開放し始めおった。この緊急事態によくもまあまだあれだけの品物を隠し持つておつたものよと、一周回つて感心させられるくらいにな」

「本来なら彼らも出来るだけ高く売りつけるつもりで、もつと危ない所になるまで待とうと目論んでいたんだろうさ。今この街は周りを悪派閥イヴァイルスに囲まれてるから、彼ら以外から仕入れるのが難しいからね。結託して値段を吊り上げる……経営手法としては良くある話さ。ただ、彼らは僕らに目を向けるばかりで肝心の民衆の力と言うものを忘れていたんだ。僕も彼女に言われるまで、【勇者】らしくもなくそうだったけどね」

フィンたち冒険者が力尽くで商品を徴収すれば、英雄の都という名前は瞬く間に地に墮ちるだろう。

だからこそ、今後の付き合いも考えれば彼らから商会に手を出すことは難しく、商人たちはそんな賢い冒険者やギルドの悔し様に歯を食い縛る姿をよそに平然と値段を吊り上げようとしていた。

しかし商会の面々は、彼らのような太客に目を向けるあまり、普通の客のことを忘れていた。

普段はどうということもない一般客——神ファアルナの恩恵のない市民。

強者冒険者ばかりが目立ち、弱者一般市民が目立たないオラリオと言う特殊環境の中で、彼らは力あるファミリアとの取引で稼ぐ大金に目が眩んでしまひ、普通の客の持つ力を見逃してしまっていた。

それは——暴動や略奪に代表される、『打ちこわし』。

富める少数が私欲のままに独占を行った果てに発生する、貧しい大多数によって為される社会的正義。

油を搾り取るような心積もりで他人民衆の首を絞めつけていれば、先に



商人  
自分たちの首が飛ばされる……そんな事例は古今東西にありふれているのだという歴史の教訓を、サラの言葉を受けて彼らはようやく思い出したのだった。

「奇しくもこの暗黒時代、単純な個々の暴力が目立つばかりで、ボクも彼らもそんな外の世界の常識を忘れてしまっていた。だからこそ成り立ってしまった商人たちの悪徳な手法を、彼女は少しの言葉で壊してくれた。これは間違いなく、僕たちには出来なかった大きな成果だ……しかもそれだけじゃない、ガレス」

「現実に起きた勸善懲悪劇に【勇者】<sup>フレイバー</sup>として感心する中で、フィンはその目を冷徹に戦いを俯瞰する指揮官としての物に戻す。

同じく目を細くしたガレスが、つい一時間前に彼の部下がようやく取り纏め終えた報告の内容を復唱する。

「総数1465名。あの娘つ子がたった一晩で仕留めたと思われる悪派閥<sup>イヴイルス</sup>の連中のことじゃな。儂等の戦果を鼻で笑うような撃破率をああの細腕で叩き出しておる。お前や【万能者】<sup>ベルセウス</sup>のような大局観を持ち合わせておきながら、力はそれ以上とはな」

「彼女のような大物が、どうしてこれまで名も知られずにいたのか……神々による冗談のような二つ名はさておき、不思議でならないよ。まあ、それはこの際問わないにしても、彼女のことはもう少し詳しく知っておきたいね。悪派閥<sup>イヴイルス</sup>にとってのザルドやアルフィアのように、彼女が僕たち側の切り札となるかもしれない」

「改めて言葉にしてみると、悔しいが……そうじゃな。幸いにも今は襲撃も落ち着いておる。向こうの失った数もそのうち補充はされるじやろうが、その前に把握出来るものは出来る内にしておかんとな」  
「フィンは座り仕事ばかりで鈍っていた身体を鳴らして、ガレスは昨晩の疲労が抜けきっていない身体に鞭うって、それぞれ立ち上がる。

「彗星のごとく現れた未知の特記戦力を自らの眼で知るべく、下の配給所へ向かおうと。」

彼らの立场上、人をやって呼びつけることも出来るだろうが——それは悪手だ。

なにせ今や民衆にとってのサラの扱いは、戦火を払い、彼らの心身

まで満たしてくれる聖人に等しい。既に一部の者たちからは、彼女を崇拜する声まで上がってきている始末。

一方、彼ら冒険者は立て続けに不始末——決してそんなことはないが、民衆の眼からしてみればそう見えてしまおう——を積み重ねている。

そんな状況でフィンたちがサラを一方的に召喚しようとするれば、せっかく落ち着いているところに「何様のつもりか!」と不和が起きかねない。

そんな打算が働いたことと、不甲斐ない自分たちの無力を補つてくれたことへの感謝から、直接足を運ぶのは当然だと彼ら二人は言葉を交わさずとも同じ思いに行き当たった。

そうしてフィンとガレスは、少し前にラウルが「サラに託された」と言つて持ってきた大きめの器が空になったものを手に持つて、息苦しい部屋から外へ出るのだった。

「いや、すまないね、配給の手を止めてしまつて」

「構わぬよ。というか、別にお主らのせいでもないのじゃ。他の者どもが「この際ついでに休め」とお玉をひったくり包丁を奪い取つてゆくものでな。別に妾はまだまだ元気なのじゃが……あのままでは妾が他の者の邪魔になるばかりであつたし」

「昨晚から一睡もせず働き詰めでいたサラだったが、フィンたちの来訪を切つ掛けとしていよいよ厨房から追い出されてしまった。

それも他ではない、同僚たちの手によつてである。

単に料理を作るだけでなく、避難所全体の指揮にも加わつていたサラ。

彼女は避難民たちにも悲嘆を抱かせる暇なぞ与えんと言わんばかりに仕事を与え、配給の列に並ぶ余力のない人々の下に器と匙を届けさせ、自分で食べる力のない怪我人の食事補助も行かせたりなど、それはもう八面六臂の活躍を見せていた。

その挙句に過労を心配されて、フィンからの事情聴取の申し出をダ

シにされてここぞとばかりに休憩へ送り出されたのであった。

そんな訳で「こうなれば仕方がないのじゃ」と、彼女はフィンたちと一緒にギルド内にある休憩室にやってきていた。

無論、嚴重に人払いを行った上で入り口には監視を立たせて、盗聴の耳を完全に封じている。

その中で、真つ先にフィン是对悪派閥イヴァイルス作戦の最高責任者としてサラに頭を下げた。

「まずは感謝を。君のおかげで大勢の命が助かり、今の僕たちにも予想していなかった余裕が生まれている。避難民の多さに人手は奪われてしまっているけれど、彼らにとっても無力感を感じる暇なく働けているのは良いことだ。君がいなかった時のことを想定すれば、嬉しすぎる誤算だよ」

「気にするでないと言いたいところじゃが、その感謝は素直に受け取ろうかの。でなければ話がこじれて先に進まなそうじゃし。……で、貴様らが気になっておるのはさしずめ、妾の能力値ステイタスと今後の身の振り方じゃな?」

分かったような口を利くサラに、フィンは苦笑しながら頭を上げる。

無駄を省いて話を進められるのは彼にとってもありがたいことだった。

「理解してもらえて助かるよ。それで、今更だけど教えてもらえるのかな。君の口から」

「うむ。とりあえず後者については、妾はお主らの味方と考えて差し支えなからう。妾の目的は餓える民の腹をいっぱい満たすこと。これはそちらの目的とそう大きく舵輪は異ならぬはずじゃ。そのためならば、大抵のことは協力しようぞ」

休憩室の奥に設えてあったベッドの際に腰かけて膝を組んだサラの回答に、フィンは目に見える形で喜びを顔に浮かばせた。

「ならば、君に【暴喰】と【静寂】の相手を求めても良いのかい?」

提案を受けて、彼女は顎に手を当てて考える素振りを見せる。

だが、少しして申し訳なさそうに首を振った。

「あいやすまぬ」

「……………！ 駄目、なのかい？」

「違う違う、そうではないのじゃ。……………というのもな、まず正直、それが誰かのことを指し示しておるのか妾は知らんのじゃ。なにぶん一年に一度しかオラリオにおらん身じゃからのう、知っておることと知らんことに偏りがある」

「フィン、落ち着かんか。お前らしくもない。焦り過ぎじゃ」

もう少し段階を踏めと嗜めるガレスに、フィンはバツの悪そうな顔を浮かべる。

「…………… ああ、つい先走ってしまったね。すまない、まずは説明を設けるべきだったか」

彼の謝罪に、サラは手を振って応えた。

「仕方あるまいよ。その顔、隈は浮かんでおらんでもろくに寝ておらのじゃろ。不眠は判断を鈍らせる、この際多少の無礼は見逃そう。しかしついでじゃ、この後妾だけでなく貴様も寝るが良い。ベッドも半分なら貸してやらんでもないぞ？ なんてな」

「考えておくよ」

冗談を返す余裕もないフィンの台詞。

それはどう考えても忠告を受け取らない奴のものだと、サラはガレスに目を向けた。

「そこなドワーフ、ガレスと言ったか。貴様が責任を以てこやつを寝かせよ。この手の輩は口先だけじゃからの。ベッドに無理矢理縛り付けるでもして、決して逃がすでないぞ」

「あい分かった。任せておけ」

「ガレス！」

慌てるフィンだが、そうは問屋が卸さなかった。

彼から目を逸らさず、ガレスもまた昔からの仲間を氣遣うように、強めに言い切った。

「休める内に休めいフィン。リヴェリアも同じことを言うじやろう、【軍長勲章】に頼り過ぎるなとな。それとも、それだけ儂等のことは信用ならんか？」

「……その言い方は卑怯だろう」

頑として譲らない土の民特有の態度に、やがて観念したようにフィンは両手を上げた。

彼自身、ずっと働いているせいで自分の頭の回転速度が落ちてきていることは自覚していた。

それでも、止むことのない襲撃下で指揮官として毅然とあるべきだ

——周囲から受けるその期待を言い訳にして、心の奥底に潜む【殺帝】への殺意を溶岩のように燃やし続けてきた。

そのせいか、頭に血がカツと上りやすくなっているくらいがあることは否めなかった。

「分かったよ、後で休むさ。ここで一度気を落ち着けた方が良さそうだ……僕のためにも、僕に従う君たちのためにも。きちんと熟睡できるように心掛ける、それで良いかい？」

「よかろう。【勇者】たる者、一度吐いた言葉を覆すなよ」

「分かっているさ」

「ン、話は纏まったようじゃな。で、さつき言った連中について説明を頼む」

二人の慣れ親しんだやり取りを微笑んで見守っていたサラの言葉を受けて、フィンが気を取り直すように咳ばらいを一つ挟んで話し出す。

【暴喰】のザルドと【静寂】のアルフィア。かつてオラリオで隆盛を極めたゼウス・ファミリアとヘラ・ファミリアの冒険者にして、今は悪派閥の首魁と見られる神エレボスの懐刀さ。そして、レベル7の実力者。はつきり言つて、今の僕たちの手には余る相手だ」

「ふむふむ」

「君も昨日の演説は聞いていただろう？ あの時この屋上に立っていたのが神エレボス、そしてその時側に控えていた二人が彼らだ」

「……ああ、あの高笑いする馬鹿神の隣におった連中か！ あの時は仕留めそこなったが、そうか。あれらがお主らにとっての当面最大の脅威という訳じゃな」

ようやく分かったぞ、と納得する彼女の漏らした一言を、フィンが

聞き咎める。

「仕留めそこなつた？ ……もしかして、あの時どこからともなく放たれた赤い巨槍は君が？」

「そうじゃ、残念ながら想定よりも連中、巧くての。一撃では仕留めきれんかったのが悔やまれるところじゃ。じゃが、二度はない」

今のオラリオで第一線級の力量を誇る二人に目線で力量を問われながら、サラは不遜に言い放った。

「あの程度ならばどうとでも出来よう。妾に言わせればお茶の子さいさいと言うやつじゃ」

## グルメホリックな戦闘給仕と偽典恩恵（サラ視点）

「どうとでも、か。……易々と言ってくれるね」

何一つ迷うことのない、確信めいたサラの言葉。

そこには誇張も妄言も一切含まれておらず、だからこそ、それを聞いたフィンとガレスは苦虫を噛み締めたかのような表情を顔に浮かべた。

彼らがこれまで<sup>ロキ</sup>主神と共に苦勞して積み上げてきた並々ならぬ努力と栄光、それを上回る千年来の英雄系譜……その中でも傑作中の傑作に勝利することを、彼女は「お茶の子さいさい」とさげすんだ。

——ああ、何たる屈辱か。

これまでの積み重ねを嘲笑うかのような残酷な女給仕の自負に、二人の反骨心が思わず顔を覗かせようとする。

しかし、いざこの期に及んで自らの未熟さを克服する機会が欲しいと言えるほど、彼らは青臭くはいられなかった。

「ならば、ぜひ君を頼らせてもらいたい。サラ・ブラッドルーラー」

滾る激情に蓋をするかの如く、握った拳に悔しさのあまり血管を浮かび上がらせながら。

フィンは再度サラに対して腰を折り、頭を深く下げた。

「僕らの尻を拭かせるような真似をさせることになってしまって、本当に申し訳ない。だけど、恥知らずと言われようがなんだろうが、そう気楽に言える状況はどうに過ぎてしまっているんだ。一刻も早く彼らを片付ける——この街の平穩を守るために、君に<sup>クエスト</sup>依頼を出したい。受けてもらえるかな？」

本来であれば自分たちが成し遂げたい——否。

黒龍討伐の失敗責任を問うてオラリオから彼らを追い出した自分たちこそが、その手で過去に終止符を打たなければならぬ。

それでも、そんな我儘のような想いで民衆にこれ以上負担をかけるわけにはいられないのだ。

だからこそと、苦汁を呑む思いで願いを託そうとした彼に、サラは

「だが断る」

「……は？」

話の流れをぶった切るように、完全拒否の四文字を口にした。

どう考えても提案を受け入れられる形だったはずなのに、空気を読まず断った彼女。

その大胆な断りの言葉に、思わずフィンは顔を上げた。

「えつと……何故だい？ 今の彼らを止められるのは君だけ、今はそういう話だったはずだ。そして、彼らは君の邪魔をする。それなのに手を出さないと言うのは、矛盾していかないかな？」

「しておらんな。そも、連中ももう妾の前に姿を現そうとはせんじやろうし。……先の一合で妾があやつらの技量を読み取ったように、向こうも妾の力量を理解したはずじや。それなりの頭こゝろがあれば、態々こちらの逆鱗を撫でるようなことはしまい」

自らの頭を横からコツコツと指で叩いて、暗に「そこまで頭の足りておらん連中ではなからう？」とサラは問う。

「そしてこちらからあの二人を探し出すのもそれなりに手間がかかろう。そこに手間暇をかけるより先に、妾には満たすべき皆の腹が待っておるのじや。……そこに火の粉が襲い来るものなら払おうが、そうでなければ放置じやな。よってあの二人の討伐は自然、お主らの手に委ねられようて」

「……しかし、彼らが君の手の届かないところで民衆を虐殺する可能性もあるだろう。そちらの犠牲については許容するつもりかい？」

「いや、それは無かろう。なにしろ連中には、弱者の血の臭いが染み付いておらなんだからな」

「それはどういふことじや？」

サラの放った言葉の意味をすぐには理解できず、ガレスが問う。

血の臭いと一言に言っても、ザルドやアルフィアには相当数染み付いているはずだ。

いずれも若くしてレベル7に至った強力な元冒険者となれば、自然、多数の魔物を討ち取ってきているに違いない。



その中で血の臭いの云々を語られても、それが何を意味しているのか彼にはさっぱりだった。

「あー、妾はとある理由で血の臭いに敏感でのう。あの時一撃を交わすついでに連中の血の臭いを嗅いだのじゃが、濃厚なその臭いの中には一般に庇護されるべき民衆のものが混じっておらんんだということじゃ。連中から香ってきたのは全て、神血の混ざった冒険者の臭い……つまり、その手で市井に危害を加えてはおらぬと妾は見ておる」  
そのサラの提言に、二人は意外そうに顔を突き合わせた。

そして、これまでに齎された報告を今一度思い起こしながら精査して……彼女の言い分の裏付けを取る。

「……確かに。言われてみれば、あの二人による直接的な市民への被害はまだ報告されていないね」

「昨晚の動きもそうじゃった。我々にばかり構い、逃げ惑う市民を闇派閥らしく襲おうとすれば良いものを、そうはしておらんかった。奴らが相手取っていたのは冒険者ばかり……見落としておったか！」  
オシリス・ファミアリアなど古参の悪派閥と対峙し続けてきた歴戦の彼らならば、当然その手口も熟知しているはず。

より効率的に、冒険者を虐げる術……まず統制のままならぬ弱者を脅かし、危機を煽って、慌てふためく彼らを守ろうとして冒険者が弱点を晒した所を容赦なく叩く。

しかし昨晚の彼らの戦い方には、そのような卑劣なものは見出せなかった。

ガレスたち主力の戦いを傍から見ている配下からの報告にも、そのような所見は記されていなかった。

「てつきり、僕らに追い出された恨みつらみから身も心も『悪』に屈したものだと思っていたけれど……そうじゃない？　もしかして彼らには彼らなりの、また別の意図があるのか？　僕たちと『神々の給仕』のような……？」

そうなれば、とフィンは新たな切り口を得て回り出した頭で考え直す。

敵の動きの前提となる目的が覆るのならば、作戦も大きく組み直さ

なければならぬ。

彼らのこれまでの動きから、目的を改めて推察し直し、その行動を再び想定する。

サラから提供された思いがけない視点によって以前の思考を破却せざるを得なくなったフィンの青眼から曇りが払われて、そこに光が戻る。

「やもしれんな。もし妾の読みが外れ、連中がこの目の前にこのこと姿を現した暁には勿論その魂ごと殺してくれるのじゃ。しかしそうでない限りは、妾からあやつらに手を出すことはない。その点を踏まえて、考えを改めることじゃな」

「……ああ。だけど、ちなみにもし他の連中が避難所に来た場合は——」

「分かっておる、その時はばんばん血祭りにあげてやるのじゃ。衛生観念的にはよろしくないのじゃがな、仕方あるまいて。——ああ、そっちに人的資源リソースを割り振る代わりに、妾のいる時に護衛はいらんぞ。つまり、こちらを餌にして愚か者を寄せ付けるくらいは許容するのじゃ」

「……すまないね」

一瞬フィンの頭に過ぎった、『集う民衆を囿イライルスにして悪派閥を誘い出し、サラに始末させる手法』。

それを読んだ彼女によって先に肯定されてしまって、彼は申し訳なさそうにしながらも苦笑した。

最も頼りたかった所については拒否されてしまったが、それ以外の所では協力を惜しまないでいてくれるサラの姿勢は指揮官として実に好ましいものだった。

「構わんのじゃ。ただし、こちらからも報酬を求めようぞ」

「なんだい？」

「お主、小人族バルウムの復興を目指しておるのじゃろう？ ならば当然、その文化にも精通しておるはずじゃな？」

突然発された【勇者ブレイバ】の成り立ちに係る話題について、目を丸くしながらもフィンは頷く。

「それはもちろんだけど、それがどうかしたのかい？」

「そこに小人族秘伝パルウムの調理法レシピなどがあれば妾に提供して欲しいのじゃ。妾の崇高なる理想のためには古今東西の料理を蒐集する必要があるでな、しかしまだまだ足りんものが多い。小人族パルウムと言えばかの女神の原型となった女傑ファイアナも好んだとされる【オーデイル・オードブルズ勇氣を謳う縁起卓】じゃが、前に手に入れた書籍にはその一部しか載つとらんくてな……」

「——ファイアナ騎士団でここぞと言う時に食されていたと言われる、大一番前の陣中食のことだね！ へえ、良く知ってるね。……うん、生憎と僕自身が作れるわけじゃないけれど、それに係る騎士ファイアナの手記をこの間運良く手に入れたばかりなんだ。戦いが終わったら、『豊穰の女主人』までその写本を届けさせよう。これで満足かい？」「それは真か!? ふっふーん、もちのろんじゃ！ よかろう、ではその点くれぐれも忘れるでないぞ！ 食の恨みは海より深く、山より高くつくからのう！」

「心得ておくよ」  
交渉を終えた二人は笑みを交し、がっちり固く握手を重ね合った。

互いに文化を尊重する者同士の無言の通じ合いが、そこにはあった。互いに文化を尊重する者同士の無言の通じ合いが、そこにはあった。

そこにまったく踏み込めなかったガレスが、固く結んでいた口を開く。

「何だか知らんが、話は纏まったようじゃの」

「知らないだつて？ ガレス、それなら是非君にも教えてあげないかね」

「うむ。かつて騎士ファイアナに必勝を期して捧げられた、慎ましかれども力の漲る十五の素材から成る決戦食。その名の通りの前菜オードブルにしてはやや重すぎるとの記録が後のエルフの吟遊詩人の歌に残されておるが、一説によればそれは主皿メインをこれから平らげる敵に見立てるという意味合いも込めて、それだけで戦場に向かう騎士の腹を満たし完結し得る皿群コースとして構成されたとも……」

「知らんと言つとるだろうが！ そうではなく！ 今はそれよりも、肝心のもう一つの話をせんか！」

急に目を輝かせ始めた一人目と、聞いてもいない知識を披露し始めた二人目。

そんな馬鹿二人に対して、ガレスは叫びながら悟つた——この二人は揃つて、下手に噛み合うと途端に面倒臭くなる性格の厄介者である。

放つておいては話に変な方向に拗れていってしまうと、彼は敢えて声を荒げて話を本筋に戻した。

「おっと、そうだね。……それで、君の能力の方については教えてもらえないのかな？」

「……むう、そうじゃな」

正気を取り戻したフィンの問いかけに、ここまでは素直に話に応じていたサラの口が途端に籠る。

「妾としては伝えて構わんと思う、じゃがのう。ちよーつとばかり色々あつての、ややこしい話になりそうじゃし……なにより、そこまでの許しをはつきりとは得ておらんからの。はてさて、どうしたものか……?」

「もちろん、君の意志を損なうようなつもりはない。無理なら無理とそう言つてくれればいいんだよ」

「無理、ではないんじゃないかな。妾だけでは判断を付けられんと言うか……うむむ」

——彼女が頭を悩ませている、どこまで自身の事情を明かすべきかについて。

クレス曰く「いざという時には迷うな」とのことだが、それで実際、なが大丈夫でなになが駄目なのか、具体例までは示されていなかった。

うんうんと唸る彼女に、フィンは言葉を重ねる。

「それならひとまず、レベルくらいならどうかかな？」

「レベル？ ー、まあそれもぶつちやけ微妙なところなんじゃが……」

「――邪魔するぞ【勇者】」

そこへ、一柱の神が介入してきた。

よく火に焼けた褐色肌を持つ、逞しい老人の姿をした神。

その名を、ゴブニュと言う。

「神ゴブニュ？ どうしてここに。御身は眷属と共に武器を作られていたのでは？」

「その材料が尽きたから相談しに来た。今は人手もあると聞く、迷宮ダンジョンに素材の回収部隊を派遣できんかと思つてな」

後方支援系ファミリアの要の一つたる神からの依頼クエストに、フィンは一時サラとの話を中断させて向き直つた。

「……うん、了解した。編成はこちらで決めて出発させるから、そちらからは神へファイストスの所と併せて必要になる素材の一覧を提出して頂きたい」

「良いだろう。ならば速やかに作成に――」

「――そうじゃ、神ゴブニュ！ 思い出したのじゃー！」

ぼん、と名案を思い付いたように手を打って、サラがベッドから飛び上がった。

彼女は退出しようとしていたゴブニュの元へ駆け寄って、その困惑する手を取って頼み込んだ。

「我が主の言う、地上で信頼できる数少ない神の一柱じゃな！ お主ならば恩恵開示ステイタスの相談にも乗ってくれると見た。――実はの、今こやつらに妾の能力をどこまで明かすべきか考えておるのじゃが自分ではうまく判断がつかなくての。ぜひ御身に相談に乗ってほしいのじゃー！」

「何を突然……？」

いきなりの、何の脈絡もないサラのお願いにゴブニュは眉間に皺を寄せた。

しかしその目が彼女の影に向いた途端、彼の眦が鋭くなる。

「この気配……もはや、【86式連結式葬槍】か」

「む、気づかれたか。流石の慧眼じゃな」

サラが自身の影から魔槍を引っ張り出して手渡すと、ゴブニュはそ

の手に持った刃をじっくりと確かめるように眺めた。

「これを保有しているということは、そうか。アレの関係者なのだな」  
ここにフィンとガレスという部外者がいる手前、迂闊にクレスの名前を晒すことは止めておいた方が良好だろうと判断したゴブニュの問いにサラは首肯を返した。

それを受けて、退出しかけていた彼の足が方向を変えて部屋の中に戻る。

「よかろう、そちらの事情は少なからず聞き及んでいる。見せてみるが良い」

「うむ、ではよろしくなのじゃ」

ぱつ、とベッドに寝そべって服の上を脱ぐサラ。

その背中に刻まれた刻印の中身を、側に座ったゴブニュが神血イコルを垂らして読み解く。

「……これは」

「神ゴブニュ？」

暫し興味深そうにじつと見つめていた老神にフィンが催促する。

それを受けて彼は、蓄えていた髭の隙間から言葉を選ぶようにゆつくりと話し出した。

「この娘の恩恵は少々特殊だ。それで、どこから話すべきか」

「御身の眼からして問題なさそうであれば妾は構わん。どこからどこまで公開すべきか、全て委ねるのじゃ」

「そうか。では……名前はサラ・ブラッドルーラー。レベルは——

『0』  
ゼロ

「レベル0!？」

それを聞いたフィンたちは、早速驚かなければならなかった。

レベル0。  
ゼロ

それは彼ら冒険者の最低となる『1』すら下回る、前代未聞のレベル。

初っ端から飛ばしてくるサラの恩恵に彼らが口をあんぐりと開ける中、構わずゴブニュは続ける。

「しかし、基礎能力値ステイタスは……そうだな。実質的にはレベル10を超え

ている、と言ったところか」

「レベル10だつて!?」

そして述べられた補足と言う名の更なる爆弾に、フィンとガレスの表情が崩れる。

レベル10。

それは【暴喰<sup>ザルド</sup>】と【静寂<sup>アルファイア</sup>】の属していたゼウス及びヘラ・ファミリアの両団長でさえついには達しなかった、二桁台。

魔法とスキルの組み合わせ如何によっては疑似的に辿り着くことが出来るかもしれないその境地に、サラが達しているという事実。

まさかゴブニュがここで嘘をつく理由もなく、彼らはまたもや空前の驚愕に襲われることになった。

だが、それはまだ終わらない。

「後は、そうだな。スキル【海魔保夜と十果の冷製和物<sup>サラダ・アスケデシヤ&テンフルーツ</sup>】、効果は『対精神<sup>グルメアニマ・ブースト</sup>：食欲増進<sup>ト</sup>』及び『軟体生物の調理特攻』と、『果実を扱う際の器用度上昇』」

「……は?」

「そして魔法、【ビスク<sup>七</sup>・テ<sup>海</sup>・セツ<sup>颯</sup>トクルヴ<sup>不</sup>エツト<sup>捨</sup>】。効果は『対象の旨味を余さず抽出する』ことと、『対舌感<sup>グルメテイステイキング・ウエイクアツフ</sup>：味覚活性』」

「……はあ!?!」

更に聞いたこともなければ中身の意味も理解できないサラのスキルと魔法に、「訳が分からない」と言った様子を露にするフィンとガレス。

一方のゴブニュの顔は顰められていると言うよりも、どこか呆れているようにも見えた。

「このようなスキルと魔法が合わせて八つ。この組み合わせ、最初は何かと思ったが……他の名から察するに、さては【連膳餐会<sup>フルコース</sup>】か?」

「その通りじゃ。ふふん、素晴らしからう」

やがて背景に宇宙を背負った猫のような顔をするフィンたちに対して、横目を向けたサラは自慢げに答える。

「妾にとって、『食』こそが生の全て。全ては食に始まり食に終わる。一般に礼節の根幹を為すと言われる衣・食・住のうちで、『食』こそが

最も尊ばれるべき至高にして究極の理よ。故に我が望みを映し出す恩恵に我が人生のフルコースが載るのは当然の論理と言えよう、のう？」

「……らしいよ、ガレス」

「……訳が分からんぞ、フィン」

さも当然のように持論を語るサラに、二人は返す言葉を持っていなかった。

否、持てなかったというべきか。

——なんだ、レベル10つて。……いや、それはまだ分かる。

——しかし、スキル【海魔保夜サラダ・アスケデシヤ&テンフルーツと十果の冷製和物】とは。

——そして、魔法【ビスク七海・デ蝦・セツのトルヴ不捨エツ吸ト腕】とは。

それは……それらは一体、なんぞや？

二人は自問を繰り返し、やがて答えを放棄した。

彼らは答えを得る代わりに悟った……「これ、もしや深く考えるだけ敗北まけなのでは？」と。

「——分からないけれど、分かったよ。ともかく、あの二人を彼女が超えているのだけは理解出来た。感謝するよ、神ゴブニュ」

「構わん。儂も久々に興味深い……そう言っただけ良いのかはお主らと同じく分からんが、ともかく珍しいものが見れた。ここ最近はずまらんことばかりを考えてその通りの剣を打つばかりだったが、今ならば面白い武器の一つも打てそうだ」

それだけ言っただけ、ゴブニュは役目を終えたとばかりに部屋を去っていった。

残されたサラが上体を起こし、着直した服のボタンを閉じて軽く背を伸ばす。

「さて、もう良いじやろ？ では、妾はここを借りて暫し寝させてもらうのじや。お主にもああ言った手前、まったく寝んわけにはいかんのでな」

「そ、そうだね。おやすみ。良い夢を……」

「うむ、お休みななのじやあ……」

再びボタンとベッドに倒れて、そのまま鼻息を立て始めるサラ。



その潔い就寝を傍目に、フィンはガレスとたった今耳にした内容の扱いについて討議する。

「……とりあえず、最低でもリヴェリアには開示しよう」

「そうじゃのう。あやつも道連れにするのは当然として、ロキにはどうする？」

「彼女と話した後で決めよう。恐らく明かすことにはなるだろうけれど……その後で話すことになる他ファミリアへの開示については悩みどころだね。いずれにせよ、僕も疲れた。日頃の精神疲労に最後の最後でどつとトドメを刺されたような気分だよ。少し寝させてもらうから、暫くの間はよろしく頼むね」

「……終わったら僕も交代で寝ようかの。というか、寝なければやつとられん気がひしひしとするわい」

サラの隣のベッドに横たわったフィンが夢の世界に旅立つのを見送って、ガレスは今も緊張を緩めず己が役割を果たさんとしている部下たちの元へと戻っていくのだった。

それから少しして、こつそりとサラが身体を起こす。

「さて、これである二人が妾が確かな睡眠を取っておつたと証言してくれることじゃろうしの。ではサラバじゃ、サラ・ブラッドルーラーは華麗に去るのじゃ……とな。ふははっ」

部屋の窓から外へ秘かに飛び出した彼女は平然と周囲の心配を裏切り、人知れず餓える誰かの元へ向かうのだった――。

く。バベル内の階段を昇り、同じ鍛冶神の元へ向かうゴブニュはふと咳く。

「世は神時代、未知なる英雄を求めて探求する時代……。言わば【偽典：人之恩恵】——人が魔物に『神の恩恵』を刻むことも、また神々の望む下界の奇跡の一つか……?」

今は遙か地の底に在るであろう馬鹿弟子を足元に見下ろしながら、彼は小さく口の端を歪めた。

——だとしても、もう少し手心を加えなければ最高神の胃痛も収ま

らぬだろうに、と。

なお、政治に関わる気はないゴブニュ当神は「面白いしまあ良いんじゃないか」と、自身の鍛冶にこの発想が活かせないか呑気に考えており、それが紆余曲折の果てにとある白兔のナイフへ反映されるのは、また別の話である。

## 真の心を引き出す（サラ視点）

サラが吹かせたオラリオ側にとっての神風は、確かに侵攻する闇派閥イヴイルスの頭数を大いに消耗させた。その結果として、街の被害はフィオンたち首脳陣が当初想定されていたものよりもかなり小規模に留められ、多くの人々は命あることの喜びに湧いていた。

しかし、本来救われる運命になかった大勢の者が救われた、その一方で。

救われずに失われた少数の命が存在するのもまた、誤魔化しようのない事実だった。

彼女の尽力があつてもなお、冒険者たちの手から零れ落ちてしまった闇派閥イヴイルスの犠牲者たち——その家族は、友人は、恋人は。大事な人を失った彼らは、その他の助けられた人々とは真逆に……強い怒りと、そして悲しみを孕んでいた。

——何故、あれだけ多くの人々他人が救われた中で、私たち俺の愛する人だけが救われなかったのか……と。

周りでは、運よく救いの手が間に合った人々が無事や再会を祝して抱き合っている。

ああ、それは確かに素晴らしいことだろうさ——でも、私たち俺は？ その輪に加わることの出来なかった彼らは自然、手を取り合う相手のない孤独に苛まれ、幸運に恵まれた他人の空気には加われないことの疎外感を抱いて。

心中に底知れず湧く、負の衝動を向けるべき先を探して……その暗い瞳の向かう先に、彼女たちを見つけた。

アストレア・ファミリア。

正義の剣と天秤を掲げる、誰もが認める公的な民衆の守護者。

——そして、自分たちの平穏を守れなかった、裏切者。

その黒く塗り潰された激情を、一休みしようと帰路についていた彼女たちを取り囲んだ彼らは、喉の奥から迸らせる。

「なんで私たちの大切な子を救ってくれなかったの!? あの子を、あ

の子を返してよっ……!」

「どうして、僕のお母さんはここに避難所いないの!? 探してよっ、お母さんは、僕を守ろうとしてあの時……うわあああっ!」

「俺の妻は、お前らの手が届かなかったからッ……! なんなんだよ、冒険者ってのは、俺たちみたいなどうでもいい一般人には手を差し伸べてくれないってのか!」

——自分たちは……自分たちの隣人は、助けてもらえなかった!

——他の連中は、助けられたのに!

滾る感情を、どうしても抑えられなくて。

弱い民衆とは違う、強い冒険者の彼女たちにならぶつけても大丈夫だろうという思い込みから。

被害者たる彼らは次から次へと、噴出する悲嘆を憎悪の炎へと転化して、アストレア・ファミリアの面々にぶつける。

それどころか、彼らは叫ぶだけ叫んで喉を痛めたかのような素振りを見せたかと思えば、そこで追及を止めることなく、今度はそこらに転がっていた石を拾って、彼女たち目掛けて腕を振りかぶる。

その八つ当たりを、ファミリアの顔役としてアリーゼは甘んじて受け入れようと決意した。

「——ごめん、なさい……貴方たちの大切な人を、守れなくて」

年若い彼女自身、まだ整理のついていない悔恨の念と。

その他諸々の私情を押し殺して、これで少しでも自分の責任が果たせるのならば……と。

彼女は自ら進んで頭を下げて、救われなかった民衆の批判の矢面に立ちとうとした。

だが、彼女の身に降りかからんとしたそれら一切の物理的な責め立ては全て、突如としてその場に姿を現した影によって撃ち落とされた。

「間一髪のところまでセーフじゃな。まったく、そこまで自己犠牲を尽くすのは逆効果じゃぞ。あまり他人を甘やかすでない」

かけられた、呆れを含んだ言葉にアリーゼは顔を上げる。

彼女の前に盾のようにして立っていたのは、フィンとの仮眠の場か

らこつそり抜け出してきていたサラだった。

彼女はちようど、未だ避難所に辿り着いていない民衆にも食事を分け与えるべく奔走しようとしていたところだった。

そこで偶然にも民衆とアストレア・ファミリアとのひと悶着の場面を捉えてしまい、続く暴拳を見過ごせないと出張ってきたのであった。

「貴女は……えっと」

「サラ・ブラッドルーラー。『豊穰の女主人』の、ただの一ウエイトレスじゃ。そして」

サラはアストレア・ファミリアを守るように立って、彼女らに非難と怒りを向ける民衆たちに向けて口を開く。

「話は聞こえておった。その上で、妾が問おう。——お主らの中で、真に「この娘らが悪い」と思う者はおるのか？」

「……」

「……」

「……」

「己の悲しみが、怒りが。……己に降り注いだ不運の責任が、この娘たちにこそ帰するのだと。本当にそう思っている者だけが、その手に持った石を投げてみせよ」

彼女の言葉を受けて、それ以上石を投げようとする者は果たして。

民衆は互いに顔を見合わせ——そして、メドゥーサの石化攻撃を食らったかのように、石を投げる腕を止めた。

「そうじゃ。お主らも分かっているのじゃろう？ この娘たちは昨晚から今この時に至るまで、文字通りその身を削って奮闘しておったのだとな。この泥だらけで血塗れな姿を見れば、全身全霊を尽くしてこの都の端から端まで必死に駆けずり回って、一つでも多くの命を拾うべく戦っておったことは一目瞭然じゃろうて」

諭すような口調のサラに、彼女らを取り囲んでいた民衆の中からそれでも、と声上がる。

「娘はっ……！ 一度はこの人たちに救われてっ……それでも結局、助けられなくて……！」

「なるほど、お主が失ったのはやや子か。——それで。「だから石を投げる」と。そう、言うんじゃない？」

ゆつくりと、その言動の正当性を問い直す彼女。

それを受けて、母親はうつ、と言葉を詰まらせて……泣き崩れた。

——そう、本当は分かっているのだ。

いくらアリーゼたちを責めたところで、娘が戻ってくることはないのだと。

目の前の乙女たちを含む冒険者たちは誰もが、全霊を賭して戦いに身を捧げているのだと。

——それなのに、無意識のうちに彼らは強いんだからと言いついて、理不尽な嘆きを訴えている自分たちの姿は、失った家族恋人に到底顔向けできるようなものではない、恥ずかしいものなのだ……。

「その様子からして違うようじゃな。良かったのう、後に後悔を呼ぶ行為に及ばずに済んで」

長きを生きるサラは、彼らの心を彼ら以上に理解していた。

「努力の結果、救われないものがあつたのは紛れもない事実。

そこに瑕疵や手抜きがあつたのであれば、責任を問うのも然るべき行為と言えよう。

しかしそれが、最善を尽くしたものであるのならば、それ以上を求めようとするのはお門違いなのだ」と。

この場を集った彼らは、心の底では理解しているのだ——と。

——だが、それでも言わずにはいられない。

発散せずにはいられない、この感情はどうすれば良いのか？

彼らの間に漂う、向けるべき先の分からない気持ちについて、サラは介入したものの責務として答えを示す。

「——さあ、食うのじゃ」

側にいた夫に支えられる母親に、サラがどこからともなく取り出したシチュー入りの器を差し出す。

彼女は首を横に振り、素振りで「要らない」と訴える。

娘を失った今は、とてもじゃないがそんな気分にはなれないと。

しかしサラはそんな彼女の固く閉じられた口を強引に開いて、その

中に具を乗せた匙をぐいつと突っ込んだ。

「はむっ!?! ——熱うっ!?!」

とろみのついたミルクコンソメと、ちよつとばかり焦げ目のついた肉団子。

湯気を立てる熱々のそれを口の中に押し込まれ、母親は慌てながらはふはふと噛んで、ごつくんと呑み込む。

いきなりの暴挙に彼女はサラへと怒りを露にしようとするが……その前に、シチューの熱が胃から次第に身体の芯に伝わって、悲しみに暮れて冷たくなつた彼女の心を溶かすように温める。

昨晚の襲撃によつて子を失い、既に涙が枯れかけていたと思われていたその瞳から……頬にかけて、一筋の小さな軌跡が零れた。

「——美味しい……」

「そうじやろう。悲しみで腹は膨れぬ。まずは食べ、食べて腹を満たすのじゃ。さすれば、己が今後取るべき未来も自然と見えてくるはずじゃ。——お主らもな」

「はぐっ!?!」

「むもっ!?!」

「んごっ!?!」

その光景を眺めていた他の民衆もまた、気づけば石の代わりに器を握らされて、その口の中で旨味を味わっていた。

肉と野菜と香辛料……様々な味が溶けだした、母のぬくもりのように柔らかな味わいのシチュー。

それがゆつくりと、されど着実に。

彼らの罅割れた心に染み渡つて、石を投げることなんかよりも大きく深く、そして優しく、傷を慰めていく。

「……ねえ、今の動き、誰が見えた?」

「生憎と。私には見えませんでしたねえ」

「アタシの眼にも一切捉えられなかつたんだが……団長でさえ無理つてなると、最低でもレベル5の上位以上だぞ。それでやるのがアレかよ……いや、確かに凄えが、どうにも締まらねえ気分だぜ……」

サラの見せた少々強制摂食行為乱暴な挙動にこつそりとドン引きするアストレ

ア・ファミリア一同。

そんな彼女らの様子もお構いなしに、サラは民衆へと語り掛けた。「どうじゃ皆の者。美味かろう？——美食は怒りを鎮め、目に見えぬ心を癒してくれるもの。そして次なる自分を導くエネルギーを、その内に蓄えてくれる。いかに食欲が失せようと、それだけは覚えておいてくれると妾は嬉しい」

最初は無理矢理食べさせられた食事に、彼らの手は自然と次を求めて伸びる。

そして食べていく内に、彼らは自覚する——目を逸らしていたもう一つの事実にも、改めて向き合わされる。

彼らが知っている者の命を救われなかったことを嘆くその目の前で、手が届かなかったことに嘆きの光を写す彼女たちの瞳があつたことを。

必死に手を伸ばしても、それでも届かなくて。

失った命に対してその場で嘆きたい気持ちを懸命に堪えつつ、それを押し殺して次の現場へと向かう、彼女らの強い覚悟の灯った瞳を、彼らは確かに知っていたのだ。

そんな彼女たちに過剰な責任を問うてしまった恥を噛み締めながら、彼らは腹を満たす。

その光景を見守っていた彼女たちの口にもまた、いつの間にか匙が突っ込まれていた。

「何を他人事のようにしとるか。お主らもじや、食べ」

「えっ、ちよっ——!？」

「なにを——!？」

「うおっ——!？」

旨味の暴力が、否応なしに彼女たちの舌にまで襲いかかる。

サラはそこにしれつと塩コショウを一つまみ増やして、疲労困憊の舌にも味が伝わるよう細やかな配慮をしていた。

しかしそんなことはもちろん知る由のない彼女たちは、まさか自分たちに向けられると思っていなかった口の中の熱さに慌てながらも、それをなんとか味わい呑み込む。



「——っ、美味しいわね！」

「——むう、この大胆かつ繊細な味わい……故郷の料理人にも勝るとも劣らない腕前か……!?」

「——へえ、こりやイケるな！」

素直に称賛を口にするアリーゼ、輝夜、ライラ。

民衆と同じように、疲れ切っていた彼女たちの心身にもサラのシチューは染み渡っていく。

それは、いつの間にか口元を覆う布を下げられて匙を啜えさせられていたリユーも同じだった。

「……これは……温かい——っ」

ほろりと涙を流し、一口目を呑み込んだ後、彼女の身体が崩れる。

張りつめていた緊張の糸が緩んで、追い付いてきた疲労に肉体が耐え切れなかったのだろうか。

すかさず彼女の分の器をサラが回収し、輝夜がその身体を受け止める。

「ふん、青二才め。ここへ来て限界が来たか……すみませんねえ、お恥ずかしい所をお見せして」

「構わんよ。気絶するほど美味かったということじゃろう？　ならばよし、じゃ。」

「ええ、本当に美味しいわ！　アストレア様にも食べさせてあげたいくらい！」

「む？　アストレアとな？　その女神になればもう食べさせたぞ。避難所で食欲の湧かぬ当初の民草に向けて、ここに旨い飯があると見せつけるサクラとしてな。無論次のご来店の約束も取り付け済みじゃ！」

そう良い笑顔でサムズアップするサラの手を、アリーゼがぎゅつと両手で挟み込むように握る。

「それならせっかくだし、私たち全員で予約するわ！　この戦いが終わった時の打ち上げ先として、盛大に祝勝の花火を打ち上げるのに相応しいって私の直感がたつた今そう叫んだもの！」

「ちよっ、団長？　それはあまりにも性急に過ぎるというか……第一、

戦いがいつ終わるか——」

「うむ、承ったのじゃ！　いつでも来るが良い、その時には妾のフルコースで以てもてなしてくれよう。お待ちしておるぞ？」

「フルコース!?　うーん、良い響きね！　今から俄然楽しみになってきたわー！」

「そうじゃろうそうじゃろう！　妾の積年の食念、特別にお主らに明かしてやろうぞー！」

「あははははははっ!!」

「ふははははははっ!!」

とんとん拍子に話を進めていくアリーゼとサラの意気投合した様子に、置いてきぼりにされた輝夜の肩をライラが叩く。

その顔にはかすかな笑みと共に、諦めが浮かんでいた。

「……駄目だ輝夜、こいつらアレだ。同類と言うか、自分の言動をとことん曲げない猪突猛進馬鹿……こっちには、止められねえ」

「そのようでございますねえ……もはや止められない暴走機関車というやつですか、これが」

輝夜もまた、ライラや他の面々とあわせて薄く笑う。

ただし、そこに浮かんでいたのは彼女がよく使う敵方へ向ける嘲笑ではない、大切な仲間を重んじる年相応の少女らしい可憐なものだった。

ここ最近エレボスは嫌な神に出くわしたりと嫌なことばかりだった彼女の心に久々に差した、昼下がりの穏やかな日の光の如き料理シチュ……それは魔法や剣などよりもよほど強く、人の真心というやつを引き出すのだと、サラはアリーゼと語りあいながらひっそりとほほ笑むのだった。

神意を食らう悪意、それを食らう熱意

——迷宮ダンジョンが哭いている。

その狂わしくもどこか愛おしい嘆きの声を、第201層の拠点にてクレスは聞いていた。

次なる冒険へ向けて支度を整えていた彼の耳が捉えた、言葉にならない迷宮ダンジョンの絶叫。

「この声、久々に聞くな。それに先ほど感じた力の波動とくれば……神が迷宮ダンジョンに侵入したか」

迷宮ダンジョンは、生きている。

地上では嘘や幻と呼ばれ、一笑に付されるその言説を、彼女の中で長年過ごした経験からクレスは事実だと悟っていた。

そして、迷宮ダンジョンが神々を執拗に恨んでいることも知っている——連中が己が体内に侵入を果たそうものならば、決して取り逃がすことなく喰い殺して、あわよくば取り込んでやろうと、殺戮を司る子供モンスターを抗体の如く産み出して差し向けるほどに。

胎動する迷宮ダンジョンの悪意。

それが発露した暁には、迷宮ダンジョンは神を殺害し得る絶死の牙を即座に孕み、そして刹那の内に産み落とす。

聞こえないまでも、クレスは確信した——その産声を。

同時に彼は、それまで荷物を詰め込んでいた背バック囊バックを置いて、拠点の一角に目を向ける。

「……そう言えば、切らしていたな」

クレスの視線の先に安置されているのは、それを地上オラリオの者たち……特に鍛冶師や魔道具作成者が目にすれば、一瞬で目が灼けてしまうほどの金銀財宝——すなわち、『深々層』産の素材たち。

その中で残量が心許なくなっている一部の棚に目を向けた彼は、思い立ったが吉日とばかりに、用意していた荷物とはまた別の武器を取りりに向かった。

「ちようどいい、未攻略域に取り掛かる前の肩慣らしだ」

普段であれば、上層で何が起きようが彼の与り知ることではない。モンスターによる大量虐殺が起きようが、はたまた悪派閥イヴァイルスによる大規模破壊が起きようが、彼の攻略する階層にはなんら影響がないから。

だが、迷宮ダンジョンが産んだ、神さえ殺し得る異形の力——それは彼にとつて数少ない、上層に目を向ける理由に成り得た。

埃を払った武器が覗かせる、朱色の穂先。

その刃に錆び付きがないことを確認して、軽く振り回し調子確かめる。

「……さて、一狩り行くか」

悪派閥側イヴァイルスにつく災神ルドラによって招来された迷宮の悪意——『大最悪』テルレユネ。

盟友たる邪神エレボスの提案を受けて彼が眷属と共に人造迷宮より侵入し、第37層にて神意を解き放ったことで、怒れる迷宮ダンジョンが誕生させた『終焉の黒き蛇』。

それは母ダンジョンの命令を受けて、神を喰い殺すべくほぼほぼ一直線に地上を目指し邁進していた。

堅牢な壁を容易く突き破り、分厚い天井に豆腐の如く穴を開け、母より与えられた純粋なる漆黒の意志を全身に漲らせながら、尋常ならざる速度で瞬く間に階層を踏み越える。

そしてフィンの思惑通り、第18層『迷宮の楽園』アンダーリゾートにおいて、アストレア・ファミアリア及びロキ・ファミアリアの連合軍に迎え撃たれる。

——そのはず、だった。

しかし、ここにモンスターの知らぬ例外がいた。

現状のオラリオの最高戦略たる【勇者】ブレイバーが、己より強いと評したサラ・ブラッドルーラー。

その彼女が「主様」あゝのじさまと呼称する、迷宮の最先端を走る者。

『禁 忌』アンタッチャブルたるクレスが、悪派閥イヴァイルス、英雄の都オラリオ、そして神々の——全ての思惑を狂わし覆す。

『——オオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

「見つけたぞ」

自身の存在を隠そうともせず爆走爆進する、蛇とも人ともつかない異形の怪物。

同じく迷宮ダンジョンの怒りの具現たる『破壊者』ジャガーノートとは異なり、俊敏性や魔法反射能力ミラーコートは持ち合わせてはいないが、それらを補って余りある膂力を与えられた化物。

その目の前に転移したクレスが、宣言する。

「悪いが時間をかけるつもりはない。一撃決殺、加減は無しだ」

突如として進軍先に出現した矮小ミニゲンな存在を、『大最悪』テルピュネはその体格を以て一息に押し潰そうと襲い掛かった。

しかし、それより一手早く彼が放った左手の緋々色金の槍が、的確にその左目を貫いていた。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!?!?!?!?!』

母より与えられし破格からだの肉体。その性能を以てさえも捉えられないクレスの左腕の動きによって片目を潰され、『大最悪』テルピュネは激痛に思わず足を止めてその場でのたうち回った。

その身に母の囁きが伝わる——案ずるな、その身はすぐに治るのだと。

『自己回復』。

迷宮ダンジョンが特別に産み落とした個体であれば大抵所有している能力を、この個体もまた当然のように保有している。

ならばと『大最悪』テルピュネは暴れるのを止めて、眼球に突き刺さる小癩なな、その巨体からしてみれば爪楊枝のようにも見える槍を引き抜いて回復に備えようとする。

しかし、抜けない。

かつて幾度となく『大最悪』テルピュネと交戦した経験のあるクレスの施した仕掛け——穂先が得物に食い込んだ瞬間に数十の鍬となって分裂し、返しとなる機能によって、槍は『大最悪』テルピュネの眼に深く食らいついていた。

『オオオオオオオオオオオオオツツ!!?!?!』

それならば仕方がないと言わんばかりに、眼球の再生を諦めた『大最悪』<sup>テルビユネ</sup>が歩みを再開しようとする。

己の眼に走る痛みなど二の次。そんなものよりも、永きに亘って母を虐げる神どもを抹殺する崇高な使命こそが重要だと。

母によつて与えられた神々への殺意が、左目を苛む激痛を凌駕する。

——嗚呼、なんと健気な息子だろうか。

母を愛する子の献身、それは例えモンスターのものであろうと、確かに称賛されるに相応しいものだった。

最も、それがクレスの攻撃の手を緩める理由にはならないのだが。

そうして再び前を向いた『大最悪』<sup>テルビユネ</sup>は、クレスが残る右手に構えた『朱槍』を見た。

「視を穿ち、死を穿つ——」

クレスがその手に持つ朱色の槍は、『ネガ・ファトウム』と並ぶ超特殊武装だった。

迷宮第200層、階層の九割を占める赤海『厄東の死海』<sup>リヴァイアサン</sup>に住まう海の霸王の亜種『レヴィアタン』。その遺骸を削り鑄溶かし、各種超希少金属を混ぜ合わせて精製した至極の呪槍。

その切っ先から漏れ出すは、死してなお虎視眈々と所有者の命を付け狙う『深々層』<sup>テルビユネ</sup>の呪い。

それに構わず、『大最悪』<sup>テルビユネ</sup>はクレスに迫る——地上においてミアがサラの真の実力を捉えられていなかったように、『大最悪』<sup>テルビユネ</sup>もまた槍の性能、及びそれを握るクレスの実力を認識出来ていなかったのだ。

前に出る『大最悪』<sup>テルビユネ</sup>、対してクレスも躊躇なく前方に踏み込む。

彼の身体を殴りつけようと怪物は前肢を振り振り——それは狙いを外れて、クレスの右後方に着弾した。

隻眼による影響で、遠近の距離感がうまく掴めていないようだ。

そして、それが齎す弊害はもう一つ。

両眼であった時には相互に視界を補完しあうことで埋められていた、『死角』の存在。

そこに狙って潜り込んだクレスの右腕、及びそこに握られていた槍



が、幸か不幸か、クレスの眼がそれらを捉えることはなかった。

彼の視線の先に映るのは、無慈悲にも存在の八割を血煙として消し飛ばされた『大最悪』テルピユネ。

無論魔石など残っていないはずもなく、神殺しの魔物の身体はゆつくりと崩れ落ち……息絶えた。

その後方に残された槍が付与効果エンチャントによって、クレスの手元に戻る。少々あつけないが、これにて『大最悪』テルピユネの討伐は一件落着を迎えたのだった。

——彼が師の教えと、自らの魔法に潜む危険性を最大限応用した、世界を犯す概念的な毒の槍。

この世界テクスチャに生きる限り防衛不可となるそれは、彼はそう呼ばれることを心底毛嫌いしているが——エレボスに言わせれば、まごうことなき『英雄』の御業だった。

「……たまには使わんと怒られるからな。腕の方も鈍っていないように良かった良かった。さて、楽しい素材回収の時間を始めるか」

『大災悪』テルピユネの残骸に近づき、クレスは剥ぎ取りを開始しようとする。一時期、彼は神を連れ込んで神意を強制的脅してに発動させ、出現した『大最悪』テルピユネ等を狩る周回行為を行っていた。しかし残念なことに老神ウラノスによってそれらの行為は一律に禁じられ、素材ドロップアイテムの残量も心許なくなっていた。

そこへ降りかかった予想外の幸運に、彼は喜びながら解体用のナイフを取り出す。

——俺が召喚したのではないのだから、ウラノスも怒ったりしないだろう、と。

しかし、いざ回収に取り掛かろうとした段階で、彼の他に足音が響く。

「……どういふことだ、何故『大最悪』が倒れている?」

「それは俺が倒したからだが」

怪訝な声に振り向いてみれば、そこには一人の少女が立っていた。喪服にも似た漆黒のドレスを身に纏い、灰色の髪を揺らす淑女。

「誰だ貴様は? ——いや」



彼女は『大最悪』と違い、クレスの力量を正確に読み取って、閉じていたその目を開いた。

そこに見えるのは……彼と同じく、左眼を灰色とするオッドアイ。「ヘラより聞いたことがある。私たちには、遠く、そして近い家族がいるのだと。お前が——いや、貴方がそうだな。クレス・テラテイアリエ、偉大なる太古の英雄よ」

その見覚えのある瞳と、その背中より感じる懐かしい気配、そして何よりその言葉に、クレスは何百年ぶりに人との対面で驚愕を覚えた。

「そういうお前は、そうか。ヘラ・ファミリアとなれば……」

「そうだ。我が名はアルファイア」

彼女はそこで言葉を区切り、一息置いてクレスと視線を交わす。

「そして、秘されし家名はテラテイアリエ。御身の後塵を拝する元冒険者であり、かつて異端と恋に堕ちた、妹君の血を継ぐ者だ——」

「——出来なければ貴様らに次の朝食がないまで  
じゃ」(サラ視点)

クレスとアルフィア——時を超えた血族の邂逅が地下にて果たされた、その少し前。

地上の側においても、今まさに冒険者たちと悪派閥による一大決戦が行われようとしていた。

人知れず繰り広げられていた『正義』と『悪』の問答にも一つの決着が付き、いよいよ残るは真の強者同士による実力勝負。

その中でクレスの置き土産ことサラにも勿論、大きな役割が与えられていた。

五つに別れた避難所の一つたる『円形闘技場』。

「その巨大施設を単身守護せよ」という——誰もが聞く耳を疑うような役目である。

「まったく、今時の小人族らしからぬ大胆さじゃな。往年の騎士団ここに甦れりといった所かの？ いずれにせよ、妾も言ったことは守らねばのう」

元々「そうしてくれても一向に構わん」とサラが提案していたとは言え、凶々しくもその言葉に則って彼女一人に作戦上の『囿』一つを担わせたフィン。

しかし、彼女はそんな【勇者】の提案を大らかに受け入れた。

そも、自ら吐いた言葉を引っ込めるほど恥知らずではない、と言うのが一つ。

そしてもう一つの理由は——彼女からしてみれば、オラリオの冒険者は肩を並べる仲間になり得ない足手まといに他ならない。

邪魔な足枷に気を配る必要がない分、逆に気兼ねなく暴れられるというものだった。

「つまりは視界に入る全てが敵と言うことじゃろう？ 見敵必殺、生ける者は見つけ次第磔刑に処し、血を最後の一滴まで搾り取ればよい

と。ただそれだけの話じゃな——ふははっ、良かろう！」  
そう笑いながら依頼を受諾したサラに、フィンはただ一言「任せたよ」と言った。

一切の余計な要素を省いた、彼女に相応しい申し入れ。

その強者に対する礼儀を弁えた彼の要請に報いるべく、サラはこれまで着用していた酒場の制服を脱ぎ、クレスの手によつて持ち込まれていた本気の装備に身を包んでいた。

——美神に匹敵するとまで謳われる、均整の取れた肢体を余すことなく曝け出す戦装束。

ぴっちりとした肌に吸い付く漆黒の伸縮布地を基調として、その上に動きを阻害しない程度の小さな金属片を当てた超軽鎧。その上に同じく純黒のヴェールを被ったその姿は、花嫁にも暗殺者にも例えられよう。

なお、効果は『装着者を一時的に『夜の国』と同じ環境下に置く』——すなわち吸血種たる彼女にレベルにして+2の応援効果を付与するというもの。

もとよりレベル18〜19相当の能力値を誇る彼女は今や、単純化してレベル20 超の完全体と化している。

どう考えてもオラリオで振るうには過剰火力気味と言えるこの装備を着用することそのものが、フィン（とその手持ちのレシピ）を気に入ったサラの気合の入れようを存分に示している。

至高にして究極。

闇を纏ったと呼ぶに相応しい今の彼女の凜然とした立ち姿は、まさに夜そのものを支配下に置く女王として君臨していた。

……ただ、その闘い易さを追求した結果生まれた、煽情的な雰囲気につられる一部の馬鹿もいて。

「うへへ、可愛いねえサラちゃん！ 是非その姿で俺に寝屋でのご奉仕を——」

「やかましい。神ならばこの局面、もうちっと真面目にならんか。邪魔じゃ、退け」

「もぷっ?!?!?!」

この非常時に構わず、セクハラを働こうとした男神。

その側頭部を（もちろん手加減込みで）蹴り飛ばし、サラはゴミを見るような眼をくれてやった。

なお、当神はその視線及び上段後ろ回し蹴りの際に見えた薄っすらとしたとある食い込み（読み）に、「ご馳走様ですっ！」などと戯けた台詞を吐いて飛んでいく始末。

そんな煩惱塗れな神の姿を尻目に、彼女はいよいよ開かれた戦場の様子を遠くに見据えた。

イヴァイルス 闇派閥と冒険者、双方から鬨の聲が上がって。

まずはオラリオの外周を囲う八方の門が全て破壊され、そこからモンスターたちが雪崩れ込み、冒険者たちが応戦を始める。

「当然、妾の存在を踏まえた上で作戦を練り直しておるのじやろう。この数日で無い頭をどのように捻くり回して対策を導き出したのか、見せてもらおうかの。——そら、特別に妾はここにおると教えてやるう♡」

イヴァイルス 闇派閥が考えてきたであろう、サラ・ブラッドローラー 盤外戦力対策。

それを手っ取り早く釣ってしまおうと、敵方に自身の居場所を知らせるべく、サラは己なりの開戦の鐘（ゴング）を景気よく……そして盛大に鳴らすことに決めた。

つまりは、例の如く。

開幕即ぶっ放し（ぶっぱ）である。

『プレリユード・フィナーレ 終局告げる序曲の音』

手元呼び出した螺旋描く大血槍を、サラは近くに見えていたオラリオの東門目掛けてブン投げた。

ギャルルルルツ……チュドツ!!

大気突き破る炸裂音と衝撃波——大破壊を撒き散らしながら放たれた、巨槍の投擲。

それは東門からその先、後方20KM（キロメートル）ほどの大地を軽く抉り飛ばして、そこに完全なる『虚無』を作り出した。

ついでにその場にいた神が運悪く巻き込まれたのか、天へと続く一つの光の御柱がきらきらと立ち昇り始める。

邪神が送還される哀れなその光景を眺めながら、サラはひよいと円形闘技場の外壁の最上部に立って。

そこへ戻ってきた槍を掴んで手慰みにくるくると振り回しながら、悪派閥 彼らに独り問う。

「妾を殺せる手段が用意できたのか？ 食の安寧を侮辱せし愚か者どもめ。精々足掻いて、力を見せよ。ただ雑魚を並べ立てるだけでは役不足ぞ……出来なければ貴様らに次の朝食がないまでじゃ」

開幕早々、敵方の用意していた戦力の八分の一をまるつと全滅させた彼女は薄く笑う。

それは夜空に三日月が弧を描くかの如く——美しくもまた残酷な、自ら処刑台へ登らんとする彼らへ向けた死刑宣言であった。

……なお、開戦から暫く経ってもサラの下に『悪派閥の考えた最強の対策』というやつが姿を見せる様子は一向にないのであった。

「暇じゃのー……おかしくないかのー。なんで妾の下に来るのはお主らのような、本当に頭のない連中ばかりなんじゃ？」

そう、眠たそうな顔で嘆息するサラ。

開戦から二時間——その周囲には、数にして三十ほどの悪派閥の磔姿が連なっていた。

他の戦場の規模からしてみれば、あまりに少なすぎる死体の数。

「上官の命令にもろくすっぽ従えぬ馬鹿しか来んとは。つまらぬ、あまりにもつまらんのじゃ」

彼女が聞き込みと言う名の拷問を行ったところ、どうやら敵の首魁の一人たるヴァレッタは「どうせ行っても無駄死にだろーが」と、特記戦力たるサラの所に半端な雑魚を送らない方針でいたらしい。

しかし何処にも上司の命令に従わない半端な反骨心溢れる愚か者はいるもので、そう言った連中がちまちまとやってきては、サラの指の一振り立ち並ぶ墓標の列に加わるだけ——ぶっちゃけ、他の戦場で繰り広げられる喧騒に比べて彼女の守る『円形闘技場』の周りはいかに安穏としていた。

「積極的に手を出すつもりがないとは言え、こうもガラガラじゃと流石にのー？　ぬう、こうなると分かっていたら未読のレシピ本の一つや二つでも持ってきておったのじゃが……」

「——サラちゅわくん！」

「しつこい、大人しく鳥籠に閉じ籠っておらぬか。武神でもない非力な身で外に出てくるでないわ。それともなんじゃ、こうなればお主を吊るして敵を釣るか？」

「……スミマセンデシター」

こうしてちまちまと様子を見に外へ出てくる神々の相手にも飽きてきた。

「こうなればちよいと離れた戦場の補助でもしてやろうか」とサラが思ったところで——その鼻がひくりと動く。

「……なんじゃこの腐臭？　ろくに下処理もしておらん生モノの臭いじゃ。どこかで嗅いだような気もするが、どうにも思い出せん。しかもこのう、こんなものを堂々と漂わせてこの戦場を闊歩するとはどんな神経をしておるのか……気になるのじゃ。ふむ、ちよつと覗いてみるか」

——この様子であれば、少しばかり円形闘技場を留守にしても構うまい。

なんとなしに、顔を顰めたサラは異臭の下へとしなやかに跳躍するのだった。

オラリオの南方から『ギルド』のお膝元である『中央広場』セントラルパークへ。

【暴喰】ザルドが、快進撃を行う。

その先には、見るからに彼を包囲殲滅するための罠である氷の結界が敷かれている。

そこへわざと誘き寄せられるかのように、ザルドは悠々と堂々と直進する——如何なる謀略が立ち塞がろうと構わず粉碎して自らの道を征く、悪派閥イヴァイルスらしからぬ『覇者』レベル7の正道を見せつけるが如く。

彼の歩みを阻める者は誰一人としていない。

立ち向かおうとした冒険者の悉くが、彼の振るう強者の『牙』ステイタスによつて喰い破られ、無残に散つていく。

——その『覇者』の『牙』が、不意に停止させられた。

「——臭い。臭過ぎるぞ。お主じゃな?」ひとなつ「夏の三角コーナーや排水溝の腐敗臭を凝縮したような死臭の持ち主は。これほどの臭いを平気で撒き散らすとは……いい加減にせんか」

「なんだと? なにを言っている、貴様は……何者だ?」

ザルドは、自らが振り下ろそうとしていた大剣が静止させられていることに兜の下で驚愕する。

瓦礫の山に埋まった冒険者たちを邪魔だと払い除けようとした彼の剣が、眼前に現れたサラによつてその切っ先を摘まれる形で止められていたからだ。

「妾はサラ・ブラッドルーラー。そして貴様は……その頬に伸びる二つ傷の風貌、確かザルドとかいう、フィンの言つておつた輩の一人じゃな。なんでも陸の魔獣ベヒーモスの毒に侵されておるとか。なるほど道理で、ふむふむ、そういうことかの」

「いきなり現れたかと思えばなんだ、知つたような口を。それよりも、驚いたぞ。『顔無し』が触れていた、こちら側の兵数を一夜にして千名以上削つた女。貴様のような冒険者がまだ……いや、違うな。貴様、なんだ?」

サラの正体を値踏みしたザルドは訝しむ。

彼女の身体から漂う、その血の臭いを嗅ぎ慣れ親しんだモンスターフェルナの気配と、彼の主神や仲間の冒険者に通じる神気の雰囲気。本来相反すべき、矛盾したモノが同居しているその様子に、歴戦の英雄であつた彼もすぐには『未知』を『既知』に変えられなかつた。

そして、彼が理解を及ぼせるより早く、サラは相手方の分析を完了させた。

「よう分かつた。お主さては、ろくに下処理もせぬままあやつ肉を食らつたな? ベヒーモス肉の毒は超が三つは連なる劇毒よ、完全解毒せずには頬張ればその身が侵されるも必然……まったく、そんな死に体でよくそう平然と振舞えるものよ」

「っ！ 貴様、俺の身体のことを……」

「とりあえず親切な妾はこれをくれてやろう。フィンから聞いておるぞ？ お主はあの氷結界の中で猪人<sup>ポアズ</sup>が迎え撃つとな。聞けばなにやら因縁があるようではないか。その戦いの前から死臭を漂わせるのも無粋じやろうしのー？」

一人納得したように頷きながら、サラは影から引き抜いた一瓶の薬をザルドに装備の上から浴びせた。

緑の蛍光色に光る怪しげな薬、その効能をザルドが察するより早く――。

「そら、せっかくじゃし向こうまで送ってやるのじゃ。くれぐれも舌を噛むでないぞ？」

「なにを——うおおおっ!？」

有無を言わせない流れのまま、サラはザルドの首根つこを引つ掴む。

そして勢いよく——フィンから彼を誘い込むと予め知らされていた『中央広場』<sup>セントラルパーク</sup>を覆う氷結界のド真ん中目掛けてブン投げた。

ザルドの巨体をもものともしないサラの腕力はなんと、地面とほぼ平行に彼を投げ飛ばして……予想よりだいぶ早い、最終決戦地への到着を成し遂げさせたのだった。

「待っていたぞ、ザルド。この手で貴様を——何故飛んできた」

「俺が知るか、糞ガキ……!」

どうにもしまらない、『執念』と『失望』の対面。

着弾の際に巻き上がった土埃の中からむくりと姿を起こしたザルドは、困惑するオツタルの前に「ふぎけんな」と、予想できるはずもない理不尽に巻き込まれたことへの怒りを露にする。

ひとまず剣を構えてらしい雰囲気<sup>雰囲気</sup>を遅ればせながら作ろうとしたところで、彼はふと気づく。

——自らの身体を蝕んでいた忌々しいベヒーモスの呪毒による激痛が、ほぼほぼ消え失せていることに。

しかしそちらに考察を深めるよりも、今は目の前の獲物の方がよほど大事だった。



こちらにも気を取り直したと言わんばかりのオツタルが双大剣を構えるのを見て、ザルドは大兜の下で笑みを浮かべ構えを取るのだった。

——なにがなんだか分からんが、今日と言う最期の晩餐の日に最上の状態で食卓戦場に座れるとは。これこそ神々の思し召しと言うやつか……などと、考えながら。

そんな、万全な状態で臨む両雄の様子を確認して、サラは『アンファイテアトルム』  
『円形闘技場』に戻る。

そこにはいつの間にか、彼女の対峙すべき敵という奴が姿を現していた。

「つと、ようやくお出ましじやな。対妾専用の切り札……ほう」

悠然と歩み寄るは、全身の筋肉を大樹の幹のように膨張させた筋骨隆々の獣人。

その身に纏うは白き拘束衣。しかしそれは今にも内側から張り裂けそうなほどにパツパツになっている。

そして、力強い心臓の鼓動を離れた距離にまで響かせる男の顔には、種族を示す猫科の耳と髭、鬣——それらの他に、白濁して使い物にならなくなった左目と、紫芋のように変色した皮膚、そしてミミズのように浮かび上がって不気味に脈動する血管という、見るからに悍ましき特徴の数々が浮かんでいた。

「素となつているのは獅子人レオーネか。そのただならぬ雰囲気の正体は、科学的で嫌な臭いケミカルチックからして、薬物と暗示による強化じやな……それもかなり深い。そしてその中に幽かなれどしつかと香る、この清廉な気配の主は——精霊か」

『ヴ……ヴヲヲヲヲヲオオオオオオオツツツ!!』

サラの独り言が聞こえたのか、獅子人レオーネだったものが反応を示す。

涙と涎を撒き散らしながら爆ぜるように咆哮するその姿は、もはやモンスターよりもモンスターらしい魔の者である。

——それは、ヴァレッタが急遽バスターに命じて用意させたアパ

テー・ファミアリアの産物だった。

彼の用意した、特定の魔道具で操作可能な『精霊兵』とは真逆の性質を持つ凶戦士<sup>ハイサーカー</sup>。

外部による一切の制御と持続性を放棄した代わりに、通常一振りである『精霊の短剣』を五本刺しにし、更にはそれらを相互に干渉させることで暴走させた、一度解き放たれたならばその場に膨大な破壊を生み出す短期決戦型の『精霊兵』の成り損ない——『精霊凶兵<sup>バジュラビート</sup>』。

レベルにして8は下らない、かつてのゼウスとヘラの栄光に対抗するべく作られた悪派閥<sup>イヴァイルス</sup>のとおきの一つ。

その獰猛な獣<sup>ケダモノ</sup>を前に、サラの顔には……。

「下らん……実に勿体ないことをしてくれるな、悪派閥<sup>イヴァイルス</sup>よ。無駄に素材を弄繰り回すことを芸術と勘違いしておる愚か者の顔が目には浮かぶわ——見よ、精霊が啼いておるではないか」

……冒瀆的な改造人間<sup>りょうりゅう</sup>を作った相手に対する、明確な怒りが滲んでいた。

「このような暴挙、許してなるものか——ここに妾が、精霊調理<sup>セイレイチャウリ</sup>の手本というものを見せてくれるわ！」



ひらり、と宙を舞う紙のような動きでサラは『精霊狂兵』の抱き付きを回避した。

薬物投与と『精霊の短剣』によって、レベル9の動きさえ捉え得るとされた『精霊狂兵』の視力にさえ映らない神速の体捌き。

獅子人の身体はすかさず地面に足の指を喰い込ませ、皮膚と地面の凹凸の摩擦によって足元から焦げ臭い煙を上げながら急速反転。再度サラの身体を捉えようと、再び顎を大きく開けて襲い掛からんとする。

だが、既に戦闘の流れを司る権利は彼女の手に移行していた。

力の向きを切り替える瞬間、どうしても生まれてしまう停止の隙。無論彼は素体の鍛錬と上昇した身体能力によってその高速機動の弱点を限界まで潰していたが、サラの眼はその刹那を捉えて槍を振るう。

『精霊狂兵』の心臓をすかさず狙い穿ち、サラの槍はそのまま敵の身体を地面へと縫い付けた。

『グギャツ——グガアツ!?!』

「宣言通り先手は譲ってやったぞ。ここからは後手の手番じゃ。もつとも、汝に次の手番は永遠に廻っては来ぬがな」

目打ちならぬ、心臓打ち。

肋骨の隙間を貫くことで、サラの魔槍が『精霊狂兵』の肉体の中央を固定する。

続けて彼女は影から小ぶりの槍を四つ召喚し、彼の四肢を順に地面に縫い留めていく。

橈骨と尺骨……前腕の骨二つの間に、右腕と左腕でそれぞれ一つ。そして脛骨と腓骨……ふくらはぎの位置に存在する二つの足骨の間に、これまた左右一つずつ。

仰向けの形で計四振りの槍を打たれて、両腕両足を動けなくされた『精霊狂兵』の姿はまさに『まな板の鯉』。

ならば続けて鯉を捌くための刃が取り出されるのが道理。

サラの影から姿を現した包丁が、特殊武装特有の輝きを放つ。純黒の包丁《ニーヴ・ニーズホッグス》。

クレスの保有していた精霊を害する邪竜『ニーズホッグ』の爪を元にした、霊体に刃を通す《ヤッフサ霊断属性》の牛刃である。

『ギャオオオオオ——オオオンツツツ!!?!?』

「苦痛は素材の旨味を濁らせる。今、解放してやるからの——まずはその邪魔な『殻』から取り除いてくれよう」

憐れむような声と共に、獅子人レオーネの上げる悲鳴に構わずサラは刃を振るう。

繊細にして大胆とも呼べる彼女の包丁捌きは、瞬く間に敵の皮を剥ぎ、肉を裂いて解体していく。その肉体に都合五つ刺された『精霊の短剣』、及びをそれを起点として全身に張り巡る精霊の力には一切の傷を負わせることなく。

そうして捌き卸された物理的な肉体には目もくれず、サラは丁重な手つきで以て、『精霊の短剣』を慎重に『バジュラビート精霊凶兵』だったものから摘出した。

——なお、心臓に穴を開けられようと構わず抵抗を試みていた肉体も、流石に肉と骨、そして内臓のいくつかに至るまでを切り離されては生きていられるはずもなく。

『オ、オオオツ……——』

そうしてあっけなく沈黙した『バジュラビート精霊凶兵』は既に脅威に在らず。

本命たる『精霊の短剣』を前に、サラは次なる調理の手順に取り掛かる。

小刀の形状を核としていた精霊の力は不正の名の下アバデーに書き換えられた性質に従い、次なる宿主を求めて近くに居たサラの身体へと光の触手を伸ばし始める。

放っておけばその触手は彼女の全身を植物の根のように侵食し、魂に干渉して、先ほどまでの『バジュラビート精霊凶兵』のように激情にかられてただ本能のままに暴れ狂うだけの怪物へと墜としてしまうだろう。

されど、現状は真逆であった。

クレスの手によって引き出された彼女の魂の真髓スキルが、逆に『精霊』たちの有り様に干渉を始める。

——スキル【グラニータ・デイ・アニマ・アヴァツロニア楽園精霊の献上氷菓】、起動。

「——狂乱の精霊たちよ、鎮まるがよい。その穢れ、妾サラ・ブラッドルーラーの名の下に祓い濯ぎて清めようぞ」

効力の一つである『精霊交感(祈)』によって、暴走する精霊に直接語り掛ける。

サラは『精霊の短剣』から伸ばされてきた触手に抵抗することなく……むしろ皮膚を喰い破り、体内に浸食を始めたそれらを介して、精霊たちに心から声を投げかけて、宥める。

——もはやお前たちを閉じ込め、苦しめる外道はここにはない。

——故に安心して、その身を我が腕に委ねよ。今すぐ、その内に巢食う苦痛からも解放してやろう……と。

サラはいっそう細やかに《ニーヴ・ニーズホッグス》の切っ先を操作し、手に取った『精霊の短剣』の内部に介入。

迸る精霊の力の隙間に分け入り、見える『不正』<sup>アパテー</sup>の毒素を除去し始める。

恐らくは邪神アパテーの神血<sup>イコル</sup>に由来する対霊の毒薬を、刃一つの手術で以て物理的に取り除いていく。

「おうおう、苦しかったろうに。じゃがそれもここまでよ。主様が神より授かりし秘技、万が一にもお主らに痛みを与えることもない。妾はしよせん孫弟子に過ぎぬが、それでもこと調理の腕前に関しては「既に俺を超えているな」としつかり太鼓判を押されておるのう」

サラの瞳に映る、『精霊』の内側に点々と存在する黒ずんだ染み。

それこそが彼らを苦しめる元凶、バスラムの呪毒である。

彼女はそれら一つ一つを慎重かつ素早く、精霊の外へと刃の先端で弾き飛ばしていく。

その手並みは熟練の職人の如く滑らかであり、彼女が最初の一振りの処置を終えるまでに要した時間はおよそ三十秒。

続く二振り目の処理は当然一振り目より早く、毒の傾向を学習したサラは作業時間の五秒短縮に成功。

更に次なる三振り目では七秒短縮し——最後の『精霊の短剣』の毒抜きに至っては、僅か三秒で完了させたのだった。

「これにて毒の処理は終了じゃ。……よーしよしよし、久々に本来の

姿を取り戻した感覚はさぞ気持ちよからう?」

悪派閥の……サラに言わせれば「趣味の悪い」加工から解放された精霊たちは、『短剣』ではない光の真体となって彼女の周囲を泳ぎ、飛び、そしてまた跳び跳ねていた。

鯨、カワセミ、兎……本来彼らが置かれていた環境に生息する命の姿を模した彼らが、思いのままに舞い踊る『精霊祝祭』。

悪質な連中の手に堕ちて意図しない形に造り変えられてしまった、耐え難き苦痛が終わったことへの悦び。

その絶頂を救いの主を囲んで全身で示す精霊たちは次第に、またその姿形を変えていく。

ただし今回は、他者の手によるものではなく——彼ら自身がそうあらうと望む形で。

サラが取り出した器の中に、各々が形を変えて盛り付けられている。

それこそが彼女のフルコースが一つ、『口直し』に据えられた一品。「——出来上がりじゃ」

外見は、粉雪が山のようにうず高く積み上がったかき氷のように見える。

しかしその全体が淡く発光しており、満ち満ちる生命力の瑞々しさが感じられる。

『楽園精霊の献上氷菓』——精霊を形作る自然の魔力、その『感謝』に溢れた透き通る味わいは、一つ前に出された『魚料理』の余韻をさっぱりと洗い流して次の『肉料理』と客の意識を向かい合わせてくれるであろう。

「それでは、いただきます。……うむ、やはり美味じゃな!」

出来上がったばかりの精霊氷菓を、サラは一口で食した。

それと同時に、彼女の魔力量が爆発的に跳ね上がる。

スキルの持つ残りの効果によって、『食した分だけ本来の許容量を超えて魔力を過剰充填することが可能』となったのだ。

己の身体に溢れかえる魔力……それを向けるべき先はもちろん、決まっている。

「——さて、腹ごなしに付き合うてもらおうかの」

サラは獅子人<sup>レオーネ</sup>を固定する串としての役割を終えた魔槍《86式連結式葬槍<sup>レギンレレイヴ</sup>》を手に取り、遙か上空に投げ飛ばす。

そして、彼女自身もまたその軌跡に追従するように大跳躍。

高さにしておよそバベル三つ分……オラリオ全域を軽く見渡せるほどまでの座標に至った彼女は、逆さの体勢となって右脚に力を籠める。

天地が逆転した視界の中で、オラリオに蔓延る悪性腫瘍どもを一瞥し、その一切を捕捉して——。

「ひーふーみ……まあ八百ほど削ればよかろう。では行くぞ、これが妾なりの感謝の表れじゃ！」

精霊を食らって手に入れた大津波の如き魔力。

その全てを脚部に一点集中し、その昂るがままに、サラは弧を描くようにして落下してきた魔槍の石突を鋭く蹴り墜とす。

通常腕の三倍の力を持つと言われる剛脚で以て、重力の勢いを加算して放つ魔槍の流星。

それはクレスが師スカサハより授かりし魔槍技の一つにして、その孫弟子サラに受け継がれた奥義。

「——宙<sup>ソラ</sup>を見よ、運命を呪え。そら、凶星が墜ちてくるぞ——『夜天穿つ血翔の槍』！」  
ゲイ・ボルグ・シユルゲイザー

魔力はサラの体内で血液に変換され、その膨大な量の『赤』が一滴残さず魔槍に吸い込まれる。

そして魔槍の投擲は——穂先を一から十、十から百、百から千近くへと分裂させて、オラリオに蔓延る悪派閥<sup>イヴァイルス</sup>ども目掛けて降り注ぐ。

「——ガフツ」

「うおわっ、なんだいったい——ぬぐわあっ!?!」

『——ピギイツ!?!』

「ひっ、ひいひいっ……うわあああっ! ——ぎエっ」

『ブルルルツ——フゴオオオツ!!?!』

「た、助けっ——嫌だ嫌だ嫌だギヤツ!!」

ザルドやデイス姉妹、ヴァレッツタなど一部の連中——フィン曰く



『因縁の宿敵』とのことでサラがあえて見逃してやった者たちを除いて、室外にいたほぼ全ての悪派閥が突如空から降ってきた流星槍雨に貫かれていく。

『夜天穿つ血翔の槍』、それは魔槍《86式連結式葬槍》の本領発揮を意味する。

サラが血液を介して指定した複数の敵を上空から並行捕捉・追尾して仕留める、対軍から対国の攻撃範囲を有する超々広範囲殲滅攻撃。

もし回避を試みるならば、最低でも双方レベル10に達した『女神の戦車』の俊敏さと後の『幸運兎』の幸運が必要となるであろう。つまり現状、悪派閥側にサラの眼から逃れられる術はなくて。

その時運よく室内で戦っていた者たちを除く、ほぼほぼ全てのオラリオの敵が……人であれば心臓を、モンスターであれば魔石を打ち抜かれて沈黙した。

「ま、妾の手に掛かればこんなものじゃ。——軽々しく『悪』などに手を染めた己が浅慮を悔やむのじゃな」

槍に遅れて落下しながら、サラは眼下の惨劇を見やるサラ。

小さな豆粒のように見える悪派閥たちの死に顔は、その大半が驚愕と後悔を写すものだった——まるで「自分の最期がこんなものであって良いはずがない」とでも言うように。

その思い込みのなんと傲慢なことか、と彼女は呆れる。

「罪を犯すということは、自らが罰されることへの同意書に署名するのと同じことなのじゃよ。誰かを害すれば、その刃は巡り巡って自らの下に返ってくる——その多くは、復讐と言う大義名分を伴ってな」  
堅苦しい説法は勿論、子供向けの単純明快な寝物語でさえ勧善懲悪を謳っているのだ。

それを与えられる機会は連中にもいくらかでもあったはずで、そこから何も学ばずに自ら道を踏み外したのだから、相応の罰を受けるのは至極当然の世の道理であろうとサラは思う。

……ただ、と彼女はまた思う。

「やってしまっただけから言うのもなんじゃが、まーたやり過ぎてしまっ

たかの？」

クレス 人よりもまだ人らしい感性を持つサラは、己の行為を振り返って頭を悩ませる。

一切隠すことのない、オラリオの公衆前でのステイタス及び必殺技解放。

目の良い一部の神々であれば、サラの出自に目を向けようとする輩も現れるかもしれない。

「いや、徐々に精霊を食す機会に恵まれて浮かれておったが、よくよく考えれば……いや、まあ、うん。余計な被害を減らしたと考えれば大丈夫じゃろ。——でもこれで、面倒臭い連中に完ツ全に目をつけられた気も……その時はカオス様を頼らせてもらうかの！ 前に「地上で困った時は迷わず私を頼ってくれたまえ！」と言っておったしな、うん！ そうするのじゃ！」

そんな他神任せの解決策を呟きながら、サラは地上へひゅうううううう……と落ちていく。

それはなんともしまらないオチのように見えるが、愚かにも『悪』の道を選んだ悪派閥イザイルスたちの末路にはある種相応しかったのかもしれない——こうして見せ場らしい見せ場もなく、大義も名分もないサラの気分一つによってあっけなく一掃される道端の土埃くらいの扱いで。

ちなみに同時刻、神カオスは猛烈に嫌な予感がして神ディアンケヒト謹製の胃薬の在庫を確かめるのだった。

そして運悪く切らしていたことも、ここに書き添えておく。

## 他力本願なぞクソくらえ、『運命』なぞ超えてなんぼの 冒険者道 by 迷宮馬鹿

「妹の血筋か。……千年も経てばいつかは絶えるものだと思っていたがな。孫や曾孫が生まれていたことまでは知っていたが、それ以降は関わらなかつたからな。神ヘラと話題にすることもなくなったし、とうに途絶しているものだと思いついていた。」

しかし、今は昔と違って村や街が容易く壊滅する時代でもない。そう考えれば、一つの血が十年百年、千年続くのもさほど不思議な話ではないか……そうか、そうか」

顎に手を当て、クレスは昔日の記憶を掘り起こす。

彼の妹、テティシア・テラティエア——それは神々の時間にして一瞬、そして人間にとつては千年も前の人物である。

彼も生きていた『英雄の都』の創成期においてヘラ・ファミリアに所属し、最終到達レベルは6。それは当時としても破格の才能であり、とある事件で若くして世を去らなければまだ上に行けたとさえ言われていた。

そんな、己と源を同じくする血族の子孫を前にして。

いくら普段は迷宮ダンジョン以外に関心を持たない彼と言えど、まったく感慨を抱かないということはなかった。

「確かに面影がなくもない。——まあ、それはそれとしてただが、それも一瞬のこと。」

今を生きるクレスにとつて過去はあくまでも、ふとした折に懐かしむ程度のものであって、それに浸るほどのものではない。

数秒と立たずに視線を過去から現実今に引き戻した彼は、アルフィアが溢した先の台詞の方に触れる。

「この『神獣の触手』のことを知っているかのような口ぶりだな。もしや、お前が意図して何処かの神に召喚させた个体だったか？」

「そうだ。神をも殺す迷宮ダンジョンの『牙』——それで以て地獄ダンジョンの蓋を開け、地

上を再び渾沌と混沌に満ちた、かつての英雄時代に逆行させる我々の『計画』。その核たる『大最悪』として、神ルドラの力アルカナムの下に招来していた。……残念ながら、御身によってあつけなく討伐されてしまったようだが」

しかし、その言葉とは裏腹にアルフィアの口調は落ち込んでいなかった。

むしろクレスの耳の調子が正しければ、弾んでいるようにさえ聞こえた。

というのも——元より意図せぬ地上側サラ・ブラッドローラーの追加戦力のせいで、当初彼女らが目論んでいた『計画』の形は既に破綻しかけていた。

そこへ今更『神獣デルピユネの触手』が討たれたことが加わったくらいで、何が変わるといえるのか？

それよりもむしろ、彼女はクレスという理想の先達と出会えた望外の幸運に目を向けていた。

ヘラ・ファミリアである彼女は当然、拠点ホームに遺されていた記録から知っている。

クレス・テラティアリエ——自らの祖先と血を同じくする者にして、迷宮ダンジョンに関わる多くの謎を解き明かし、現在の冒険都市オラリオの礎を知識面から築いた紛れもない『英雄』。

——ならばきつと、今の自分が抱いている失望も分かってくれようだろうと。

「しかし、『大最悪』がいなくなろうと構うものか。クレス・テラティアリエ。御身にも是非、力を御貸し頂きたい」

「何のためにだ」

「貴方も分かっているのだろうか？ 今のオラリオの脆弱つよみ性を。平穏というぬるま湯に頭の天辺まで漬かり切った『冒険者』の惰弱つよみを。——これを正すためには今一度、世界には『立ち向かうべき強大な危機』がなくてはならない、と」

「……なんだ、つまりお前もあの神エレボスとやらの仲間か」

「アレを知っていたのか？」

「神をアレ呼ばわりか。その凶太さは嫌いじゃない。……まあ、つい

昨日ちよつと顔を合あわせてな。で、あの邪神の関わる企みに乗れと言ったな？ なら答えは当然断きるだ。あんな馬鹿げた考えに興味はない、そつちで勝手にやっつてろ」

しかしアルフィアの期待とは裏腹に、クレスが彼女の意見に同調することはなかった。

彼はそれ以上は話すことはないと言わんばかりにしつしつと追い払うような素振りを見せ、それから背を向けて肅々と『神獣デルビュネの触手』の剥ぎ取り作業に戻ろうとする。

取り付く島のない、いつそ清々しいほどの拒絶の態度。

対して彼女は、そつと右手をクレスの背中へ伸ばして――。

「――【福音ゴスペル】」

「おつと」

背後から迫る不可視の音撃。

それを気配から察したクレスは危なげなく回避し、振り向いて下手人たるアルフィアに非難の眼を向けた。

「なんだ、危ないな」

「私の魔法を見向きもせず避けるか……御身が勝手に話を打ち切ろうとするからだ。それに、馬鹿げているだと？ 何故だ。御身はかの栄光の時代と今の墮落した時代を比べて、その落差に何も思うところはないのか？」

「別にないが」

そうあっさりと言い切ったクレスに、彼女は愕然とした面持ちを向ける。

なんなら心底面倒くさそうに溜息さえ吐いてみせる彼に、アルフィアは更に顔を顰めた。

――彼女が記録英雄譚から見た『英雄』ならば、決してそんなことは言わないはずだった。

『冥洞一灯伝』において、主人公は散り際にこう残したと語られる。

彼の知識と精霊を付け狙う連中に襲撃され、追い込まれ、下層に繋がる奈落に墮ちる寸前で、彼は襲撃者たちに向けて厳かに呟いた。

『俺の知識に群がる死肉喰らいども。目先の利益につられて三歩先の未来を見ようともしない愚か者どもめ。良いだろう、今は一時の享楽に精々浮かれるが良いさ。しかしその短慮さが将来、自分の首を絞めることになるのだ』

そう言い残して彼は自ら迷宮ダンジョンの奥に飛び込んだ。

後に残された襲撃者たちは主人公の遺した知識を売り払って利益を得たが、後に彼の精霊に導かれた『傭兵』たちによって、四肢を引き千切られ五体を『要塞』の五方に晒されて終身の不名誉を受けることになったのだった——と。

当時のクレスはさぞ、襲撃者たちの愚かさを恨んだことだろうと彼女は思っていた。

——そして、今のオラリオや冒険者が安穏と平和の空気を吸って停滞に甘んじていることもまた短慮。世界には未だ『災厄』が残っているというのに、ゼウスとヘラの眷属を外に追いやってなお進歩の兆しも見せない連中のことを、かつて彼に襲撃をかけた者たちと同じく『愚者』と称して忌み嫌うのが当然ではないのかと。

だというのに、当人はそれを意に介さず、アルフィアの訴えに耳を貸そうとしない。

ましてやこうも軽んじられるなどは、彼女は露ほども思っていないかった。

「であれば、誰がああ『隻眼の黒竜』ジズを討つと言う？ 神時代最強と謳われた私たちでさえ叶わなかった『終焉』を、このままでは誰も打ち倒せまい。『救世』マキアは成されず、世界が滅びの路を辿ることは目に見えている。なればこそ、この温室の世界を一度破壊し、かつてあの黒竜の瞳に疵をつけた『傭兵王』ヴァルトシュテインのような、神時代到来前の傑物が生まれる魔境が必要——」

「阿呆」

アルフィアの語る、切実な『想い』。

それを、クレスは残酷なまでに切って捨てた。

「やりたければお前が自分でやれ。地獄が必要というのなら、自らそ

ここに身を置け。誰かをお前の願いに巻き込むな。叶えなければ他人に委ねず、自分で掴み取れよ」

——他力本願など笑止、『救世』<sup>マキア</sup>とやらを叶えたくばあくまでも自助努力を以て為せ。

そう淡々と正論で殴るクレスに、アルフィアは首を横に振って否定した。

「私には無理だった。そして、これからも……この身は【才禍代償】<sup>ギフ・ブレッシング</sup>という決して拭うことの出来ない『病毒』<sup>ウイルス</sup>に冒されているのでな。もう数年と保てば上等とさえ言われている」

「なんだ、それは？」

「この身に巢食う忌々しい病気だ。一度発作が起きればレベル<sup>ダウン</sup>下降さえ伴う不治の呪い。生まれながらにして背負ったこの病のせいでもはや『黒竜』を滅ぼすだけの力をつける時間的余裕は私には残されていない。——故に、たとえ世界から千の恨みを買おうとも、この身を次の世代の贄として新たな『英雄』の歴史を紡がせる。それが私に残された、最後の役目に他ならない！」

「……ふむ」

クレスの瞳に映るのは、悲痛な覚悟を決めたアルフィアの顔。

自らの命を投げうってでも次代に継ごうとする、消えゆく老兵が輝かせる最後の灯。

それはなんと悲劇的<sup>ドラマチック</sup>で、浪漫的<sup>ロマンチック</sup>で、感動的<sup>エモーショナル</sup>な——。

神々が好みそうな、ありきたりでつまらない『覚悟』だと彼は鼻で笑った。

「だからなんだ？ そんな自分勝手な理由が他人を巻き込んでいい道理になると思うなよ」

今のアルフィアの顔は、クレスがその永い人生の中でとうに見飽きたものだった。

彼がこれまでに幾度となく見送ってきた——都合の良い言い訳で自らの力に勝手に見切りをつけて、『理想』を諦めた『敗残者』の顔。

「年を重ね過ぎたから」、「安心して『夢』を託せる後継者が見つかったから」、「自分の能力ではここが限界だから」、拳句の果てには「もう

頑張ることに疲れてしまったから」などと。

ああ——まったくもって馬鹿馬鹿しい、下らない。

夢を追うことを諦めた者たちの口から吐かれる戯言なぞ耳を傾ける価値さえないのだと、彼は彼女の語る『希望』を蔑む。

「二つ教えてやろう、後輩。……お前は随分と自分の価値を高く見積もっているらしいが、勘違いも甚だしいぞ。悪性のスキルがあるから出来ないだど？ 甘ったれるなよ。そも、たかだが己の運命も超克できない者の安い命一つを捧げたところで、お前の言う『黒竜』討伐が叶うものか」

「……っ！」

アルフィアの言う『計画』に隠された真意を、クレスの老獪な目は見抜いていた。

神でなくとも、同じ『冒険者』だからこそ分かる彼女の『正義』。

それは……既に己の限界を見定めてしまった自分への『諦念』。

そして、現実を前に膝を屈してしまった自らへ向けた『後悔』。

だが、そんなもので形作られた人造の『英雄』とやらに世界の命運が担えるわけがないと彼は断罪する。

「俺の『想い』は俺だけのものだ。俺が決める。俺が背負う。俺が超える。『理想』ってのは、そういうものだ。——他人に託すだなんて、耳障りの良い言葉で逃げるなよ。その『計画』とやらはな、勝手に現実から逃げ出したお前がその夢だけを他人に自己都合で押し付けてるだけのものだろうが。そういうのをなんていうか知ってるか？」

「……」

「クソくらえ、だ。お前らの丁寧に考えたご立派な脚本なんざ、そこらの素人が妄想を膨らませながら書きなぐったご都合主義塗れのチラシの裏書きにも劣る駄作に過ぎん。上から目線のご高尚なお説教、それも世間に大迷惑を振りまく問題作なんかよりも自己中の自慰語りの方がよっぽど面白いだろうぜ」

それだけ言ってもなお、目前に佇む後輩は頑なに意見を変える様子を見せない。

そんな彼女の見せる、取り澄ますような表情が。



「所詮世の中などこんなもの」と言わんばかりの達観した風な責任転嫁面が気に入らなくて。

クレスはそこへ向けて——千年経ってなお薄れるどころかなお強く燃え盛る己の熱情を叩きつける！

「——『諦め』も！『悔い』も！自分のものなら徹頭徹尾最後まで自分で背負え！自分の『弱さ』を他人に投げるな！お前の『理想』を叶えられるのは他でもない、お前自身しかない！」

厳しい目を向けるクレスに、「それでも」とアルフィアは臍を噛む思いで口を開く。

「出来るのならば……どうにやっている」

「出来ると分かっているからやるのか、お前は。はっ、随分と甘やかされて育ったらしいな。なんだってやって初めて出来ると分かるんだ。それとも神ヘラは単なる二番煎じのためにお前に恩恵ファルナを与えたか？とも思っているのか？」

「……」

「悪性の『腫瘍』スキルがあるから無理だと？ 違うな、原因と結果が逆だ。

お前が無理だと決めつけているからこそ、【才禍代償】ギフ・ブレッシングが発現したんだ。目を逸らすな。神ヘラも言っていただろう、『神の恩恵』ファルナはお前の魂の鏡だと」

「……それは」

【才禍代償】ギフ・ブレッシングは紛れもない、お前自身の意志の弱さの象徴だ。もしお前にそれを乗り越えられるだけの意志の強さがあったなら、打ち消すことだって出来たはずだ」

確固たる自信を以て、クレスは情けない顔を晒す後輩に断言した。

——なにしろ、彼自身がそうして執念深く迷宮攻略を諦めなかった結果が今なのだから。

寿命だとか老化だとか、そうした一般人にとっての『絶対的な運命』は冒険者にとって乗り越えられる『壁』でしかない。

そう言ったものを尽くブチ破るための万能鍵こそが『神の恩恵』ファルナ。

後は全て、担い手の意思次第に他ならないのだと彼の存在が証明している。

——だが、ここまで言っても通じないのであれば仕方がない。

「とはいえ、そこまで求めるのが通常酷なことは知っている。仕方ないよな、アルフィアと言ったか？ お前も所詮、弱い凡人に過ぎなかったようだからな」

「……なんだと？」

「普通の人間は限界に直面した時、超えられないと諦める。お前もそんな奴らの一人なんだろう？ お前は弱者なりの結論を出した、だったらその通りにやってればいいさ。ただし、俺を巻き込むな。俺は弱者の我儘に付き合えるほど暇じゃないからな。このまま放っておいてくれ」

アルフィアの精神の根本が只人と変わらないものに過ぎないのなら、それも仕方がなかったのだろう——ただし、凡人を英雄紛いの狂人を一緒にするな。

限界を突破する『資格』を持ちながら有効活用しようとしな……奇しくも、彼女もまた彼女の蔑んだ英雄都市の罪の一つに過ぎなかった。

それだけの他人事。

それでこの話はどう終わりだと、絶句するアルフィアを置いて彼は今度こそ『神獣の触手』の素材回収に取り掛かろうとして——。

【福音】

「またか？ いい加減にして欲しいんだが……」

二度身に迫った音爆撃を避け、クレスは鬱陶しそうに彼女を見やる。

ただし、その気配があからさまに先ほどまでとは異なっていた。

「……言うことに欠いて、私が『弱い』とは。災禍と謳われたこの身を明確に『弱者』だと……これまで誰も、そんなことを言ってくる奴はいなかった」

全身に魔力を滾らせたアルフィアの顔からは、これまでの超越然とした様子が消え失せていた。

その代わりに滲み出ていたのは——彼女の心の奥底に封じられていた悔しさ、そして怒り。

「——そこまで言ってくれるのなら、このままご教授願いたい。御身の語る、『強者の在り方』というものをな！ 今、ここで！」

逆鱗を撫でられた竜の如き、強大な覇気が炸裂する。

八つ当たりのようなそれには、依然として『過去』英雄の幻想に縋る諦観があつたが——その中に、僅かばかりの『未来』己の超克への渴望本音が見えて。

ここまで不機嫌に近い不愛想面を向けていたクレスの頬が、極僅かに緩む。

「ハ、ここまで言われてようやく少しは見られる顔になったか？

……良いだろう、獲物を掠め取った謝罪ついでだ。先輩として『冒険者の心構え』、その初歩くらいは教えてやろう」

直後、猛火と轟音の激突が迷宮ダンジョンを揺るがせた。

## 荘厳なるかな九つの鐘、闇夜拓く明星剣

破壊の戦塵が舞う。崩落の轟音が止め処なく反響する。

巻き込まれ殲滅される、モンスターのア鼻叫喚が合唱を刻む。

——ここに常人が迷い込めば、すなわち地獄に他ならぬと判断するだろう。

【禁忌】と【静寂】の間で交錯する、一撃一撃が必死と成り得る絶技の嵐。

それが、戦場となった迷宮の環境をド派手かつ瞬く間に塗り替えながら吹き荒れる。

徐々に階層を昇る形で戦況を発展させる彼らの現在位置は、第27階層。

第25階層から伸びる『巨蒼の滝』の最下部である。

早々に会敵した階層主『アンフィス・バエナ』はとうに討伐させられており。

文句を言う主がいなくなったのを良いことに、彼らは各々の主砲を太っ腹にぶっ放していた。

【福音】【福音】【福音】【福音】【福音】——【炸響】！

「見え見えだな、ならば態々当たってやる道理もない」  
アルフィアの主力たる不可視の音撃、超短文詠唱から繰り出される音撃魔法【サタナス・ヴェーリオン】の連続炸裂。

しかしクレスはその隙間を体技一つのみを以て熟練の軽業師のように擦り抜け、連撃をその余波すら一つもその身体に掠らせない。

背後で『巨蒼の滝』が半ばから決れ吹き飛んだことに構わず、彼は魔力を練る。

「攻撃そのものが見えなくとも、術者の視線に魔力の揺らぎ。狙いを推測する手段は幾らでもある——そら、次はこちらの番だ」

「ちっ、わざとらしい挑発だな！ 良いだろう、乗ってやろう！」  
お返しと十の小太陽を並行詠唱破棄で展開したクレスに対し、次は

アルフィアが果敢に挑む。

緩急をつけた複雑な軌道で迫りくる火炎球の乱れ打ちに飛び込むようにして、避けて、避けて、避けて——背後から迫る隠された一発を、足元に転がっていたモンスター<sup>の</sup>遺骸を投げつけて対消滅させる。

「この程度か、随分と容易いものだ——ぐっ!？」  
「甘かったな」

しかし、足元からの隠れた一撃が、その余波ですんでのところ<sup>クリンヒット</sup>で命<sup>を</sup>中を避けた彼女の半身を焼く。

事前にクレスは、あえてそちらに思わせぶりの視線を投げていた。

「何かある」ように見えてその実何もないのだろうか?」と思わせておいてからの、「実はきちんと仕込まれていた」という虚実織り交ぜた二段構え。

「くっ、嫌らしい手を使ってくれ……!」

「そうか。この程度は当然と思っていたが、それならもう少し手緩くしてやろうか?」

「ほざけ、御身はつくづくこちらの神経を刺激するのが得意なようだな!」

「対人なら精神攻撃は基本だ。知らなかったなら覚えておけ、後輩」  
『英雄』らしくもない、そんな戦い方はお断りだな——!」

漆黒のドレスが持つ高い魔法耐性さえ容易く貫通する『プロメテウス』の強力な放射熱。

焼けた部位とそうでない部位の境目に響く激痛を堪えながら、アルフィアは怪我にすかさず回復薬<sup>ポーション</sup>をかける。そうして、足を止めるどころか更に戦意の赴くままに己の身体を加速させる——。

アルフィアの持つ魔法無効化の第二魔法『魂の平静』<sup>アタラクシア</sup>は、クレスの『プロメテウス』には効力を持たない。正確には、限りなく『無』に近いと言うべきか。

単純なレベル差もあるが、その存在を認識するや否や、クレスが命中直前で火炎球を爆発させて周囲の酸素を奪う手法に切り替えたからだ。『魂の平静』<sup>アタラクシア</sup>では魔法の放射熱を防いでも、追加効果である呼吸困難までは防げない。

それで一度気絶した後、腹部への容赦ない蹴りで叩き起こされてから、彼女は【魂の平静】アタラクシアを切つて（当たるかどうかは別として）その分の魔力を全て攻撃に注いでいた。

そうして互いに敵の魔法を回避しつつ、距離を縮めて今度は接近戦へ。

「御身のそのすまし顔、少しは男らしくしたらどうだ！」

「雄弁なのは良いが、舌を噛むなよ。危ないぞ」

加速する勢いのままに握りしめた拳を振るう彼女に対し、クレスは広げた手の平でそれを受け止め、横に方向ベクトルをズラしていなす。

すかさず地面を蹴って攻撃の向きを転換させてきたアルフィアの肩シヨルダータツクルによる突進を今度はすねを蹴って転倒させ、追撃とばかりに転んだ勢いを後押しするように腕を掴んで、宙に跳ね飛ばす。

ならばと彼女は空中で器用に姿勢を整えて己の状況を上空からの襲撃に変え、着地した天井を蹴って彼に流星のような蹴撃を見舞おうとする。

それをクレスは落下してきた彼女の足首を瞬時に掴んでハンマー投げのように振り回し、更にはそこに蹴りを叩き込んで、回避と同時に遠方への変則巴投げカウンターに変えてみせる。

「それら」

「ぐうっ……!」

軽く迷宮の壁を貫いて吹き飛んで行ったアルフィア、その後をクレスは追う。

そして彼女の立ち直りを待つことなく、その先に一足早く回って、更に元いた場所目掛けて蹴り返す。

「ふん」

「がはっ!？」

めき、と鈍い音を立てたアルフィアの身体。

それを遠慮なく再度ぶつ飛ばしたクレスは、再び彼女を追いかけて迷宮ダンジョンを駆ける。

無論、正面から反撃の一手が来ないように盾として【プロメテウス】を先行させながら。

「ぐっ……くはっ！」【福音】！ 【福音】！ 【福音】！

「左下、右上、後方か。視線を向けずとも座標指定が出来るようになったのは認めよう。それでも分かるがな」

盾代わりの「プロメテウス」を遊星のように動かして三方向からの「サタナス・ヴェーリオン」を打ち消したクレスが、一休みとばかりにアルフィアの前で足を止める。

崩れ落ちた迷宮ダンジョンの破片の上で、満身創痍になりながら荒い呼吸を繰り返す彼女。

己の血と土埃に汚れて膝をつく今の彼女に対して——向かい合うクレスは汗水一つ垂らしていない。

明確な力の差を映し出す彼我の光景。

立って上から見下ろすクレスの余裕に、アルフィアは激昂と共に奮起した。

「それで、この程度か？ お前の『想い』とやらは」

「ふざけるな！ まだまだだとも——！」

喉は枯れかけ、四肢は引きつるような痛みを訴え始めている。

されどアルフィアの動きに陰りは見られず、むしろ段々とキレが増してきていた。

その理由の一つは回復薬ポーションによるものだが、もう一つは、彼女の学習能力の高さが関係していた。

目の前にある、これ以上ない教科書クレスの存在。

もとより高い才能を有している彼女はお手本のようなクレスの動きを戦いの最中で模倣しながら、急激に戦いの作法を身に付けてきている。

それでも、目の前に聳え立つ壁クレスはあまりに高く、そして厚い。

【福音】 【福音】 【福音】——  
「そも、一々詠唱している時点で俺に何をしようとしているか教えるようなものだ」

駆けだしながら、自身もまた防御壁として音の爆撃を展開するアルフィア。

それをまたもや掻い潜って彼女と拳や蹴りを交わしながら、クレス

は語る。

「お前はこれまで何度その魔法を使ってきた？ 体内を巡る魔力の動きはとうに覚えているだろう。ならば後はそれを自力でなぞる、それが無詠唱の方法だ。俺の【寡黙不語】<sup>カタラヌモノ</sup>はそうして発現させた」

「何を言ってる——」

「魔力も自らの力の一部。ならば『神の恩恵』<sup>ファエルナ</sup>の自動化に頼らず、己の意識で制御し運用しろ。それが出来なくば一生俺に疵はつけられようよ」

「——ハ、そうか……っ！ その余裕、親切丁寧にわざわざありがたいなっ！」

『魔力を意識的に消費する』、単純だが神時代の冒険者にとって無茶苦茶な理屈を平然と押し付けてくるクレスに対してアルフィアは舌打ちする。

そも、魔法とは『神の恩恵』<sup>ファエルナ</sup>によって受動的に発現するもの。その燃料たる魔力を自主的に運用するなどという非常識を口にすれば、現代の魔術師<sup>メイジ</sup>はいかなる高位の者であろうと「ふざけるな」と無理を訴えるだろう。

——しかし時代を遡れば、かつては確かに修行を経て独力で魔法の習得に至った者もいたと彼女は知っている。その類の者であれば、魔力を自力で操作することも出来た……否、必須の技術であったのかもしれない。

かといって、このような土壇場で説明されたところで身に着けられるかは別だが。

通常ならば誰にも邪魔されないような場所で瞑想等の修行で練習するものだろう。

だが、今彼女と敵対しているクレスは説明の中に容赦のない乱打を含めてくる。

「このような中でどうしろと……があっ!？」

「並行詠唱は出来るな？ なら集中しろ。肉体の痛みを思考から切り離せ。一方で俺との戦いに集中し、一方で己が内に集中しろ。なんてことは無い基礎の応用だ——出来なければここで朽ちる、それだけ



だ」

アルファイアが悩み試行錯誤しようとする間にも、クレスは遠慮なく彼女の身体を壊しにかかる。

彼女が撃ち込んできた手刀を手首を掴んで受け止め、ついでに捻って脱臼させる。

側面からの彼女の回し蹴りを膝と肘で上下から挟んで潰し、そのまま圧をかけて骨を折る。

その度に走る激痛程度に悶えるようでは、彼に傷をつけることなど夢のまた夢だと示すように。

「魔力の感覚を一から自力で覚えなければならなかった昔と比べれば、まだ楽になった方だ。そして自らが追い込まれるこの状況。脳の発する麻薬物質によって、集中は平常時と比べ更に深まる……新たな技術を習得するには絶好の機会だろう」

「……偉そうにぐちぐちと、このつー」ゴスベル

良いようにやられてばかりのこの状況が許せず、打破すべく発起したアルファイアの反撃。

内に巡る魔力への思索と並行して、滾る怒りを乗せた拳——それが同時に、無意識的に使い慣れた魔力の感覚を乗せて。

打撃の先に、詠唱を忘れた音が爆ぜる。

「む」

「くっ!？」

二人の間で弾けた想定外の衝撃が、互いの中に強制的に距離を作った。

衝撃で煙を上げる拳に目をやりながら、アルファイアは思いがけず手にした『未知』の感覚に何度か握っては開いてを繰り返す。

「——これが、そうか」

「そうだ。随分と学習が早いが、今までの積み重ねの賜物か……良いだろう、今の感覚を忘れるな。この技に習熟すれば、あえて中途半端に留めた魔法マジックサークル円で索敵を行うと言った回りくどい方法を必要とせず直接索敵を行えるようになる。また、周囲の魔力を意識的に呼吸で回収して魔力回復を早めることも出来る。東方で言う『気功法』がその

最たる例だ」

「なるほど面白い。ならばこのまま練習に付き合つて貰うぞ——！」  
詠唱を捨てたアルファイアの猛攻が、苛烈さを増してクレスに襲い掛かる。

【福音】<sup>ゴスペル</sup>という四文字は、他と比べれば短いとはいえその全詠唱に半秒程度を要していた。

それが今は念じるだけで発動可能——口を動かさなければならぬという制約から解放された彼女は、凄まじい勢いで迷宮<sup>ダンジョン</sup>諸共クレスを爆破しようと「サタナス・ヴェーリオン」の波濤を炸裂させる。

連続する破裂音は津波のように鳴り響き、固い迷宮<sup>ダンジョン</sup>の岩盤を容易く抉り貫く。

それは渦中にいる者に対して須らく空間を揺らすような錯覚を齎し、無差別に平衡感覚の喪失を振りまいていく。

そこかしこで巻き添えを食らったモンスターたちが墜落したり壁に激突したりする、そんな中で。

元より慣れているアルファイアは勿論、より酷い騒音災害を『深々層』で経験したことがあるクレスと、彼ら二人だけは先ほどまでと同じように平然と戦っていた。

「よくもまあこの中で悠々と振舞える！ 私でさえ油断すれば酔ってしまいそうになるといふのに——」

「心頭滅却すれば火もまた涼し。如何なる異常にも毅然として適応するのが冒険者の在り方だ、後輩。また一つ勉強になったな」

響き渡る爆音の中でも精密に相手の言葉を選び分け、会話する二人。

周囲に幽かに響くモンスターの怨嗟は聞き流し、彼らは口と同時に手足でも意思疎通<sup>コミュニケーション</sup>を行う。

殴打、蹴撃、手刀、貫手。  
掴み、投げて、抉り、引き千切る。

目まぐるしく攻守の姿勢を入れ替えながら腕と脚を交差させるクレスとアルファイア。

その周囲に彼らの避けた互いの魔法が誤爆し、モンスターと迷宮<sup>ダンジョン</sup>

の悲鳴が飛び散る中で、二人は苛烈な死の舞踏を刻む。

——その、最中。

「——ごほっ！」  
「む」

うまく被弾を避けたアルフィアの口から、唐突に鮮血が漏れ出る。

ギフ・プレッシンゲ  
【才禍代償】。

彼女に与えられた才能の代償が、ここへ来て姿を現してしまった。僅かに鈍るアルフィアの動き。

その隙を、クレスは——それでも何一つ躊躇いのない顔で穿った。

「がふっ！ ……ぐっ、ぐふっ、けほっ！ ……一切の同情なしとは恐れ入るな」

「知るか。しかし、それが先に話していたギフ・プレッシンゲ【才禍代償】か。——ふん、肺と臍臓、自律神経に麻痺と混乱が見られるな」

「そんなものだ。今回はまだ優しい方を引いたな」

口元に垂れた血を拭いながら、アルフィアは自らの晒した痴態に失笑する。

——ようやく気分が乗ってきたところにこれとは、随分と運が悪いものだ。

常であれば、彼女はここで自らの症状に響かないような慎重な立ち回りを取ろうと考えていた。

だが、それでは目の前の『英雄』に一泡吹かせることなど到底出来やしない——ならば。

「さて、ようやく私の身体も温まってきたらしい！ この程度で止まるものか、行くぞ！」

「そうでなくては冒険者は務まらない。……ふっ、来い」  
鈍る身体に無理矢理魔力を巡らせ、言うことを聞かせる。

数秒前に学んだ能力に魔力操作土壇場で応用を効かせて戦闘を再開させたアルフィアの姿勢に、クレスもまた応えるように前に踏み出る。

——鳴り止まない身体の悲鳴は無視して、前へ、前へと彼女は揺るぎない足取りで踏み出す。

目の前の憧れの『英雄』の横つ面を張ることに全身全霊を傾け、彼

女は限りなく高揚する戦闘意欲のままに戦おうとする。

クレスとの間で拳打と魔法を交わし、彼女の気分は更に高まるばかり。

内臓からは血反吐を吐き散らし、骨は折れ肉は裂け、神経が露出する中で、彼女は背中に走る灼けるような痛みと共に全能感を感じていた。

——運命が、アルフィア私に止められと訴える。

内臓に鈍痛が響く。頭が振れるように痛い。肺は思った通りに膨らまないし、目も霞んできた。

まるで「これ以上の先はお前には用意されていないのだ」と言わんばかりに、定められた命運が必死になって足を縛ろうとしてくる。

そんな錯覚を無意識に聞きながら、彼女は背中に迸る熱に焦がされるままに疾走する。

——熱い。

普段は冷めたような感覚で世界を睥睨している自分には到底似つかわしくない、浮かれるような『熱』が自分の内側から湧き出していることをアルフィアは自覚していた。

そこには、『才』を發揮する代わりに『禍』として進行する病状によって齎される身体的な発熱も多少なりとも混じっていたかもしれない。

しかし彼女はそれを、なんとなく……己の魂り湧き出る感情の発露だと直感で理解していた。

「ははっ、はははっ……！」

——この程度では止まらない、止まれるものか。

冷めていた絶望が、得体のしれない高揚感によって焼き払われていく。

生の実感を喪って久しい、灰色の身体に久方ぶりの熱が巡っていく。

それは魔力であって、『神の恩恵』の齎す産物エネルギーであって。

彼女の内に知らず眠っていた、魂の渴望だ。

「ははははははっ——そうか、運命とはこうも容易く乗り越えられるものか！」

力が、無限に湧いてくる。

クレスの手によつていくら身体を物理的に傷つけられようと、内側から【才禍代償】ギョウ・ブレンシツクに喰い破られようと。

その気骨が折れぬ限りは何処までも前へ進めるといふ、誰に保証されるまでもない絶対的な確信の下に、彼女は今、自らを縛る宿命の呪鎖を振り切つて詠う――。

「――【祝福の禍根、生誕の呪い。半身喰らいし我が身の原罪】」  
「……ふむ」

振り翳す足刀と同時に紡がれる魔法の気配に、クレスが目を細める。

漲る魔力の量と足元の魔法円マジックサークルの規模からして、超長文詠唱が来ると彼は見た。

無詠唱を身に着けてからの、あえての詠唱。

それはなぜか――今一度、彼女は己が魂に問うているのだ。

クレスには分かった。

これは己の絶望と向き合い、答えを出すための歌なのだ。

「裸みそけはなく。浄化はなく。救いはなく。鳴り響く天の音色こそ私の罪」

並行詠唱――本命の詠唱を一時中断・保持して張られた【サタナス・ヴェーリオン】の弾幕が、クレスと詠者アルファイアの間に無理矢理距離を作る。

隙間のない壁を生み出す形の音爆壁。

それを彼は音速を超えた拳で殴りつけ、衝撃を相殺。

続く詠唱が、音の壁を越えたクレスの耳に届く。

「神々の喇叭らっぱ、精霊の豎琴たてこしら、光の旋律、すなわち罪禍の烙印」

響くその祝詞は、彼女のこれまでに刻んだ人生そのものを現す悲嘆。

金剛石のように力強く輝き、そして脆く崩れ去ってしまう欠点を併せ持つ彼女の抱え続けた絶望。

その独白にクレスは拳で以て問う――だから、どうするのだ？と。

震脚、崩拳、体当たりタツクル、背面回し蹴り、発勁、前蹴り……拳と蹴りが

交互に連携して打ち出される高速連撃を決めて【才禍代償】<sup>キフ・プレツンゲ</sup>以上の血反吐と胃液その他諸々を吐き出させ、彼女の持つ『才』と『禍』を同時に刺激して。

アルフィアという子孫の、一度は砕けた心に彼自身の『熱』<sup>拳</sup>をくべる。

「げほっ、げほげほっ……ぶはっ！——【箱庭に愛されし我が運命よ砕け散れ。私は貴様<sup>おまえ</sup>を憎んでいる】」

慣れたように赤く染まった唾を吐き捨てて、アルフィアの視線が鋭く光る。

その先に見据えるのはクレスか……はたまた、一向に己の意に従おうとしない運命か。

——もしくは、そのどちらでもあるのだろうか。

【代償はここに】……【罪の証をもつて、万物<sup>すべて</sup>を滅す！】  
アルフィアの背後に、神々しい大鐘楼が出現する。

灰色の雪のような魔力が舞い散る中、彼はそれが鈍く輝いているのを見た。

それは力を使い果たし、諦観を覚え荒んでしまった色のようにも見えて——。

【哭け、聖鐘楼】

その鐘が、これまで通りの絶望の咆哮を振りまこうと揺れ始める。

彼女の心中に秘める後ろめたさと懺悔、破滅願望さえ含めた呪いの鐘楼が定められた運命を告げようとする。

——しかし、その動きが不意に止まる。

クレスの見立てによれば、既に魔法は完成しているも同然のこの状況。

後は解放の指示を待つだけの状態だが、アルフィアが自らの意志で鐘の啓示<sup>発動</sup>を封じているように見えた。

どういふつもりかと視線で問うクレスに、彼女はニヤリと笑う。

己の血に塗れた死化粧のままに、その首が前を向く——これまででは手を伸ばすことを諦めていた未来へ向かって、瞳が瞬く。

——そこに映るのは、絶望の灰色などではなかった。

それは今まさに力強く打ちあがろうとしている、燃え盛る鋼の覚悟。色

「黙れ運命。神の鐘 私はまだ——終われるものか！」

——そうだ、御身の言う通り私は今まで何度もこの力を無造作に振りまいてきた。

私の魔法は私自身が一番、良く知っている。

自らをも壊す絶望の化身——ならばこれを以て壊そう、壊してしまおう。

そう、弱き過去の自分を打ち砕き、新たな自分に生まれ変わるために——！

神々の定めた終焉を意志の力で捻じ伏せ、彼女は己自身で定めた追加詠唱を吐き出す。

「——【理想の残響、英雄たちの挽歌】」

かの黒竜との戦いで散った、もしくは逃げた家族たちへの失望。

そして、他でもない自分自身に向ける、これほどないまでに強い失望を——再起の燃料として心を燃やす。

「私は独り、孤高の丘に悔恨を歌う」

隣に立つ最愛を喪った彼女の心を真に理解する者は誰もいなくなつた。

それでも構うものか——ああ、今は羨ましき英雄時代よ。

失われたその強き過去への回帰を……戻れるのなら自分こそが戻りたいという本音を掲げて。

「沈む白日。明けぬ理想。黒き月が上り、私の源罪を暴く」

ゼウス及びヘラの描いた未来は漆黒の帳に閉ざされ、ならばいつそエレボスの描く『悪』に身も心も堕ちようとしていた。

しかし目の前に現れた輝きに焦がされ、夢見てしまった——他ならぬ自らが、闇夜を貫く星に至ることを。

そのためにはこの時この場所で、運命を超えなければならぬ。ならば超えてみせよう——他ならぬ前例がそこで見守っているのだから！

「されど、憧憬はここに在りて——然らば、戦律は絶ゆることなどな

く！」  
既に<sup>ジエノス・アンジェラス</sup>完結している魔法が、アルフィアの理想を以て新たな姿に塗り替えられていく。

鐘の輪郭がぐずりと崩れ、次第に<sup>ノイズ</sup>霧がかかり始める。

悲鳴のような音を上げて軋む魔法の鐘。

それに構わず、彼女は確固たる意志を以て宣言する。

「神々よとくと御覧じろ！<sup>黙って見ていろ</sup> 私の脚が征く、私の腕が拓く、私の血が記す！

【開け白紙の『英雄<sup>あ</sup>楽譜<sup>した</sup>』——我が神聖英雄譚をここに示さん！】  
彼女が鐘へ向けて手を伸ばし——それを視界の中で手中に収めて、握り潰す。

圧壊する鐘。舞い散る魔力の塵。

……それが彼女の意志で編み直され、再結集し、新たな黄金の鐘楼を形作る。

「見るが良い英雄、これが私の答えだ！ 【ジエノス・アンジェラス】——

【破響<sup>フォルテシモ</sup>！】

鳴り響くは、鍛ち直された鐘の壮麗な音。

一切の不純のない、きめ細やかな鐘の音。

澄み渡るそれは、新たに生まれた英雄の卵を祝福する天上の調べのようで——。

その『鐘音』に触れた者一切を、問答無用に虚無へと還していく。

鐘の音が内包する、微細かつ強力な超々振動。

それが強制的に物体の組成を崩壊させ、触れたものを分子の塵に帰す。

——それだけには留まらず。

新調された【ジエノス・アンジェラス】に付け加えられた新機能、『自動詠唱<sup>オートキャスト</sup>』。

アルフィアが手ずから調律した鐘が奏でる音色。それは彼女が先ほど唱えた詠唱と同じ音階を踏んでおり、それが術者の無意識領域に干渉し、自動的に次なる音<sup>ジエノス・アンジェラス</sup>の爆裂を産み出すという『規格外<sup>チーグレート</sup>』。

連鎖する度に質は落ち、現状最大で繰り返されるのは九つ分——つ



まりは本来の「ジェノス・アンジェラス」の九倍の力を秘める音の大瀑布が、クレスただ一人目掛けて放たれる。

彼女自身、しれつと先に「静寂の園」を纏うも打ち消し切れず、体中の穴という穴から血を噴出さざるを得ない一撃。

「……なるほど」

それを前にして、クレスは小さく頷いた。

どうやら後輩は目論見通り一つ殻を破ったようだ。

ならば、気分が良い——こちらも一つ、祝福代わりの本気を示してやろうと。

『奔り穿つ影葬の槍』は実は師より十年に一度の制約が定められており、使えない。そもそも、あの威力は今のアルフィアにはまだ早過ぎる。

——となればここは、殻を破る前の彼女が散々喚いていた『英雄』らしきを見せてやるのも良いだろう。

「来い、『隕鉄の剣』」

クレスの呼びかけに応じて、どこからともなく彼の前に一振りの折れた直剣が現れる。

握り手に巻かれた布は随分と色褪せており、古びた様相を呈している。

それは、彼が通常開帳することのない太古の精霊武装——彼自身がそう呼ばれることを厭う、迷宮神聖譚に記された『英雄』の剣。

「契約に応えよ、東方の明星よ。我が命に従い常闇夜を拓け」

その刃に宿る精霊は伝承の通り、既にその身を大地に還している。ただ、そこに宿る微量の残滓……そこに魔力を叩き込んで強制的に覚醒させ、彼は折れて失われた刃の代わりに眩い黄金の光を切っ先に逆らせる。

——その隣に降り立つは、黒紫に輝く艶髪を携えた女精霊。

眠るように瞳を閉じた精霊に見守られながら、クレスは『英雄』の剣を振るう。

「【ソード・オブ・ハートウーシャ】」

迸るは、極大極光の剣。

曰く、かつて『大穴』に顔を覗かせた『白亜の巨壁より生まれし赫灼の巨人』を討ったという、英雄の絶技。

万物を断つ星光の刃が音より早く奔り——その担い手に迫る大音塊を、一刀の下に斬り伏せた。

「なっ……ぐううううっつっ?!?!?!」

その刃はアルフィアの身から僅かに逸れたが、代わりに迷宮の天井を易々と10層分近くは貫いて。

ついでに余波で以て、彼女の身体をその向こうまで吹き飛ばしていった。

「……やり過ぎたか? まあ、手足の一二本消し飛んだくらいならどうともなるが……」

吹き飛ばされていった先のアルフィアの安否を確認すべく、クレスは彼女を追いかけて急ぎ上層へ向かうのだった。

——そして、遭遇する。

「——なっ、【静寂】!? 何故吹き飛んで来た!?!」

「やかましいぞ、ひよっこ共……くっ」

本来『神獣の触手』を討伐すべく待ち構えていた派閥連合が、突如地面に空いた穴から姿を現した満身創痍のアルフィアに困惑する姿に。

「——悪いな、気が変わった」

一方、混乱する正義と道化の眷属。

「ねえ一体どうしちゃったのかしら!? 地面が爆発したと思ったらいきなりその奥から【静寂】が飛んできて、ズガン!! って勢いで壁に埋まっちゃったんだけど!」

「私に聞かれても困るぞ団長! こんなもの、誰が想像できるものかっ」

「本当に何が起こったとるんじゃ……?」

数日前に観測された未知なる強大な怪物を討伐すべく送り込まれた彼ら地上の精鋭は、地上で邪知暴虐の限りを尽くしている悪派閥の首魁のうち一人がいきなり満身創痍になつて吹き飛んできた目の前の光景に開いた口が塞がらなかつた。

——何故、迷宮に侵入できないはずの【静寂】がいる?

——何故、その【静寂】が血と泥に塗れた情けない姿になつている?

そんな彼らの、現状に追いつかない認識に更に追い打ちをかけるようにして。

アルフィアの後から飛び出してきた人影ことクレスは、彼女へと親しみを込めて口を開く。

「……どうやら、目は完全に覚めたようだな」

「ああ。御身のおかげで、ようやくだな」

壁に体を埋める形で沈んでいたアルフィアに、クレスはそつと手を伸ばす。

彼の手を取って立ち上がった彼女は、傷と土埃に塗れながらも、晴れやかな顔を浮かべていた。

もはやそこに、先ほどまで彼らが互いに向けていた戦意は露ほども残ってはいなかつた。

端でただ様子を見守るしかなかった派閥連合の顔ぶれを前に、二人は悠々と会話する。

「しかし、だ。その口ぶりからして、私をあえて煽つたな？」

「そうだ。将来有望そうな後輩が燻つている姿を見れば、それとなく手助けをしてやるのも先輩としての務めだからな」

「ちっ……おちよくられたのは腹立たしいが、原因はあくまでも私の未熟にあるか。悔しいが、感謝を伝えておこう」

そう、先の戦闘そのものは、諦観を抱いていた彼女に発奮を促すためのクレスによる茶番。

その目的が達成されたと両者が納得した今、続ける理由はなかった。

手を取り合ったクレスとアルフィアが、互いを認めたと示すように見つめ合う。

——己の壁を今一度見つめ直し、そして見事乗り越えた後輩への称賛を。

——迷い堕ちようとしていた自分にわざわざ労力を割いてくれた先達への感謝を。

相互に無言の満足を示した二人の有様は正しく、短くも濃厚な時を共に過ごした戦友冒険者の姿であった……。

……とは言え。

その事情を何一つ知る由のない派閥連合の側からはやはりと云うべきか、「いやいやいや！」と当然の突つ込みが上がって。

「なんだか一昔前に流行った青春モノの一頁みたいなのを見せつけられてるんだけど、これってどういうことなのかしら!？」

派閥連合全員の心の声を代弁して叫んだアリーゼに、二人が顔を向ける。

「また面倒臭そうなのが来たな」「騒がしい」と目配せで会話するクレスとアルフィアに、彼女は大げさな身振り手振りで以て状況説明を請うた。

「迷宮にどデカイモンスターがいるらしいって言うから、倒しに来てみれば主役級の大悪役が地面から吹っ飛んできて!? それで後から出てきた男の人と手を取り合って、それで「全部、終わったんだ……」みたいな満足顔してて!? 私たちには何が起きたのか、さっぱりなん

「だけどー！」

「相変わらずきやんきやんとよく叫ぶ娘だ。……そうだ、今お前の語った通り。この迷宮内ダンジョンで我々が企んでいたことは全て終わらされた。他でもないこの方の手によつてな。つまり、貴様らもそれなりに覚悟をしてきていたようだが、それも無駄足に終わったということだ」

アルフィアの返答によつて、この場の全ての視線がクレスに集まる。

——これは俺が答えなければならぬ流れなのか、と彼は若干煩わしく思いつつも説明を引き継ぐ。

「あー、このアルフィアという女の言つたように、お前たちにとって喫緊の課題だつたらしき【神獣テラビュネの触手】——そもそもこいつの正式名称を今の冒険者お前たちが知ってるのか俺は知らないんだが——迷宮内ダンジョンにおいて一定量の『神アルカナムの力』の発露を以て顕現するモンスターの一種だが、そういった既に俺が始末した」

「なつ……先遣隊の報告にはレベル6から7相当の能力値アビリティを有しているとあつたが、それを単独ソロで討伐しただと？ 俄かには信じがたいが……確かに、発見報告以来続いていた大地の震動が一切途絶えている……」

「リヴェリア様!! 確かにそうですが、あのような見知らぬ者の言葉をそう容易く信じるのですか!？」

顎に手を当てて思考する素振りを見せるリヴェリアに、リユーが声を上げる。

その言葉にクレスは肯定を半分と、呆れを半分示した。

「信じるも何も、気配を感じないことが分かれば一目瞭然だろう。それに、お前たちとは一度会つたことがある。あの時も散々食つて掛かつてきたはずだ、一応は見知らぬ仲と呼べない仲じゃないのか?」  
「……そう言えば、その声! まさかあの時、アーティを助けてくれたフードの人!？」

「気づかなかつたのか」

「気づかなかつたわ! ごめんなさい! でもちよつとだけ言い訳す

るならあの時は声がちよつとくぐもつてたから、聞き取りづらかったの！」

「……まあ良い。俺の正体など、この場においては些事に過ぎんだろうからな」

素直に頭を下げてきたアリーゼを許しつつ、クレスはさっさとこの場を終わらせるべく、彼らの先ほどから求めていた答えを口にしようとした。

彼はあくまでもアルファイアという迷宮攻略に役立つ才能が歴史の塵と消えていくことを惜しんでいただけなのであって、それ以上のことに関わるつもりは微塵もないのだ。

——つまり、彼が行おうとしているのは、端的に言ってネタ晴らしであつた。

「それで、お前たちが気になつていられるであろう残りの事情もさっさと説明してしまおうか。つまり、何故こいつがここまでボロボロになつているのか。何故俺がさっきまでこいつと戦つていたか、だが」

「——む、おい」

「それはこの後輩が、自分への失望を的外れにもお前たちにぶつけようとしていたからだ。それは筋が違うだろうという訳で、その勘違いを正していた」

「……なに？ 自分への失望、だと？」

クレスのあまりに端折つた説明に、派閥連合一同の頭に「？」が浮かぶ。

そんな彼女たちに、彼は仕方がないと言つた素振りで一から説明してやることにした——そう、他でもない本人の目の前で。

話の流れを敏感に察知した彼女がクレスの口を塞ごうとするが、もう止められそうもない。

「待て。何を言おうとしている？」

「何って、お前が先ほど俺に語っていたことをそのままこいつらにもう一度説明してやろうとしているだけだが。——安心しろ、後世の批評家よろしく適当に難癖をつけたりするつもりはない。先ほどの戦いの中でお前が吐露したものを、それを新鮮さそのままに伝えよう」

「違う、そうではない。私が憂慮している点はそこではない。今思えば、なんだ……急に以前の言動が恥ずかしくなってきた。それを大っぴらに話すというのはだな」

「知るか。恨みたければ浅慮のままに突っ走った過去の自分を恨め。それに、迷惑をかけられた連中にはお前の動機を知る大義名分があるはずだ。俺から話されるのが嫌なら、自分から話せ」

「うぐっ……それは、いやしかし……分かった。私から話す、話そう」結果、クレスに押し切られるような勢いで、根負けしたアルフィア。

彼女は「もうこうなればやけくそだ」と言わんばかりに、派閥連合側に向けて自身の思うところの全てを詳らかに曝け出すのだった。

——もはや未来のない、自身へ向けた限らない絶望。

——ならば未来ある後進の贄となり、糧となつて。彼らお前たちに期待をかけようとして。

——そうして編み出された、英雄時代の再来を目指す『計画』の全貌を。

余すことなく、包み隠さず。

もういつそ恥の上塗りになろうと構うものかと、彼女は心中に抱えていた悩みやそれに由来する想いを全て吐き出した。

そして。

もちろん、そのあまりに身勝手な立ち振る舞いに派閥連合からは非難の嵐が轟々と巻き上がる。

「——聞けば、なんと身勝手ではた迷惑な！　なんたる傲慢、なんたる理不尽！」

「——大義のために弱者を犠牲にしなければならぬだど、絶対に間違っている！」

「——確かに私たちにも非があることは認めよう。しかしそれでも、民衆を巻き込む道理はない！」

輝夜から、リユーから、リヴェリアから。

その他全ての正しき眷属たちからの怒りを前にして……アルフィアは。

「——そうだ、お前たちの言う通りだ。私が悪かった」

全て自分の非を認めると、素直に頭を下げた。  
腰を綺麗に垂直に折った、一切の歪みのない謝罪。

その、これまでの彼女には有り得ない態度に思わず派閥連合の声が止む。

「私は切羽詰まり過ぎていたようだ。現実を勝手に諦め、いつか到来する暗黒を打倒するために更なる闇を産み出そうとしていた。——だが、それはとてつもなく卑怯で、また無責任な行為であると改めて思い知らされた」

アルファイアがちらりと、横に立っていたクレスに目を向ける。

その揺るぎのない立ち姿に、彼女は久方ぶりに思い出させられたのだ。

——『想い』とは、他ならぬ自分で叶えてこそ最も輝くものなのだと。

「もう、お前たちに無理矢理私たちの『想い』を委ねるようなことはない。私の『想い』は、私が背負い続けなければならないのだから。故に今後はお前たちを巻き込むことなく、私自ら遺された最後の三大冒険者依頼の残り一つを達成すべく精進するつもりだ」

「……何を今更！ 貴女たちの勝手のせいで、どれだけの人々が犠牲になったと——！」

「そうだな。無論、その前に罪は償おう。遺族への賠償は行おうし、破損した街並みの修繕費用も耳を揃えて払う。招き入れた悪派閥も一匹残らず仕留めようとも。全てはそれら、贖罪の行脚を済ませてからだな……だが、その前に」

殊勝な態度で謝罪の意を表明していたアルファイアの顔が、上がる。

——そこには、血を滴らせ、爪が剥がれようと変わらない覇者の威圧が浮かんでいた。

その視線が、油断していた派閥連合の背筋を射抜いて心胆寒からしめる。

「このままここから、お前たちを挫折一つなく返すのも忍びない。当初の想定とは少々形が違うが、強者による洗礼——受けていくか？ 後輩ども」



そう、もはやアルファイアには彼女らに『想い』を託すつもりはなかった。

ただ、それでも『計画』の上で与えようとしていた格上との実戦経験——それくらいは分ける機会チャンスを与えようと、クレスとの戦いを経た彼女は思った。

彼女が行うのは、これまでと違ってあくまでも選択肢を与えるまで。

その決定権を握るのは派閥連合側だが——果たして、答えは。

「——いえ、それは後にしましょう！ 皆、今すぐ地上に戻るわ！」

この場の指揮官であるアリーゼが選んだのは、目の前の経験値エクスペリエンスではなく帰還だった。

冒険者としてではなく、今オラリオに必要とされる『正義の使徒』としての勇氣ある撤退。

「サラって娘のおかげでだいぶ楽になったけれど、まだまだ人手は足りてない！ 迷宮まごうちでの用がなくなったなら、まずはそっちへの対処が優先！ でしょ、ガレスのおじ様！」

「……うむ、それがこの場の最善手じゃろう。もはや【静寂】に敵意は無し、ならばこの場で斧を交わす必然性もなからう」

「よし皆！ せっかくここオラリオまで潜ってきたところ残念だけど全力反転！ 地上オラリオへ向けて転換撤退後進！」

ここが正念場だと気合を入れていた派閥連合の面々は一様に不満を浮かべたものの、アリーゼの判断とそれを後押しするガレスの声を受けて、すぐさま来た道の逆走を始めていく。

颯爽と最前列から最後尾へ位置を入れ替えた彼女に続いて、彼らは胸に小さなしこりを残しながらも地上目掛けて駆けだす。

「——フ。そこは見誤らなかつたか」

潔いアリーゼの態度に僅かな微笑みを溢して、アルファイアもまた自身の後始末をつけるためにその後が続こうとする。

だがその前に、クレスが「まあ待て」と彼女を押し留めた。

「その前に一つ、餞別をやろう。背中を出せ」

「……なんのつもりだ？ 恩恵の更新の真似事でもするつもりか」

「ところがどっこい、その通りだ。……自慢じゃないが、俺格上との戦闘で割と良い感じに経験値エクセリアが溜まったはずだ。東方の諺に『鉄は熱いうちに打て』とあるように、経験値エクセリアは新鮮なうちに反映した方が数値の幅が大きい。だが確か今、女神ヘラは都市外でゼウスを追っかけて世界中を飛び回っていると聞く。それを捕まえるまでに今回の経験値を劣化させるのは勿体ないだろう?」

「それはそうだが、まさか下界の住人が恩恵を更新できるなど……いや、御身のここまでの埒外ぶりからして今更か。それよりも私たちの『神の恩恵』ファルナには鍵が掛かっている……『更新薬』ステイタス・スニッチか? そんな希少なものを、よくも……」

アルフィアはすぐさま非合法の魔法薬の存在に思い至るも、クレスは首を横に振る。

その手にはいつの間にか、二つの液体薬と一つの錠剤が指に挟まれていた。

「正確にはもう一つ上、『発現薬』ステイタス・テイラノスも用いる。特定の系統の『神の恩恵』ファルナにしか効かない代わりに『魔法』と『スキル』の発現までが可能になる、超が十個くらいつく激レアな代物だぜ」

「なんだそれは。私たちのファミリアでも聞いたことがないぞ、そんな魔法薬は」

「素材が素材深々層産だからな。だが効果は間違いない、治験も済んでいるし俺の主神にもお墨付きをもらってる。だから、そら。早く背中を見せろ。なに、俺はゼウスと違って子供に欲情するほど餓えちゃあいない」

「別に今更そこに恥じらいを覚えることもない……それに私はもう二十四だ!」

「まだまだ青臭い年頃だな。せめて五百を超えてから出直してこい、がきんちよ」

なんだかんだ言っただけで渋々ドレスの紐を緩め、背中を露出させたアルフィアにクレスは素早く『解錠薬』ステイタス・シーフ『更新薬』ステイタス・スニッチを垂らし、そして『発現薬』ステイタス・テイラノスを砕いて散らす。

それから彼は己の背中にある『恩恵』に意識を連結させ、そこから

滲ませた神力オスの神アルカナムの力を腕から指先へうまくインクのように制御して、彼女の恩恵に神妙な手つきで干渉していく。

たった今積み重ねられたばかりの、量としては少なくとも質は極上の経験エッセリア値。

それを『神ファールナの恩恵』が記録した主アルファイアの願いに従って、能力値アビリティ、スキル、魔法にそれぞれ振り分ける——。

「……なるほど、良かったな。もう、女神へラさえいればレベルアップできる所まで来ているぞ」

「——は？ いや、それも当然か……御身と戦ってレベルの一つも上がらない方が逆におかしいか」

「むっ……まあ、そうだな。これは未だ俺には不可能な芸当だから、そのお楽しみは次の機会にとっておけ。『昇ステイタス・カンキスタ華アルガナ葉』の研究は魔法大国の知り合いに譲ったしな……ふむ、その内そつちにも久々に顔を見せるか。……それよりほら、終わったぞ。新しい自分を確認してみろ」  
クレスがざつと書き留めたメモを、アルファイアは手に取って確認した。

六つある基礎能力値アビリティは既に全項目が限界を突破しており、評価値SSに突入しているものさえ見受けられる。

更には、魔法【ジエノス・アンジェラス】の一部詠唱追加。

スキル【誓寂歌姫】——クレスの【寡黙不語カタラヌモノ】と同系統の、無詠唱スキル——の発現。

そして、最も大きな変化が、【才禍代償ギフ・プレッシンク】の進化だった。

新たな名は——【才禍絶奏ギフテッド・オーバード】。

追加された一文は、以下の通り。

・『理想』の響おもいく限り命運突破。  
「良かったな。さっきのお前の魂からの叫びは、運命の鎖という奴を見事引き千切ってみせたようだ」  
「……どうやら、そのようだな」

残念ながら、未だ完全に運命の女神が定めた『代償』が消失したわけではない。

しかし、それを上書きするだけの意志を示し続ける限り、それは実

質的に無力化されることだろう。

明文化された『運命からの脱却』——その短くも力強い一文を自覚したアルフィアが、いずれ自我エゴで世界の理屈を塗り潰してしまえる己の同輩になることを願って。

「それら、行ってこい。そして待っているぞ。迷宮ダンジョンの奥深くで、お前たちが追い付いてくることを」

「ああ。——その前に精々、孤独死しないことだ！」

それ以上の言葉は不要と、アルフィアは颯爽と地上オリオ目指して駆け昇っていった。

日の当たる場所へ再び身を躍らせた子孫を見送ったクレスの後ろで、足音が複数。

「——なんだ、何がどうなっている？」

「我が神よ、この状況は……何故、叫喚の歌が聞こえていないのですしやう？」

漸く配下を引き連れてご登場の遅刻神エレゴスが、クレスただ一人を除いて誰も存在しない決戦の舞台に呆然と間抜け面を晒す。

彼らに向き合ったクレスはただ一言——。

「——悪いな、気が変わった」

そも、「手出ししない」などという悪神との約束を律儀に守る方がよほど間違っているだろう、と。

彼は悪びれもせず、のこのこと現れた残党たちへ後始末の剣を振るうのだった……アルフィアの再起に要した時間及び魔法薬など諸々のコストを、彼らという都合「恩恵」の良「持ち」い実験素材「生物」で補うべく。

さあ謡え。彼らは今日も、明日を征く……

そして、暗黒時代は急速に終焉を迎える。

闇を乗り越えて光の側に帰還した英雄<sup>アルフィア</sup>。

弱者の食卓を守るために吹き荒んだ嵐<sup>サラ</sup>。

その双極が台風の目となった『悪』への粛清の風は瞬く間に悪派閥<sup>イヴァイルス</sup>の残党の首を狩り尽くし、戦局を『秩序』一強に塗り替えて。

『老兵』<sup>ロートル</sup>は死なず、ただ時の流れに任せて静かに消え去るばかり。

新たに生まれた『英雄の卵』たちは祝杯と共に、新たな冒険への誓いを立て。

時は巡り巡って、本史へと続く――。

オラリオ南東区画、『第一墓地』。

街を支配する数多の祝声に、ベルはようやく納得を得た。

「なるほど、そう言ったことがあったんですね」

「そうさベル君。七年前の今日この日、この英雄<sup>オラリオ</sup>の都からは一切の『悪』が駆逐された。しかも冒険者たちの犠牲はほぼ0<sup>ゼロ</sup>に等しい、大快挙でね。俺たち神だつて、こんなにもうまく事が運ばれるなんて誰も思っっちゃいなかった……冒険者<sup>彼ら</sup>の明確な勝利さ」

町中を行き交う、華々しい歓声の数々。

冒険者の、英雄の都の勝利を謳う凱旋<sup>パレード</sup>行列。

道端にまで伸ばされた臨時の席で酒杯を煽る大人と、お菓子の詰め合わせを買い与えられ喜ぶ子供。

誰も彼もが踊り浮かれ、今日という日を盛大に祝っている。

オラリオに来て初めてこの日を迎えたベルは、街角で偶然遭遇したヘルメスに連れられて、それらとはかけ離れた墓地で祝日のいわれを聞かされていた。

「とはいえ、残念ながら誰も生き残れたわけじゃない。少なからず、あの戦いに命を捧げた子供たちもいるんだ。そんな彼らのことを忘

れるのも良くないからね、こうして観測者たる俺はこの日の午前中は墓参りをすることに決めているんだ」

そう言つて、ヘルメスは手元の花束から抜いた一つの花を目の前の墓に手向け、黙禱をささげる。

そこに名を刻まれた者の顔を思い浮かべ、その業績に思いを馳せるように。

「——とはいえ、午後はもちろんいつも通りにアスフィたちと華々しく祭りに繰り出す予定だけどね！ ベル君もそんな感じで誰かに誘われたりしてるんじゃないのかい？」

「え!? あつ、へっ!? い、いや、確かに神様やりりたちから色々誘われたりしていますけど……」

「くーつ、やつぱり隅に置けないねえベル君は！ つと、それならもしかして俺がこんなところに誘つちやつたりしたのも悪かったかな？」

「いいえ！ そんなことはないです！」

ヘルメスから事のあらましを聞かされたベルの中に去来するのは、過去の先達たちへの素直な尊敬だった。

巨大な『悪』を前にして、それでも前のめりに倒れた冒険者<sup>英雄</sup>たち。

彼らに感謝と誓いを捧げることもまた、この祭りの重要な目的の一つだと知ることが出来たことは、彼にとつて間違いなく大切な収穫だった。

「そう言つてくれるなら良いんだが……つと。どうやら先客が来てたらしいな」

ヘルメスに付き添う形のベルは、他とはまあまあ離れた場所に立つ三つの墓に案内される。

そのうち真ん中の一つにだけ、既に二輪の花が添えられている。

燃え盛るような深紅の花と、透き通るように純粋な白の花が。

「ヘルメス様。ここは……」

「あー、ここは当時、最後に天界に還つた俺の神友とその仲間の墓さ。とはいえ、どれも形ばかりだけどね」

「形ばかり……?」

「実際には中に誰も入っていないからだよ。だけど誰かが死んだこと

を記録として現世の人間に認識させるために、必要な記号シンボルだとして設けられたんだ」

ヘルメスはその、既に花の捧げられていた方へ先と同じように黙禱をささげる。

そして残る二つへ、ベルに花を捧げるよう促した。

「そして、ベル君。ちよつとしたお願いなんだけど、君にはぜひその二つに花を飾ってやってほしい」

「僕が、ですか？」

「別に大した意味はないけどね。そつちの二つは君と同じ冒険者のものだ。それも、どちらも歴史に名を遺すくらい俺の傑物でね。どちらも神から鎮魂を祈るより、君からの方が良いと思うんだ」

「それなら……」

ベルはヘルメスから受け取った花をそれぞれの前に添え、秘かに祈りを捧げる。

——どうか、安らかに。

「ありがとう。きつと彼らも喜んで……いや、怒られるかなあ……」

「なんでですか!？」

「いやあ、やつぱり君に余計なことをさせたって後で追いかけられるような気も……そう思うと急に寒気がしてきたな。よしベル君、今日ここでしたことは俺との永遠の秘密にしてくれよな☆ 絶対誰にも言っちゃダメだぜ!」

「別に言いふらしたりとかなんてしませんけど!? えつ、ちよつ、ヘルメス様!？」

ばひゅーん、と手元の花を全て手向け終えたヘルメスが足早に去っていくのを、ベルは目を丸くしながら見送るしかなかった。

やがてその姿が墓地の端で、金髪と水髪に捕まって両挟みになるのを見届けてから、彼は先ほど祈った墓地へと振り返る。

「……」

その墓標に刻まれた意味を、ベルは知ることはない。

ただ、そこに偉大なる先達が眠っているであろうことを彼はヘルメスの言葉から察していた。

——貴方たちに誇れる英雄に、なりたいと。

もう一度、それだけを誓うように黙禱を捧げ、彼はその場を立ち去るのだった。

その背中を、今日も燃えるような英雄願望が灼く。

「——さて、初披露だ」

今日も今日とて、クレスは迷宮ダンジョンに潜る。

祝宴も歓声も、彼には遠く。

目の前にそそり立つは、雷鳴纏う凶犬型のモンスター。

その群れを前に、彼は腰より引き抜いた双釘剣を逆手に握り交差させる。

「歌え『ヴァナ・デイス』。我が魔を縛り、臂を寄こせ」

サラが毒血塗れの大男と一緒に持ち帰ってきた、かの暗黒時代の遺産の数々。

そのうち二人を、生きながらに加工した能力値操作の呪姉妹剣カース・ツイン。

刃より自ずと迸る鮮血に濡れる『悪愛』しき双剣を構え、彼は今日も

迷宮ダンジョンの『未知』に挑む。



【おまけ】クレスの三分（大嘘）??悪派閥クツキング!

〜×もあるよ〜

×

そこは、一寸の光さえ見えぬ暗闇だった。

「ならば此処こそがあの世だろうか?」と彼女はまず最初に疑った。

——なぜなら、自分はどうに死んだはずだから。

あの皆が殺し殺され合った素晴らしい狂乱の七日間の最後に他ならぬクソツタレの黒妖精大々好きによって首を断られたはずだと、彼女はその自らの首が寸分違わず切断された感覚を覚えていた。

——だが、どうした訳か。

自分彼女は生きているようだ。

訳の分からぬこの現状に対して、心臓がドクドクと脈打っている感覚が分かる。

深く深呼吸すれば薄い胸自慢のが膨らみ、酸素と魔力が全身に巡る快感が確として理解できる。

——ならば、今の私は……?」

「……ふおいふおいふおふお?」

「目が覚めたか『妖魔』の片割れ。良い夢は見れたか?」

カチリ。

小さくスイッチを捻る音が聞こえて、ようやく彼女の居た部屋に明かりが灯った。

デイナの、声にならない——レベル5の咬合力に耐え得る頑丈な口枷の隙間から漏れ出た、その疑問に答えたのは一人の男だった。

その男は、がらがらと脚付き台ストレッチャーを押して彼女の横までやってくる。そこで彼女は気づいた。

男の顔を見ようとしても、首が上手く動かない。

否、それどころか、起き上がろうとした自分の五体そのものが動かない。

彼女の四肢が、頭部が、腰が……指の一本に至るまで、嚴重にかつ

丁寧に拘束されている。

「さて、現状説明だ。十分なる事前説明インフォームド・コンセントという奴だ。ただしお前からの同意は既に取れているものとみなす——なにせお前という犯罪者マードラーは、自らが積み重ねた数十数百の無垢なる犠牲の血によってとうに己が死刑執行書に署名を済ませているからだ」

ディナに一方的な口調で現状を告げる男——この部屋の主ことクレスは、彼女の隣に脚付き台をピタリと止めた。

その上から香る濃密な死血の臭い、それを彼女は知っていた。

それはどの命よりも深く濃密に己と溶け交わった、大切な妹ヴェナの臭い。

「ふえふえあ!？」

「そうだ、コレがお前の妹だ。その完成未体路だ。よく見るが良い。なにせ今からお前もこうなる」

ぱちり、とクレスが親切にもディナの頭部から拘束の一部を外してやる。

それで首が自由になった彼女は、隣に運ばれてきた妹ヴェナを見た。

正確には、かつて妹であったもの、その成れの果てを。

そして今から自分がそうなるものを見た——見てしまった。

そこに安置されていたのは、慣れ親しんだ黒妖精いもうとの瑞々しい五体ではなかった。

隅々まで磨かれ、細心の注意を以て油を塗られ、美しく装飾された……一振りの短剣であった。

「……ふえ、ふえあ?」

「然りだ。サラの報告を受けた俺がお前の特異な魔法レア・マジックから考案した生体魔剣、その妹剣だ」

哀れな姿になり果てた妹の姿に目を見開く姉ディナに構わず、クレスは説明する。

その、塞ぐことの出来ない妖精族特有の長耳にはつきりと伝わるように、明瞭な声で魔剣ディルスの製造改造方法を語ってやる。

「まず、一度死んだお前の骸をサラが眷属化血することでその魂を黄泉

の国から引き摺り出した。だが生き永ら<sup>グー</sup>の屍は素体として使い物に  
ならん。故にまずはその呪詛塗<sup>カース</sup>れの血を透析し、蘇生した。ここま  
での処理は二時間前ほどに完了している」

愕然としたままのディナに近づいたクレスが、彼女の華奢な前腕に  
差し込まれていた針を抜く。

その針の繋がっていた先は何やらごうんごうんと唸る物々しい魔  
導機械であり、それが彼の操作によって音を止めた。

得体のしれない機械に繋がれていたことに一瞬恐怖を感じたディ  
ナだったが、それが彼の言葉によって「既に終わったのだ」と悟り、落  
ち着いて……彼女は周囲を見渡して再度怯える。

なにせ彼女の周囲には——彼女の囚われた部屋の四方には、百十数  
年生きた彼女にもよく分からない機械の数々がひしめいており、更  
にはその内幾つかはまだどるん、どるんつと動いていたからだ。

——分からない。

剣の姿にされたのだと男<sup>クレス</sup>が語った妹と、呻くような音を立てて動き  
続ける魔導機械——不気味な『未知』に囲まれたディナは、自分が一  
切抵抗の出来ない現状と並行してそれらを認識し「分<sup>助</sup>からない！」と  
怯えを抱いた。

知識を持つ者が見れば、そこを魔法使いの『工房<sup>テクトリー</sup>』と呼んだだろう。  
そして彼女はその中央に置かれた検体であり、『まな板の鯉』なの  
だ。

「では施<sup>加</sup>術<sup>エ</sup>を始めよう。まずは要らない部分を切つて落とす。——剣  
に手足は要らん。内臓も要らん。要るのは脳髓と心臓、それと背中の  
『神<sup>ファールナ</sup>の恩恵』だ。それら以外の一切合切とはお別れだ」

ディナの隣に立って彼女を上から見下ろすクレス。

その瞳には同情も、憐憫の欠片さえも何一つなく。

唯々<sup>ただただ</sup>素材に対して真摯に向き合う鍛冶師の、怜悧な熱意だけが映し  
出されていた。

そこに彼女は必死になって目で訴える——そんなのは嫌だ、と。

だが彼はその訴えを一考の余地もなく退ける。

何故なら彼女は悪派閥<sup>イザイルス</sup>だからだ。

『人を殺せば死刑』と云う、古今東西共通の法理に真つ向から喧嘩を売った大犯罪者なのだ。

その法理の下において、そうすれば死刑となることを知った上で、彼女は人を殺し、犯し、凌辱したのだ。

……ならば今更「嫌だ」と駄々をこねるなんて、ちゃんちゃら可笑しな話ではないか？

クレスはその手に持った手術用の小刀<sup>メス</sup>で、ヴェナの左肩に斬り込みを入れる。

白妖精<sup>エルフ</sup>の淡くきめ細やかな絹の如き素肌にスツと刃を侵入させて。

そのままぴつ、と撫でるかのように周囲の皮膚を剥ぐ。

「ふーっ!？」<sup>きゃあっ</sup>

「騒ぐな。騒いでも何一つ変わらん」

それから、剥き出しとなった血色の良い血肉の解体にクレスは取り掛かる。

血管と神経を断ち切り、筋繊維を骨から剥がして。

見えた関節を、ゴキツ——それだけで容易く、ダイナの左腕は本体から取り外された。

「ふぐーっ!？」<sup>嫌あああっ</sup>

大気に晒された神経の先端から、稲妻のように迸る激痛。

唐突に左腕の触感が消えた喪失感と、その代わりに響く痛みによって彼女の瞼の裏に星が瞬く。

その感覚の中で、彼女は思わず気絶しそうになった。

だが、クレスの続ける作業が否応なしにダイナの意識を現実へ引き戻す。

「次、左足」

「ぎりっ」

「右足」

「ぎりっ」

「右腕」

「ぎりっ……」

全ての手足が取り外され、綺麗に並べられる。

その様子をデイナは直視する……してしまふ。

自身の固定された手術台の、真上に設けられた大鏡。

その中で四肢を喪った自分が不可逆に解体されていく様を、彼女はまざまざと見せつけられる。

「むーっ、むーっ！」

嫌だ、嫌だと首を横に振るデイナ。

されどクレスの小刀メスは問答無用と言わんばかりに、今度は晒された少女姿の『妖魔』の臓腑はらわたを切り刻んでいく。

薄い脂肪と、その向こうに存在する練り上げられた腹筋。

それらを覆う滑らかな皮膚を容赦なく縦に切り裂き、開腹。

開創器具を装着して、中で脈打つ生暖かい臓器を順に取り出ししていく。

肝臓。脾臓。胃。結腸。

腎臓。膀胱。子宮及び卵巣——。

身に覚えがあり過ぎるほどに、これまで彼女たちが他者から奪い、むしゃぶりついて、その中から溢れ出る命の雫を浴び、飲み乾したもののたち……それら生の輝きが、自らの身体から取り除かれていくという自業自得。

一つ、また一つと外されていく度にデイナは己の身体が軽く、また寒くなっていくのを感じた。

その悍ましい感覚に身もだえしようとする最中——今度は胸部が開かれる。

外気に晒されている、彼女の慎ましやかながらもツンと立った桜色の頂上を持つ小丘。

そこに女メスとしての価値を一切認めないまま、クレスは胸筋を左右に開いて肋骨に手を伸ばす。

彼の振るうメスが容易くレベル5の骨を断ち、彼の五指がその奥に安置されていた二つの巨大な肺を優しく鷲掴みにして……どちゆりと水音を立てて取り外される。

「■■■■——っ！」

肺を喪えば、もはや呼吸はままならず。

失われゆく生気を必死に求めて足掻こうと声にならない叫びを上げるディナに、クレスは落ち着いた手つきでてきぱきと新たな機械――生命維持装置を繋いでいく。

「安心しろ、後で返す。ここからの作業で邪魔だからいったん外しただけだ。不要な部品を全て取り外し終えたら、残った分に必要な酸素を回すだけに加工して付け直すさ」

そこから先の手順に取り掛かるにあたって、クレスは更に素早く手を動かしていった。

とはいえ、基本的な手順は特に変わらない。

皮を剥ぎ、肉を剥がし、内臓を抜いて、骨を関節から外していく。

その光景は、サラやその他料理人が行う調理や、ディアンケヒト配下の医者らの行う手術と何ら変わらない。

むろん、説明も忘れずに。

「ああ、そう言えば。これは昔に不正アバテの連中から拝借した資料にあったんだが。前頭葉に繋がる神経の一部を切断した場合、対象は多くの情動を喪失する。様々な物事に無頓着になり、自己認識が鈍化するんだ。知ってたか？」

その時の連中の団長あたまで実際にやってみたんだが、ものの見事に使い物にならなくなってな……今回はやらんが、覚えておいて損はなからうよ」

そう言って開頭したディナの前頭葉をぺちぺちと触りながら語るクレスの独り言は、残念ながら恐怖によって彼女の意識には届いていなかったが。

「む、奥に虫歯が一つあるな。こいつは使い物にならんが……よし、幸いにして奥まで浸食はしていないな」

がきゅつ、と麻酔無しに歯を抜かれた挙句、歯肉をピンセットで扶られながら奥の顎骨を観察されたり。

「この髪は中々に質が良いな。殺人エルフとは言え、妹と同じくその辺りの手入れは欠かしていないのは良いことだ。その他の体毛とあわせて、よく魔力を通す導線になりそうだ」

女の命とも呼べる髪どころか全身の毛を一つ残らず剃られ、更には

部位ごとに分けて小瓶に詰められる恥辱を与えられたり。

「消化器系はきつさと洗わないと特有の臭みが定着するからな。部位ごとに分けて裏返して塩で揉んで、と……おい、野菜類はきちんと取っていないかったのか？ 肉食系の臭いが強いぞ、しかもこれは吸収しきれない鉄分のだな……血の呑み過ぎだ」

果てには腸内の様子から近頃の食生活を推察され、それについて苦言を呈されたりという滅茶苦茶な始末。

恐怖と緊張の狭間に揺れ動いていたその時のダイナの意識は、神経が過敏になり過ぎるあまり、そのほぼほぼ九割方について聞き届けてしまった——端的に言って、それは彼女の生命と自己認識において最大の絶望であり、凌辱であった。

たとえクレスにその意識が1パーセントほどしか無かったとしても、彼女にとって彼は過去の自分を映し出す鏡のように思えた。

被害者の苦痛を嘲笑う、加害者としての優越感。

その何にも代えがたい至上の快楽に包まれると同時に、彼女の瞳は常に生贄たちの浮かべる絶望を映していた。

記憶の中に氾濫するほどありふれた、それら犠牲者たちの悍ましい表情。

それらが今、自分のものとすり替わって彼女の意識上に投影される。

そう——今や被害を受けるのは自分であり、生贄に捧げられたのは自分であり、痛ましい犠牲となるのは自分自身なのだ。

その事実を狂おしいほどに自覚して、いつそ発狂してしまえばどれほど楽になれるだろうかと彼女は現実逃避を考えた——だが。

「この『大聖樹の葉』を発酵させた抽出液はエルフに強い覚醒作用をもたらす。『魂』に損傷が行き過ぎて廃人になると困るからな、入れておくぞ」

僅かに濁った黄金色の液体が注入され、ダイナの意識を無理矢理現実に残め続けるという地獄。

彼女はどうかあっても、今自分に起きている時間の流れから目を背けられない。

やがて彼の手はダイナの美しい瞳にさえ届き、そこから光を奪ってしまう。

柔らかな耳さえ彼の指によって奥の三半規管ごと取り外され、やがて彼女は自分が何処にいるのかさえおぼつかなくなってしまうた。

ただ自分がそこに居ること、それだけが辛うじて認識できる彼女は。

それでもなお敏感に、外界で起きている己の変化を脳と繋がったままの『神の恩恵』越しに感じ取ってしまう。

「骨は圧縮硬化して芯材に。歯は他の抽出した金属分子と合わせて刃に。皮と腸は煮溶かして接合材に。肉は筋をほぐして緒紐に……」

——今再び、彼女は最初の状況と同じく闇の中にいた。

目覚めた時とまったく同じ、無音無光の世界。

そこに冷たく響く、謎多き男が自分だったものを加工する声と音。

聞こえないはずのものが、何よりも強く聞こえる。

見えないはずのものが、何よりも鮮明に浮かび上がってくる。

そうしている内にやがて、男の手によって失われていたはずの肉体の熱が再び蘇っていく。

加工の終わったであろう、道具としての身体が組み上げられていく。

——最後にダイナは、己一人の『無』の世界に仄かな暖かさが差し込んだのを直感で悟った。

「(……これは、ヴェナ？ ヴエナなの?)」

いつ終わるとも知れない、一瞬とも永遠ともとれる暗闇の恐怖。

その果てに感じた、懐かしい妹の気配。

獲物の油脂分が髓まで沁み込んだ艶やかなチョコレート肌の温もりと、くすぐつたい銀髪の絡まり。

その愛に寄り添われたと感じたダイナは、小さくとも、確かな安心を抱いた。

生まれたその時から一瞬たりとも離れたことのない、愛しき破綻の片割れ。

生まれながらにして抱いていた生物としての欠けを互いに補完し



あう至上の狂気<sup>あ</sup>。

それが隣に戻ってきたことを双子として確信し、彼女はようやくこの未来の見えない世界に安堵を見出した。

——暗くて、怖くて、何もかもが奪われてしまった私<sup>ダイナ</sup>。

——だけど、もう怖くない。

——だって、これからもずっと妹<sup>ヴェナ</sup>だけは一緒だから。

「——うふふ。そう、私たちはいつだって……。隣り合わせ、なんだから……。」

側に妹が居ることの確信を抱きながら、ダイナは次第に暗闇にその意識を溶かしていく。

張り詰めていた意識がほつれ、暗い夢の中にゆっくりと落ちていく。

妹と仲睦まじく絡み合う幻想を抱きながら。

決して終わることのない、永遠の微睡<sup>あくむ</sup>みへと……。――。

魔剣の完成を迎えたクレスは、疲れを吐き出すように息を吐いた。

「終わった、な。七時間と半……。妹の方で一度手順を踏んだ分、姉の方は早目に済んだか」

出来上がった姉剣を妹の皮膚と髪で作った鞘に納め、更に相對する妹剣には逆に姉から作った鞘を嵌めて、彼は真の意味で成った一対の剣を見下ろす。

外見は正式なエルフの文化様式に倣った、単調<sup>シンプル</sup>と高貴を兼ね揃えた白黒の双剣。

しかし魔法の素養があれば、一目見ただけで察せられるだろう。

互いに喰らい睦み合う、双子の無限龍<sup>ウロボロス</sup>を想わせるような強烈な呪詛に塗れた魔剣。

「お前の銘はどうに決めている。「ヴァナ・ディース」だ。見た目は悪くないが……。問題は性能だからな。試し切りと行くか」

人によつては手に取ることさえ躊躇<sup>ちゅうちゆ</sup>いたくなるその魔双剣を掴み、腰に携えたクレスが地下工房から外へ出る。

その途端、出迎えるように居間で何かしらの作業をしていたサラがぐりつと勢いよく彼に顔を向けた。

「むっ！……ああ、なんじゃ主様かの。ようやく作業が終わったのじゃな。にしてもその濃厚な臭いは我が鼻の毒じゃ。早うシャワーを浴びてこい、食事はもう出来ておるからの」

「分かった。小一時間ほどで戻る」

「応とも。楽しみにしておくが良い、あのフィンとか言う小人族バルウムから手に入れた調理法レシビの反応が見たいからの」

ふっふっふ……とよく見れば手元で鉢の中身を擦っているらしいサラを置いて、クレスは第188層《古骸戦場》スパルタニアへと転移で跳んだ。

一瞬歪む視界、その後すぐに見慣れた二勢力の殺し合う風景が現れる。

しかも今回は運よく、両陣が睨みあうその真つ只中に転移してしまったようだ。

一瞬間発の空気を形作っていた数百の殺気が瞬く間にクレスへと向けられて――。

「今回用があるのはお前らじゃない。王を出せ、王を」

その全てが、クレスの周りに顕現した特大火球フロメテウスによって蹴散らされる。

この古戦場の王個体『スパルトイ・テーバイキング』――その亜種にして、両陣営が共に九割近く壊滅することを出現条件とする特殊な戦王個体を彼は試し切りの相手として求めた。

戦場を飛び回りながら手当たり次第に遭遇した部隊を消し炭にすること十数分……条件は整った。

「久々に起こしたな。そら、早く立ち上がってこい」

揺れる地面、隆起する砂原の大地。

その中に沈んだ数多の戦士の怨念を背負うように――呉越同舟の王が立つ。

この地で覇を競い合う両陣営の王『スパルトイ・テーバイキング』の二つ骸を核として目覚める、その個体こそは『スパルトイ・マールウス』。

燃える火の星の如き赫骨にて組み上げられた、両軍の協力による超巨大『スパルトイ』である。

身体に纏わりつく砂を振るい落とし、地中深くより現れた『スパルトイ・マーウオルス』。

その伽藍洞の双眼が、これまでクレスに屠られた戦士たちの怨念によつて紫色に燃え盛る。

ちなみに、その名の由来は報告を受けた某老神が「この巨大さ……アレスの真体に匹敵しよう」などと呟いて、それを当時のギルド長が深く考えずに採用したせいである。

多分神アレスが聞いたなら「俺の名を勝手にモンスター如きにつけるとはふざけるなやはりオラリオは征服するしかないな！」となること間違いなし。

なお最悪なことに、この場で神アレスの名を借りた骨王はクレスの巻き藁替わりである。

「さて、お試しと行くか」

戦意を煌々と昂らせる《スパルトイ・マーウオルス》を前に、クレスは工房から出てきた時そのままの作業衣姿だ。

だが、彼の顔に焦りはない——そも、試し切りに面倒な相手を使う道理もなく。

彼は明確な格下として、《スパルトイ・マーウオルス》のことをその態度で以て見下していた。

その不遜な面構えに増々怒りを燃やす戦骨の巨王が、腰に下げた骨塊の天然武器を以て彼に斬りかかろうとするが……。

迫りくるその凶体相応の巨剣を前に、クレスは平坦な声色で詠唱する。

「神意接続。恩恵疑似励起——全行程良好。魔法強制発動……【黒き

沼、赤き咎。咬み千切り交ざり合う、汚泥のごとき我等が臍物】——

【ディアルヴ・ステイージュ】

瞬間。

魔剣の素材としてくべられながらも未だ生きているディナの『神の恩恵』と、クレスの『神の恩恵』が接続される。

柄を握る腕。そこに逆る、彼の背中より伸ばされた神の力アルカナムが剣に搭載された神アレクトの神意を侵食し強制的に励起させる——そして。

剣より逆流するディナの第三魔法「ディアルヴ・スティージユ」が、彼の恩恵アビリティの数字を書き換える。

此度必要なのは『魔力』ではなく、単なる『力』。

彼の意志に従って、クレス・カタストロフの『魔力』が半減し——その更に半分、計『魔力』の四分の一の数字が彼の『力』に加算される。

そこいらの冒険者であればともかく、レベル21の彼であれば、合計値は減少したとはいえその変動による影響は凄まじく。

『スパルトイ・マーウォルス』の振るう巨骸剣を指先で受けようとして——力加減を間違え、静止させるのではなくバラバラにしてしまった。

『!? !? !?』

「なるほど、こいつは感覚を掴むのに時間があるな。変動率を抑えていて正解だった。慣れるまでは想定していたような極振りには止めておくか」

まさかたった一度の交錯で得物を破壊されるとは思わなかったのか、何度もクレスと己の手元の間で視線を行き来させる戦骨の巨王。

それを前に悠然と歩み寄るクレス。

その瞳は千の言葉よりも雄弁に彼の心情を述べていた——「今からお前を実験台にする」と。

そこへ来て漸く『スパルトイ・マーウォルス』は気づいた。

これは彼らが復讐を果たす絶好の機会などではなく、クレスによるつまらない独壇場一方的な蹂躪の場でしかなかったのだと。

だが、時すでに遅し。

『ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ?!?!?!』

戦骨の巨王は彼の目覚めさせられた目的の通り、全身の骨を無残に粉碎されて再び荒砂の一部へと戻るのだった……またクレスが試し斬りをしたくなる、その日まで。

その断末魔を最後に、彼はぼそりと呟く。

「……ふむ。次は殴って奏でる打律楽器ハグパイプでも作るかな」

平然と「『悪』はいくら使い潰しても困らない」などと言うクレス。  
次なる彼の犠牲者が誰か？

少なくとも、善良な市民であればそれを知ることはないだろう。

間章：2023冬イベ

フロンティア☆クリスマス〜深々と降り積もれ、甘雪の祝福よ〜

——『迷宮開拓計画』。

それはクレスが常の冒険の中で構想していた、冒険者の在り方を革新する施策の一つ。

迷宮内に農地や牧場を設けることで、第18階層の《リヴィラの街》をより拡大拡張した拠点、すなわち《冒険者が地上に戻ることもなく攻略行動が完結するような橋頭堡》を『深々層』に築く戦略的『計画』である。

しかしそれは残念なことに「未だ『机上の空論』に過ぎない」というのが、また同じクレスの見解であった。

大前提として、迷宮の有する主な資源はあくまでも魔石である。

つまり迷宮内の大地には《雲菓子》のような一部を除いて、地上の動植物が成長のために必要とする養分が決定的に不足しているのだ。

そのため迷宮内で上記のような一次産業を行うにはまず肥料等を地上から輸入しなければならず、その実行には当面の循環が整うまで莫大な投資が求められる。

しかし遅々として攻略の進まない現状、迷宮内部に彼の思い描く《もう一つのオラリオ》を作るよりも、素直に地上まで戻った方が効率的なのだ。

とはいえいつかは冒険者たちも今クレスの立つ迷宮の深淵に到達するであろうし、その時のために資料を取っておくことは決して悪いことではない。

そんな訳で彼は試験的に『深々層』の一部を切り開いて耕し、『麦畑』を作ってみたのだが——。

——ぶっっちゃけ、やり過ぎた。

「さて……これだけの量、どう消費するか。保存して少しずつつ切り崩すと言っても、使い切るより先に三割ほどは駄目になりそうだ」

第201層の拠点前で、クレスが見上げる先。

そこには彼が実地試験で育て上げた迷宮産小麦ダンジョンおよそ4Tトーンが、巨人が腰掛けるような小山ほどの高さにまで積み上がっていた。

……誰がどう考えても、彼とサラの二人暮らしだけでは使い切れないことが目に見えている。

「せっかくの実験だから」と彼はモンスターによる被害も想定した上で作付面積を多めに取っていたのだが、その予防策が完全に裏目に出た結果であった。

案山子代わりに吊るしておいた《スプリドルストンの竜頭骨（※第230層産）》が求められた役割を完璧にこなしてくれたおかげである。

「勿体ないが、流石に焼いて捨てる他ないか……？」

「——ちよつと待った！ ならば妾に良い提案があるのじゃが！」

「じゃが!!」

「なんだやかましいぞ。どうした？」

使途に困り果てたクレスの側に突如として駆け付けたサラが、「我が胸中に妙策あり！」と言わんばかりの自信満々な顔で彼に一冊の本を差し出す。

既に頁を捲られた状態のそこに映っていたのは、『クリームで白く彩られた苺のケーキ』のレシピであった。

それをビシビシと指先で叩きながら、彼女は楽しそうにクレスへ眼前の問題の解決策を提示した。

「明日は確か、地上で言う聖夜祭クリスマスとやらの日じゃろう!? ならばいつ

そこは有り余るこの小麦でケーキを作り、地上オラリオで配るのが良からうて! どうじゃ、名案じゃろう!？」

「まあ、構わんが……つまるどころお前が作ってみたいだけだろう」

「まあ。だが問題はあるまい? どうせ妾達だけでは持て余すのが目に見えておるんじゃ、ならばパーツとバラまいた方がこの小麦た

ちにとつても幸せじやろうし」

「それはそうだが。……そこまで言うなら、好きに使つていいぞ」

クレスとしてもせつかく地上から資材諸々を運び込んで育て上げた小麦なのだから、廃棄処分にするのが不本意だったのは間違いないかった。

ふんす！ と息を荒くして腕をまくる、やる気十分な様子のサラに彼は適当に許可を出す。

そうして悩みの種が解消されたところで、彼は普段通り『深々層』の最新部を冒険するべくその場から踵を返そうとしたのだが……。

その肩を、サラがやたら強い力で掴んで引き留めた。

「何を「俺はこれ以上は知らん」みたいな態度しとるんじや？ 主様も料理するに決まつておろうが」

「は？ 何故だ。やりたいと言いつ出したのはお前だろう、作りたいたら一人で作れ」

「流石に明日までにこれだけの量を挽いて混ぜて捏ねて焼いてとなると、妾一人で厨房を回すのが無理なのは目に見えておるのじや。それに、この惨状を作ったのは他ならぬ主様じや。ならば腐らせずに最後まで看取る責任が、生産者にはあると妾は思うがのう？」

「む……」

「のう？ 妾は間違つたことを言つとるか？ なあ？ なあ？」

面倒臭そうな表情を浮かべるクレスに、ぐぐつ……と顔を近づけて圧をかけるサラ。

迷宮出身の彼女はその経歴から《食》に対して人一倍ありがたみを感じており、特に「食材を無駄にすること」を嫌う性格を有している。

——単一かつ平坦な味しか存在しない、彼女の種族の主食たる《血液》。

他の個体とは異なり理性を有していたからこそ、彼女は永遠に代り映えのしないその地の底の冷たく鉄臭い日々食事に生きながらの停滞死と絶望を抱いていた。

——そこへ来訪した彼女の天敵たる冒険者は、気まぐれから暖かい《料理》をふるまった。



その迷宮<sup>ダンジョン</sup>深くにおいては革新的な、地上においては極々普通の《文明》が与えた衝撃は、彼女が《美食家<sup>グルメ</sup>》に目覚めるのに余りあるものだった……。

そんな過去を持つサラの料理にかける意気込みは、まさにクレスが迷宮<sup>ダンジョン</sup>攻略にかける情熱と同等のものと言って良い。

生産者としての後ろめたさを僅かながら抱いていた彼はその勢いに押されて、肩を竦めながらも頷いてしまうのだった。

「……分かった、お前の言うことの方が正しいさ。それにここへ辿り着いて以降料理は任せっぱなしだったし、一度腕の錆を落とすのも良いか。手伝おう」

「ふははっ、それで良いのじゃ！ では——いざ行かん、我らが死<sup>キユイジー</sup>地に！ なのじゃ！」

「はあ……」

サラのどこから借り<sup>バクった</sup>たかも分からない決め台詞をやる気なく受け流したクレスの顔だが、次の瞬間には引き締まっていた。

決まったことにいつまでもケチをつけるよりも、手早く全力で終わらせた方が楽だと彼は数百年にも及ぶ経験の上で理解していた。

どこからともなく取り出した前掛<sup>エプロン</sup>けを装着し、料理人としての顔になった彼はサラにこれからの段取りを問う。

「で、俺は何をすればいい。凝った菓子は作った記憶がないんだ、きちんと計量する必要があること以外はさっぱりだぞ」

「うむ、そうじゃな……ともかく、ここにあるだけの小麦の量に見合うその他の材料を地上から仕入れるのは不可能じゃ。ならば第一に、それらを集めばならん。モンスターの《卵》と《乳》、甘味系統のドロツプアイテムから抽出する《砂糖》、それと飾り付ける《果実》といったところじゃな。あと、製粉もしなければならぬし……主様にはまず、そちらをお願いしようかの」

「良いだろう。粉挽きだな、任せておけ」

「どうしても焼きに時間がかかるからの、疾く頼むぞ！ では妾は素材の回収に行ってくる故——よいい、ドンっ！ なのじゃ！」

クレスに仕事を振ったサラは早速己が役割を果たすべく、身体を大

量の蝙蝠に分裂させて迷宮内に散らばっていった。<sup>ダンジョン</sup>

普段はずっと人型を取っていて「<sup>ドミナ・ノスフェラトゥ</sup>吸血皇鬼」？ ……ああ、妾のことか！ すっかり忘れとったのじゃ、許せ！ ふはははっ！」などとほざく彼女がその種族特性である蝙蝠化まで使って取り掛かるとは、いよいよ本気らしい。

ならば自分も本気で取り組もうと、クレスは目前の大量の小麦に改めて向き合い、製粉する方法を考える。

「……必要なのは石臼、それと篩か。だがこれだけの量を一気に処理するならまああの規模がいるな。素材は《ギガント・タートルの岩甲羅》と《クライオゼニック・ドラゴンの髭》がちょうど良さそうだ。後はついでにオーブンも用意しておいてやるか、つと。その前に一応、話を通しておくか——「シユレディンガー」

クレスが転移して向かった先は当然の如く、ギルド長であるロイマンの執務室である。

彼がいつものように音もなく侵入したその部屋では、嫌らしい顔を浮かべた主人が黄金に輝く貨幣を数えていた。

「ひひひ……ひー、ふー、みー……いつ手に持っても、この重みの有難さは素晴らしい……」

「随分と趣味が悪いな、ロイマン。まあお前の特殊性癖は置いておくとして、諸々あつて明日の<sup>クリスマス</sup>聖夜祭でケーキを配ることにしたから職員を貸せ」

「は、はっ!? 誰だ断りもなくギルド長の部屋に侵入するとはこの無礼者めっ!! ——と、貴様かクレス・カタストロフ!？」

げえっ、とマズいものを見られたとでも言いたげに机に積み上げていた金貨をロイマンは慌てて懐に隠した。

それに構わずソファアに腰かけて茶菓子に手を伸ばすクレスの図々しさに、彼は遠慮なく文句をぶちまけるのだった。

「そも、誰が貨幣で興奮する特殊性癖だ！ いくら儂とてそこまで落ちぶれてはおらんわ！ ——しかも、ぬわあーにが「諸々あつて」だこの愚か者がっ！ いきなりやってきて明日職員を貸し出せ、だど？ しかも言うことにかけてケーキを配るなどと、何を考えておる！」

「こつちだけで食べ切れない量が、あー……2、3万人分ほど出る予定だからな。なに安心しろ、本職の菓子職人パティシエの仕事じゃない、料理が趣味なだけの素人（※数百年単位で修業済）が作る代物だ。ある程度の味は保証するが本職には劣る、商会の戦略を邪魔することにもならんだろう。対象も普段ケーキなど買わんような、ダイダロス通りの住民なんかを想定しているしな。あと人件費はいつも通り俺の金庫から差っ引いておいてくれ」

「うぐぐぐ……だから、なんでもそう思い付きで済ませようとするなど言っておるのだっ！ それにそれだけのケーキの材料など、いったいどこから仕入れて——」

『深々層』だが」

「ふざけるなこの大馬鹿者めがあああっ!!」

ともすればギルド全体に響くような大声で叫ぶロイマンが、ぜえーっ、ぜえーっ、この短時間で切らした息を整える。

「……そもそも『深々層』の素材を地上にばら撒くのは貴様とウラノスの間で結んだ盟約に違反する行為だろうが！ 慈善事業をするのは——儂さえ巻き込まなければだぞ——いくらでも結構だが、そんなこと出来るわけがなからう!!」

「別に武器や防具の素材になるわけじゃない。食べればそこで終わりなんだ、お前らの危惧するようなパワーバランスの崩壊を招くことにもならんし良いだろ。……たぶん」

「たぶん、だど!? 今貴様「たぶん」と言ったか!? そんな不安になるようなことを言うんじゃあない、この——!」

『そこまでだ、ロイマン』

「神ウラノス!?!」

泡を吹いて倒れそうになるのを懸命に堪えながらクレスの浅慮を糾弾するロイマンの声を、突如として響いた老神の声マジック・アイテムが遮る。

「どうやら執務机に置かれた水晶型の通信用魔道マジック・アイテム具を介して話しかけているようだ。」

『《暴喰》のような例外を除けば問題はなからう。クレス・カタストロフ、今回は特例で認めよう。ただし……』

「ああ、分かっている。こんなことはもうこれっきりにするさ。俺だつて本意じゃないんだが、今回は色々あつてな……という訳で職員の設定と説明は任せた。俺は調理に戻る」

それだけを言い残して、ロイマンが次に瞬きすると同時にクレスは姿を消すのだった。

老神ウラノスの気配も消え、残されたのは部屋の主であるロイマン一人。

つい先ほどまでは一人静かに黄金色の輝きを眺めて悦に浸っていたというのに、今の彼の心はまるで潮風に晒された錆び付いた銅貨のようにザラついていた。

「——ふ、ふぎ、ふぎけるなあああつ!!! クレス・カタストロフうつつつ!!! 貴様つ、今度という今度は絶対に許さんからなあああ——つ!!!」

狂乱するロイマンの涙声などつゆ知らず。

拠点に戻ったクレスは任された製粉の作業をこなすべく、道具の作成から取り掛かるのだった。

「……さて、まずは《クライオゼニック・ドラゴン》から仕留めてくるか。冰山を消し飛ばすついでに良質な《水》になる《万年氷》クリスタルアイスも回収するとして……」

クレスの『計画』に係る失敗と、サラの唐突の思い付き。

そして地上を巡る季節的な事情が偶然にも絡み合っただけで、フロンティア☆クリスマス『最前線から贈る聖夜祭』。

今日も賑やかで騒がしい、ダンジョン迷宮での日常が幕を開ける——!

『カリギュラの船』編

プロローグ：夜天に囁く　＋　静養の冒険者

《プロローグ　夜天に囁く》

空を見よ。

宙の彼方に輝く無数の星々——その中に一際大きく瞬く、銀の大鏡を見上げよ。

其は貞淑である。

清廉である。

下界の安眠を見守る、静かなる美である。

汝らの快く崇める日輪と双極に位置する、高貴なる女神の唯一無二たる写し身である。

——けれど、その名は一つにあらず。

現<sup>い</sup>状<sup>ま</sup>。嘆かわしいことに、大いなる月を騙る痴れ者どもが幾つも蔓延る

——ああ、どうして許せよう？

月を司る神は一柱<sup>ひとり</sup>で良い。

ああ、愛しき皇帝<sup>けんてい</sup>よ示しておくれ。

かの憎らしくも誉れ高き「無双<sup>オ</sup>の狩人<sup>オン</sup>」にすら勝る我が象徴よ。

息子の血を、娘の骨を与えよう。

我が尽きぬ愛を、喜んで捧げよう。

故に、赤き父祖の名の下に——落陽よ、二度昇れ。ふたたび

偽りの月を撃ち落とし、我らが威光を今一度世にしらしめようではないか。

【銀月の皇帝】の名を——再び!!!

### 《静養の冒険者》

誰かが言った——迷宮ダンジョンの奥深くには、楽園楽園があると。

七彩絶華の花々が乱れ裂き、傾政無法の女たちが代わる代わる美酒を注ぐ至上の極楽。

第176層に位置するその空間の名こそは、『幻想楽園』ファンタズマゴリア。

来訪者を紛い物の快樂にて酔わせ狂わせ誑かした挙句、果てには魂の一片たりとも残さず喰い尽くして、己らの養分にしてしまう……そんな、魔性モンスターの者どもの巣窟である。

そして今日も、その花園に訪れた哀れな男貴が一人。

食人花は一嗅ぎするだけで陶醉するような甘い蜜を垂らして。

淫魔サキユバスは生まれ持った蠱惑的な肢体を惜しげもなく晒して。

酒灯鬼ドウジは手にした杯に、零れんばかりの薄く桜色がかつた魔酒を張って。

やってきた男を囲い、知らず知らずのうちに身も心も手籠めにしてしまおうと迫って——振るわれた剣の一閃が、その悉くを一蹴した。

「……チツ、発達部位ドロップはなしか」

舌打ちを一つ鳴らした『楽園』の侵入者が、刹那の内に身体を塵塵に還すこととなったモンスターたちの唯一の遺品石を勢いよく蹴り飛ば

す。

それらはひゆうと音を立てて風を切り、近くにいた他のモンスターたちの口元へと命中。

食人花の魔石は食人花へ、淫魔の魔石は淫魔へ。

酒灯鬼の魔石は酒灯鬼へと——彼らの顔面に、突如走る衝撃。

『ギイツ!?!』

『ギヤアツ!?!』

『グオツ!?!』

侵入者の蹴った勢いが強過ぎるあまり受け止めようとした前歯が折れたり、喉につつかえて嗚咽を漏らしそうな感覚に襲われるモンスターたち。

だが、その場でのたうち回りながらも、彼らはなんとか窒息せずに同族の魔石を呑みほすことに成功して……その身体に新たな『力』が漲る。

迷宮のモンスターが共有して持つ『魔石喰らい』の能力によって、ステイタスが強化されたのだ。

ならば次に為されるべきは、いきなり行われた狼藉に復讐することであって。

彼らはその全身に力を込めて——一歩踏み出すことすら許されず、その『力』の源となった餌たちと同じ末路を迎えた。

『ギィィイツ!?!』

『ギヤアアアアツ!?!』

『グオオオオツツツ!?!』

またしても転がる、先ほどよりほんのちよつとばかり大きくなった魔石。

その周りに散る黒い塵の中に目的のものが落ちていかなかったことを確認して、侵入者ことクレスはまたもや舌打ちを溢した。

「チツ。……まあ良いさ、そうはなから手に入れられるわけもない」

左腕に握った剣にこびりついた血を振り払いながら、眉を顰めるクレス。

珍しく不機嫌な様子を漂わせながら、彼はまたもや魔石を他のモン

スターらの口元目掛けて蹴り飛ばした。

うち一体が先ほどの光景を見ていたのか吐き出そうとするも、瞬時に近づいたクレスによって脳天を殴りつけられて無理矢理呑み込ませられる。そうして全身に魔石が取り込まれたことを確認してから、彼は再びそのモンスターを屠って魔石を回収する。

今回の彼の狙いは、『魔石喰らい』を利用した効率的な希少<sup>レア</sup>素材目的の周回だった。

人間には通常持ち得ない、モンスターが同族の魔石を食らうことで成長する<sup>システム</sup>権能。

一般的な冒険者であれば「それは避けるべき事態である」として、持ち帰らない魔石などがあればその場で砕いてしまおうと言った対策を取る。

しかし彼のようなちよつとした上級者であれば、それを活用することもままある。

わざとモンスターに魔石を食わせることで強化し、発達素材をより<sup>ドロップし</sup>落ちやすくする行為。

——いくら強化されるとはいえ、自分が屠れる範疇であればこれを利用しない手はないだろう？

そんな持論を元に、クレスは蟲毒染みた周回をこの『楽園』で行おうとしていた。

「さて、今回は何体殺せば落ちるか。出来ればさっさと終わらせたいものだが……」

そう思っているときほど、欲しいものは手に入らないのが世の常。神々曰く「物欲センサーは悪い文明」らしいが、それはさておき。モンスターたちが「どうやら目の前の来訪者には自分たちの能力が通じないようだ」と悟った時——表裏一体とばかりに、天国は地獄へと変貌する。

見目麗しい外面を自ら引っ剥がした彼らが、その醜悪なる本性をさらけ出す。

鮮やかな色彩の花弁を持っていた食人花<sup>トレント</sup>は、地中に隠していた丸太のような根茎を引きずり出して巨体を形作る。



瑞々しい身体が自慢だった淫魔は黒目と白目をぎよろりと反転させ、更には体皮を毒々しい紫に変色させつつ、男を物理的に溶かす毒を垂れ流し始める。

そして女姿の酒灯鬼は顎を頬の奥まで引き裂いて剣山の如き凶悪な牙を見せつけ、手に持っていた酒を浴びるように一息に飲み干して酩酊状態へと至る。

それぞれ真の姿に成った『エンゼリック・トレント』『トラプトリクス・サキユバス』『ドウジ・オーガ』らが一堂に会する様は、まさに百鬼夜行さながらの光景。

その中心に立たされたクレスは、されど呑気そうに左脚でこつこつと地面を叩いていた。

「シー、今日は特に調子が悪いな。妙に疼くし、苛々する」

『キエアアアアッ!!』

「うるさい。その猿叫にすらならないただの金切声を一々飛び掛かってくる度上げるのはなんだ？ そう迷宮に教わったのか、ええ？」  
鼓膜を突き破るような甲高い声を上げて、鎌のように伸びた爪を振り翳す淫魔。

その鳩尾を撃ち抜くように蹴り上げたクレスは、相手が怯んだ隙にすかさず首を切り落とした。

続く食人花の太い茎部分による殴打を剣で真つ二つに断ち、そのまま芋類のようにでっぷりと太った根茎ごと唐竹割りにして枯らす。

そして、この中で最も『力』の高い酒灯鬼が本能のままに振るってくるラリアットを、彼は剣を槍のように突き出す刺突で以て受け止めるようにして貫く。

魔石を壊してしまつては元も子もないので、そこだけには細心の注意を払いながらも。

真つ向から相手に立ち向かつて始末するという、どこか彼らしくない暴力的な立ち回り。

鋭くも荒々しく剣を振るいながら、クレスは次なる個体目掛けて取り出した魔石を投擲する。

そうして——斬つて捨てては次に魔石を引き継がせて。

嫌がる素振りを見せるモンスターがいれば強引にでも呑み込ませ、口からの摂食が不可能なほどに魔石が大きくなつてくると、今度は直接腹を切り裂いてそこに押し込むという暴挙にすら躊躇わず手を染めて。

彼は延々と、モンスターたちの生死を握って暴れ続ける。

一帯に飛び散った淫魔の体液やら鬼の美酒やらが蒸発した退廃的な臭いが立ち籠る中、彼はまだまだ目的の素材が落ちぬと無言で語って剣を振るう。

その目は何処までも冷静で冷淡で、そして冷徹であつた。

「……」

クレスが師スカサハより教わつた奥義が一つ、『明鏡止水の奥義』。およびそれを元として成長したBランクの心眼アビリテイが、場を満たす淫蕩な雰囲気<sup>アムビエンス</sup>に彼を溺れさせない。

彼の五感を犯そうとするこの階層のモンスターたちの能力は、残念なことに彼の魂に対してまったくの無意味であつた。

故にこそ叶う周行行為——徹頭徹尾機械的で、効率厨な殺戮行為。天国から地獄へと真なる姿を見せた第176層が、彼の手によつてその上から阿鼻叫喚の第二園へと塗り替えられる。

『——ギヤアアアアッ!!』

「……こんなものか」

最終的に都合百ほど仕留めては食わせてを繰り返して、出来上がったのは三つの異形なる異形。

一つ。狂つたように咲いては枯れて、弾けた種からまた生えてを繰り返す食人花<sup>トレント</sup>。

一つ。男を魅了するだけに過ぎなかつた体液<sup>エキス</sup>が濃縮の限界を迎え、ついに自らすらも耐え切れなつてビクビクと震えるばかりになつた淫魔<sup>サキユバス</sup>。

一つ。浴び過ぎて脳が完全に酒蜜<sup>アルコール</sup>に浸食され、ケタケタその場で笑い転げることしか出来なくなつた酒灯鬼<sup>ドウジ</sup>。

既にモンスターと呼ぶことさえ憚られる姿になつたそれらをクレスが仕留めれば、ようやく狙つていた素材たちが黒い塵に半ば埋もれ

ながら姿を現した。

『エンゼリック・トレントの種』、『トラプトリクス・サキュバスの唾液』、『ドウジ・オーガの酒雫』。

それらを拾い集めたクレスは拠点に戻ることにすらしないままに、その場で座り込んで急ぎ調合を始める。

両脚で挟んだ乳鉢に種子から取り出した胚乳を入れ、そこに残る二つの液体を少量ずつ注ぎながら丁寧に磨り潰していく。

やがて出来上がった乳白色の液体に懐から取り出したキツイ薬草ハーブ臭の液体を同量注いで、更に念入りに掻き混ぜる。

「……完成だ」

最後に、出来上がった薬を前に座り込んだままの彼はおもむろに左手を右肩に添えた。

——がちやり、と何かが外れる音が響く。

同時にクレスの右腕が支えを失ったように、地面に落下した。

否、それは彼本来の右腕ではなく、魔道具マジック・アイテムの義肢であった。

更に左脚の付け根にも同様の手順を行い、繋がっていた義足を外す。

そうして五体から三体となった彼は、出来上がったばかりのクリーム状の薬を指先にとって、少し前まで右腕と左脚のあった場所に残る生々しい傷跡に満遍なく塗り込んでいく。

「まだまだ先は長い、か」

クレスが目をやった二つの傷跡には、うごうごとと蚯蚓が蠢くような黒い呪詛カースが轟めいていた。

それこそは彼が先日、やつとの思いで攻略した迷宮第200層ダンジョン『厄東の死海』に住まう海の霸王の亜種、『レヴィアタン』による報復と恩讐の呪いである。

おおよそ二十年がかりの大討伐——かの地に住まう原罪の黒獣を討った紛れもない偉業と引き換えに、彼は右腕と左脚を失った。

とはいえ取り戻す目途はどうに立っており、今の彼は三百年ぶりの静養中なのだった。

『エンゼリック・トレントの種』が豊富に持つ栄養分、『トラプトリ

クス・サキユバスの唾液』及び『ドウジ・オーガの酒雫』の鎮痛作用、その他諸々を配合した医<sup>ディアンケヒト</sup>神お墨付きの再生薬<sup>リジエネレータ</sup>。

それによって傷は徐々に癒えつつあるが——完治までには討伐に掛かったのと同程度の時間を要するだろうと、レベル19に達したばかりの彼の直感<sup>ダイカン</sup>は察していた。

討伐を報告した当時、ウラノスは『リヴァイアサン』の主たる生息地を突き止めたことに珍しく興奮を隠せないでいたし、主神カオスは眷属が死に体ながらも生きて帰ってきたことに涙を流して喜んでた。

しかしクレスの内心はただ一つ。

その間迷宮<sup>ダンジョン</sup>の攻略が滞ってしまうことに対して、大きな怒りを孕んでいた。

このような状態で新たな階層に挑む蛮行を犯さない彼の理性が、逆に今の彼を苦しめていた。

「……また一年が過ぎる。約束の時か」

——きつとまた、眷属を溺愛する主神にべたべたと引っ付かれるに違いない。

大切にしてくれる分には構わないが、もう少しどうにかならないものだろうか。

預言者系統のスキルを持たずとも分かる、地上に待っている面倒くささに溜息を漏らしながら義肢を装着し直したクレスは地上で使う分の薬を包んで魔法を唱える。

「我は此処にありて、尚あらざる者なり——【シユレディングー】」

目指すは久方ぶりの地上。

今を生きるゼウス・ファミリアとヘラ・ファミリアのせいで年がら年中騒がしく、この世においてもっとも退屈とは縁遠い最盛<sup>オラリ</sup>の都——

変態どもと怒れる乙女たちの、ちよつとした一騒ぎ

地上に着いたクレスは、味わい慣れた迷宮ダンジョンのものと異なる新鮮な空気を吸って鼻をピクリと動かす。今を生きる人々の活気が溢れればかりに含まれたそれは、彼の嗅覚と舌先に決して小さくはない違和感を抱かせる——まるで、遠い異国に足を踏み入れたかのような。

迷宮ダンジョンに住み、迷宮ダンジョンに生きる。

その生活を続けて久しい彼にとっては既に、迷宮ダンジョン特有の閉塞感漂う緊張に張りつめた世界こそが肌に馴染む日常となっていた。

なんとなく落ち着かない、そわそわとした感覚を身体を一度身震いさせて振り落としてから、気を取り直した彼は転移先として予め確保してあった隠れ家の一つから外へ出る。

途端に、世界がいつそう騒がしくなる。

地上に來たのだと言う実感を本物の日光と共にその身に受け止めながら、しかし彼は、どうやらいつにも増して大きな騒動が街を賑わせているらしいことに気付いた。

「それにしてもこの街は相変わらず賑やかだが……なんだか今日は普段よりもどんちゃん騒ぎが激しい気がするな。何かあつたのか？

……ああいや、そういうことか」

少し風の声に耳を傾ければ、彼はすぐさま喧騒の正体を理解した。

どうやら今日のオラリオでは、彼基準で言うところの『クソしようもない馬鹿騒ぎ』が繰り広げられているようだ。

しかも嫌なことに、それは彼もよく知るところに原因を帰しているときた。

——ままある悪神の信者どもの暴動テロほどではないにせよ、やかましさで言えばそれに限りなく匹敵するひと騒動。

ただ間違いなく、下らなさで言えばこれに勝るものはないと断言できよう——その正体は。

「またか。またあの変態エロスケベ老神ジジイのやらかしか。……しかも『眷属どもまで巻き込んだのヘラ・ファミリアの大浴場での覗き騒ぎ』

とは。まったく、性懲りもない……」

クレスも思わず呆れた喧騒の中身。

それは自らの下半身に滾る性の欲望の忠実なる下僕となった、一柱の老神及びその神意に率いられた男バカどもの浅慮が引き起こしたなんとも情けない犯罪行為であった。

むさ苦しい男連中が自派閥内に色気が皆無であることを理由に暴走して、主神の妻が率いるファミリアに夜の（現在は真っ昼間だが）隠密行動を仕掛け、それがバレて追い回されている——それが、今回の大騒ぎの正体ということらしい。

つまりはこのオラリオで度々発生する、ゼウス・ファミリアとヘラ・ファミリアの抗争。

というより寧ろ、被害に遭った女性たちによる加害者どもへの天誅と言った表現の方が相応しかろうか。

いずれにせよ……ああ。

なんと地上らしくて、阿呆らしいことかとクレスは嘆息する。

「あの老神のやることなすことには毎度見下げ果てさせられる。たまには……極々稀々にはマトモな所も見せるとはいえ、それで果たして補い切れているのか怪しい所だ。これは俺でも擁護しきれぬ自信がないぞ?」

視界の端には、街の空を自慢アピリティの能力値で疾駆する冒険者たちの姿が見える。

見たいものは見れたと言わんばかりに笑いながら「後は逃げ切るだけだ」と言わんばかりに、蜘蛛の子を散らすようにして建物の屋上を駆けながら撤収していくゼウスの眷属たち。

そしてその背中を、ヘラの眷属たちが三者三様の顔で追いかける。

ある者は恥じらいに顔を真っ赤にして。

ある者は怒りに顔を修羅のように転じて。

またある者は、一切の感情を削ぎ落した能面のような虚無を顔に浮かべて。

街の各所で激しい衝突音を響かせながら、彼女らは自らの裸体を許しなく目にした無作法者どもに罰を下すべく獵犬となって疾駆する。

両者ともに最低限の配慮は忘れていないようで、幸いなことに街には大きな被害は出ていない。

それどころか、民衆たちは冒険者たちの繰り広げる高次元の戦いっぷりをまるで祭りのように眺め盛り上がる始末。

道理で騒々しいわけである。

果てには昼間から酒に吞まれている一部の酔っ払い共が「今回は（男どもが）何分持つか」などと賭け事をしている——現状はヘラ・ファミリアの抱える冒険者の方がやや平均レベルが高いため、大抵最後にはゼウスの眷属たちがとっ捕まえられて痛い目を見させられるオチが待っている——その側を通り抜けてバベルに向かいながら、クレスは被ったフードの下で独り言ちる。

「だから女神ヘラには何度も忠言しているのに……ゴブニユでもヘファイストスでもいいから、貞操帯を作ってもらって夫に嵌めさせろと。そのためなら『深々層』の素材も提供すると言っているのに、毎回簡単に許すからつけ上がるんだ」

浮気癖の激しいゼウスのことを、それでもなんだかんだ言つてヘラは愛している。

それはもう、心の底から。

故に何度叱りつけ折檻をしたとしても、結局最後にはゼウスの「愛しておるぞ我が妻よ」の一言で容易く許してしまうのだ。

クレスは彼女から愚痴を聞かされるたびに「やはりここは頑丈な貞操帯を着けさせてしまうより他はないだろう」と何度も提案しているのだが……そうしようとする都度に、ゼウスはあの手この手で妻を<sup>ヘラ</sup>かどわかして逃げおおせるのだ。

「至極度し難い男の屑、『下半神』とはまさにこの男神のためにある言葉だ」とは、その夫婦間のやり取りの一部始終を傍で見ていたクレス並びに歴代のヘラ・ファミリアの団長たちの共通認識である。

「——百の知を持つ我は百の口以て百の魔を語る」！ 「ラルバ・パヴォーネム」！

「ぐおっ!?」 街中で戦術級魔法使うとか正気か「百の識持つ女傑」!?! 「うっさいわ痴れ者め、貴様らが常識を語るなぞ百年早いのじゃ!」

どうやら東の空で、全身に魔眼を埋め込んだ異形のエルフが複数の属性を内包した虹色魔砲をブツ放したようだ。

その美しき光線がうまく馬鹿のうち一名を討ち取ったようで歓声が上がる中、今度はクレスの後ろからドタバタと複数人の駆ける足音が聞こえてくる。

「——くそつ。あの爺なんて速いんだ!? 冒険者のアタシたちでも追いつけないなんて!」

「——ふははつ、年季の入った儂の健脚じゃ! 高々十数年しか生きてない小娘どもに捕まえられんのも道理じゃよネ!」

後半に聞こえた調子に乗ったその声は、まさしく今クレスがその評価を地面にめり込ませて……それ所か、地中深くのマントルにでも埋めようかと考えていたゼウスのものであった。

そちらに顔を向ければ、見慣れた逞しい顎髭の老神がするすると人ごみの合間を擦り抜けて、後に続く女冒険者たちの手を巧みに攪乱している様子が見て取れる。

懸命に追いかけるヘラの眷属たちを後ろにしながら呵々大笑して逃げるその足捌きはまさしく、かつて彼が入れ込んでいた道アルゴノウトの技術わざそのもの。

——しかし、それが女湯の覗きのために利用されていることはなんとも情けない……否、そう言えばあの白髪アルゴノウトの英雄も似たようなことをして何度も妹に怒られていたような?

そんな懐かしい過去に思いを馳せながら、クレスは偶然にもちよほど横を通り過ぎようとした老神の首根つこをきゅつと引つ掴んだ。

「——ぐぴゅつ!」

「ちようど良かった。貴神アンダの血が切れかけていたからな、いつも通りちよつとばかり分けてもらうぞ」

潰れた蛙のような変な音を口から漏らしたゼウスの首筋に、クレスはすかさず懐から取り出した注射器の針をプスツと突き刺した。

そのまま一瞬のうちに必要な分の神血イコルを抜き取って、そして彼は続けざまに神の老体を地面へと押し倒して更に腕を背中側に固定する。

その取扱いはまさしく、犯罪者に対するそれ。



流れるようにして完全にキマった腕関節の痛みに、ゼウスは反射的に悲鳴を上げた。

「アイタタタ!? なんじゃいったい!? つーか今血イ抜かれたよネ!? 儂をあの大神ゼウスと知つての狼藉か!」

「知っているとも。あの、妻を放つて若い娘たちを手籠めにするのが趣味の下半神だろう?」

「酷くない!? ナニソノ偏見!? ……って、その声はお主、クレスか? 戻ってきとつたのか!」

「生憎と今日がその日だな。戻ってくるなりこんな馬鹿騒ぎでお出迎えされるとは思ってもみなかったが」

ゼウスの問いに辛辣な言葉遣いで返したクレスは、そのまま冷たく言い放つ。

「それに偏見も何も、事実だろうが。既婚者なのだからいい加減妻に夫として相応しい姿を見せてやれ、といつも言ってるだろうに」

「うぐつ……だつて仕方ないじやろう? 儂の熱いパトスが女の尻を追いかけると叫ぶんじやもん!」

「戯言を往来で叫ぶな、他人の迷惑を考えろ」

不変の特性を持つ超越存在らしい妙に芯の通った叫びに対して、クレスは眉間に皺を寄せる。

その次いでに、彼はゼウスの腕にかける力をギギギ…と僅かに強めた。

「痛い痛いっ! 痛いぞいつ!? 儂つてば一応神様なんじやから、もう少し優しく扱わんか!」

「女湯覗く元気があるんだ、これくらいがちようど良いだろう。…それに、そう言われなくてももう手は放すさ。どうやらお迎えが来たみたいだしな?」

「え?」

ゼウスがクレスの言葉の意味に気付いて顔を上げた先には、怒り心頭の女冒険者たちが立っていた。

彼女らは囚われの身となった覗き魔<sup>ゼウス</sup>を前に、一様に頬をヒクつかせている。

そんな彼女たちに、クレスは一寸の躊躇いもなくゼウスを引き渡した……両手両足を芋虫のように縛るといっておまけ付きで。

「ほら、もう逃がすなよ」

「すまねえな。オラ立てクソ爺、アタシたちの裸を見た罪はその身体でキツチリ支払ってもらうからなア……！」

アマゾネスにしては珍しく肌面積の小さい、ヘラの眷属らしい貞淑さを持った褐色の女戦士にクレスは「気にするな」と手を振る。彼としては特段、大したことをしたつもりがないからだ。

しかし一方、素直に受け渡されたゼウスからしてみれば、今後のことを考えればこれは大事であった。

「くっ！ 裏切ったなクレスウツツツ！」

「裏切るものにもない。かつて色々世話になつた義母上とだらしない下半神、どちらの意向を優先させるかなど常識的に決まっているだろうが」

「くっ……真面目な好青年染みた言い方をしておって！」

「その何処に問題がある？ 言えるものなら言ってみろ」

ヘラの眷属に腰縄を握られた哀れな敗北者<sup>ゼウス</sup>の遠吠えを軽くあしらって、クレスは彼女たちの方に目を向ける。

それに反応して、どうやら彼女たちの中で一番レベルの高いらしい女冒険者が一步前に出てきた。

紅茶のような赤髪を肩口で切りそろえた、凜然とした女騎士。

彼の見立てではレベル6になったばかり、といった所か。他のファミリアであれば団長格だが、ヘラ・ファミリアではようやく派閥の幹部候補生になれた辺りだろう。

彼目線からしてみればまだまだ初々しい雰囲気のあるその女性は、表情を固くしたまま口を開いてクレスに頭を下げた。

「ご協力感謝する。御身のおかげで早く片付いた」

「構わんさ。それより、今日という今日も苦労させられているようだな」

「ああ、そうだな……。この老神は常人と同じ身体能力のくせに、異様に逃げ足が速くてな。そのおかげでいつも苦労させられるんだ」

「この神は『弱者の戦い方』を熟知しているからな、仕方あるまい。……コツを一つ教えるとすれば、遠慮しないことだ。なんならお前たちと同じレベルを相手するくらいの勢いでかかった方が良い。いつそ腕の一つくらい折るくらいの心構えで「ちよっ!?」なに言うてるんじやクレス!」うるさい。ともかく、それくらい無理矢理やつてしまつて構わん」

なんならそれくらいしないと懲りない、しても懲りるかどうかわからんと肩を竦めて暗に伝えるクレス。

側のゼウスの絶望顔はさておいてそう語る彼に、女騎士は真剣な様子で答えた。

「なるほど、それは是非参考にさせて頂こう。「いやしくて良いからネ!」やかましい。……それはそれとして、今回の礼として後に貴君のファミリアまで何か届けさせたいのだが。良ければ御身の名前を伺つても?」

「クレス・カタストロフ。所属ファミリアの本拠地は一般には公開していないが、女神ヘラに聞けば教えてくれるはずだ」

「了承した。では後日、改めて仲間たちと共に謝礼を伝えに伺わせていただこう。——行くぞ皆、主犯格は捕まえたとその他の部隊に伝達しろ!」

きびきびと周囲に指示を出しながら、彼女は一刻も早く主神ヘラに下手人を突き出そうと仲間を連れて再び動き出す。

しかし諦めの悪いゼウスが、悪足掻きとばかりにまた騒ぎ始める。

しかもその矛先は面倒なことに、同じ男ながら浪漫を共有しようとならないクレスに向けられる。

「ぐぬぬ……クレスよ、何故お主にはこの『想い』が分からん!」

「分かつてたまるか。そも、同意を得ていない相手の裸を勝手に盗み見るのはただの犯罪だ。そんなに女の裸が見たければ、正々堂々付き合つてからの筋が通っているだろう」

さつさと話を終わらせたいと正論で殴りつけるクレスに、されどゼウスは懲りず応戦する。

「馬っ鹿もん! 良いか、お主は何も分かつたらん! 若い乙女が男

に覗かれて、意図せず恥じらうところが良いんじゃないやろうが！」

「普通の女なら見知らぬ男に覗かれたら恥じらうより先に恐怖を覚えるだろうが。そこまでして悦楽に浸りたいとは俺は思わん。それに、そんなにその状況シチュを味わいたいのならそこらの春本エロ本か風俗で我慢しろ。何の関係もない他人に手を出す時点で、有罪ギルティは免れ得んに決まってるだろうが」

こんな下らない猥談で時間を取られるのは、どう考えようと無駄に他ならない。

クレスはさつきと別れたのだが、そうならば後は妻ヘラの厳しいお仕置きが待っているだけのゼウスはなんとしてでもこの時間を引き延ばそうとしてくる。

もつとも彼としては、引き延ばす分だけ逃亡の算段を立てる猶予を手に入れたという老神の裏の思惑は百も承知の上だ。

そのため、彼は手早く物理的に相手を黙らせることにした。

「これ以上下らないことを言っていないで、早く叱られて来い。その無駄に饒舌な口をいくら動かそうと現状は改善されないし、なんなら抵抗するだけ余罪を重ねるだけだぞ。……店主、これはいくらだ？」

「うぐぐつ、嫌じゃ！ 儂は決して諦めん——諦めんぞ！ 女の子の大きなおっぱいに埋もれてウハウハするこの世ハレムの春を！ その為にはヘラの乳二つだけでは足りんのじゃ！」

「だからそう言う破廉恥なことを公の場で喋るなど。こっちまで恥ずかしくなってくる……十ヴァリスだな、分かった」

「お主も男なら！ その真面目腐った面の下に同じ欲望を抱えているハズじゃ！ そら、儂に続けて言ってみい！ 巨乳こそ至高！ 大きければ大きいほど、たわわであればあるだけ良し！ 巨峰ビッグバスト・イズ・ジャステイスそれ則ち正義なりや！」

「聞くに堪えんな。——もう良い、暫くこれでも噛んでいろ」

口先ばかり達者な道化ウザい奴擬きを黙らせるには、古今東西その舌を切り落とすのが一番と相場が決まっている。

しかし仮にもゼウスはオラリオの双翼を担う巨大ファミリアの主神であるため、そこまで強い対応を行うことは難しい。

よってクレスは面倒臭がりながらも、近くの露店で売っていたハンカチをくしゃくしゃに丸めて簡易的な口枷を作り、その口に突っ込むことにした。

更にその上から縄を二重ついでに三重と噛ませて、完全に黙らせる周到ぶりを披露した。

「むーっ！　むーっ！　むーっ?!?!?」

「これで良し。後は女神ヘラが如何様にでも処分してくれるだろう。この爺の発言は一言一句正確に伝えてやってくれ……どうした？」

ふと見れば、女騎士姿の冒険者が顔を赤くしながらちらちらと彼とゼウスの間で視線を右往左往させて連行の手を止めていた。

……どうやら、口調の通り真面目かつ純朴な性格であったようで、今のゼウスの馬鹿な発言を真に受けて恥ずかしくなってしまうらしい。

——確かに、女性ばかりのかのファミリアの中で育てば露骨な男性の欲望に弱くなってしまいうのも無理はないか。

ゼウスの度し難さに目を細めながら、クレスは後輩に助言を贈ることにした。

「はあ……こんな痴呆爺「むーっ!?!」の語る外見至上主義など一々気にするな。見かけはあくまでも人を気にかける切っ掛けに過ぎない。外面が麗しくとも中身が腐っている例など、歴史を振り返ればこと欠かん。——何よりも大事なのはそいつの内面であって、これまでに成してきた努力だ。その面から言えば、お前に恥じらうことなど何一つないだろう。こんな馬鹿げた言葉なんて、自信を持って弾き返せばいい」

「……そうか、そうだな。いや、すまない。こほんっ……クレス・カタストロフだったな？　貴殿は少なくとも、この老神及びその眷属の男どもよりは信頼に値するらしい。このことも含めて、後に改めて礼を述べさせてもらおう。我が名はハーマイオニー・サマーヴィル、二つ名は「不沈箱舟」<sup>アークシッブ</sup>。覚えておいてくれたら嬉しい……なにを見ている、行くぞお前たち！」

クレスの言葉を受けて案外早く立ち直った素直な女騎士こと

【不沈箱舟】<sup>アークシッテ</sup>を筆頭にして、ヘラの眷属たちはようやく自身の最期を受け入れてがつくりと項垂れたゼウスを引き摺って行くのだった。

きつとあの老神にはこれから、ヘラによる凄惨なお仕置きが待っているのだろう。

以前に彼がカオスから聞いた話によれば嘘か誠か、その悲鳴はオラリオ近郊の港町メレンにまで轟いたとか。

——まあ、どうせそれでも少し間隔が空いたらまた同じことを繰り返すのだろう。

その連行の様子を見送るクレスに最後、ゼウスが視線で何かを伝えてくる。

——自分だけうまくこの娘にコナかけおつて！<sup>サマーヴェイル</sup> 相手が貧乳とはいえずるいぞ！

彼はその何処までも救いようのない今際の言葉を黙殺し、バベルに向けて再び歩き出した。

それから暫くして、ようやく普段の適度な騒がしさを取り戻し始めたオラリオ。

その中を歩くクレスの耳に、されどまた珍しい声が一つ届く。

「——誰か、この女の子を見かけた人はいらっしやいませんか!!」と。

## 搜索依頼：「消えた少女の行方を追え」

バベルに向かうクレスの目的は二つあった。

一つは主神カオスに一年ぶりに顔を見せて、無事を報告すること。

もう一つは当代のギルドの長と意見を交換すること——彼からは『深々層』で得た諸々の知見を提供し、代価として彼女からは上層で新たに発見された未開拓領域等の情報を貰うことである。

「しかし、どちらから先に済ませるか……難しい問題だな」

段々と近づくバベルの陰を前に、クレスは悩まし気に自分に問うた。

と言うのも、何しろ現在——彼からしてみればどちらの対応も中々に面倒臭いのだ。

主神カオスは言わずもがな。

片腕片足を失うといった通常の冒険者であれば引退間違いないの大怪我を負ったクレスのことを大切にしようとするあまり、帰った時には限界を超えて必要以上にベタベタと引っ付こうとしてくる。

とうに過ぎ去ったはずの思春期における親への反抗期が蘇ってしまいそうになるくらいには、うざったい「ごほんごほん」。

そして当代のギルド長である小人族バルウムの女。

彼女は種族由来の賢さかしさで以て、口八丁と手練を駆使してあの手この手でクレスに厄介な話を押し付けようとしてくる。しかも毎度彼の許容範囲をギリギリで超えてこない辺りが、特に面倒なことこの上ない。

「それはそれとして、攻略出来ない暇に調合をし過ぎたせいで素材も枯らしかけているからな。そつちも買い集めなきゃならん。ふむ、いつそそちらを先にして面倒は後に回すか？」

嫌いなものを先に食べるか、後に食べるか。

そんな次元の話をぐるぐると頭の中で堂々巡りさせているうちに、いつの間にかクレスの足はバベル前の大広場まで辿り着いていた。

辺りを見渡せば、今日も今日とて迷宮ダンジョンに潜ろうとする勤労働勉

冒険者たちの姿が見受けられる。

その中で、彼に見覚えのある紋章エンブレムとそうでない紋章エンブレムの割合はおおよそ7：3といった所か。

また彼の知らない内に、新たな神々が着々と地上に根を下ろしてきているようだ。

——さて、その新興ファミリアの中でいったいいくつが名を上げ、いくつが歴史に一文すら残さず消えていくのか。

彼としては、願わくはなるべく多くの後輩が育ってほしいと考えているのだが……そんな先達としての祈りは、得てして届かないことが世の常だ。

「ま、そんな下らん常識に捕らわれないよう精々頑張ることだ。俺も頑張るからな……よし、と」

希望に燃えた若人たちを前に、クレスもウダウダと悩んではいられない。

まずは特に厄介そうなギルド長との情報交換から先に処理してしまおう……そう考えて巨塔の門を潜ろうとした矢先、その前で一組の男女に呼び止められる。

「あの、すみません——この女の子を見かけませんでしたか!？」  
「む?」

同じデザインの指輪を左の薬指に嵌めているところからして夫婦であるらしい、壮年の男女。

その彼らが、クレスに対する声掛けと同時に胸元に抱えていた紙束のうち一枚を彼の手に押し付けてくる。

それを仕方なしに受け取った彼は、さっと中身に目を通した。そこに大きく書かれていたのは、大きなはしばみ色の瞳を持つ可愛いらしい少女の似顔絵。

名はユリア・ダルシア、年齢は5歳。

その彼女が、三か月ほどまでにお使いを任せたつきり姿を消してしまったのだとか。

——よくあることだな、とクレスは特に目の色を変えることもなかった。



強い光はより濃い陰を生むと言ったように、一見して時代の最先端を行く輝かしいオラリオの裏側にも何時の時代においても相応に黒い陰が付き纏イッパイルスっている。

例えば悪派閥イッパイルスに代表されるように、実際の所はこの英雄都市も誘拐や暴行、建造物の爆破に至るまで犯罪とは無縁でいられないのだ。

ガネーシャ・ファミリアなどが治安維持に走ってはいるが、人数に限りがある以上、手を伸ばせる範囲にも当然限度がある。

そして冒険者たちは本業が犯罪の取り締まりではなく迷宮ダンジョンの攻略であるから、知り合いがその禍に巻き込まれない限りは基本的に発生した事件の解決に自ら関わろうとはしない。

現に、先ほどからクレスが眺めていた冒険者たちはみな夫婦の訴えに耳を貸すことなく側を通り過ぎていくばかりだ。

未だ天界に居ると言う『正義』や『秩序』を司る神々が地上に降りてくれば、またこの状況も少しは改善されるのだろうか……神の御心は人たるクレスには分からない以上、いったい何時になることやら。

「あの……」

ずっとチラシを手にして佇みながら世の無常について考え込んでいたクレスを「心当たりがあるようだ」と勘違いしたのか、通りすがりの冒険者たちに声をかけていた夫婦が話しかけてくる。

「もしかして、見覚えがあつたりしましたか？」

「いや。悪いが、普段は迷宮ダンジョンに籠りつきりで地上のことはあまり気に留めていないものでな。考えていたのも別のことだ」

「そうですか……すみません冒険者様、お邪魔をしてみました」

クレスの答えに落胆し俯く妻の肩を、夫が慰めるようにそっと抱きしめる。

その際にちやりつ、と彼の胸元に下げられた飾りが小さく音を鳴らした。

ついそちらに目を向けたクレスは、思わぬ物を目にしたとばかりに今度は彼の方から夫婦に声をかけた。

「すまない。貴方たちの娘の話とは別件で申し訳ないが、そのペンダントを見せてはもらえないか？」

「は？ 構いませんが……」

夫の方が不思議に思いながらも、クレスに首の細鎖を外してペンダントを手渡す。

その持ち主の気軽さとは裏腹に、彼は慎重な手つきで以てそれに目を凝らした。

手触りと質感からして、単なる木製の彫刻のようにも見える装飾具。

丸い球状に削った表面の上から複雑に絡み合う蔦のような保護具が取り付けられており、その奥にはよく見れば隠されるようにしてヒエログリフ神聖文字が書かれていた。

「——『我、麗しき金枝の使徒なり。偉大なる女神のために祈りを捧げん』」

「おや、なぜその文言をお知りにな？ それは我が一族に伝わるお祈りの言葉なのですが……」

「ここにそう書いてあったからだ。しかし、この祝詞は……なるほど、そういうことか。これは『ウイスクム聖金樹』、エルフの崇める『大聖樹』と祖を同じくする代物。そしてその枝を加工した装飾品を持つことを許されたのはひどく限られている——そうか、古きローマーナの末裔か」

クレスの発したその問いかけに、夫は妻と一度顔を見合わせてから確と頷いた。

「よくお分かりになりましたね。その通りです、貴方の仰った通り私にはかの偉大なるクラディウスの末裔。とはいえ今はこの街のしがな——い——大工をしておりますがね」

「大工か、この街ではおおよそ仕事にこと欠かない重要な職だな。しがないなんて評価は相応しくないだろう。それに、建国王である初代は同じ造る者として良い仕事を選んだと喜ぶはずだ。最もクラディウス朝の面々は顔を顰めるかもしれんがな」

なにしろ彼らの祖先であるところの皇帝の一部は、とある大工の息子が率いたとされるファミリアとよく争っていたことで知られているからだ。

かつての宿敵が腕を磨いた仕事に自らの子孫が携わることになっ

たと知れば、今頃彼らの中には冥界でキレ散らかしている者もいるかもしれない——それはさておき。

それにしても、とクレスは手にした『ウイスクム聖金樹』の宝玉をよくよく観察して考える。

「この『ウイスクム聖金樹』、当時のローマナにおいて再生と繁栄の象徴として崇められただけあってまだ生きているな。大元は既に戦火に焼かれてとうに消えたと聞いたが、例え破片になろうと、潤沢な魔力があればすぐにそこに根を生やして元の大樹の姿を取り戻すだろう……それに」

『ウイスクム聖金樹』、別名『ポーシヨン聖なるヤドリギ』は優秀な回復薬の素材として、当時のローマナでも大変重宝されていた素材である。

今のクレスにとつては喉から手が出るほどまでは言わないものの、それでも手に入れておいて損はない代物だ。

——更につけ加えるなら、オラリオで起こる犯罪と言えば大抵が悪神の眷属どもが関わっている。

リジエネレータ再生薬の調査実験の過程で失った検体の確保もちょうどしたいと考えていた矢先に、それが叶いそうな話が舞い込んできた。

ならばせっかくだ、とクレスは夫にペンダントを返すと同時に口を開いた。

「先ほども言った通り、俺は貴方たちの娘を見ていない。しかし、良ければその搜索を依頼として請け負おう」

どうせ現状では迷宮攻略も満足に出来ない身なのだ。

ならばせめて身体を鈍らせないよう、たまには冒険者らしく普通の依頼を受けてみるのも良いだろう。

そう軽く考えて提案したクレスの手を、夫婦は驚きと共に喜びを浮かべて強く握りしめた。

「それは本当ですか!?! ……ですが、申し訳ないことに私たちの血筋は元皇帝一族のものとは言え、とうに落ちぶれた身。大した遺産を引き継いだわけでもありませんし、冒険者の方に満足いただけるだけの報酬を用意することが出来るかどうか……」

「金は不要だ。ただし、事後報酬としてそのペンダントを譲り受けた

い。全体とは言わない、極僅かな一部分を削り取らせてもらうだけでも構わない。ただ、代々受け継いできた家宝に傷をつけることに変わりはない。それでも良いのであれば、だが」

「構いませんー」

まず間違いなく、あのペンダントは彼らにとって家宝に等しい代物に間違いはない。

クレスの見立てによれば、当時皇帝に仕えていた由緒正しき彫金師一族の手による代物である。歴史的価値は勿論のこと、売却すれば彼らの孫世代まで不自由しない暮らしが保証されるだろう。

それをいきなり「寄こせ」と言うのだから一晩くらいは迷う時間が必要かもしれないとクレスは考えていたのだが、しかし夫婦は構わず彼の提案を即座に受け入れた。

「娘が戻ってくるのであれば、装飾品の一つくらい喜んで差し出しますよ。お婆様やお爺様が生きていればそれはもう盛大に怒られたかもしれないませんが……娘を取り戻すためとなれば、きつと偉大なる父祖もお許し下さるでしょう」

「そうか。——娘も立派な親を持って誇らしいだろう」

娘の身柄と家宝を天秤にかけて、迷わず娘を選ぶ。

世の全ての親にとって鏡となるべきその選択は、クレス個人としても好ましいところであった。

悪意を向けられれば容赦なく悪意を返す彼だが、人の善意を見せられれば相応の善意を施してやりたくなくなるくらいの心は残っているつもりだ。

「良いだろう。では当時の状況について、知っていることを一通り話してもらおうか。場所はギルドの一室を借りるとして……ついでにギルド長あの女にも情報を出させるか」

——きつと「迷宮狂いの貴様らしくもないですね。さては拾ったハニークラウド雲菓子でも食べましたか？」などと揶揄されるかもしれないが、どう返してやろうか？

そんなことを頭の隅で考えながら、夫婦をつれてクレスは改めてバベルの門を潜るのだった。

「罪人狩り（クライム・ハント）の開催をここに宣言しよう」

残念ながら、ユリアの両親から得られた情報は皆無に等しかった。そも、彼らからしてみれば知らぬ間に子供が消えていたのだ。

直接誘拐された場面を見ているのでもなければ、その道を専門とする探偵ほど観察力や推理力に優れているわけでもない。

そんな彼らから得られたのは精々、親として知っているであろう当然のものばかり——少女の外見的特徴や好きな食べ物、それと最近出来た気になる子のことくらいであった。

それでもと分かる限りのことを詰めて纏めた一枚のペラ紙を手に今、クレスは今代のギルド長である小人族バルウムの女と相對していた。

情報交換を終えてなお珍しく居座っていた彼が「誘拐された少女の搜索依頼を請け負った」と伝えた時の彼女は、それはもう、クレスがあらかじめ想定した通りの反応を返した。

「——あらあら。まさか貴方様が心底愛してやまない恋人ダンジョンのことでなくて、そこらの端依頼に浮気してしまうだなんて！　こんなこと、この私の瞳を以てしても見通せませんでしたわ。正気ですか？　それともついに狂われたのですか？　いえ、元々イカれてはいましたわね」

「……（やっぱりこうなったか、という顔をしている）」

「まさかまさかの迷宮狂ダンジョンが遂には善人落ちするなど狂気も凶気……いえ、一応は正気を保っておられるご様子ですわね？　つまりは狂気が一周回ってマトモな冒険者様に戻られたということですか、これは喜ばしい。今日は天から槍が、地から剣が、そして海からは斧でも飛んでくるのでしょうか？」

「そいつは迷宮内ダンジョンの天候に比べれば物理的に対処できるだけマシな方だな。それはそれとして、その嫌味を一息で言い切れるあたりお前も十分狂気じみてるだろうよ」

「そこは否定しませんわ。この街で曲がりなりにも長の責務を負うには、気の一つや二つは狂っていないければやっていけませんもの。ろくでもない神々や異国の名ばかりの王族との折衝、常にこちらの寝首を搔こうとしてくる部下の躰、後先考えずに突っ走る冒険者への支援……それらに心を削られる内に自然と舌鋒を鋭く尖らせてしまう。政治の世界に身を置く者の宿命ですわね。ふふふつ」

メーヴ・ナクナ・レイ。

クセのある栗色の髪を伸ばした、左目を覆い隠す欠けた金属製の眼帯が特徴的な彼女は、残るもう一つの琥珀色の瞳でクレスを見据える。

【魔女】【偽子老女】【腹黒女狐】などと通常不名誉極まりない呼称を嗤って受け止めるその女傑は、みっちりとクレスの冒険の記録が詰まった超重要書類をぽいっと机の端に投げ、「まあ良いでしょう」と組んだ両手の上に顎を乗せた。

「こうなればむしろ本題が副題で副題が本題。報告の方は後でじっくり読ませて頂くとして、今は貴方様が珍しく気まぐれを起こした理由から知りたいものですが……」

「報酬は『聖金樹』だ」

「なるほど！ それはまた面白いものを見つけられましたわね。ロマーナの復興を狙う末裔共にとつては喉から手が出るほど欲しい国の象徴樹……それほどのものなら確かに、貴方様を動かす理由にもなりますか。——で、態々それを私にお話になるからには要求があるのでしょうか？ 良いですとも、オラリオの秩序を保つこともまた我らギルドの掲げる至上命題。さあさ、どうぞ仰ってくださいな。罪のない幼気な少女を見つけ出すために、私たちに何をして欲しいのか」

メーヴのわざとらしい親切な口調はその裏に何かを企んでいると言っているようなものだが、そんなものを一々気にするようならそもそも彼女に相談したりはしない。

どうせ押し付けられる対価としての仕事も、面倒ごとであっても神々の試練のような達成不可能が前提の難事ではないのだから……。

薄い笑みを浮かべる彼女に、クレスは構わず率直に要求を提示す

る。

「俺からの要求は二つ。ギルドの資料室の使用許可と、消費して構わない囚人の提供だ。欲しいのは各悪神の一派閥につき一人ずつ、質は問わんし最悪拷問で頭が壊れてしまっても構わん。あとはそうだな、ゼウスとヘラのところ顔が利く職員がいると便利になるか」  
「良いでしょう。それで、代価はいかが支払うおつもりで？」

「迷惑料で十億ヴァリスもあれば良いだろう。ついでこの街の大掃除を済ませるのだから、十分お釣りがくると思うが？」

クレスのとりあえず金で解決しようと言う単純な暴力に、メーヴは少しばかり悩むような素振りを見せた後、それを受け入れた。

ただし、もちろん彼の想定していた通りの余計なおまけ付きで。

「ふむう……ま、ひとまずはそんなところで良しとしましょう。今回は間違っても、国一つを消し飛ばしたりはしないでくださいましね？」

ああ、あとは追加でウラノスからの討伐依頼も処理しておいてくださいいな。140層近辺に『偽神』が出現中のお達しです。迷宮越しなので、司る権能までは雑音がかかって知り得ないとのことですが」

「む、もうそんな時期か。面倒な奴だな……」

『偽神』。

かつて迷宮で果てた神が天界に還ることなく、そのまま迷宮に権能ごと存在を捕食された暁に産み落とされる影法師。

モンスターであるが故に神々が定めた規則に従うことなく、躊躇なく世界を書き換える神の力を行使してくる厄介極まりない敵。

とはいえそれだけの力を持つ子供を作るのは迷宮としても大きな負担であるようで、産み落とされる周期は200年に一度程度。

ちやうど忘れた頃にやってくるくらい認識の相手の出現情報に、クレスは分かりやすく溜息を吐いた。

「だが良いだろう、傷が治ったら速攻で片をつけてこよう」

「ええ、お願いいたしますわ。私風情では談笑に付き合うのが精々、激しい舞踏のお相手までは到底務められませんので。では話も纏まったことですし、貴方様につける職員を呼びましょう——」

メーヴが机に置かれていた鈴を鳴らすと、少しして一人の痩せこけた若いエルフが入ってくる。

「はっ、はっ……失礼します。お待たせ致しました、ギルド長。それで、どのようなご用件でしょうか？」

見かけは完全に事務畑の男で、どうやら肉体より頭脳を働かせるのが得意なようだ。

彼女の呼び出しを受けて急ぎ下の階から駆け上がってきたらしいが、その短い距離の移動だけで既に脂汗を流している。

いくら事務職とはいえ運動不足にもほどがあるなこの男、とまあまあ失礼な感想を抱きながら、クレスはその初対面の男についての説明をメーヴに視線で求めた。

「紹介しましょう。これはロイマン。貴方様のご希望通りの職員ですわ」

「はあ、ご紹介に預かりましたロイマン・マルデールと申します。それで、この冒険者は……」

見覚えのないクレスの姿に困惑するロイマンに、メーヴはさつと情報を与えた。

「彼はクレス・カタストロフ、貴方に分かるように言えば【アンタッチャブル禁忌】ですわ。今後長い付き合いになる相手でしょうから、覚えておきなさい」

名前と二つ名のみのも端的な紹介だが、その名を聞いた瞬間、一瞬だけロイマンの眼の色が変わったのをクレスは見取った。

だがすぐにロイマンは表情を戻し、とぼけたように首を傾げる。

「はあ？ 生憎と私めにはそのような冒険者には聞き覚えがありませんが……」

「余計なあーだこーだは不要です」

ぎろり、と睨みつけたメーヴの視線にすぐさまロイマンは顔を青褪めさせた。

「私が唯一認めたその頭が飾り物だったと自白するつもりなら、とつと今座ってる席から蹴り飛ばして差し上げますが？」

「はっ、申し訳ありませんでしたあっ!! 知っておりますとも、かの英



雄殿にあらせられるのでしよう！」

慌てて謝罪するその様子を他人事として眺めながら、クレスは考える。

そも、機密である彼の情報をギルド長でない一職員のロイマンが持っているというのはおかしい話だ。

となればつまり、この男は自分に権限のない情報を勝手に盗み見た愚か者ということである。

しかしメーヴの方には、どうやらそれを咎めるつもりはないようだった——その気であれば既にこのロイマンとかいうエルフは誰に看取られることもなく息絶えてしまっていたであろうと、クレスは彼女との長い付き合いで知っていた。

「このような男です。中身は俗物なうえ神経質。しかし意欲とその目には人一倍の価値があります。なにせ密かに私の執務室に忍び込んでまで、こちらを蹴落とす材料を探そうとしてくるくらいですからね？」

「ぎ、ギルド長……まさか私が、そのような……」

「言い訳は結構！……なに、安心なさい。貴方をクビにするつもりはありませんよ、むしろ褒めたいくらいです。こちらからいくつかヒントを散りばめていたとはいえ、私から見事機密を掠め取ってみせたのですから。与えられた椅子に座ることしか出来ない、そのような愚鈍な連中にこの街の政治は任せられませんので」

「は？……はあ？」

何を言っているのか分からない、とばかりに目を丸くするロイマンをよそにクレスは事情を察した。

——どうやらメーヴはここへ来て極秘中の極秘たる彼と顔合わせを行かせたあたり、将来的にロイマンに長の席を譲ることを見据えているのだろうか。

つまりはそれだけ使える便利な駒を今回クレスに貸し与えて、情報漏洩の償いとして働かせるついでに、その付き合い方を勉強させるつもりということか。

「というわけで、ロイマン。暫く貴方を彼に預けます。……細かいこ

とはそちらの裁量に任せますので、どうぞご自由にコキ使ってやってください」

「分かった、期待させてもらおう。では先に囚人の方から済ませるか。行くぞ、いつまでも頭を下げていないでついてこい」

「は、はい……失礼します」

にこやかな顔で手を振るメーヴの執務室から離れ、クレスは血の色が失せたままのロイマンを連れてバベル内の階段を地下に下つていく。

その間、二人に会話は無い。

片やもとより会話が好きでなく、片や蹴落としたかった上司に弱みを握られた挙句笑って送り出されたばかりで恐怖に思考を支配されているのだから、それも仕方のないことなのかもしれない。

ただどんよりと肩を落としたロイマンが他の職員と擦れ違う都度にぎよつとした目で見られていたことが、彼の印象に残った——そんなにもこの様子が珍しいのだろうか？

「……」

「……着いたな」

クレスとロイマンが辿り着いたのは、暗くジメジメとした地下牢だ。

ろくに換気が行われていないことが分かる、初見の者なら思わず顔を顰めてしまうような空間。石材が露出したままの壁と床から伝わる肌寒さは、そこに居る犯罪者たちの身体から熱を奪い、逃亡や反逆といった思考を鈍らせる役割を十分に果たしていると言えよう。

事務室に設置されていたストーブで暖を取っていた管理人に、クレスは職員であるロイマンを介して要求を告げた。

「囚人共の一覧が見たい」

「はっ……おい、一覧はどこにある？」

「こちらです」

「よろしい。お前は自分の持ち場に戻っている」

管理人によって案内された、ここにいる囚人たちの情報を纏めた柵の前に立ったクレス。

彼はそこに無造作に押し込まれていたファイルの背表紙をぎっと流し見る。

刻まれている名前はいずれも、オラリオの長い歴史の中に生まれた闇の断片だ。

「アパテー、アレクト、オシリス、ルドラ、アヌビス……有名どころは一通り揃っているな」

「……仕方なからう。悔しいが、連中の積極的な勧誘につられる新人が後を絶たんからな」

「微笑ましくない就職活動だ。いくらギルドが注意喚起を行おうとあの手の手は次から次へと手を変えて無知な若者を絡めとっていくし、それに人生経験の少ない者たちに相手の裏を疑えと言ってもそう簡単には身につかん。いつの時代も為政者の悩みの種だ」

そんな話をしながら、クレスは柵の中からギルドにとって用済みとなった連中を選んでいく。

まともな情報を持たされていなかった者、尋問を終えて抜き取れるだけの情報を取り終えた者。

そうして後は処刑を待つだけの囚人を選んでいく中で、彼は同時に相手の口くでもない犯罪歴を目にすることになる。

強盗殺人、人体実験、故意の爆破……それらを記す筆跡はどれも聞き取りを行った職員の正義感からか、太く、また強いものであった。

「……よし、こんなところか」

その中から必要な連中を一通り選び出したクレスは、今度は看守から鍵を借りて実際に犯罪者たちの収容されている牢に向かう。

その後続くロイマンは顔を青くしたまま、彼に今回の行いの意味を問うた。

「そう言えば聞かされとらんのだが、そやつらで何をするつもりなのだ？」

「最期に一仕事してもらっただけだ。言っても詳しくは分からんだろうし、まあ見ていろ」

クレスは最初を選んで相手の牢の前に立ち、鍵を開けて中に入る。その中には檻褻切れのような服に身を包みながら、四肢を極太の鎖

で繋がれた男がいた。

名をガーク・ランドルフ。二つ名は【毒蛾】。

オシリス・フアミリア所属のレベル3にして、違法薬物販売の元締めを行っていた売人である。

全身が拷問もとい尋問によってひどく傷ついており、指やら耳やらが欠けて、治療が行われないうちに放置されたおかげで腐りかけている。

それでも息があるのは、流石は上級冒険者といったところか。

「ああ、なんだあ？　これ以上手前らに話すことなんざ何も——」

「黙ってる」

「がふっ!？」

今回クレスに必要なのは男の言葉ではなく、またこの手の輩は口を自由にさせていれば大概口なことを言わないので、彼は手始めにガークを殴って気絶させた。

「お、お前……正気か？」

「こんな連中に良心の呵責はいらん。そうメーヴには学ばなかったのか？」

手慣れた様子でガークを黙らせたクレスにロイマンが怯える中、彼は構わずガークの服だったものを引き千切って、その背中の『神の恩恵』<sup>ファールナ</sup>を露出させた。

そして彼はゼウスにも使った注射器の魔道具をそこを突き刺し、『神の恩恵』<sup>ファールナ</sup>を形作るオシリスの神血<sup>イコル</sup>を採取する。

「こんなところか。で、レベル3だったか？」

ついでクレスは、ガークの全身に目を走らせる。

元は屈強だったらしい刺青だらけの体は尋問とこの環境のせいでやつれており、拳傷が膿んでいるせいで綺麗な所が一つも見当たらない。

「まあ、レベル2以下だと使い物にならんからな。……仕方ない、こいつで我慢するか」

クレスは懐から一つの回復薬を取り出して、ガークの身体に満遍なく振りかけた。

『深々層』製の薬効は、一瞬のうちに相手の肉体を癒していく。それを見届けた後、彼は「何をするつもりか」と作業を覗いていたロイマンの前で、続けてナイフを取り出す。

そしてロイマンが止める間もなく、彼の刃が手早くガークの身体から皮膚を剥ぎ取った。

「——ぎやあああつ!？」

「もう一度寝てろ」

身体を抉られる突然の激痛に飛び起きたガークを再び拳で黙らせ、それつきり用件は済んだとクレスは今度は傷を治すことなく牢の外に出た。

一連の流れを見守っていたロイマンは、先ほどのメーヴの視線による詰問に加えてたった今彼の働いた凶行に顔色を青から更に白へと変化させていた。

「ぎ、貴様っ……!？」

「別に良いだろう、どうせ死刑だ。今あの出血で死んでも後で首を絞めても結果は同じだ、問題はない。ちよつと書類を書き換えるだけだし、その程度はお前の力でどうとでもなるだろう?。」

「……」

「そういう話ではない!」と今にも目の前の光景の生々しさに吐き出しそうなのを堪えるロイマン。

忍耐を試される彼をよそに、クレスは他の牢の囚人たちからも神血イコルを採取していった。

そうして一通り主要な悪神の神血イコルを手に入れたクレスは、集めたいくつかのガークの皮膚を縫い合わせて出来た大きな人皮紙を近くの床の上で伸ばして、その上に自前の触媒を乗せて呪詞を紡ぐ。

「契約に応えよ、徘徊する襲撃者の呪よ。我が意の下に血鎖を打ち鳴らし、響く魂の共鳴を以て、連なる命脈をここに示せ」——【アップト・ノーグッド】

クレスが唱えた呪詛名カリスと同時に、触媒が黒い染みと溶けて波打つ波紋のように人皮紙の全体に広がっていく。

その上に彼が囚人たちから採取した神血イコルを垂らすと、全く間に紙の

上に複数の名前が小さな文字で浮かび上がり始める。

十、二十と名前の数は増えていき、その数はやがて百ほどにまで達した。

「その力、呪詛カースだと……なんだ、なんなのだそれは？」

「別にそう恐れるほどのものじゃない。元は昔に【学区】でやんちゃをしていた悪童どもが作った悪戯道具に過ぎん。それを俺がオラリオでも使えるように改造したものだ。使い道は——言うより見るが易し、か」

そう言つて、クレスは手にしていた紙——出来上がった《地図》に目を凝らすようロイマンに促した。

エルフだからこそわかる、そこに漲る呪詛の強さに恐れを抱きながら、彼はその紙に浮かび上がった名前を恐る恐るいくつか読み上げて……目を見張った。

「ヴァレッタ・グレーデ……アニマート・ペルデイクス……オリオン・ブラック……メルティ・ザラ……こ、こやつらは……！ まさか！」  
「そう、これを見れば一目で分かる。連中がどこで、何をしているのかがな」

ロイマンの眼が捉えたのは、いずれもオラリオに潜む悪名高き連中の名前。

それらがまるで生きているかのように、人皮紙の上で動いている。

これこそは「アプト・ノーグッド」、その昔に【学区】で名を馳せた四人の悪童たちが作った呪いの道具『忍びの地図』の派生版である。

連中の悪戯にほとほと困り果てた当時の神バルドルに依頼されて彼らをとつ捕まえた際に取り上げたのだが、その『学区内に存在する全ての人間の足跡を複写・追跡する』性能にクレスは「これは便利だ」と目を付けたのだ。そしてこれまた昔に魔法大国アルテナを訪れた折に、とある魔法使いから買った『探索者の粉』なる魔道具マジックアイテムと掛け合わせてこの呪いを作り上げたのである。

効果は『垂らした神血イコルを持つ者の居場所と名前を、地図上に表示する』というもの。

その評価は——眼球を蛙より大きく飛び出させているロイマンの

表情から推して知るべし。

「後はお前たちが持つているオラリオの地図と重ね合わせれば、正確な配置が特定できるはずだ。——さて、クライム・ハント罪人狩りの開催をここに宣言しよう。ゼウスとヘラのところへ情報をやれ、そして連中にはこう伝えろ——『今ならギルドのにかけている懸賞金に更に十億ヴァリスを特別に追加してやる。借金で尻に火がついた者も、買いたいものに手が出せなかった者もいずれも気張れ。全ては次なる冒険のために』、とな」

最後に付け加えた一文があれば、両神はこれがクレスの差し向けたものだと思座に看破するだろう。

後は彼らに布告の信頼性を担保された眷属たちが暴れるだけ。

覗きを行うほど血気の有り余った連中も、滾る怒りのやり場を探していた者たちも喜んでこの狩猟劇に参加するに違いなかった——なにせ冒険者という生き物はなにかと金欠なので、後は深く考えずに暴れるだけで済むこの状況はまさに絶好ポーナスタイムの機会なのだから。

「ああ、俺は先に資料室に行っているからな。連中の手綱を握るのはお前に任せた」

「は、は、は……はああああっっっ!!」

クレスの見せた地図のあまりの便利性と、その後の面倒をすべてブン投げられた任されたことへの驚きにロイマンは思わず絶叫する。

だが、早く慣れてもらわなければ、彼の望むギルド長の席など夢のまた夢。

彼はメーヴのことを信用して、彼女の信頼できる部下たるロイマンに容赦なく追い打ちの一言を投げた。

「早くするんだな。その地図だが、大元の冒険者素材のレベルが足りてないせいで一日ともたず灰に還るからな。あと、追加の賞金のことには気にするな。俺が払う。計算だけ済ませて、後で纏めて口座から引き落としておいてくれ」

「はあっ!!? お、お前っ、これがそれだけで済むとっ……このっ——ふざけるなっ! ふざけるなあああっ!!」

もはや一刻の猶予もなし、とばかりに人皮紙《悪血の地図》を握り

しめて駆けだしたロイマンを見送って、クレスは呑気な足取りで資料室に向かった。

雑事は腐らせっぱなしだった貯金をバラまくままに任せて、彼本人はこれから誘拐事件近辺にあった事件の資料を洗うつもりだ。

悪人どもの隠し持つ資料とギルドの資料、その全てを漁れば今回の誘拐事件における手掛かりの一つも掴めるだろう。

そんな軽い考えから始まる、たった一人のための採算度外視の大掃除——ロイマンの苦<sup>暴</sup>勞<sup>食</sup>の歴史はここから始まるのであった。



吟遊詩人マーカス・ダルサス（マルクス・ドウルース）

元々の莫大な懸賞金に、更に十億ヴァリスもの大金を上乗せした『気前の良い報酬』。

無辜の大衆を害する卑劣な犯罪者どもを叩き潰すという、『社会的道義』。

そして、そんな毒蟲連中が蔓延る巣穴の場所は既に特定されているという『絶好の機会』。

それら三拍子が綺麗に揃ったクレス仕立ての据え膳を前にして、常に武装や女やらの都合で懐事情に頭を悩ませる冒険者たちの食指が動かぬことがあるだろうか？

——否。

無論、そんなことがあるはずもなく。

「——アヌビス・ファミアリア第三拠点、撃破されました！」

「【血斧】エリック・ソーヴァルド撃破！　って、戦利品の斧をほったらかして行くなあつ！」

「なんだ【不沈箱舟】？　……都市北東に残党が集結する動きがあるだど？　させるな、その前に各個撃破するよう仲間に伝達しろ！」

「【轟雷】より連中がダイダロス通りへの逃亡を凶っているとの報告あり！　あの裏街に逃げ込ませるな、情報共有急げ！」

ギルド内に喧々囂々と響き渡る、職員と冒険者たちのやり取り。

突如としてギルド長の名を以て発令された『罪人狩り』の影響によって、現在のバベル一階の受付は行き交う靴踵の音が止まない戦場と化していた。

次から次へと飛び込んでくる、ゼウス及びヘラの冒険者たちによる悪派閥撃破の報せ。

それらを捌きつつ寄せられた情報を中継するための臨時窓口すら設けられ、不運にもそこに配置された職員たちは、訳の分からぬまま

に怒涛の如く寄せられる吉報を処理していた。

「しかしなんでまた急にこんなことになったんだ!？」

「あの人のことだ、深く考えるな新人! 数年に一度はこの手の無茶苦茶が起きる、最終的にはうまく行くはずだから俺たち下っ端は黙って手を動かしてればいいんだよ!」

「ええ分かりましたよ! ただしその分残業代は弾むんですよね!？」

「普段鬼ババアだとか側が子供で中身が卑劣様だとかの悪口さえ叩いてなけりやあな! もし一回でも言ったらご愁傷さまだ、あの地獄耳にこの機会にガンと扱き使われるぞ!」

「そんなあー!？」

などという職員同士のじゃれあいも混じった騒ぎを遠くに聞きながら、一方でクレスはギルドの資料室に綴られたこれまでのオラリオで発生した事件の記録を漁っていた。

今回の少女誘拐事件の直前直後に類似した事件があったのなら、そこから解決への糸口を手繰り寄せられる可能性があるかと踏んでのことだ。

弾くように頁を素早く捲りながら、中身を流し見る。

そんな彼の正面では、ゼウス・ヘラの両ファミリアから帰ってきたロイマンが同じようにして調査作業の一部を任せられていた。

忙しい目つきでえっほえっほと行ったり来たりを繰り返す彼の仕事は、各悪神系ファミリアの根城から運び込まれてきた新鮮な事件資料をクレスの要求に応じて選り分けることだった。

「……………ふむ……………違うな……………ほー、これはまた……………」

「ぬぬぬうっ……………!! 何故だ、何故今更私がこのような雑事をつ……………!」

——ロイマンは当然、ゼウスとヘラの冒険者を動かした後には今のような猫の手すら借りたい状況が発生すると予測していた。

故に彼は先手を打って、あらかじめ何も知らない他の職員たちにこれからひっきりなしに訪れるであろう冒険者たちへの対応を任せただ上で、自分はこっそり後ろに構えるだけで楽をしようとしていたのだが……………そうは問屋が卸さなかった。

万の群衆の中から一つの足音を聞き分けるクレスの耳は、仕事の振り分けを終えたロイマンがギルド内で人目につかない場所にこそそこと移動しようとした瞬間をすかさず捉え、逃げようとする彼に「待っていたぞ、ロイマン。何処へ行こうと言うんだ?」「げえっ、クレス・カタストロフ——っ!?!」と次なる仕事を与えたのだった。

今のロイマンが取り掛かっているのは、冒険者たちが無造作かつ大雑把に積み上げた資料の山を分類して整理する作業である。

その中から特に今回クレスが必要とする誘拐及び人体実験に係る資料を規則正しく抽出するのは、一般の職員にとっては中々に頭を悩ませる仕事だろう。

ただでさえ一目見ただけで胸糞悪くなるような資料が辺り一面に散らばっているのを、中身がある程度理解した上で順序良く並べ立てるという精神的苦行にも似た仕事。

それでも流石は現ギルド長が見出した頭脳の持ち主だけあって、ロイマンは苦悶の声を上げながらも手早く進めていく。

——もつともこの一時においては、彼が山を崩すより早く冒険者たちが積み上げていくのだが。

終わりの見えない地獄の前に、愚痴を叩くロイマンの瞳は既に光を喪いかけていた。

「オシリス・ファミリア団長メルティ・ザーラ、討伐を確認!」

「アパテー・ファミリア団長のマグス・ハーメルンも捕縛されたぞ!」

「——うぬおおおっ!! 喜ばしい! 外から聞こえる報告はまず間違いないく喜ばしいっ! ……のだがっ! 今はこの吉報が、何より恨まれるわっ……!!」

職員たちの興奮交じりに叫ばれる報告は、ロイマンも手放しに賞賛したいところだった。

しかしながら、その吉報の余談おまけとして彼の前には更なる資料の山が積み上げられていくのである。

それは彼の抱いた希望を瞬時に押し潰すに足るほどの、残酷な光景であった。

彼は愚痴をぐちぐちと垂れ流しながら、側で資料を読み進めるこの

件の元凶をふと見て舌打つ。

その恨みつらみの籠った目を向けられたクレスは、ロイマンが一つ資料を読み進める間に三つのファイルを読破していた。

あまりに速く頁を捲る彼の動きに、ロイマンはストレス発散の意味も込めて唾を飛ばした。

「貴様っ、その速さで本当に中身を理解しているのか!? まさかただ適当に流し見ているわけではなからうな!」

「無駄口を叩くな。そら、次が来たぞ」

ただ、クレスから返された回答は非常にそつげなく。

それから自身の後ろでどんっ☆ と置かれる新たな資料の音に、ロイマンはまた絶叫せざるを得なかった。

「ぬぐうおおおあああつっつ!!」

「……駄目だな。これも違う……違う……違う……全然関係ないな……」

——なお、ロイマンの推測は半分間違っていて、半分正解であった。クレスは資料を一つ一つ頁の隅まで読み込んでいるわけではない。ざっと一目見た中で重要だと思っただけだけ抜き出し、それを記憶の中で検索にかけることによって、今回の事件に関係がありそうかを感覚的に識別している。

それはロイマンのような地の頭の良さによる論理的な思索ではない、単純な長年の知識の積み重ねによる反射的な直感。

古今東西のありとあらゆる悪事を目にし、また実際に巻き込まれた経験のあるクレスは、その身に蓄えた重厚な歴史の観点から『悪』の思考を分析していた。

「ぬがあああつ……!! 何故私がかんなクソみたいな実験資料などで目を通さねばならんのだつ……!」

【骨喰】、【無名之権兵衛】、【武者髑髏】討伐ウ!? 嘘だろ、こんなに多くの連中の首が並ぶところなんて初めて見たぞ……!」

唯一その価値を他人に認められた脳味噌を全力回転させて唸り声を上げるロイマン。

運ばれてくる悪神の眷属らの亡骸に「壯観だ」と浮かれたような声

を上げるギルド職員。

それらを背景に、クレスは静かに目前の資料へと目を走らせ続ける。

——だが、中々彼の勘に引つ掛かる情報が見つからない。

身寄りのない子供たちを養う慈善施設に偽装された、暗殺者養成機関。

ギルドの目の届かない遠方の村一つを丸々潰して建てられた、人体実験場。

政治と経済を裏から操って戦乱を無意味に拡大させ、難民を作つて奴隷に落とす人身売買事業。

どれ一つとつても決して許されざる蛮行だが、しかし少女の誘拐に関わらない以上、クレスはそれらの件についてさして気に留めることなく次の資料へと思考を移していく。

「……ぬ、なんだこれは？」

その中でふと、ロイマンが手を止めて一つの資料にじつくりと目を落とした。

若干禿げあがりつつある前頭部の汗を拭いながら、彼は羊皮紙に刻まれたとある実験の目的を読み上げる。

『<sup>ファルナ</sup>神の恩恵』の引継ぎ、だと？ 一体どういう……」

「——アパター・ファミアアとオシリス・ファミアアの共同実験だ。詳細が知りたいのならこちらを見る」

ギルド内に保管されていた最近の資料を一通り漁り終え、ロイマンの選り分けた資料にも眼を通してしまい、ついには他の手付かずの山に手を付け始めたクレスが一つのファイルを抜き取つて彼に差し出す。

——【<sup>プロジェクト・サクセスライフ</sup>実験名・恩恵継承】。

それは『<sup>ファルナ</sup>神の恩恵』を媒介することで、死した冒険者の魔法やスキル、果ては魂を新たな肉体に転写・発現させることを目的とした実験である。

結論としては、近親者同士の間では一応の成功を見たとのこと。

ただし制限時間があるようで、親子で一時間、双子で半日、<sup>クローン</sup>複写体

で一週間しか保てない。

最終的には被験者の肉体が二つの魂の結合に耐え切れず崩壊してしまうため、実用性がないとして失敗の烙印を押されている。

「ぬぬぬう……嫌味のつもりか貴様っ！」

「なにを言っている？」

瞬時に参考となる押収資料を投げ渡したクレスがそれなりに資料を読み込んでいることを悟り、深読みしたロイマンは「先ほど訴えたことへの意趣返しか！」と猶更唸った。

もちろんクレスにそんな意図はないのだが。

そうして濃密な調査の時間が半日ほど経過した頃に、ようやく事態はいったんの落ち着きを見せたのだった。

「……かひゅー、かひゅー……」

ぐったりとした様子で擦れた息遣いを響かせるロイマンの姿は、まさに屍のようであった。

一方のクレスは腕を組み目を閉じて、今回目を通した資料を改めて記憶から掘り返し、頭の中で再整理する——しかし。

「……駄目だな、今回の作戦は失敗だったか」

しかし、集められた情報の中には少女ユリアの誘拐に関わってきそうな情報は見つけられなかった。

悪神のファミリアが計画的に仕込んでいた、もし達成されたならば世紀的な事件となる大犯罪にも、その眷属が衝動的に起こした軽犯罪にも、少女の気配は見当たらない。

となれば結論は一つ。

クレスは探すべき場所を間違えていた、ということになる。

これまではオラリオ内の何者かが行った犯行と見ていたが、そうではないとなれば——。

「見るべきものはギルドにはない、か。ならば次はガネーシャ・ファミリアでオラリオの出入りの記録を見たい。行くぞロイマン、もう十分休んだろう」

「ま、待て、せめてもう少し休ませて……」

「ふん」

「——わぎやっ!?!」

甘えたことを言うな、とばかりにロイマンの背後に回ったクレスがその首筋に向けて引き金を引く。

プシュツ、と音を立てて打ち込まれたのは彼も御用達の『深々層』製栄養剤。

途端、うつらうつらと閉じかけられていたロイマンの瞼がカツと見開かれた。

「こ、これはっ!? 眼が、頭が冴え……うおおおっ!?!」

「これで大丈夫だな。なに安心しろ、あの女も一時期病みつきになって俺に帰る都度にあの手この手で強請りに来たほどキク代物だ。安全性は俺で確認済だし、効果もあいつのお墨付きだ」

「この戯けがあっ! それには中毒になっっていると言うのだからがああっ!! 安心なぞ出来るかあああっ!!」

「慣れる。奴の後を継ぐと言うのなら、この程度は日常茶飯事だと思え」

クレスの襟元を掴んで、ロイマンは訴えるようにその首を揺さぶろうとする。

しかしもちろん、彼の身体は大樹の根が張ったかのように微動だにしない。

逆に諦めの悪いロイマンの首根っこを引っ掴んで、ズルズルと引き摺りながらクレスはガネーシャ・ファミリアの拠点<sup>ホーム</sup>へと向かうのだった……。

「——うむ、見るに堪えん! その男は解放してやるが良い! ガネーシャ忠告!」

「そうか。御身がそう言うのなら仕方あるまい。ではメーヴにもまああ役に立ったと伝えるか」

民衆の王を名乗る象頭<sup>ガネーシャ</sup>の神との交渉はつつがなく終わり、いざ都市の出入記録を閲覧しようとしたところで、ロイマンに対して見かねた彼から<sup>ドクターストップ</sup>がストップがかかった。彼から安静にするよう止められた。

しかし、そこにロイマンが必死になって食いかかる。

「いや、神ガネーシャ！ どうぞご心配なさらず！ 私はまだまだ働けますとも！」

「聞けば十二時間もぶっ通しで働いていたと言うではないか！ 下界の人間には休みが必要だとガネーシャも重々承知しているゾウ！ と言う訳で無理せず休むが良い！」

「い、いえー！ 大丈夫です！ その男によく分からん栄養剤を与えられたおかげで元気澆刺でありますので！」

「まあ落ち着けロイマン！ 元々その身はそこまで仕事に精を出すというタマでもなかったはずだが……そこまでして働かねばならぬ理由があるのか？」

「い、いえ、それは……」

ロイマンは思わず、神ガネーシャから目を逸らして右往左往させる。

——言えぬ。まさか上司ミーザから情報漏洩を咎められて罰として働かされているなどと、今後に響く失態を迂闊に公言など出来る訳が無からうが！ と。

「なに安心するが良い！ 俺からもきちんとミーヴに話は通してやろう！ なぜなら俺は、ガネーシャだからだ！」

「ああ、いえ、その……」

純粹にロイマンの身を案じて、休ませようと圧をかけてくるガネーシャ。

それに対してなんとか言い訳しようと頭を回転させるも、半日の疲労が彼の思考を鈍らせる。

結局うまい言い訳を思いつかず、疲れ切った彼の頭が選んだのは——思考回路の気絶ショートだった。

「あ、ああ……あの、そのつ、このつ……どの？ うーん——あガふツ」  
ばたり、とその場に倒れたロイマンを見て、目をぱちくりとさせたガネーシャは代わりに事情を知っていきそうなクレスの顔を見る。

「……なにがこの男をそこまで急かしていたんだゾウ？」

「俺は知らん」



——そんな訳で、気を失ってしまったロイマンの代わりとしてクレスは新たな協力者を神ガネーシャから与えられたのだった。

青錆色の髪をざんばらに刈った逞しいその男は、呵々として彼に握手を求めた。

「クレス君と言ったか？ 俺はメルギイ・ヴァルマー！ 二つ名はヴィグネーシユヴァアラ

『象神の盾』！ 最近息子が立派な花嫁を迎えて、感激のあまり三日三晩妻と咽び泣いた世界一の果報者だ！」

「そうか」

元気で陽気な彼に手を掴まれ、クレスはぶんぶんと腕ごと振り回される。

ガネーシャ・ファミアリアの冒険者は大きく分けて、主神に似て過剰に活発な者とそれを見て呆れる者の二通りに分けられるとカオスはクレスに語っていたが——どうやらこの男は前者にあたるらしい。

そんなメルギイに連れられて、彼はガネーシャ・ファミアリアに設けられた保管庫に向かう。

「オラリオの出入記録ならここにがある！ それで俺は何をすればいい！」

「俺と一緒に記録を洗ってくれ。絞る条件は次の三つだ。一つ、出ていった日付が誘拐のあった日から7日以内であること。一つ、常連の商人関連ではないこと。そして一つ、署名が代筆で無いことだ」

「分かった、良いだろう！ ではさっそく取り掛かるぞ！ うお おおおおっ!!」

あまりに話が早いと言うか、さほど考えることなく愚直にクレスの指示に従って仕事に取り掛かるメルギイ。

ロイマンと違って物分かりが良いのは助かると思いつながら、クレスもまた調査を始める。

まずオラリオを出た日付から絞るのは、外部の人間が街の中で罪を犯した場合には即座に脱出しなければならぬからだ。

オラリオで犯罪に手を染めた場合、まず間違いなく悪神の眷属から「十二俺たちの縄張りで勝手やってんだオイ」と目を付けられる。彼らに一度絡まれたならば後はズルズルと引き込まれていくだけなの

だから、大抵は目的を達成すれば速やかに街を出ていくことを目論む。恐らく一週間程度を目途に脱出しているはずだ、とクレスはこれまでの経験から読んでいた。

そして常連の商人を調査対象から省くのは、偏に彼らに誘拐に関わる利益がないからだ。

既にオラリオと言う世界最大の市場に食い込んでいる以上、彼らにはそれなりの利益が転がり込んでいる。その状況を壊す危険リスクにあえて手を染めることは、通常有り得ない。

最後に、署名が自筆であることを条件にしたのは、対象を知識の面から絞るためだ。

一口に誘拐と言っても、その流れには大なり小なり計画性が求められる。それだけの頭があるのなら、文字も書けるくらいだろう。近隣から文字のかけない観光客も多数訪れることから、これでもだいたい省けるとクレスは踏んでいた。

ギルドの資料室にいた時と同じように、黙々と作業を続けるクレス。

一方メルギイは黙って仕事を出来ない性格のようで、積極的に彼に話しかけてきた。

「いやあ、それにしても結婚とは実に目出度い出来事だ！　そうは思わないか!?!」

「……」

「あの子は俺に似ず奥手でな！　恋人とは長い間じれつたい距離感を保ってばかりで親としては悶々としているばかりだったが、ついに『水船の匙』スフィン・アクアで一世一代の告白を成し遂げてな！」

「……」

「妻なぞもう孫の名前を考えているものだ！　俺としてはちと気が早いと思うのだが、うん！　初めて祖父母になるのだから、気が昂るのも仕方あるまい！　俺としては男児であればアルシュやドウルヴ、女児ならばシャクティやアーデイなどが良いと思うのだが、いかんせん気が早いと義娘に言われてな！　がははっ！」

「……そうか。まあ、実際に名づけを行うのは祖父母ではなく両親な

のだから、他のことを教えてやれ。赤子を育てるのには様々な気苦労がある、そのコツを代わりに話してやると喜ぶだろう」

ベラベラ話すとは言え、メルギイの作業の速度が落ちていくわけではないので、クレスも適当に返事を送る。

そうして記録を追っていく中で、彼の手が一瞬止まった。

「む……う？　これはなんと読む……マーカス・ダルサス……で、良いのか？」

「どうした。——いや、違うな。それはマルクス・ドウルースと読む。しかし共通語ではなく神聖文字を使うとは、今時の人間にしては珍しいな」

メルギイの手元を除いたクレスが、一つの署名を読み上げる。

神聖文字で書かれているが、かなりクセが強い。

読み間違えるのも無理はないと彼が思った、その矢先。

——クレスの直感が、違和感を訴えた。

「いや、待て。ちよつとそれを貸せ」

クレスは記憶の底から、神聖文字の知識を掘り起こす。

目の前の書類に書かれた字体のクセは、個人的なものと言うよりは……数百年ほど前にはまあまあ見慣れた様式のもの。だからこそ彼も、そこまで悩むことなくスラスラと読み上げることが出来た。

その書体の名は——。

「そうか、ローマーナ式……！」

「ローマーナ？　それがどうかしたのか？」

メルギイの不審がる声をよそに、クレスはその書類の中身にじっくりと目を通す。

職業欄に書かれているのは『吟遊詩人』——今時英雄譚の一つくらい誰でも諳んじられるだろうし、なにかと誤魔化しのきく仕事と言える。

持ち込みの所有物は金銭とその他旅の必需品、そしてケースに入った弾き語り用の大琴——それは、子供一人くらい容易く入る大きさでもあるだろう。

更に決定的だったのは、付記されていた当時の門番の所見。

試しに彼が一曲語るよう促したところ、マルクス・ドウルースと名乗る男は「珍しく、神聖迷宮譚ダンジョン・オラトリアに記載のないカリギュラ帝——かつてのローマナ皇帝の栄光を謳った」とある。

つまりは、この男が今は失われしローマナに深く関わることは確定的。

それでいて、今回攫われた少女はその皇帝の由緒正しき子孫である。

「——これか」

クレスはようやく、自分の頭にピカンと来るものが来たかと直感した。

彼はすかさず審査書類に添付された他の書類を確認する。

オラリオに入る時に提出された身分証明書——そこに使われているインキは船乗り等に好まれる水に強い類のものであり、紙には微妙に潮の香りが残っている。

となれば次はオラリオ近郊の港町を調査すべきだと、クレスは立ち上がる。

「メレンだ。メレンへ行くぞ」

「お、おう？ よく分からんがこの際だ、俺も付き合うぜ！」

水平線が太陽を呑み、世界は月の祝福に満たされる

港町メレン。

オラリオの目と鼻の先にある海洋の出入口に辿り着いたクレスは、休む間もなくガネーシャ・ファミリア所属の『象神の盾』ことメルギイ・ヴアルマの権限の下にギルド支部の保管する商船等の出着港記録を精査していた。

支部長を務める犬シアンスローブ人は一介の冒険者に過ぎない彼らが内部に足を踏み入れることに対して良い顔をしなかったが、都市の憲兵としての役割を持つ象神ガネーシャの威光（十面倒な手間を嫌ったクレスの殺気飛ばし）を前にしては首を縦に振るしかないのだった。

紙の劣化を防ぐための、潮風から隔離された黴臭い部屋の中で彼らは再び書類を漁る。

クレスが目をつけた吟遊詩人マルクス・ドウルースの痕跡は、さほど手間を要することなく見つかった。

「足は個人所有の小型汽船ランチ、船体名は《レオンティーナ》。動力は燃薪メラアタイト鉱か。……なるほどな」

「おお、もう見つけたんだな！ では早速、他の港に着港履歴を確認して——」

「いや。その必要はない」

クレスの呼び止めに、喜び勇んで記録庫を出ようとしたメルギイの足がキキーツ、と音を立てるかのようにして止まった。

勢いよく振り向いた彼の顔には、ありありと疑問符が浮かんでいる。

「何故だ!？」

「ギルド職員が検査したこの船の性能スペックからすると、最大航続距離は2,000 Kキロルだ。だが俺の記憶上、その範囲にあるめぼしい港は全てこの同じ大陸のもの。わざわざ船を使うまでもない所に行くのにお前は船を使うか？ 使わないだろう」

「……そういうことか！ なら確かに無駄足だな！ しかし、だとし

たらそのマルクス・ドルウースとやらの船は何処へ行つたと考えられる!」

「普通に考えれば、その距離の半径内に存在する小島のいずれか——もしくは、それ以外の……ふむ、ここで推測をいくら口に出しても詮無きことか」

可能性の話を論ずることの無意味さを認めたクレスは、口に出しての考察を止め、手元に開いていた書類の綴りを棚に戻した。

それから彼は少し考えた後、メルギイの心身に漲る溢れんばかりのやる気に水を差すような問いを発した。

「確認だが、海中もしくは海上戦闘の心得はあるか？」

「俺はない! 『潜水』アビリティの持ち主が必要か? それなら別途手配するが……」

「海は迷宮ダンジョンの水場とは話が違う。アビリティ換算で言うなら最低でも『潜水』のCは必要だが、ガネーシャ・ファミリアにそんな物好きはいるのか?」

「ぬ——残念だが、ウチにそこまでの者はいないな。そちら方面の能力を求めるならむしろ、メレンここに拠点を置くニヨルズ・ファミリアの漁師たちの方が高いだろう」

「だが、こちらは逆にレベルの高が知れている、か。……分かった、ここから先は俺一人だな」

クレスが持たない、公での権力の出番は恐らくここまで。

これから先は地位でなく技術、彼の秘する魔道マジック・アイテム具がその役割を果たす時のようだ。

しかし、彼の保有する超遺物オーバート——今の時代にそぐわない魔導機アーティファクト構類をメルギイらの前に晒すことは、「みだりに『深々層』の情報を衆目に晒さない」というウラヌスとの契約に反する。

表立って話すことの出来る『潜水』アビリティ云々を付き添いを断る理由にして、クレスは最後に感謝を伝えるべく手を差し出した。

「ここまで世話になった、メルギイ・ヴァルマ。初孫が生まれた暁には出産祝い……そうだな、迷宮神聖譚ダンジョン・オラトリアの絵本などが良いか? ……まあ、そんな何かしらを神カオスを通して送ろう」

「そうか……力不足ですまん！ 初孫が生まれた時には、是非顔を見に来てくれ！ 歓迎するぞ！」

一瞬悔し気な顔を見せるも、メルギイはすぐに気を取り直して笑顔に戻った。

暗に「役立たず、足手まとい」と言われて腹の立たない者はいない。

特に実力主義に基づく誇りプライドの高い冒険者であれば猶更だ。

しかし、その腹に据えかねる想いをすぐさま「己の努力不足にある」と呑み込んだメルギイは、流石ガネーシャが眷属にただけのことはあるとクレスは感心した。

その彼に再び握られた手を邂逅時の二割増しの勢いで振り回された後、「またなー！」と激励を送られてクレスはギルド支部を後にした。

それから彼が向かったのは、ここメレンにも当然設けてあるセーフティベース隠れ家だ。

東部の波止場の一角に建てられた、一見宿のようにも見える木造の古家。

数十年単位で利用していないせいで外壁が黒く変色しかけているその建物の正面に立った彼は、玄関の鍵穴に数多のひっかき傷がついているのを見てとった。

やはりと言うべきか、ろくに管理もされていない様子はこの家に不法侵入を試みた連中が数多くいたらしい——もともと、全て無駄骨に終わったようだが。

建物の裏に回り、人目につかないことを確認してから彼は鍵を唱える。

「シユレディンガー」

一般的な家屋に見せかけるための装飾に過ぎないこの建物の玄関は、例え正しい家主に対してであろうと物理的に開くことはない。

唯一の正しい入り方である転移による侵入を果たしたクレスは、その中に据え置かれていた『船』に触れながら再度詠唱を行って空間を跳躍した。

共に向かうのは、大海へと繋がるロログ湖の入り江——その地下に

存在する小さな空洞。

唯一水中の路ルートを通ることでのみ外へ出られる彼の秘密の港に『船』を着水させた彼は、手始めに燃料槽内の残量を確認した。

「前に使ったのが残ってたか。……ま、これだけあれば足りるだろう。長引けばまた持つてくればいい」

魔石を燃料に駆動する魔導動力機を積んだ魔法船、《ナキア・ラクリミス》。

『深々層』の亀型モンスター『アクバーラ・タートル』の甲羅を利用したクレス特注の船だ。

外周を軽く視認して疵や経年劣化がないことを確かめ、その船先につけられた対リヴァイアサン用の試作撃竜衝角の輝きにも欠けがないようだと小さく頷いて、彼は眠る王妃船に目覚めの接吻キスを落とすかのように優しく点火した。

——かくて炉が稼働を始めた船は、久々の主の搭乗に歓喜を示すかのように嘶く。

動力源より伝わる振動にかすかに揺れる操縦桿をしつかと握り、クレスは彼女に出港の合図を下す。

「発進」

ゴポゴポ……と泡あぶくの音を立てながら、喫水線を超えて《ナキア・ラクリミス》が沈み始める。

船室にて窓の外側が水面下に潜る様子を尻目に、クレスは操縦桿を前に倒した。

彼の目の前に広く展開された画面モニターが映し出す水中の光景が、急速に後ろに流れ始める。

船後方の魔力推進機構マジック・エンジンが生み出す小規模かつ連続的な水蒸気爆発が、彼の操作する船に文字通りの爆発的な加速力を与え、操舵者の意志のままに突き進むのだ。

やがて口ログ湖の湖峡を超えて大海原へ飛び出したところで、彼は船を浮上させた。

水平線上に幽かにメレンが見えるくらいの位置まで到達したところで、彼は一度手元の小型船舶用探信儀レーダーを操作して周辺の状況を測



る。

「……この辺りにはモンスターどもしかいないか。まあ、漁師の行動範囲に腰を据えるはずもなし。遠洋まで出なければ話にならないだろうよ」

クレスは再び動力機<sup>エンジン</sup>を吹かして、《ナキア・ラクリミス》号をぐんぐんと加速させていく。

海面をV字に切って快進する船、その真横で激しい白波が弾けては消えていく。

その道中で適宜探信儀<sup>レーダー</sup>から電磁波を放ちながら、彼は少しずつ《レオンティーナ》号の行動範囲を埋めていく。

——しかし当然のことながら、相手方の痕跡は中々見つからない。途中で見つけた小島には漂着した漁師たちが浜辺に残したのである。ろう焚火の痕跡くらいが辛うじて見られたものの、島の奥部へと続く足跡などが見つからない以上は実質的な無人島だ。

見つかるのは、そんな島々ばかり。  
となれば、ギルドでメルギイの前にて口に出さなかった別の可能性が考えられる。

例えば、常人の目には見つからない海底基地。

しかし 念のためにとその存在は海上と並行して別途海中にも音波を走らせることで潰していたのだが、その類のものは見つからない。

他には例えば、行動範囲の広い大型船舶や飛行船への収容。

より大きな輸送機関への乗り換えが行われた……こちらの方が怪しいか、とクレスは海原を駆けつつ唸る。

「ふうむ……よし、物は試しだ」

現在彼が使用している汎用の探信儀<sup>レーダー</sup>に映る範囲に、相手がいないのだとしたら？

——だがこんなこともあろうかと、《ナキア・ラクリミス》には別の探知機構が搭載されている。

《学区》をモデルとしてこの船を開発した魔法<sup>マジック</sup>大国の研究者曰く「いずれ星の大海へ漕ぎ出す時のために」開発した物をクレスが出資者権

限でブン取った、対惑星用巨大探信儀——《ファゼカス式：  
デミ・アルカナム・レーダー  
擬似神力波探信機構》である。

出力こそ船体のサイズ相応に落とされているものの、その探索範囲はクレスたちが今立つこの星の表層デクスチャのおおよそ六分の一までに達する。

『深々層』に生息する階層モンスターレックス主の核魔石を複数個投入してようやく稼働する大喰らいだが、その程度の消費を今更彼が惜しむはずもなく。

「——む？」

幸運にも、一回目からクレスの目は魔道具の画面モニターに巨大な二つの光点を捉えることに成功した。

一つは国家にも匹敵する多くの魔力の集合体——恐らく《学区》だろう。

クレスの放った擬なる神力デミ・アルカナムのせいか、一粒一粒の動きが騒がしくなっている。

ちようどオラリオ近海を航行していたようだが、そちらの動きは捨て置くとして。

——その世界最大の『船』に迫るかとも思われる、もう一つの大きな光点はなんだ？

こちらは光粒の数こそ少ないが、その中央に一際大きな魔力の反応が瞬いている。

「確かめてみるか」

《学区》に匹敵するほどの巨大船が建造されたなどと言うニュースがあれば、まず間違いなくカオスが彼に伝えるはず。しかしクレスは、そんな話を聞いたことがなかった。

善は急げとばかりに、彼はさっそく不審に思った謎の光点へ向けて舵を切る。

距離にしておよそ5, 000 Kキロル。

その大陸一つ分に相当する距離を、《ナキア・ラクリミス》は一挙に踏破する。

半ば海面から浮くほどの勢いで、自動操縦形態に切り替わった彼女

は大気の壁を突き破りながら一時間と半で光点の近くまで駆け抜けた。

その間手持無沙汰だったクレスは船内に常備していた非常食で腹を満たし、目的地に到着した頃には、既に空は暗くなっていた。

水平線の彼方で、赤く燃える太陽が没する最中。

紫茜に染まる空の向こうに、クレスは肉眼でその光点の正体を捉えた。

「……ほう？」

それは、全長500Mにも達するかという巨大『艦』だった。

とはいえ外形は《学区》のような人工物で無く、切り立った崖のような断崖絶壁となっており、まるで陸から一部を切り出したかのような自然物に見える。

その周囲を幹と見紛うほど極太の植物の根らしきものが這って補強しており、それがヤドリギのものであることをクレスはすぐさま看破した。

そして偶然にも、彼はこの『艦』を——『陸』の本来の姿をかつて目にしたことがあった。

「何処のどいつだ、こんな遺物を引っ張り出してきた奴は。……前に俺が沈めてやったはずだが」

それは——かつてこの海の上に存在した浮遊移動式『大陸戦艦』、《アトランティス》。

ムー・ファミアリアの国土として利用され、そして八百年もの過去に『封神大戦』でクレスがそこに居た主神及び眷属諸共その文明の全てを海溝に沈めたはずの『国家艦』。

恐らくはその残骸の一部を引揚して流用したのだろうその船の頂点には、かつて太陽神ラ・ムーの祭壇として利用されていた巨大大理石の奉神碑が見えた。

ただしそこに刻まれているのは、かつて彼が見た太陽の紋章ではなく、真円——満ちた《月》。

そしてご丁寧にも側面に書かれていた船体の名前を、臙げに降り注ぎ始めた月明りの下でクレスは眉を顰めながら読み上げた。

「――『ネモレンシス』」

## 古の情景、実るは奇妙な『事実』

クレスが発見した謎の巨船《ネモレンシス》と彼が追う少女ユリアの誘拐事件を紐づける証拠モトは一つもない。

ただし、その船体を取り巻く巨大なヤドリギが、かつてのローマーナにおいて国の象徴たる神樹として崇められていた歴史的事実を彼は知っている——そして、少女の血を遡ればそこローマーナに行き着くことも。

『事実』が結びつかなくとも、彼の経験に基づく『直感』は強く訴えていた。

——目の前の巨艦について、「これは怪しいニオイがプンプンするぜ」と。

「百聞は一見に如かず。関係があるにせよないにせよ、ひとまず乗り込んで内部を偵察してみるか。となれば何処から侵入するか……ふむ」

幸いなことに、《ネモレンシス》が慌ただしくなる様子は今のところ見受けられない。

どうやらクレスの船は未だあちらからは見つかっていないようだ。

ならばこのまま未知の優位を活かそうと、この先の方針を定めた彼は素早く《ナキア・ラクリミス》を操舵して仮想敵船の外壁の一部に寄せた。

《ネモレンシス》の外周を形作る断崖絶壁。

その内で特に傾斜の激しい箇所は、接岸ならぬ接崖する。

上部が大きくせり出している地形の関係上、これでもし警備の人間が崖上にやってきたとしても、よほど身を乗り出して覗き込まなければ崖下のクレスの船を見つけないと出来まいだろう。

「船の方はこれで良し。……さて、崖登りは久々だな」

眼前にそそり立つ崖壁の様子を慎重に見定め、クレスは両手を何度かぐつぱつ、と握っては開いてを繰り返す。

そうして指の調子確かめてから、頭の中で思い描いた道筋ルートを反芻して——彼は、その常人には登り難いどころか落下必至の強傾斜の崖

を一息に登攀した。

足場は崖の各箇所には爪先ほどせり出た僅かな岩片と、ヤドリギの根。

それらを取っ掛かりにして、彼は猿のような器用さでするすると崖の淵まで後一步の所に辿り着いた。

「……誰も来ない、な」

そこで一度耳を澄ませ、監視の気配がないことを確信してからクレスは今度こそ崖上に身を乗り上げた。

崖の淵は木々が生い茂る雑木林となっており、これまた身を隠すには好都合だった。

その中に躊躇なく飛び込んだ彼は藪になっっている足元より移動しやすい樹上に移り、枝から枝へと飛び移るようにして奥へと進んでいく。

「(そこかしこにヤドリギが共生しているな……) かつ、やはり侵入者<sup>ネズミ</sup>除けが多いな」

鳴子やトラバサミなど一部物騒な罾が藪下の見え辛い所に仕掛けられているのをよそ目に駆けるクレスは、やがて林を抜けて《ネモレンシス》の内部を伺える場所にまで辿り着いた。

その先には、やはりと言うべきか。

夕闇に沈む世界の中で、確かに息づく文明の光が瞬いていた。

「これは……」

クレスが辿り着いた先に広がっていたのは、立派な一つの都市空間だった。

多くの背丈のある建物が形作る影の中を数多の人々が忙しなく行き交っている。

くたびれた身体に哀愁を漂わせる、少し腰の曲がった老人が。

子連れだろうか、元気な男の子に手を引つ張られて進んでいく柔らかな表情の女性が。

ぐいぐいと酒杯を傾け、同僚らしき同じ卓につく男に頭を叩かれています。早急の労働者が。

なんの変哲もない人々が、ちかちかと点灯を始める魔石灯に照らさ

れながら、日の暮れる街並みの中で生計を営んでいる。

その光景を、クレスは林の入り口付近に立つ百日紅の枝サルスベリの隙間からひっそりと観察する。

「……やはり間違いない、ここは《アトランティス》だな。細部が少々異なるが、この都市構造は見覚えがある。碁盤状に整理された緻密な区画割りと、その上で多くの人口を抱えるための立体的な超高層建築群……すなわち、ムーの《摩天楼》」

見渡す限りに聳え立つ建築物はいずれも、最低でも10階以上の高さ誇っている。

最大でも20階程度に抑えられているのは、かつて彼が轟沈させた名残に違いなかった。

ところどころ建物の先端が変に折れ曲がったオブジェのようになってるのが、まさにそうだ。

それより上の階層部分は須らくかの『封神大戦』グノーシスマキアにおいて、彼が愛用する焰の余波で溶け落ちたのだ。

本来ならば最低でも30階は下らないはずなのだが——この船を引き揚げて再利用している者たちには、そこまでの建築技術はなかったようだ。

「しかし、雰囲気は大分異なるな。とかく素材の質感が剥き出しで、アダマンタイト超硬金属オルガクオーツやら不壊晶石の黒一色で無機質なのがムーの都市だったが……今は無駄に凝った装飾やら暖色系統の塗装が施されて、そんなイメージは微塵もない。予想はしていたが——まあ、間違いなくローマーナ式だな」

クレスの目で見たところ、独自の『魔導機巧』マジカ・マキナ文化——エレクトロニクス電 力を中心とした先鋭的な発展を遂げていたムーの都市機能はほぼほぼ残ったままだ。

その利便性をうまく踏襲しつつ、ローマーナの文化様式で表面を染め上げていると言った所か。

そう分析した彼は内心で感心するとともに、都市の中心部分を——うず高く盛り上がるような船全体の地形の中で最も高所に位置する神殿を見上げる。

「それにしても、元が戦艦だからどんな孤島の要塞かと思えば中々立派な生活を営んでいるものだ。それもここ数年の規模じゃない、数十年……いや数百年単位だな。これだけのものが世界に見つかからず悠々と海洋を行き来していられたのも、ムーの遺産の賜物と考えれば説明はつく。年がら年中内輪揉めで争い合って知識の積み重ねだけは人一倍あつた連中だからな。……しかし、こんな連中の墓標をわざわざ掘り起こしてまで運用しようとする神の存在を思えば、目的は口くなものじゃなさそうだ」

外からも見えた大理石の祭壇を奥に据えたその神殿は、唯一この艦の中で木材から造られており、軽く見ただけで分かるほどに特異な存在感を放っている。

正確には、聳え立つ大樹のうろを流用して神殿の形式を整えていると言うべきか。

青々と葉を茂らせるこれまた巨大なヤドリギから溢れる生命力と、その中に崇められる超越存在デウス・デアの明瞭な神意アルカナムの燐光が入り混じって、天へと向けて薄く白く立ち昇っている——いわば、地上に降りた月のように。

「この気配からして、あそこにはまず間違いなく本物が降りているな。覚えのない神意だが、恐らくロマーナアラに関わる神のいずれか……マルスは《王国》ラキア、メルクリウスは《魔法大国》アルテナ、ミネルバは《学区》アラに居たのだったか？ それ以外の誰か知らんが、まあ会えば分かるだろう」

一通り観察と考察を終えたところで、クレスは手つ取り早く「この地を支配する神と接触してしまおう」と腰掛けていた樹上の枝から飛び降りた。

彼は一陣の風となった彼は手始めに近場の建物の屋上へと駆け上り、そのまま別の建物の屋上へとまるで忍者スパイのように駆け抜ける。

彼の『神の恩恵』フアルナ外スキルである隠密能力を以てすれば、音もなく疾駆することも朝飯前。

およそ30Mメトルほどの距離がある眼下に人々の営みを眺めながら、彼はこの《ネモレンシス》神の主の坐すると見られる根城へ向けて突き



進む。

その過程で彼は、かのローマーナの文化を踏襲した古式ゆかしい人々の生活様式を垣間見た。

今の時代では神々くらいしか着ないような、貫頭衣チュニックと一枚布トリーガの組み合わせ。

エールやワインを揃えた酒場にはパンや魚が籠に入った状態で積み上げられており、オラリオでは「行儀が悪い」と咎められるような、寝っ転がって食事をする台も設けられている……なお、流石に中毒の危険性がある鉛製の器は廃されているようだ。

遠目にはローマーナの代名詞の一つでもある公衆浴場テルマエが煙突から湯気を昇らせており、量販店を流用したらしい兵舎の前には馬のような鬘上の飾りをつけた兜を被る兵士たちの姿が散見される。

「まあ、普通だな。やたら情景が懐かしいことを除けば、誰も彼もが危険とは程遠い安穩とした顔で——いや、待て」

その過程で、クレスの目はとある一つの違和感を捉えた。

神殿へ向かう足を止め、彼は通りを行き交う人々の様子を改めて観察する。

そして、気づく——奇妙な『事実』に。

というのも、彼の足元で言葉や杯を交わす人々の容貌が全て、やたらと……似たり寄ったりなのだ。

「顔立ちに体格、雰囲気……誰も彼もが似通っている。双子や複製体クローンほどではないが、三、四親等くらいか……むむ、ここにいる全員が親戚同士なのか？」

一直線に中央へ向けて駆けるクレスの目は、決してこの船の全てを捉えたわけではない。

しかし、その道中で目にした全ての人々の瞳や髪の色、耳の形、骨格などと言った遺伝的要素が悉く相似しているのは、偶然の一言では済ませられない。

「まあ、外界からの出入りを封鎖した閉鎖的な環境であればそうなるのも必然だが……だとしても種類パターンが極端に少ないな。それどころか……むう、ここにいる全員がほぼ一つの血族に統一されていると

見て間違いなさそうだな。昔の王族や支配階級の間にはまま見られた風習だが……」

つまりは、近親相姦による貴血の保持。

いとこ同士や時には親兄弟の間で婚姻関係を結ぶことで、一つの属性を後世まで保とうとする手段。

その人類社会における『悪徳』の一つをふと思い起こしたクレスは、その流れで思い至った——思い至ってしまった。

《ネモレンシス》にいる住民のほとんどの間に共通する血縁的特徴。

——それらが、彼の知る件の少女の似顔絵にも共通していやしなかったか、と。

「ここで繋がったか。……なるほど、段々と事件の霧が晴れてきた気がするな。これが思い違いでなければ良いが……もしそうだったとしたら、義母<sup>ははうえ</sup>上などは特に激怒しそうだな」

クレスは思いついた可能性を胸に秘めたまま、辿り着いた神殿の前で一度足を止めた。

——もし、この先で顔を突き合わせるであろう神の御心とやらが彼の想定の通りであるのだとしたら。

「絶対碌なことにならない」

それだけは間違いない、と嫌な確信を抱えながら、クレスは衛士の巡回をすり抜けて神殿内部へと侵入するのだった。

## 月下の号令

ヤドリギの枝々が絡み合って形を成した太柱の隙間から、朧げな月明かりが差し込む。

通路を抜ける、夜の冷気に雑音を吸い取られた清廉な風が頬を撫でる。

日の光が完全に落ちた時間帯の神殿は、人知を遠くに置いた風光明媚な異界としてクレスを迎え入れた。

「……懐かしい。この気分も久々だな。慣れない場所に足を踏み入れる、この感覚……初めて迷宮ダンジョンに潜った時のような、得体のしれない肌寒さがある」

影の落ちた視界の先へ向けて、クレスはその濃淡の深い場所を伝って静かに移動を始めた。

その足遣いは糸を渡る蜘蛛のように滑らかかつ素早く、一切の余計な音を伴わない。

研ぎ澄ました五感で慎重に先の様子を探りながら、彼が奥へ奥へと進んでいくと、不意に先の曲がり角からぼんやりと人工的な光が漏れ出てきた。

「……」

「」

「（……警備の目は起きているか）」

武器という争いや血を連想する『穢れ』を神殿内部に持ち込むことが許されない衛士の代わりに見回りをしているのであろう、携帯灯カンテラを持った不寝番の神官及び巫女の二人一組ツーマンセル。

それを、天井に張り付いたクレスは逆さまの視界で見送ってやり過ぎた。

「（……次へ行こう）」

見回りの二人が十分に離れた頃合いを見計らって、天井から降りたクレスは先へ進む。

神殿内の通路はそれほど狭くなく、人が4、5人は横に並んで通れ

るほどだ。

またその壁には幾つもの凹凸の大きい装飾が施されていたり、立派な美術品が飾られていたり、彼が監視の目から逃れられるだけの余裕スペースが至る所に点在している。

この調子でいけば、まず見つかつて騒ぎとなることはなさそうだった。

神殿内にある程度慣れてきた彼の目は、奥へ進むついでに、この神殿に存在する数多の『ローマーナ』を捉えることになった。

当時の兵士の間で広く用いられていた、小剣グラディウスを模した魔剣。

芸術家（気取りを含む）が特に好んだ、青年ならではの肉体の黄金比を映す精悍な石の彫像。

どこから切り出してきたのか、当時の民衆が公衆浴場テルマエで議論する風景をそっくりそのまま切り取った漆喰画フレスコ。

更には彼も知る顔がちらほらと並んでいる、恐らくは歴代皇帝のものらしき胸像の数々。

いずれもれっきとした、古代ローマーナに所縁のある代物ばかり。

さながらここは、神を祀る神殿であると同時に、ローマーナの由緒正しい歴史を綴る博物館としての機能も有しているのだろう——と、その中を歩くクレスは勝手ながら推測した。

「全ての道はローマーナにこそ通ず、だったか……？ 奔放かつ刹那的な快楽を愛する神々が掲げるには珍しい、一途な国粋主義ナショナルリズムがここにはある。きつとこの主たる神は、心からあの時代を愛しているのだろう。良くも悪くもな」

クレスは通路に飾られていたローマーナの風景画のうち二枚に注目する。

そこには確かな人々の活気が——狂愛くるおしいほどの情熱ロマーナと残虐ナが描かれていた。

獅子と徒手の異端者集団を、逃げ場のない闘技場コロッセオにて殺し合わせる……公開処刑場。

十五に満たぬ少年少女が、麗しき花園の中で激しくかつ見境なくまぐわいあう……酒池肉林。

現代では忌避されて当然とされる豪放磊落的な価値観が、それらを眺めるクレスの前で「さも当然」と言った顔で胸を張っている。

栄華と崩落、人の善性悦びと悪性血を何百何千と積み重ねて築かれた『ローマ』<sup>ローマ</sup>の『大帝国』。

その大河の如き歴史を己の瞳めでもまた少なからず見てきた者として、少しばかり懐かしい気分になりながら。

クレスはそれら有形の歴史に彩られた廊下の中を流れる神気に導かれるようにして、最奥の部屋へと至るのだった――。

「――絶海の遊艦たる我が神殿ネモレンシスへようこそ、名も知らぬ人の子よ。礼節を弁えぬ身なれど、珍しき来客なれば、言葉の一つすら交わさずして返すほど狭量な我が身ではありません。歓迎致しましょう……して、何用ですか？」

謁見室にも似た広々とした空間の中で、上座に設けられた祭壇の方から響く上位存在デウスデアの声。

それは鈴の音のように軽やかであり、また祭儀に使われる銅鐸のような重厚さを伴っていた。

一言一言の隙間から滲み出る……存在としての格の違い。

文字通り上位の次元から声をかけてきた女神の神意が強く浮かび上がった挨拶に、クレスは不躰にも目を逸らさずに応じた。

「礼を失したことは謝罪する。その上で、俺は仕事でここに来た。……御身は確か、女神ディアナだな」

クレスは偶然にも、以前に彼女の御姿を目にしたことがあった。

世の穢れエーテルさえも塗り潰して『善』としてしまうかのような、高原エーテルに咲く一輪の花の如き白肌。

一筋一筋が光の如き皇輝を放ち、『神の力』<sup>アルカナム</sup>がなくとも後光を形作る透き通った髪。

そして人知を超えた視界を持つ者に共有される、博愛主義アルカイックスマイル的な微笑み。

その中央に瞬く絶対なる神の黄金瞳ひとみが、「一切の嘘偽りを許さぬ」といった威迫を伴って眼下に立つ侵入者を射抜く。

「いかにも。この身こそはかつてローマにて崇められた一柱ひとり、『狩

獵』と『貞淑』、そして『月』を司るディアナ。それで、貴方の言うその仕事とは具体的に何を意味するのですか？」

「誘拐事件の解決だ、神ディアナ。近頃オラリオから一人の女兒が攫われてな、俺はその両親に頼まれて行方を追っていた。——そして、見つけた」

常人であれば目が霞む、もしくは潰れてしまうほどの女神の威光。

ディアナが背負う、下界の禁忌ルールをギリギリ冒さないほどの『神の力』アルカナムの瞬きの向こうに、クレスは探し求めていた少女ユリア・ダルシアの顔を発見した。

彼女は女神ディアナの側に控えながら、その小さな身体を余すことなく使って、懸命に植物の葉を模した巨大な扇を煽いでいた。

……《魅了》に犯された瞳で、女神の忠実な下僕しもべとして。

「俺の目的はただ一つ。その娘、ユリア・ダルシアを返してもらいたい。それだけだ」

「断ります」

神ディアナは一切の逡巡なく、その澄み渡る声でクレスの要求を却下した。

……この件における非は間違いなく彼女の側にある。

だというのに、彼女はさも自分に正義があるのだと言わんばかりの強気な態度を示した。

その短くも傲慢な物言いに、されど彼は憤るよりむしろ内心「だろうな」と納得した。

——なにせ神と言うやつはいつも、どいつもこいつも自分本位で、勝手気ままに動いては周囲に迷惑を振り撒くのが常なのだ（覗ゼウき魔とか痴漢ゼウスとか寝取りクズウスとか）。

根本的な価値観が下界の者たちと異なる彼らからしてみれば、むしろデメテルやタケミカヅチと言った物静かな神の方が逆に異端だと言える。

故にクレスは彼女を非難するための無駄なやり取りを省き、率直に説得を試みようとした——どうせ叶わないことは分かっているのだが。

「その娘一人さえ手放して貰えれば、俺がここのことを口外するつもりはない。そうなれば御身としても大きな面倒ごとに発展せずに済む、その方が良いだろう。……そう言ってもか?」

「ええ。愛故に——我が最愛を取り戻すために、この小娘はどうしても必要なのです」

「愛……『愛』ときたか」

今度こそ、クレスは「面倒なものが出てきたな」とでも言いたげに目を細めた。

——『愛』。

それは理知ある命が共通して抱く数ある感情の中でも、特に異質で、かつ厄介なものだ。

「虫けら一匹殺せぬ者でさえ、愛故に人を容易く殺し得る」と古代の詩人も言ったように、愛はその所有者に底知れぬ情念と倫理を犯すための免罪符を与える。

しかも、それが悠久を生きる神の口から漏れ出た時。

それは世間一般のものよりも何十何百、いや何千倍も粘着質で、陰湿で、それこそ融けた鉛のように熱く、また重たくなるのだ。

彼が神殿に入る前に感じた嫌な確信は、どうやら見事に的を得ていたらしい。

やはり口だけで引き下がってはくれなさそうだ、とクレスは思考を巡らせつつ再三にわたって言葉を重ねた。

「しかし、愛それを取り戻すか。やはりそういうことか……だが、なんにせよその言い分でこちらが引き下がる道理はない。そもそも魅了チャームをかけるような一方的な神の愛よりも、懸命に子の行方を捜して世に訴える親の愛の方が勝ろうさ。違うか?」

世の道理を矛として口を開きながら、力づくで取り返すことも辞さないと再度交渉による少女の身柄の返還を求めるクレス。

対してディアナは、反論の代わりにその神意を彼への牽制として放った。

彼の狙いであつた言葉による解決の明確な破綻を示す、膨大な霊的圧力が指向性をもってクレスの心身へと叩きつけられる——が。

「そよ風だな」

「……！ 小動こゆるぎ一つしませんか。この艦に辿り着けたことから薄々察してはいましたが、ただの子どもではなさそうですね」

今クレスを襲っているのは、体感にして重力が10倍ほどにも増した精神的重圧だ。

常人なら良くて失神、悪くてショック死。

上位の冒険者でも膝をつくこと間違いなしの、目に見えぬ暴威。

しかし、今更その程度で折れる彼ではない。

なにせ、クレス・カラストロフは《神殺し》である。

従者と同じく、己の目的のためならば神さえも弑することを躊躇わないこの下界の破綻者。

そんな彼の見せた『下界の只人があろうことか天上界の神を見下す』というこの世界における最大最上級の無礼に、ディアナはその端正な顔立ちを分かりやすく正した。

「大人しく引き下がるならば見逃すのも止む無し、と考えていましたが。我が愛を奪うというなら、容赦はしません」

「結局こうなるのか。……先に愛を奪ったのは貴女だろう、神ディアナ。何を目論んでいるかは知らんしどうでも良いが、誘拐は貴女の愛する古代ロマーナの法にも犯罪として明記されていたはずだ。此度において責められるべきはそちら、分かりやすく言えば『ユースティティアの剣は我が手に在り』というやつだ。返してもらおうぞ、その娘を」

もはや言葉は不要、とクレスが娘ユリアの奪取に向けて動くべく重心を前方に傾けた。

その微細な予備動作を、しかしディアナははつきりと見切っていた。

狩りの女神でもある彼女は獣の動作を読み取る業にも優れており、そして広い範囲でくくれば人もまた獣の一つである。

文字通りの神業的な技量で以て、ディアナは瞬時に背後に飾られていた銀色の弓に矢を番え無礼者に射かけようとしたが——遅い。

その目だけは辛うじてレベル19の動きに追い付いても、物理法則下界のルール



に縛られた平々凡々な身体は彼女の思うように動けなかった。

急に遅く感じられた視界の中で彼女は、彼我の距離を瞬時に詰めたクレスが悠々と少女を取り返す光景をただ茫然と見送ることしか出来ないのだった。

一瞬のうちに百段近い祭壇を土足で駆け上った彼が、ユリアの手から扇を奪い放り捨て、その身を抱えると同時に跳び退る。

「ぎゃっ——止めて、放して！」

《魅了》されたままの少女ユリアは敬愛する女神の下に戻ろうと、クレスの腕の中でじたばたと抵抗する。

その無意識化を占領するディアナの《魅了》をこの場で解除するのは困難だ。

心身ともに成長の過程にある幼子の《魅了》を無理矢理解除した場合、その負荷で精神が壊れてしまう恐れがあるからだ。

例えるならば、一つの湖に溶けたたった一滴の顔料を再び回収しきることには等しい。

彼も不可能とは言わないが、ここは万全を期して専門の処女神を頼り解祝してもらおうのが一番だ。

「寝てる、その間に全て済む」

「——うっ！」

とりあえず当面の処置として、クレスは少女の額を小突いて気絶させる。

それで「用は済んだ」と言わんばかりに、彼はすぐさまこの場を離脱しにかかった。

「ではお望み通り退散しよう。余計な気は起こさぬよう、くれぐれも御身が賢明であることを祈る」

そう言い残して、元来た道を速やかに戻っていくクレス。

だがもちろん、神がたかが一人の矮小な人間の言葉に素直に従うはずもなく。

腰を落ち着けていた豪華な椅子を倒す勢いで立ち上がったディアナは、その自らが語った『愛』の深さを示すかのように——その身に秘めたる神意を爆発させた。

『——決して、逃すものか』

仮面染みた無感情な相貌を露わにしたディアナの唇から、人間性を排した『神の声』が響き渡る。

その身に立ち昇る神威が銀の御柱となって、天へ向けて迸った。その様子はまるで、空に瞬く月とは異なる——地上に降りたもう一つの月。

眩いばかりの極光が、神懸かり的な力の波動を放って覚醒する。

『——告げる。我が血を与えし眷属たちよ』

真昼と見紛うばかりの眩い光の奔流が神殿内を満たし、その中心から現れた月女神が、身に纏う神の力を細雷のようにバチバチと打ち鳴らしながら艦全体に命ずる。

『神域を汚す侵入者が現れた。探せ——見つけ次第男を殺し、汝らが同胞を取り戻せ!』

女神が直々に下した託宣を受けて、寝静まりかけていたはずの艦が揺れ動き始める。

疾走するクレスは神殿に設けられていた窓から、その脈動の正体を見た。

夜の帳の落ちた都市全体に急遽瞬き始める地上の星々……それらは全て、クレスのよく知る『神の恩恵』の気配。

すなわちこの艦に住まう誰もが、オラリオでいう所の冒険者。

それら月女神の下僕たちが一齐に、恐れ知らずの愚か者に鉄槌を下すべく集結を始める——。

『月』の発した凶光の号令によって、今まさにローマーナに愛されし血宴が始まる。

## 汝、星を穿つ白銀

駆ける、駆ける、駆ける。

『少女を取り戻す』という当初の目的を達成したクレスは女神ディアナに宣言した通り、「後のこの船ネモレンシスでの面倒事色々 諸々などいざ知らぬ」と艦の外周部に接舷した己が船を指してただ尾を引く流星の如く疾駆する。

夜の摩天楼の空は天に近い分だけ肌寒く、天神意に弓引いた彼に罰を与えるかのように乾いた冷たい逆風を吹かせていた。

されどたかが地上の環境負荷程度デバフが超級冒険者レベル19の足を遮れるはずもなく。

彼は保護した少女ユリアの未成熟な体に負担をかけないギリギリの速度を保ちながら、屋上から屋上へと来た道をぐんぐんと逆走していた。

——突如、その視界に頭上から百余の影が差す。

「む。来たか」

月明りに淡く照らされた高層建築群の頂上。

輝きを遮るものが何もないはずの場所で自身以外に影を作る者がいると言うことは、つまり。

——やはり。俺一人ならともかく、か弱い荷物があれば追いついてくる奴らもいたか。

追手の影がクレスを足止めするべく攻撃を仕掛ける。

その手から、更なる千もの小影が放たれて……背後からの投擲物の雨に晒されることを防ぐべく、彼はこれまで足場に使っていた建物を盾にして地上に降りることを即決した。

彼一人ならば加速一つで回避出来る話だが、少女の身体がそれに耐えきれないからだ。

抱える矮小な荷物への負担を鑑みて、何度か建物の壁面を蹴って落下速度を殺しつつ、これまで見下ろすばかりだった《ネモレンシス》の地上へ。

着地と同時に全身の関節を緩衝材に使って衝撃を吸収し、彼は猫の

ように平気な顔で即座にその場から離れようとする。

見渡せば、彼の落下した場は三叉路の中央だった。

そのうち、外周へ続くであろう道に飛び込もうとして——彼は、突如として出現した大勢の妨害者にまたもや足を止めなければならなかった。

そこへ、遅れて降り注いだ先の襲撃の正体の一部がガガガツ！と

鋭い音を立てて足元に突き刺さる。

その姿かたちを視認したクレスは困惑の唸りを漏らした。

「これは……」

追手が降らせた足止めの正体は単なる鉄の雨ではなかった。

十字に卍字、竹葉型に風車型等の特徴的な形をしたそれらはまごうことなき手裏剣。

主に極東の隠密の間で使われる得物だが、それ以外にもその武器を扱うとある種族がいたことをクレスは知っていた。

しかし、その種族は彼の知る限り既に滅んだはずだ。

他ならぬ、彼の手によつて——かつてのこの地の名と共に。

「生き残りがいたのか？ いや、それならそれで昼間に見かけたはず。

あの光景の中には、お前たちムー人の特長たる白髪に褐色肌、そして刺青を入れた者はいなかった……なんだ、お前たちは？」

クレスの問いかけに、ディアナの神意をその背中に宿した包囲者たちは手中に握りしめた魔道具——『太古の遺物』と魔法で答えた。

彼の正面に立った集団の内、緑衣を纏った者たちが

《大振りの手裏剣》を構えて詠唱する。

「二——【我らは影に忍び影を討つ者。即ち疾風夜行】……」

そしてクレスの右後ろの路地に立った半裸の赤い腰衣を巻き付けた連中が、頭に《竜の頭骨化石》を被り、咆哮する。

「二【我らは覇を唱え覇に賭す者。即ち暴竜万丈】!!!」

更には彼の左横の道路上に立った鋼の鎧を装着した者たちが《金色の線が走る大剣》を掲げて斉唱する。

「二【我らは剣に生き剣に死ぬ者。即ち雷刃繚乱】——」

その詠唱が意味する所を結実させるべく、彼らは最後に共通するそ

の魔法名を唱えた。

「『トライブ・オン』」」

——木の葉の嵐が吹き荒ぶ。

——火岩流が噴き出す。

——白き雷鳴が轟き落ちる。

続けてその中から現れた懐かしい気配に、クレスは改めて名乗られるまでもなくその正体を察した。

「忍者、ダイナソー、ベルセルク狂戦士……なるほど。太陽神ムーの遺物を基に、その眷属だった連中の力を降ろしたか。まさか今になってお前らの顔を見ることがあるとはな……これも神々の言う下界の未知というやつか？」

今クレスの前に再び顕現した彼らこそは、かつて栄えたムー・ファミリアの三種族。

闇に駆け奸智を張り巡らせるシノビ。

敵と己の血に塗れて戦火に名を馳せたベルセルク。

内に秘めた暴獣性に任せて破壊と略奪を繰り返したダイナソー。

彼の認識上、連中はこの神時代における負の遺産の一つである。

「全ては神ムーに供物を捧ぐため」と宣って、デルスキュラ鬪国のような内部での殺し合いに飽き足らず世界へ繰り出してまで大々的に戦争を吹っ掛けるような生粋の殺戮狂ども。

そんな連中が女神ディアナの眷属を依り代に顕現した——という現状。

世界的に見ればかなり重大な事態なのに間違いないのだが、それの前にしたクレスはそのまで深刻そうにするまでもなく、むしろ面倒そうな顔を浮かべて独り言ちた。

「それにしても、月女神の配下が太陽神の遺物オーバーを使うのか？ 俺としてはまあ、どうでも良いんだが……一つだけ教えてくれよ。なあ、お前らのロマーナは何処へ行った？」

そんな彼の軽い皮肉に、彼らは「これが答えだ」と言わんばかりにクレスへと襲い掛かる。

数を二倍三倍にも増して再び降り注ぐシノビの手裏剣雨。

クレスを挟んだ反対側からは、ダイナソーの腕に装着された竜頭の砲から火炎放射が放たれる。

そうして生まれた灼熱鉄雨の真っ只中を、構わずベルセルクたちが雷鳴を踏み鳴らしながら果敢に斬りかかる。

——その眼は全て、《魅了》の白銀に染まっている。

「……面倒だな」

通常向かってきた者は容赦なく冥府の神の誘いに委ねるクレスだが、今回はそうもいかない。

《魅了》の支配下にある彼らは本人の意志が封印された、いわば心神喪失状態にある。

その行動にまで責任を問う等の人道にもとる一部行為については、彼の神力オスから直々に「人間性を損なう行為」として非常事態を除き禁止されていた。

故にクレスは少女を負いながらも尚、総じて平均レベルが3はあろう下界基準で精鋭に当たる彼らに対して、手加減してやることを決めた。

それだけの傲慢が、レベル差の名の下に許されてしまうのが下界の理だから。

「殺しはせん。だが、少々痛い目は見てもらう」

わざわざ三つの種族全てを正面切つて相手取る必要はない。

クレスは戦う上で最も少女にかかる負担の少ない相手を素早く見定め、そちらへ向けて足元にぎやりつ、と地面の焼け焦げるような摩擦を残しながら呐喊した。

彼が突破先を選んだのは凶剣士の一団。

シノビのカワリミのように厄介な術がなく、ダイナソーの火炎のような範囲攻撃がない彼らの攻撃は、強力であるが《凶化状態》故に単調だ。

「うおおおっ!!」

「借りるぞ」

嘶きを上げて襲い来る狂戦士の懐に飛び込み、その上段からの振り降ろしが終わるより先に肩からの体当たりを食らわせて吹き飛ばす。

後方の敵まで巻き込んで飛んで行ったその一撃は連中の背後まで続く道を作り、クレスはそのへ勢いに任せて飛び込んだ。

衝撃に怯まざるを得なかった連中のうち一人から、彼は立て続けにその黄雷を帯びた剣のうち一振りを奪う。

『タタカエ……タタカエ……』

『マジックアイテム カースアイテム 魔道具というわけ呪道具なのか。——下らん』

『……ギヤアアアツ?!?!』

どうやら遺産にはムーの亡霊の遺志が宿っているらしく、握ったクレスの頭に直接おどろおどろしい声が響いてくる。

それを魔力を流して強引に祓った彼は、人々の壁を突破し切った後一度立ち止まって振り返る。

そして、万が一にも少女に害が及ばないよう一度その身体を宙に放り投げてから、両手で剣をしっかりと握り、記憶の底から彼らの剣の理を引き出す。

——その剣に、黒い雷が宿る。

「確か、こうだったか? ——【サンダーボルト・ブレイド】」

左から右へ、右から左へ。

陣を突破された《ネモレンシス》の住人達がクレスを追おうと振り返ったところへ彼は強烈な横薙ぎを二連続で食らわせ、たたらを踏ませる。

生まれた一瞬の間を見計らい、彼は大量の魔力黒雷を刀身に宿して派手な三撃目トドメを振り下ろした。

その稲光はまさしく、地上に落ちたる神の怒り。

広大な範囲に打ち付けられた稲妻が、彼を追おうとしていたディアナの眷属たちを諸共に薙ぎ払った。

「つと」

用済みの雷鳴剣を放り捨てると同時に、落ちてきた少女の身体を優しく受け止める。

ひとまずの邪魔者を打ち倒したクレスは、麻痺もしくは気絶して動かなくなった彼らをおいて先へ進む。

殺しはしないが、彼らの正気を取り戻して女神の領域から解放する

ことまでは夫婦の依頼外であり、報酬のない余計な仕事をするほど彼はお人好しではない。

今は少女ユリアの身柄をオラリオまで届けることが彼の責務であり、それを果たすべく、彼は再び風となつて《ネモレンシス》を突き進む。

「トライブ・オン」！ —— ガアアアアツツツ!!!」

「——」

雷鳴轟かせる剣士の凶撃を、火花一つすら少女に届かせないよう注意を払つて蹴り飛ばし。

「トライブ・オン」！ —— 【ジェノサイド・ブレイザー】！」

吠える恐竜の業火流を、熱が少女の髪を溶かさぬよう余裕をもつて躲した上で肝臓を殴り抜き。

「トライブ・オン」！ —— 【フウマシップウジン】！」

またもや降り注いだ手裏剣の雨霰をいっそ潔く進路を変えてやり過ごし、追いかけてきた連中を置いておいた魔法の遅延爆発で返り討ちにして。

相手の支配領域内だけあつて次から次へと闇の中から現れる連中を退けつつ、クレスは着実に外周部へ距離を詰めていく。

「……ほう？」

その最中、クレスは2つの遺物を持った相手にも出くわした。

手裏剣と大剣を構えた青年——恐らくレベル5はあろう、神ディアナの手札の中でも奥の手に近い敵。

既に「トライブ・オン」を終えて鈍色の忍装束を纏った彼はなんと、その手にある手の平ほどの魔道具で魔法の詠唱を代替しながらクレスに斬りかかってきた。

《『アクセスコード・フウマシユリケン』—— 電符演算開始。  
開を告げるは 剣士の鼓動 血雷よ、 我が意に依りて  
「トキヲツゲルハ ケンシノコドウ ケツライヨ ワガイニヨリテ  
凶笑せよ」—— 「ウオリアーブラッド」。 シを奏するは  
キョウシヨウセヨ—— 「ウオリアーブラッド」。 「シフソウスルハ  
濡刃の調べ。妖刀よ、我が血に依りて斬獲せよ  
ヌレバノシラベヨウトウヨワガチニヨリテザンカクセヨ」—— 「ムラ  
マサブレード」》

「あー、そういうのもあつたな」



魔法を電子化<sup>プログラム</sup>することで疑似的に再現する、ムーの魔道具<sup>アイテムメイカー</sup>製作者の技術結晶の一つだ。

クレスの記憶が確かなら、目の前のシノビとベルセルクの混合戦士——都合上ベルセルクシノビと呼称すべき相手の魔法から推測される戦法は、『時間経過とともに体力減少を伴う代わりに攻撃力を上げる』である。

しかし逆に考えれば、「さっさと倒してしまえば大したことはない」とも言える。

2種族の力を纏った相手だろうと、クレスは構わず真正面から踏み込んだ。

大胆にも見える態度だが、《魅了》下にある青年は驚く素振りを見せることがなく、冷静に「ムラマサブレード」と「イナズマケン」の二刀流でクレスを仕留めようと目論む。

交錯する刹那、クレスが少女を抱える腕の代わりに自由な足による蹴撃を狙ったところで——唐突に敵の身体がタヌキを模した人形にすり替わる。

そして後ろに気配を現出させたベルセルクシノビの双剣が、容赦なくクレスの背中を切ろうとする。

「どっ？」

「——っ!？」

かつてムーの戦士と何度も相対した経験のあるクレスは、その手の内を彼ら以上に知り尽くしている。

【カワリミ】を読んでいた彼は相手が位置を入れ替えるより先に、振り向きざまの背面蹴りを置いていた。

自らクレスの蹴りに飛び込むような醜態を晒した相手はそのまま防ぐ間もなく胸に吸い込まれるような衝撃を受け、近場にあった閉店後の酒場の中に吹き飛ばされていった。

「とはいえ、いい加減受け側だと面倒臭いな。恐らくこの辺りに——あった」

クレスは走る先で見つけた、苔むした置物の前に立つ。

傷一つなく磨かれた石造の操作台<sup>コンソール</sup>。

どうやら今ここに住まうディアナの使徒たちにはついぞその使い方が理解できなかったらしく、長年放置されていた様子のそれに彼が触れると電源が入る。

そこへ彼がすかさずいくつかの図形を組み合わせた文字を入力すると、息を吹き返したかのように先ほども聞いたばかりの電子音声の流れ出す。

とはいえ放置されていた分だけ調子が幾分か悪いようで、そこには雑音ノイズがかかっていたが。

《『アクセスコード・■■■タ■■』——》

「この状況を解決するには……これが良かろう。まあ、死にはしまい」

《プログラムキヤ■ト ■滅びを喚ぶは電の波導。流星よ、

《電符演■開始——【ホロビヲヨブハリユウノハドウリユウセイヨ

我が意に依りて咆哮せよ  
ワガイニヨリテホウコウセヨ】——【ゼツメツメテオ】》

ムーの電力を吸い上げて物質化マテリアライズした、絶滅を招く流星群が《ネモレンシス》全体へ降り注ぐ。

大気との摩擦で燃える高温の大岩が船の各所に突っ込んでは大爆発を起こし、地響きを立てる。

クレスは戦闘要員とならない赤子や老人を見ていないことから恐らく屋内に引っ込んでいるのであろうと見込んでおり、そちらは無事だとしても、現状野外にいる戦闘員たちはそれなりの被害を被るだろう。

「こんなもので良いだろう。さて、「シユレディンガー」……む？」

隕石メテオの方に気を取られざるを得ない今、誰も自分を見ていないだろうと踏んだクレスが短縮詠唱を行う。

しかしどうやら発動条件を満たせていなかったようで、小船への転移は不発に終わった。

彼が確認のために周囲を見渡すも、確かに誰もいないはずなのだが。

「——そうか」

クレスは咄嗟に空を見上げる。

そこには神ディアナの瞳が——寒気立つほどに美しい真円を描く月が浮かんでいた。

彼が神殿の方を向けば、遠目に、屋上に立つディアナの顔が見える。その機械的な相貌は、間違いなくクレスの現在位置を睨んでいた。その口が小さく動くのを、彼は読み取った。

『二・ガ・ス・モ・ノ・カ』

それに舌打つ間もなく、彼は膨大な神意が天上に向けて凝縮されているのを察知した。

——見上げる先の月が徐々に欠けていく。

それは神の力が充填されている証。

もはや神が下界に存在することを許されないほどの強大な力場が、月に投射されるように形成されていく。

「む……それはもはや、俺はどうでも世界が放っておくまい。なのに、そこまでするか神ディアナよ」

『篡奪者よ、その命を以て贖罪せよ。……ああ愛しき我が眷属よ、この矢で汝の心を再び射止めよう。——【偽現・月神の聖光弓】』

「神創兵器まで出す、だど。——いよいよ正気のようなな」

あれを食らえばマズい、と今度こそクレスの全身がけたたましく警鐘を鳴らす。

高レベルの今の彼を傷つけられる存在は、下界には今や迷宮程度しか存在しない。

だが、天上界は違う。

事象の理がまったくと言って良いほど異なる神々の武器は、容易くクレスを屠る必殺の一撃となり得るのだ——それこそ、齡3歳に満たぬ子供が自分の落書きを消しゴムの一撫でで消してしまうような。

瞬時に彼は逃げ場や隠れる場所を探すも、当然の如く見当たらない。

いくら過去の超遺物たる《ネモレンシス》の船体と言えど、しよせん彼に沈められる程度の頑強さしか持たない。

つまり、この場に月女神の神意を防げるだけの盾はなく。

『我が真名は月女神。夜天に輝く孤高の鑑、唯この胸を射止めし王に至上の愛を注がん。悪とは条理、正とは神意。今、天に弓引く愚者に天罰を下そう。すなわち愛為、破魔の月弦——』

空の彼方で、皆既月食の弓が厳かに引き絞られる。  
女神の激昂に浸食された月光が神アルカナムの力と織り交ぜられ、凝縮され

る。  
其をありきたりな言葉で示すなら——衛サテライト・キャノン星砲。

「——仕方ない。こうなればいつそ……」

もはやクレスも出し惜しみしてはいられなかった。

彼自身が心底忌み嫌い、神カオスの力を借りて背中に封じていた『奥の手』を使わざるを得ない——そう覚悟を決めた時。

「……待て。今回はオレがなんとかしよう」

「は??」

『——【汝ミーティア・アフォース・アリキア、星を穿つ白銀】』

降り注ぐ、膨大な神意と月光の集積ダイクロイック・レーザー複合重奏大砲。

しかしそれはすんでのところを狙いを逸らし、海の方へと駆け抜けていった。

——遠方から、遅れて極大の衝撃と拳を連打するかのような音が届く。

月光の砲撃が海を底まで蒸発させ、そこに周囲の水が瀑布のように流れ込んでいるのだろう。

同時に潮風によって迷い込んできた海水の霧が周囲の景色を覆い隠し始める中、クレスは突然の声の主に尋ねた。

「ひとまず危機を脱せたことには感謝しよう……それで、何の用だ」

「——頼みがある、【神造英雄ヘラクレス】」

その声は、いつの間にかクレスの腕の中から降りていた少女の口から響いていた。

しかしそれはひ弱な彼女の外見に不釣り合いな低音の男声で——恐らくは少女に一時的に宿ったのであろう何者かが、彼に頭を下げ

た。

「神祖ロムルスとの盟約に基づき協力を要請する。かつての東方オリエントの賢者よ、どうか我が女神あいでいを殺して欲しい。あの方は既に——どうしようもなく、狂っておられるのだ」

## 《エーゲリアの受胎儀式》

「御身も既に察しているとは思うが——改めて名乗ろう。オレこそは栄えあるローマナ皇帝、ガイウス・ユリウス・カエサル・アウグストゥス・ゲルマニクスである。またの名をカリギュラ、此度は我が子孫たるこの娘の身を借りて一時的に顕現した」

「……」

少女ユリアの身体を使う何者かは、自身のことをそう名乗った。

それを聞いても無表情を保ったままのクレスを「突然のことに困惑している」と勘違いしたのか、彼は下げている頭を上げ直して、慣れない少女の肉体でぎこちない身振りを示しつつ説明のために口を開いた。

「ああ、この身体の本来の精神のことを気にしているのか？ 心配せずとも良い。我が女神の《魅了》による自我の封印が逆に強固な盾となつて、オレの精神による上書きを防いでいるが故な。それとも次なる光撃レイザーのことか？ そちらは魔法で一時的に女神の認知をズラすことでこちらの座標を誤魔化している……長くは保たんが、少しばかり話をするだけの猶予はあろう」

その情報を流し聞きつつ、クレスは相手の発した名を頼りに記憶を手繰り寄せていた。

カリギュラ——山ほどいる古代ローマナの皇帝のうちの一人。

大した功績も残さず歴史の露と消えた者もいれば、そうでない者もいる中で、彼の名が後世に残すところの意味と言え……。

「……思い出した。銀月の狂気に堕ちたと評される、ローマナ屈指の暴君か」

彼から見て遙か後の世の評論家がそう纏め上げた、侮辱とも言える評価。

されどクレスが発したその評価を、とうのカリギュラは否定する素振りを一切見せることなく受け入れた。

「しかり。賢帝と呼ばれ調子に乗り、月女神を口説いたまでは良かった。」

だが、しよせんはその愛に応えきれずに吞まれてしまった愚帝よ。その後のオレが女神に捧ぐ愛を勘違いしてしまったせいで、民に苛政を敷いてしまったことは今でも深く悔やむところである。だが、オレの後悔よりも今は現状をこそ語らねばなるまい」

借りた少女の顔に深い自責の念を浮かび上がらせながら、カリギュラは月女神ダイアナが座標の設定を修正している隙を利用してクレスに語る――この艦、《ネモレンシス》で秘かに行われている計画ことの全容を。

「既にオレと言う皇帝の概要は知っというよう、その末路もな。女神の寵愛に魅入られ過ぎたオレはその愛に相応しい国を作ろうと独裁を強化した結果、当然の如く暗殺された。死の間際に正気を取り戻したオレとしては「それで良い」と受け入れられたのだが……しかし、我がダイアナはその終わりを良しとしなかった。本来ならば天に還るべきオレの魂を、その御力アルカナムを使い秘かに下界に留めていたのだ」

「それだけでも既に神々に許された範囲を超えているな。見逃されていたのは……ああ、まだ具体的な下界での規則ルールが定まっていなかった時期だからこそか」

神々が現代まで続く『下界の規則ルール』を明確に定めるまでには、それなりに悲惨な出来事があった――例えば、『視界いっぱい広がる砂浜の粒全てほどの不死』を与えられたが、『不老』ではなかったために肉体が風化してしまい、五感が喪失した中でそれでもなお孤独に『生かされ続ける』老婆がいたように。

その当時の天上界ゆる☆ふわ的な価値観からすれば確かに、死後冥府に送られるべき魂の一つや二つを手元に留めておく程度のこととは軽く見過ごされていただろうとクレスは納得した。

カリギュラもその神ダイアナの判断そのものは特に非難するつもりがないようで、話を続ける。

「うむ。そして、当初は手元にひっそりと隠したオレの魂を愛玩する程度で収まっていたのだが、我が女神の愛は次第に膨れ上がり、それだけでは満足できないようになっていったのだ。オレの肉体的不在と併せて……とうに絶頂期を過ぎ、衰退していくばかりのロマーナを眺めながら。あの憎き大工ヨセフの息子が説き広めた異端の教えに侵され、

正しき信仰すら失われていくローマーナを見ながら」

「……」

「その『時代の移ろい』が、不変を是とする女神には耐えられなかった……それと同時期に、ローマーナ外で名声を高めつつあったアルテミス・ファミアリアという名の派閥があつたのだが悪かつた。同じ事柄を象徴する女神アルテミスは隆盛を極めていくのに、自らの国は零落ローマーナの一途を辿るばかり……『何故だ！ あの小娘と私、何が違う!?』とよく仰っていた」

「……ただでさえ心が弱っていた時期に他者との比較を覚えて、下へ降りるばかりの螺旋階段から思考が抜け出せなくなってしまったのか」

「そうだ。神と言えど人と同じように思考するのだと、あの時ほど強く実感したことはない……。それから更に経って、いつからだつたか……あの御方はかの正当なる時代を復活させようと、オレの復活を目論み始めた」

当時を思い返すかのように、瞼をキツク閉じて顔を顰めるカリギユラ。

彼は女神ディアナのお膝元で長きに渡り彼女と視界を共にしていたからこそ、その超越存在デウスデアの心情を少なからず理解できていたのだろう。

生の後半ではその在り方こそ歪んでしまったとはいえ、その口振りから、彼が間違いなく自らのローマーナを愛していたことは疑いようがない。

それが目の前で廃れていく光景をまざまざと見せつけられることに彼自身、「思うところがなかった」とは言えないようだった。

しかしそんな己の思いの丈を語るよりもあくまでも現状を語ることに徹しようと、彼は閉じていた目を一瞬の逡巡の後に開いた。

「魂は既に女神の手中こにあった。ならば残る復活に必要なものは肉体だ。血の通う、生きた肉体がなければ『神の恩恵フアルナ』を刻むことも出来ぬ。それを用意すべく、女神は世界中に散ったオレの血を集め始めた。世代を経て薄まったローマーナ皇帝の正当な血筋……それを交配



させることで、再び濃く高めていく。そうして出来上がる、かつてのオレの肉体と遜色ない容れ物に中身を注げば、晴れて【銀月の皇帝】の復活という訳だ」

「この艦の連中が全て似通っていたのはそのためだな。果てしない近親相姦を繰り返してきた結果、ここでは誰しもが親であり子であり兄弟であり姉妹である。全ては求めるただ一つの器のため……」

「しかり。それこそがこの艦の正体。女神ディアナの神殿《ネモレンシス》——そちらは内実を覆い隠すための虚構の偽名に過ぎん」

ここに至って、クレスは漸くこの艦の真名を知るに至る。

「またの名を、《エーゲリアの受胎儀式》。あの方はかつての分御霊であった水の精霊エーゲリアの『繁栄』の権能を用いて母胎の受精出産を加速させ、愛して病まぬオレを再びこの世に産み落とそうとしているのだ……!」

それこそが、神ディアナが少女ユリアを攫った目的。

彼女の中に眠るカリギュラの遺伝子をも計画に組み込み、祖先の肉体を再構築するための一片にする予定だったのだ。

クレスも薄々感づいていたこの場所の正体がカリギュラによって詳らかにされたことで、彼が女神の様子に対して抱いていた疑問も腑に落ちた。

「神ディアナはオレを復活させるためだけに、オレの子孫を生まれながらに《魅了》に墜としては愛のない家庭を無理矢理築かせていた。愛のない交わりなど、本来我がロマーナに有り得てはならぬ……あのお方にはもはや、愛すべきロマーナの姿が見えてはおらん。オレを取り戻す、その一点以外全てが些事に過ぎんのだ」

「……それが最初に言った、「狂っている」ということか」

「業腹だが、そう言わざるをえまい。現実に干渉する術を持たない魂のオレは、あの方が狂うまでの全てを側で見ていることしか出来なかった。悔しいことにな。——だが偶然にも、こうして御身が現れた。【神造英雄】、燃え燻るような灰の髪を持つ神祖ロムルスの義父が」

「……」

——かつての話だ。

迷宮……当時の『大穴』の攻略に必要な物資、特に強力な武器を調達するために、クレスは度々そこを離れて世界中を渡り歩いていた。そして、地上に溢れるモンスター<sup>ダンジョン</sup>のせいで人々の心に無限の暗雲が立ち込めていた当時、その旅の過程で数々の問題<sup>英雄譚</sup>に巻き込まれるのはある種必然であった。

ある国に、シルウイアという一人の女がいた。

本来の立場を奪われ、望まぬ地位に押し込められかけていた不幸な女。

それを当時下界に降りてきたばかりだった神アレスが——美女と言うこともあつて——気にかけて、当時旅をしていたクレスに加護を与えることと引き換えに彼女の救出を依頼したのだ。

結果クレスは色々とすつたもんだの挙句に彼女を神アレスと共に祖国から連れ去り、ついではばかりに二人の仲人を務めさせられたりして、その果てに彼らの息子……のちの初代ローマナ皇帝ロムルスとその弟レムスの養育係を任されたりしたのだが。

子の養育と言えば通常何年もかかるものであり、それを辞<sup>面倒臭</sup>したかった彼は適当な所から賢い老狼の精霊を連れてきてそれを代理とし、「代わりに一人前となったお前たちが真に困った時に手を貸そう」という約束を残して再び『大穴』の攻略に戻った——。

「神祖はついで、貴方に助けを求めることなくその生涯を終えたと遺された書簡にあった。ならばその血を引くオレが残ったその権利を行使したとしても父祖はお許しくださいさるだろう。——故に、頼む。どうか御身の手であの狂われた女神を討ち、我が大切な子らを救うと共にこの悪しき儀式の場を終わらせてはくれまいか」

再び頭を下げて、カリギユラはクレスに懇願する。

そこには派手に着飾った皇帝の見得等はなく、真摯に主神の安寧を願う一人の眷属の姿があった。

神殺しという下界最大の咎をクレスに押し付ける傲慢さ——それを他者に委ねることしか出来ない己の無力感を押し殺して、希う。

その心からの願いが彼の心に響くかは分からなくとも、尽くせるだ

けの誠意を尽くして、カリギユラはクレスからの答えを待った。

「むろん、報酬も与えよう。この船には失われた本来の動力源の代替として、かつてオレが設計した対海の魔物用の魔力増幅機関『赤竜機心』ローマン・リアクターというものが搭載されている。もつとも、到底吊り合わせぬと思うが……もはやオレには、それくらいしか残っておらんのだ」

——投げうてるならば五体を投げ出してでも構わない、それこそ命を捧げたとして惜しくはない。

ただ、間借りした子孫少女の身体に自分のエゴで傷をつけるわけにはいかない。

だからこそその、今のカリギユラに出来る精一杯の誠実な対応として、頭を深く下げる。

そんな誇り高き皇帝の遜った態度に、クレスは。

「良いだろう。依頼の目的は子孫の救出と神殺しだな。請け負おう」

カリギユラの浮かべる真剣さとは裏腹に、明日の天気を確認するくらいの気安い口調でその依頼を受領した。

「え？」とトントントン拍子どころか坂道を転げ落ちるような速さで都合よく進んだ展開にカリギユラが目を丸くする中、クレスは久々の『破神』へ向けて計画を頭で練りつつ理由を教えた。

「あの様子だと、どうせ殺さねば何処までも追ってくるだろう。下界の規則にも抵触していることだし、お前からの依頼があるにせよないにせよ、少女ユリアを送り届けた暁にはウラノスに言われてやっていった。その『咎』も今更問われるまでもない。なにせこの身は既に神殺しだ」

「——っ」

下界の住人にとっての最大の禁忌であるはずの事柄を、悔いる素振りもなく、かといつて自慢げにする様子もなく、淡々と口にするクレス。

その己の常識とは大きく異なる在り様にカリギユラが思わず息を呑む中、クレスは背に負った解放しかけの恩恵の調子確かめるようにしながら、彼にとっての事実を語る。

「それが一つ二つ増えたところで変わらん。お前の言う子孫の保護も

——数こそ多いが、まあやってやれんことではない。女神の庇護下を離れた後の生活もメーヴに任せれば、愚痴を言いつつなんとかするだろう。強かな女だからな、あいつは。……そら、背中を見せろ」

クレスが少女の服を捲つて後ろ側を見れば、そこには女神ディアナの眷属の証であるカシワの葉の冠と月、弓の紋章が刻まれていた。

「やはり《魅了》の媒介として『神の恩恵』を刻んでいたな。貫うぞ、その血」

例の如く抜き取った神血イコルをクレスはすかさず纏っていた外套を拡げてその上に垂らし、悪派閥イヴァイルスにも使った同属捕捉アプト・ノーグッドの呪詛を唱える。

じわりと滲むようにして出来上がった簡素な血地図を見やって艦全体の人員配置を把握しつつ、クレスはこれからの自身の振る舞いを確定させた。

「数は……3万と少しか。連中を一人残らず救い、ついで神を一柱殺すだけと。ここへ来るまでもう十分時間を無駄にした、暇じゃないんだ……さつさと済ませるか」

気怠げな声色によって示される確定づけられた事項に、もはや見守るより他ないカリギユラは自身の手が震えていることに気が付いた。

数多くの矛盾や悪徳を孕んだ坩堝ロマーナの支配者として君臨した皇帝でさえ理解の及ばない、盤外イレギュラーの条理。

神々の見せるそれに等しい、下界の常識を易く踏み躪るクレスの『傲慢さ』に彼は覗いてしまった。

——己が主張するまでもなく、その背中に他者が勝手ながら見出し  
てしまう称号憧を。

人はそれを、『英雄怪物』と云う。

「君よ、一を拓く炎熱たれ（アナムネシス・イーリア）」

一発目の超距離<sup>汝、星を穿つ白銀</sup>月光大砲から生まれた潮味混じりの霧が、そろそろと晴れていく。

その内側にいたクレスたちの視界が確保されていく一方で、神ディアナもまたカリギュラの認識阻害魔法の影響から脱したようだ。

再び略奪者<sup>クレス</sup>を視界に入れた彼女は「今度こそは外しません」と強い神意の光を黄金色の瞳に湛えて、肩から一直線に伸ばした右腕で再び狙いを定める。

その白く滑らかな指先に、命を奪う『狂気』を宿して。

『——《精神汚染》の解呪を確認しました。標的を再捕捉します。<sup>ルナースサイト</sup>《月光距導》、弾道補整を開始……計算完了。エネルギーの再充填を開始します。決して逃がしはしません、逃げるといふのなら地の果て冥府の奥底まで追いかけて必ずや殺してみせます——すべては、我が愛しきカリギュラのために！』

抑揚の喪失した哀しき天上の調べが、世界に響く。

二度神<sup>アルカナム</sup>の力が銀光を食して月輪の弦に番えるまで、その間およそ10秒。

海に大穴を開けるほどの大破壊をもたらす神の主砲<sup>リチャージ</sup>の再装填は、下界の論理からしてみればあまりに常識外だった——無論、早過ぎるという意味で。

並の冒険者にとってみれば絶句に値し、見慣れた神々からしてみれば『天上の理』<sup>チー</sup>持ち出すなよおー、これだから堅物女神様はさあー？

あ、俺たちも巻き添えにするって？ ……フヒヒ、サーセンww」と面白半分に非難<sup>ブイイング</sup>まっしぐらな、神創兵器の平均的『速射』機能。

しかし、ことこの期に及んで——それは融通が利かない『機械的怠慢』<sup>ロマ</sup>だった。

「歯を食い縛れ、俺は女とて容赦はせん」

『な——!?!』

彼我の距離、およそ200M<sup>メドル</sup>

その長距離を詰めるのに、邪魔な手荷物少女の身体を下ろした本来のクレスの速度は10秒も要しない。

一足。最硬金属オリハルコンの地面が融け焦げる臭いと共に、距離の半分10.00Mを踏み潰す。

二足。残る半分10.00Mを、爆ぜる大気の壁と共に突き破る。

『っ、【偽現・月神の聖光弓】、緊急発射を——光量充填不足？ くっ——』

そして三足目。

バリバリバリイッツツツ!!! と雷鳴のような衝撃波を伴うクレスの流麗な跳び膝蹴りが、反撃の間に合わなかった女神の整った鼻っ柱に叩き込まれる。

怒る西風ゼヒューロスの咆哮の如き轟音をがなり立て、女神を文字通り足蹴にする物理的不敬。

それをなす術なく正面から受けてしまったディアナは、理不尽なまでの勢いで遙か後方へと蹴り飛ばされることと相成った。

「ガッ、アッ、アッ——ツツツ?!?!」

「——柔い、同じ神とてわが師スカサハとは比べ物にならん?!?!」

スカサハ直伝、《蚤撥ねの妙技》。

脚の関節を寸分のズレもなく同時に駆動させることで、自身の背丈を超えるものさえ容易く飛び越える脚力を生む奥義。

その武の粋が生み出した威力は神ディアナの身体に後方の巨大石碑モニュメントに風穴を開けさせてなお足るを知らず、その御体を《ネモレンシス》外の海面にまで弾き飛ばす。

更には水切り石のように何度も水面に跳ねさせて、彼女を遙か大洋の彼方にまで送り届けるのだった——。

「——がふっ! げふっ! ごほっ! ……神の尊顔を躊躇いなく蹴り砕くとは、なんたる不忠ですか。神意に従うことも知らぬ、下界の恥晒し者……! お前のような人間に、決して我が『計画』を中止させはしません——私は絶対に我が愛を取り戻しましょうっ。我が愛こそが、世界の全てなれば!」

「不忠? 俺は別に、お前に忠義を捧げた記憶はないが……」

クレスはディアナの吹っ飛んで行った先に、少しばかり遅れて海面を駆けることで追いついた。

何のことはない、片足が沈むより先にもう一方を踏み出すだけの《妙技》とも言えない力技だ。

辿り着いた先は一面見渡す限り遮るものが何もない、水平線を仰ぎ見るだけの新たな戦場<sup>大 海 原</sup>。

そこで、彼は空中に姿勢を整え直した神ディアナに分析の眼を向ける。

その端麗な顔にはレベル19の蹴撃を見舞ったというのに、傷一つついた様子がない——今も尚彼女の周囲に後光のように噴出してる<sup>アルカナム</sup>神の力が自動修復を促しているためだ。

神々を真の意味で屠ろうとするならば、下界に属する攻撃はそも無価値に過ぎない。

「この、不義、不誠、不信心、不忠不孝反道徳——神を崇めることを忘れた愚か者。御覧なさい、汝の攻撃は私に通用しませんよ。諦めるのです。膝をつき、泣いて許しを請いなさい。さすれば一瞬の痛みもなく、死の神プルトの下に送り届けて差し上げましょう。……ああ、待っていてください我が愛。ようやくここまで辿り着いたのです。貴方に相応しい身体<sup>からだ</sup>まで、たった後2割なのですよ？ これだけの数字を詰めるのに、神の力を極限まで抑えてどれほど経ったか——我が愛を邪魔立てする無粋者も、今退けてみせますからね」

「長いな、話が。更年期か？ 妄想は頭の中だけにしておけ、おかしな目で見られたくなければな」

ディアナの告げた降伏勧告を、クレスは鼻で笑う。そも、先ほどの蹴りに彼女を殺す意図など毛頭なかった。

彼はただ戦場を《ネモレンシス》から移したかった、それだけだ。

——血地図で把握した《魅了》兵の配置は艦全体に広く散らばっているもので、女神と戦火を交えるのに先んじて一人ずつ避難させるのは面倒だった。

——加えて、下界での神の力の行使を底上げ<sup>パ フ</sup>する『神殿』そのものから彼女を引き剥がすのは必然。

そんな訳で彼にとって色々と不都合の多い巨艦から、神ディアナを別の場所にご案内さし上げたただけなのだ。

故に「被害がなくて残念でしたね？」などと煽られたところで「で？」と返す他ない。

とことん不遜な態度を崩さないクレスにディアナは眉を吊り上げながら、蹴りで意識を逸らされたことで中断していた月矢の充填を再び始める。

「どこまでも苛立たせてくれますね——その顔、今に恐怖に歪むことになるというのに。座標再々修正、中断中のエネルギー充填を開始——」

「……………ここからが本番だな」

自らの手元にも『神殿』内で扱っていた弓を出現させ、ディアナはクレスに牽制の矢を連続して放つ。

しかし彼も、対獣用の単調な射掛け程度にみすみす仕留められはしない。

爪弾くように連射される狩女神の矢は、彼の動きを先読みするかのような巧みな軌道を描いて標的に迫る。

彼が『魅了』下のディアナの眷属に行った「移動先に攻撃を置いておく」程度のことなど造作もないのだぞ、とでも嘲笑うように。

まるで詰将棋のようにクレスの回避先へ放たれる光輝の神矢。

その神意の鏃が作り出す白き檻を、クレスは人体の可動域を無視した動きで潜り抜ける。

「……………なるほど。自ら関節を外し、内臓まで動かして重心を操ってみせますか。気味の悪い」

「冒険者なら普通のことだ」

「ですが、そのような軟体類の如き動きでも範囲攻撃は避けられないでしょう？ 先ほどの不命中は不意の錯乱魔法によるもの……………本来、神々の攻撃とはそれ則ち必中なのですから」

見上げれば、月光を貯め終えた【偽現・月神の聖光弓】が二射目を繰り出そうとしている。

極光が収縮し、一拍の隙間を置いて、神意の下にクレスに吸い込ま



れるように放たれて――。

「我が愛のために消えなさい――【汝、星を穿つ白銀】」  
ミーティアアフォース・アリキアー

『隕鉄の剣』＋『ネガ・ファトゥム』――【契約に応えよ、東方の明星よ。我が命に従い常闇夜を拓け】、【ソード・オブ・ハートウーシャ】  
オリエント！」

握り締められた精霊武装隕鉄の剣と運命属性の合わせ技が、降り注ぐ光の中に微細な隙間を穿つ。

そこへ身を躍らせ、クレスは断罪の光から間一髪で脱出した。

またもや目標を打ち漏らした月よりの御柱は海を深くまで抉り、幾つもの海流の層を突き抜けて、一瞬だが白砂の底を露出させてみせた。

彼の態度の通り、真つ向から立ち向かえば到底敵わない神創武器デウスウエボンの『必殺』であれど、指先一つほどの一部を破損させて活路を見出すことは出来る。

――ただし、『必死』を『生』に転じたことの代償は決して小さなものでは済まなかった。

「動きが多少おかしいと思えば、義手、それに義足でしたか。その偽物の身体で我が光を耐えたことは素直に認めてあげましょう。しかし一度は耐えられても、あと何度耐えられるのでしょうか？ ふふっ、ふふふふ――見るのです、我が愛よ！ 私と貴方の前に立ち塞がるものなど、こうして滅びゆく定めなのです！ ふふふ――あはははははっ！」

自身の優勢を示す敵の姿に、ディアナは高笑いを隠さなかった。

あくまでも代替品でしかないクレスの義肢は（彼基準で）そこまで強固なものではなく、神の一撃の余波を受けた段階で半壊していた。

表面の偽装皮膚は溶けたチーズのように焼け落ち、露出した内部機構も悲鳴を訴えるようにバチバチと火花を散らしている。

神の威光を迎え撃てるのも、もってあと二度か三度が限度だろうか。

そしてそれを斬った二つの名剣も、その刃先が僅かに溶融を始めている――いかに『深々層』に適合し得る聖剣と魔剣と云えど、そう何

度も『運命』を斬り抜けないだろうことが窺える。

その悲惨な予兆を流し見たクレスは、それでも余裕を崩さなかつた。

「なに、十分だ」

「……っ、生意気な！ 下界の人間如きが、こうも神意を軽んずることなど——ああ、気に入りません！ 気に入りません気に入りません気に入らない気に入らない気に入らない——滅びなさい！ 疾く滅べ！ 死して我が憤懣を慰めなさい下郎！」

女神ディアナは三度、己が腕による牽制を行いつつ、成層圏に浮遊する神創兵器にエネルギーの充填を命じた。

心なしか苛烈さを増した矢雨を《矢除けの妙技》で回避しつつ、彼はいよいよ先ほど切ろうとしていた『切り札』を出すべく、片目を閉じて己が内側に意識を集中させる。

彼は強く想起する。

背中に負った『神の恩恵』、その内に封じられた『焰』を。

——その瞼の裏に、複雑な色彩を湛える『光玉』が揺れ浮かぶ。

その『焰』は、計3つの頑丈な鎖神意によって縛られていた。

「一つ。これは『救界』に通ずる戦いである」

天空神ウラノスによる封——『救界』に係る事柄で無ければ、この『力』は振るつてはいけない。

もしこのまま女神ディアナの狼藉を見逃せば、世界は神アルカナムの力の氾濫により終焉を迎えよう。

それは神々の悲願を阻害する危機であり、であれば、今この場において暴走する女神を完膚なきまでに滅ぼすことは世界の正義となる。

「一つ、これは『人』としての戦いである」

知恵プロメテウスと炎の神による封——この力を振るう時には、『想い』がなくてはならない。

かの女神は冷徹な使命を以て敷かれる天上の『法』ではなく、多少危うかろうと前へ進む下界の滾る『意志』こそを求めた。

——女神の暴走に伴うムーの二の舞が起きれば、また迷宮ダンジョン攻略の邪魔となる。

その前に禍根も遺恨も諸共に消し飛ばさんと、クレスは己が熱意を燃やす。

「は、下らない——なにを企もうと無駄なことです！ 下界の者がいくら抗おうが、我々の導き示す運命の流れから逃れること能わず……充填完了、主砲発射。【汝、星を穿つ白銀】！」

「ソード・オブ・ハートウーシャ」ツ！」

三度放たれた宙からの砲撃を前と同じく斬り抜けつつ、クレスは『恩恵』に意識を向け続ける——その内側から今にも溢れようとする『力』の制御を離すまいと。

「一つ、これは『誇り』に背かぬ戦いである」

最後に残る、混沌と原初の神による封——それは単純に、『力』を振るう行為そのものを嘘偽りなく主神に告げられるか否かを彼に問う。

「たとえ間違っついても構わない、それが君の、恥じ入ることのない本心に由来するものであればね」……かつて聞いた主神の言葉が、幻か、クレスの耳元に響く。

それに「当然だ」と彼が心の中で返した時。

封印が、解かれる。

「——神意開放。『神の恩恵』より第一魔法欄へ。偽装解除。封印溶解。……真名発火」

三神による嚴重な施錠を外した今、クレスの『恩恵』が——燃える。彼の背中から業火が怒濤の如く噴き出し、一帯の海面を煌々と照らしだす。

その様子に女神ディアナは何故か、不吉な予感を抱かされた。

まるで、カリギュラの後を継いだ皇帝ネロの治世に愛を焼いた火炎旋風のような——。

「……なんです、なんなのですか、それは——まさか!？」

遅れて『焰』の正体を理解した彼女は、感情を超越したはずのその顔に大きな驚愕を浮かべた。

「その『焰』は……何故、それが下界の人間の手に——!？」

瞳目を禁じ得なかった彼女の前で、今にも荒れ狂いそうな『焰』の手綱を握るクレスはその額に珍しく脂汗を滲ませていた。

迷宮第200層由来の呪詛すら平然として抱え込んでいた彼でさえ、制御に苦勞する『じゃじゃ馬』。

——『恩恵』の内側から漏れ出づるその『焰』が、ついには偽りの魔法名を灼き剥がして。

『焰』は彼の装着していた壊れかけの義肢を焼き落とし、代わりの二肢として形を成す。

そうして炎によって形作られた彼の新たな右腕には、今や空欄となった第一魔法の代わりに『光焰を先端に灯す赤金色の砲塔』が握られていた——否。

これこそは砲ではなく『炬火台』。

採火したオリンピアの『聖火』を灯すための『薪束』。

「拘束、完全解除……疑似神造兵器、【智炎女神の炬火台】」

その先端に坐す『焰』こそは、女神プロメテウスの名の下にクレスが『炎驚の嘴』からくすねることを許された『力』。

神さえ殺し得る、まごうことなき『天上界の火』である。

「何故、何故何故何故何故何故何故——理解不能です。まさか下界の命如きが、その『焰』を制御できるはずが……!」

「さてな」

ディアナの無意識から出た問いかけを短く打ち捨て、クレスは『焰』の制御に集中する。

——どうせ、今から死にゆく者に知らせたところで意味はないのだから。

「っ、充填完了、発射っ! 【汝、星を穿つ白銀】!!」

降り注ぐ、四度目の女神の神意。

これまでは所詮矮小な下界の人間、との蔑視が抜けていなかったディアナによる、ここへ来て初めて本気となった殺意が天を駆ける。

一方、『焰』の操作に集中するクレスは対抗する素振りを見せぬまま、その極光に呑み込まれ——。

「ふふふ——あーっはっはっはっはっは!! 如何に神を殺す『焰』を担うとはいえ、死ねばそこまで……なっ!」

——されど、無傷。







今回の件はただ、運悪く地上に帰還した彼と少女の夫婦が邂逅しただけ……その上で、彼が攻略に注力できない事情があった……それらの偶然が重なっていないければ、彼は女神の悪行を知った所で放置していただろう。

その不運に同情を捧いで、それからもう少しだけ「念のために」と暫く照射した後、本当に終わったことを確信してから、彼はようやく『焰』を終息させた。

「終わったか。まったく、まさかこんなことになるとはな……」

そうボヤきつつ、クレスは己が身体に起きた異変を見やった。

「……またか。だが、今回は前ほどでもない」

これまで外見上25歳程度を保っていたクレスの身体は、およそ2、3歳ほど若返っていた。

加えて、『レヴィアタン』の呪詛により失われ蝕まれていたはずの右腕と左脚が、健全な形で復活を遂げている。

それが、時に『不死』をも意味するところの天上界の『焰』を扱ったことの『祝福』<sup>代償</sup>だった。

「面倒だが、仕方がない……また感覚を慣らしていかないとな」

騒がしい光が消え、夜の海には静寂が戻る。

空に輝く星々の瞬きが水面に乱反射して、見る者の心を揺さぶる風靡な光景を生んでいた。

その中に独り立つクレスの瞳はしかし、その自然の神秘とはまったく別のところに向いていた。

「戻るか——俺たちの迷宮<sup>ダンジョン</sup>に」

その前にやらなければならない諸々の雑務（ギルドへの報告、神々への言い訳等）が残っていることを思い出して、クレスは今度こそ大きく顔を歪めた。



エピソード：かくして筆は置かれ、名もなき英雄は次の冒険へ向かう

——数日後、ギルドの一室にて。

依頼者である夫婦に少女を引き渡したクレスは、彼らにしつこいほど何度も頭を下げられていた。

「ありがとうございますっ……ありがとうございますっ……！　ありがとうございますっ……！」

「ユリア、よく無事で……！　うう、本当にありがとうございますっ……！　……！　ああ、ユリアっ……ありがとうございます……っ！」

父親は立ち上がって深く腰を折り、母親はユリアを強く抱きしめ、両者ともに感謝の言葉を繰り返す。

クレスが壁に備え付けられていた時計の針を見れば、既に彼らがこのようになって三時間近くが経過しようとしている。

……ぶつちやけ、彼はとうにこの状況に飽いていた。

「あー、感謝は分かったが、それでだな……」

「ありがとうございますっ……！　ありがとうございますっ……！」

「ユリアっ……！　ユリアっ……！」

「……（気持ちは理解できるが、せめてこっちの話を聞いてくれないものか？）」

もつとも、それも無理のない話。

英雄の都と謳われるオラリオは、その反面、底知れぬ闇と陰謀が渦巻く地でもある。

その住人として、夫婦は「消えた娘の安否を天秤にかけた場合、当然悪い方に傾くだろう」と内心覚悟を決めていた。

死体だけでも帰ってくれば御の字、最悪訃報一つだけを伝えられる可能性も十分に考えられた。

だというのに娘は五体満足で無事に帰ってきたのだ。

それも、目に見えるような後遺症を抱えた様子もなく。

これを楽しばない親などいるはずもなく、そういう訳で、彼らが事件を解決に導いた立役者クレスに尽きぬ感謝を捧げようとするのも無理はないことだった。

「この度は本当に、なんと申し上げれば良いか……娘を怪我無く連れて帰ってきてくださり、誠にありがとうございました……！」

「実は、夫とも何度も話していて……もしかしたら、帰ってこられないこともあるかもしれない。だけど、こうしてユリアはまた再び私たちの所に戻ってきてくれました……それが本当に嬉しくて……っ！」

「……ああ」

「しかも、報酬は要らないとまで仰って！ その、本当によろしいのですか？」

「別に気にすることもない。そんなことよりも、貴方たちはその子供のことを気にかけてやれ」

クレスが夫婦に提示していた報酬——ローマーナにて祀られていた『ウイスクム聖金樹』の破片。

しかし、もはやそれは彼にとって無用なものと成り下がっていた。

というのも彼は此度の事件の成果として、舞台となった『ネモレンシス』そのものを大きな損傷もなく接收していたのだ。

そこには古代ムーの失われし秘術ロストテクノロジーが数多く搭載されていると共に、女神ディアナの手で植え育てられ、半神殿化した『ウイスクム聖金樹』が聳え立っている。

今更彼らの家宝を傷つけてまで、そのちっぽけな『破片』を手に入れる必要もない——それだけのことなのだが、そんな事情を知る由もない夫婦はひたすらに無欲そうに見えるクレスの態度に感銘を受けらるばかりだった。

つまりこうして話が長引いているのは、偏にクレス自身のせいにもならないのである。

それを一応理解している彼は、夫婦がこちらに意識を傾けたこの隙に話を終わらせるべく畳みかける。

「それでだ。もし今後しばらくの間、娘に変な様子が見られた場合……例えばだが、急にぼーっと宙を見つめるようなことが数度繰り返

された時などは、ディアンケヒト・ファミリアを頼ると良い。あの老神は貪欲だが、俺からの紹介だと言えば不当な診察料を請求されることもなからう」

ついでとばかりに、クレスはここで師たる医神ディアンケヒトを推薦しておく。

女神からの《魅了》の後遺症など早々見られる症例ではなく、きつとかの神は「まーた面倒なものを寄こしておって！」などと騒ぎながらも興奮するに違いなかった。

こうしてささやかな恩を積み重ねておくことで、ここぞと言う時に返して貰えるようにしておく——強欲な師に相応しい、弟子としての役目だった。

「分かりました。その時には是非、ディアンケヒト様を頼らせて頂きます—」

「最後まできちんとケアしてくださいるなんて……本当にありがとうございます、冒険者様……！」

そこへ、母親の胸元から顔を出した少女が言葉を挟む。

「……ねーパパ、いつまでこの人とお話しているの？ 私、お腹がすいたよー！ なんだかね、ママのピッツアがすつごく食べたいのー！  
ペペロナオイルをたっぷり塗った、ママ特性のピリ辛ピッツアー！」

「こらユリア！ 恩人の前ではしたないわよ！ いい、この方はね……！」

「良い、この子は何も知らない……そちらの方が貴方たちにとっても悪くないだろう。そう怒ってやるな」

呑気な少女のことを叱ろうとする母親を、クレスは「これ以上話が長引いてはたまらない」と制止する。

——そう、幸いにして彼女の記憶は《魅了》されていた間の分だけすつぽりと抜け落ちていた。

だが、「それで良かったのだ」とクレスは思う。

見知らぬ地で、見知らぬ神の下で。

一人寂しく、操り人形の如く働かされていた……その影響がこれからの少女の人格形成に響かない方が、冒険者でもなんでもない彼女に

は相応しい。

自らその記憶を取り戻すか、もしくは向き合おうとするのでもないのなら。

そのまま忘れてくれた方が彼女の家族にとっても、（これ以上の面倒を嫌う）クレスにとつてもありがたいから。

「そら、もう行くんだ。娘も久々の我が家が待ち焦がれて仕方がないようだし、それに、俺もいい加減感謝は聞き飽きた」

「はい……その、本当につ、ありがとうございました！……ああ、もし今後この街で家を建てるようなことがあれば是非私たちを頼ってください。その時は全力を尽くして、立派な館を建てさせていただきますから！」

「私からも重ね重ね、ありがとうございました！」

「？……ありがとうございますー！」

よく分からないままに両親に倣って頭を下げる娘と手を繋いで、ようやく彼らは去っていった。

大事な一人娘の誘拐事件、それが無事解決したことに大いに安堵し、感謝する普通の両親。

彼らは何も知らない。

事件の裏側に潜んでいた数百年来の女神の『計画』も。

齡十にも満たない娘ただ一人を取り返すためだけに、神がひとり柱弒されたことも。

——そして実の所、彼らの依頼した冒険者の真名さえも。

『娘が無事帰ってきた事実』のみを以て、彼ら一家は日常に帰っていきのだった——。

……家族を見送り、クレス一人がソファアーに深く腰かけるだけになった部屋の中で。

姿かたちのないもう一つの声が、彼の懐の中から響く。

『……良い娘だ。我が姪に似て、きっと花や蝶のように美しく育つことだろう』

「そうか」

その声を聴いたクレスは懐からこぼし大ほどの一つの宝玉を取り出した。

鏡面状に磨かれた艶やかな朱色の『珠』——それこそはローマーナの至宝の一つ。

『魔力を込めることでより大いなる魔力を産み出す』効果のマジック・アイテム  
『ローマン・リアクター』  
魔道具、『赤竜機心』。

またそれは、少女ユリアの身体から離れた古の皇帝カリギュラの魂が新たに宿る先として選んだ仮の身体でもあった。

朱珠の表面をピカピカと光らせながら、カリギュラは反響がかかった声でクレスと会話する。

『オレもあのような子孫の顔が見れてよかった。国としてのローマーナは潰えど、その脈流は確かに受け継がれているのだな』

「盛者必衰、されど全てが泡沫の夢と消えるわけではない。人が降り積もる歴史の塵の上に立っていることは、人が人としてある上で必然の事象だからな」

『新たなローマーナの威光が芽吹くのも、古き良きローマーナがあればこそ。……オレという過去が大事に過ぎた我が女神には、その人として当然の移ろいがどうしても受け入れられなかった。オレが、そして自らが新たな後継者の立つ大地過去となることが認められなかった。……悲しいことだが、これが有限を生きるオレたちと、悠久を生きる神の感性の違いというやつだったのかもしれないな』

どこか達観したような声で語る朱色の宝玉を手の中で転がしながら、クレスはそこに宿ったカリギュラの魂を見つめつつ問う。

「それで、お前は成仏しないのか？ 女神ディアナは依頼通り殺した、もう現世に未練もなからう。冥界に行く路が分からなくなったのなら、適当な冥府の神をツテで見繕わせるくらいはしてもいいが？ 昔一度死んで以降、奴らの使徒はそれなりの頻度で俺の前に現れる」

『……いや。本来ならばオレの魂もまた神プルートーの御手に委ねられるのが当然なのだろうが、もう少し我儘を通したい。つまり、オレはこの宝玉の中で眠りにつこうと思う。我が女神が再び、目を覚まさ

れるまでな』

その選択に、クレスは彼の覚悟を確認する。

「……神が蘇るまでには途方もない時間がかかると聞く。それまで待つつもりなのか？」

『ああ。オレはいつまでも待とう、我が女神のことを。それがあの入らずの森から彼女を連れだしたオレの負うべき責任だ。それに……』

刹那、クレスは唐突に幻視した。

——深い懐古の念を込めたカリギユラの、言の葉の向こう側に佇むとある美しき光景を。

かつて、森の神殿でしんしんと降り注ぐ月光と清流の奏でるせせらぎを友としながら、少数の信者に囲まれてひっそりと暮らしていた、世間知らずな女神ディアナ。

彼女に一目ぼれしたカリギユラがその手を取って広い世界へと連れ出した——その時の一幕を。

『私は月。夜の静けさに、愛し子らの安眠を見守る者。それだけが全て。それだけで良いのです……』

『ハ、それだけではつまらんだろう？ 共に来い、女神よ。そして我が不夜のロマーナを見よ。たとえアポロの瞼が落ちようと、万民は変わらず呑み、騒ぎ、熱く議論を交わす。そして愛を言祝ぐのだ。オレは貴女にも愛を贈りたい。闇に輝く大輪の白百合よ、オレはなんと少しでも貴女を逃さぬ。何故ならば、御身は既にオレの心を奪ってしまったのだから！』

きつとその記憶を共に振り返ったのであろうカリギユラは、最後にこう付け加えた。

『それが、オレの夫としての『愛』だからな』

「……なるほどな。まあ、そうしたければそうするが良い。俺の邪魔にさえならなければ、どうでも良い」

その淡白な声色とは裏腹に、万感籠ったカリギユラの声を聴いたクレスは思う。

——やはり『愛』とは他の感情とは一線を画すものだ、と。

我が為にでなく、誰が為になされる感情。

人が人であるが故に持つ、他者を尊ぶ在り方の最も強い表出。

それが力による蹂躪しか知らないモンスターに弱き人類が打ち克てた最大の要因の一つであると、彼は歴史の傍観者として識っている。

……なればこそ。

カリギユラは本当に、ディアナの復活まで待ち続けられるだろうと彼は確信した。

『では暫しの別れだ。感謝する、古代の英雄よ。我が女神を狂気の檻から解き放つてくれて……』

それつきり、宝玉の明かりは明滅を止めて沈黙した。

カリギユラの魂がその内奥で深い眠りについたからだろう。

彼はこれから永い時を待つことになるのだ——それこそ、クレスのこれまでの人生が時計の秒針の僅かな傾きに感じられるほどの長い年月を。

「別に、感謝されるほどのことをした覚えはないんだがな……」

無反応となった『赤竜機心』ローマン・リアクターを再び懐にしまい込み、クレスは部屋を出る。

鍵を近くを偶々通りがかった獣人の職員に渡し、彼はバベルの階下に降りて、ウラノスに今回の一件についての報告を済ませ、それからカオスのいるファミリアの拠点『時空の狭間』ホームアラモスに帰った。

眷属たる彼の接近を感じ取っていたのか、かの女神は当然のように外で待ち構えていた。

しかも、腕を組んで仁王立ちしている——どうやら怒っているようだった。

「ただいま、カオス」

「おかえり、クレス。——じゃ、なくなつて！ なーんで君は『智炎女神の炬火台』ソセを開放してるのかな!? 地上に戻ってきてたことは知ってたけれど、まさか私のことを放って遠くへ行つて、それでまた何かやらかして帰ってきたんだねエ！ どうせこないだの神意の開放に関わってたんだらう！ これだから君つて眷属は……まあ

良いよ、事後承諾の代わりに何があったのか余さず教えること！  
いね!？」

詰め寄るなり、怒涛のように言葉をぶちまけるカオス。

そこに余すことのない眷属クレスへの愛が含まれていることは疑いようがない。

変わらない主神の様子に「よく舌を噛まず早口に言えるものだ」と感心する一方、クレスはふと考える。

——もし彼女カオスが彼クレスを愛するあまり世界を敵に回そうとした場合、俺はどうするのだろうか？

「……（愚問か）」

彼の中での判断基準答は既に決まっている。

それが自らのためになるなら放置知ったことかする。

だが、最終的に己の邪魔をしようと企んだのであれば——。

その時は、長年の恩を受けた彼女でさえ彼は手にかけるに違いない。

「どうしたんだい、なんだか怖い目をしているけれど……」

彼女を見るクレスの瞳に宿った、一瞬の剣呑な気配。

それを逃すことなく察知したのは、流石主神の眼といったところか。

嘘偽りを逃がさない彼女の美しき瞳に向き合ったクレスは、いつもの不愛想な無表情から頬を僅かばかり吊り上げて、小さく笑いながら首を振った。

「なんてことはない、下らない考え事さ。そら、飯でも食べながら気になっっている今回の一件について話そう。なにせ久々の神殺しだ。それなりの土産話であることは保証しよう……」

——こうして、知られざる英雄譚がまた一つ筆を置かれた。

それは歴史盤の裏側編の一頁、どこにでも散逸している『書き手知らずの英雄譚』の一つ。

それらは後の面倒名を嫌い、自ら名を語らない主人公クレスだけが真実を知



る歴史の断章。

ただ、事情を知る一部の物好きは、その幾つもの短編を一つの本として綴り、表紙に題名を与えた——『とある名無しの英雄譚』と。

即ち、クレスの第二魔法。

フルランドやヴァルトシュティインのように確たる主人公としての名を表の歴史に残していない、されど広大な歴史の裏に細々と点在することが数々の歴史家によって確実視されている、とある未観測の英雄の仮の名。

それこそが彼の持つ唯一の自己の魔法、【シュレディンガー】の意味するところである——。

## 幕間：それは希望が実る霊峰の巡礼

求めるのなら、探すが良い。

この世に数ある霊峰おつぱいの中から、最も自分に相応しい希望おんなを――。



旅を、していた。

古ぼけた焦げ茶色の外套と幾つかの小物に身を包み、人生の最大目的たる迷宮ダンジョンを離れ、クレスはひたすらに長距離を移動していた。

足元はろくに整備もされていない、ただ人の足によつてのみ踏み固められた凸凹の土路。

周囲には見渡す限りの青々とした麦穂が風の誘いに波打っていて、それを狙う小鳥どもがしきりに宙を跳び回っては鳴き叫んでいる。

「ここにはなにもない、だけど全てが揃っている」……なんて小恥ずかしくなるフレーズが似合うような、そんな、どこか牧歌的な春の光景。

その中を歩いていた彼は、己の脚の向かう先に一つの小さな人影を認めた。

「アー、少し良いか？ この先に村があると聞いたのだが、君はその村の――」

「こんにちは、旅のお兄さん！ ところで好きなおっぱいはなんですか!!」

「――ふむ」

どこことなく見覚えのある白髪の子供が出合い頭に発した、衝撃的な問い。

相手によつては「なんだこのクソ生意気なガキは」とも取られるような唐突な問いかけに、しかしクレスの目は正しく、その後ろ育てのバカ親の顔を見抜知つていた。

思い浮かぶのは――口元に逞しい髭を蓄えた、老骨だが屈強な体を

している、性に関してかなり奔放であることが特に定評な、自ら口説いた妻をほったらかしにして他の女に手を出しては「前が見えねエ」となるまでボコボコに躡シバられてかれているばかりの、いつそ清々しくなるほどの好々爺ズ。

それが少年の後ろで、妙に輝かしい笑顔でサムズアップしている……そんな気がして。

「とりあえずお前にその馬鹿な挨拶を教えた爺はどこだ」

クレスは確信した。

間違はなく今回の旅の目的が——あの愚かしい浮気雷爺ゼウが、少年の村にいることを。

同時に決めた。

先ほどふと幻想した爺神のニヤケ面に妙に腹が立ったので、とりあえず後で罰として妻ヘラに報告チクッしてやろうと。

なお、罰は既に執行されていた。

「お、お爺ちやーんっ?!?!」

家の床板をぶち抜いて、その中に上半身が埋められた所謂犬神家状態。

帰るなり、そんな情けない姿を晒していた育ての老神の姿を見て、少年は慌ててその側に駆け寄った。

その理想的な孫（と耄碌した祖父）の様子を家の玄関先に立たされたまま傍観していたクレスに、その惨状を為したこの家の住人が振り返る。

「そんな変態なぞ放っておけベル。それよりも客が来たのだろう、茶を出す準備を——誰かと思えば御身か」

「久しいなアルファイア。地上オラリオで名前が聞こえないと思えば、こんな僻地オラリオにいるとは」

彼が声をかけた、どこか幽世的な雰囲気を漂わせる女性こそはアルファイア。

かつて【静寂】の名を冠し、オラリオに大いなる英雄譚を刻み、そ

して終には闇の歴史を齎さんとした女傑である。

暗黒時代の終わりを経て、主神の下で都合二度のレベルアップを果たしたはずの彼女が何故このような安穩とした場所に腰を落ち着けているのか。

じろりとどこか暗い色合いを含めたクレスの視線に、彼女は肩を竦めた。

「ああ……その健気な子が私の甥でな。親代わりの育て方が余りにも悪いもので、仕方なくここに留まっている。決して怠けているわけではない。それで、御身こそどうしてここに？」

「その神血を買うためだ。定期的に取引している。——さて、いつまでそうしている」

クレスは床に突き刺さった養爺を引き抜こうと懸命に頑張っていた少年をどかして、見えているゼウスの足をむんずと掴む。

そしてずぼっ!! と乱雑に引き抜いた。

もとより超絶残酷破壊衝動女と言われた妻の折檻に耐え得る身体の持ち主である以上、そこまで労わってやるつもりもなかった。

「あ痛っ!?! なんじゃ、もっと丁寧に——っってお主か」

「ああ。変わりが無いようにで安心したぞゼウス。顔を合わせる都度に最低評価を更新してくれる、その情けない姿に安心したよ」

「毎度思うケドお主ワシに辛辣過ぎない? ……それよりも、いつものじゃな?」

「ああ。代金は此処に置いておく」

度し難い変態でも神峰の最高神に変わりはなく、クレスはその神血には相応の価値を認めている。

その対価に相応しいだけの貨幣が詰まった袋を近くにあった机に置いて——中身は現在のオラリオで第一線級と評されるファミリアのおよそ五年分の予算に匹敵する——近くの椅子に腰かけた彼は、アルフィアの甥だという少年が持ってきた茶を貰いながら話しかける。「ありがとう。……しかし、まさかあの老神が直に子育てを行うとはな。下界に降りてくる前はよく無責任に女を孕ませてはほったらかしにしていたと聞いたが、驚かされたぞ。正直今からでも神ヘラに任

せた方が良いと思うが」

「それは私も同感だな。とかくこれはベルの教育に悪い」

「嫌じゃ！　こんなにかわいい孫を引き渡すなぞ例え天地が引き裂かれようと僕は断固抵抗するぞい！　そう、KO☆BU☆SHI☆DE  
！」

「お前が夫婦喧嘩でヘラに勝てるか？　無理だろう」

「無理だな。十中八九我が主神に分がある、賭けてもいい」

「ワシつてばホントどんだけ信用がないの!?!」

そりやそうだろ、とクレスはここで一つ爆弾を投下する。

隣に、というより何故かもう少し彼に近い場所に陣取ったアルフィアの耳に聞こえるように。

「なにせ、子供に公の場で女の乳の好みを問うように育てるくらいだからな?」

「——ほう?」

「あ、いやそれは……ぎやぴいつ!?!」

アルフィア、迫真の福音真拳!

本日二度目のそれは一切合切反論を許すことなく、またもやゼウスを床下に沈ませた。

「お義母さんつ!?!」

「お前もだベル」

「ぎやふんつ!?!」

ゼウスに向けられたものと比べて幾分か手加減された(それでも痛いことには変わりない)ゴスペルパンチが、ベルと呼ばれた少年の頭を正確に捉えた。

あまりの痛さに涙ぐむ少年は、思わず余計な一言を漏らしてしま  
う。

「ひどいです！　お爺ちゃんが、「最近流行の都会での挨拶はこうだ  
！」って言ったのに……」

「少なくとも俺の知る都会オラリオでそんな戯けた挨拶が流行った記憶は一度  
もないが」

「やはり殺しておくべきか」

「殺しちゃダメですよ!？」

薄く開いた瞼から殺意を覗かせるアルフィアに、それでもベルは義祖父を庇おうとする。

その必死さは少年の愛らしい顔立ちも相まって健気なものに見えた。

——親の愛情は子に表れる、と言う。

少なくともこの様子を見る限り、幾分か……まあまあ……恐らく、それなりに……真つ当な愛情をゼウスはこの子に与えていたのだろうと推し量れる。

それを見て、アルフィアは仕方なしと振り上げた拳を下げるのだった。

「……仕方ない、今日の所はこれくらいにしてやろう」

「おい、凄い音が聞こえたが何かあったのか!? ……ああ、いつものか」

ひよこっ、とたつた今農作業から帰ってきたらしい土塗れの男が顔を出す。

クレスはその顔にも見覚えがあった。

少し前に目の前のアルフィアと共にオラリオで暴れようとして、そして何の因果か、ズタボロになって満足げな表情で逝きかけていた所をサラが連れ帰ってきていたザルドという名の男である。

こちらでもアルフィアと同じように、サラ、sブートキャンプ——もとい『<sup>フェア</sup>神の恩恵』任せに陸の魔獣のフルコースを四六時中彼女から食わされた挙句、なんやかんやでかの終末の獣の毒を克服させられ改心したという経歴を持つゼウス・ファミリアの冒険者だ。

全て件の魔獣の肉で構成された満漢全席を前に「食うのじゃ」と言われ顔を青褪めさせていた光景がやけにクレスの印象に残っている。

ついでとばかりに分不相応な『深々層』の肉を食らって腹を下していたことも彼の記憶に残っていた理由の一つであるが、それはさておき閑話休題。

「で、今回はなんでこうなっちゃったんだ？」

「かくかくしかじか、という訳だ」

「……あー、そりゃあ確かにお前の逆鱗に触れるのも無理はない。――

「ちなみにベル、俺は爆乳が良いぞ。いつそこっちの息が出来なくなるくらいに巨大な乳はそりやあもう平らげ甲斐があつてだな、なおかつ中身がお淑やかであれば猶更……」

「死ね」

何故かキメ顔でそう言ったザルドは——やはりゼウス・ファミリアの恩恵は争えないらしい——アルフィアの福音真拳で空の星となつた。

なんで今の話を聞いてわざわざそれを口に出来るのか、クレスにはその頭が理解できなかつた。

——主神に倣つて、上ではなく下で物事を考えているからだろうか？

「おじやーん!」

思わずザルドの消えていった方向へ手を伸ばすベル。

しかし、さほど慌てて探しに行こうとするほどでもないようだった。

どうやらこれがここでの日常的なやり取りらしい。

「……邪魔をした。そろそろ帰るとしよう」

これ以上付き合うのも馬鹿臭くなつたので、クレスはいい加減帰ろうと考えた。

いつの間にか今度は自力で床から這い出していたゼウスを睨みつけ、彼は取引の対価を求める。

「で、肝心の神血を早く出せ。金はもう渡したぞ」

「ふっふっふ……お主だけ逃げようつたつてそうはいかん! 答えよクレス! お主の乳の好みはなんじゃ! ——「くたばれ」——おぐうっ!」

最後と言つたな、あれは嘘だ。

アルフィアの福音真拳で三度沈むゼウス。

しかし何度痛めつけられても女湯の覗きを止めなかつた時のゴキブリのような生命力をいかに発揮して、すぐさま復活して拳撃しつこくクレスに詰め寄ってくる。

「——巨乳か!? 貧乳か!? ペったんか!? 爆乳か!? 美乳か、もし

くは奇乳の類か!? 答えよ! さもなくば今回の取引は無しじゃあ  
!」

「馬鹿か?」

まったく意味のない駆け引きを仕掛けようとしてくるゼウスに、クレスは呆れるばかりであった。

そも、金は既に渡したのだ。

しれっと机に置いた貨幣の袋は回収されており、ゼウスが大事そうに胸元に抱えている。

だというのに品物の受け渡しを拒んで、変な追加報酬を要求してくるとは何事か。

「そちらがそう来るなら、俺としても容赦はせん」

まともに売買の契約を履行しようとしぬい相手に、こうなればいつそ鋼鉄の処女よろしく縛って殴って直接血を絞ろうかともクレスは考えたのだが……

「……!」

なぜかそこには、目をキラキラと期待に輝かせてこちらを見てくる少年の姿があった。

——そこに、何故か昔見た道化の顔が重なって。

「そうだな……」

それは、今は昔。

古の王都ラクリオスで刹那行った、交流。

当時、『神の恩恵』に依らない原始魔法をとあるエルフの吟遊詩人から教わっている最中に声をかけてきた、やけに馴れ馴れしい白髪の男にもクレスは同じ問いをされたことがあった。

珍しく面倒臭さよりも懐かしさが勝った彼は、一息置いて、当時の情景を思い描きながら同じように口を開く。

あの時は、なんと答えたのだったか、そう——。

「——そも、一つの乳に拘る方がおかしな話だろう。全ての乳には個性があり、それはその女の持つ他の要素と掛け合わせることで様々な面を見せ得る。真に平らかなる乳も、天を貫かんばかりに聳え立つ巨峰も、中身が伴えばこそ如何様にも花開く。大事なのは、そこを見



極めることだ」

「誤魔化すでない！ もつと欲望に素直に、正直に語れい！ ——

「福音・二重奏！」——あべしっ！」

単純計算で二乗の威力になったアルフィアのパンチで、ゼウスはザルドの後を追うように吹っ飛んでいった。

残されたベルに、「それはそれとして」と前置きしてからクレスは続きを説いた。

「俺の好みとしては、慎ましやかな乳が良い。大きくはなく、かといって全くの平坦ではない程度で、細身でしなやかな体に控えめに主張するくらいがちょうど良い」

「御身も何を言っている！——福音・四重奏——な!？」

いつの間にかザルド・ゼウスと同じことを話し始めたクレスに、アルフィアは「御身もか」と呆れた顔で四乗轟音福音真拳を向ける！

「しかし クレスには 効果がないようだ……」

「ちいつ、やはりか！」

「——ええっ!？」

祖父もおじさんも何度も討ち取ってきたお義母さんの拳骨が効かない！

自分もよく知る所の一撃を、防御すらすることなく受け止めたクレスの姿に、ベルは口をあんぐりと開けることしか出来なかった。

これまでアルフィアの天下しか知らなかった無知な少年の耳に、先祖からの最後の言葉が厳かに響く……。

「初めは手の平に収まる程度の小さな蕾……それを春の日差しのように優しく慈しみ、時に凍てつく冬の如く激しく揉みしだき、愛を注ぎながらじつくりと育てる……そうすれば、いずれ己にとって最も良い乳へと花開いてくれる。覚えておけ、ベル。女の乳は恋を知り、愛を注ぐことで大きくなるのだとな。初めから完成されたことを前提に語るなどつまらん」

アルフィアの福音真拳を受けてなお堂々たる威容で語るクレスに、じつと聞き入っていたベル。

その頭をぼんぼんと軽く叩いて、彼は隣の、何故か今度は自らの胸

元を見つめているアルフィアに目をやりつつ少年に彼なりの答えを与えた。

「世を知れ、ベル。そうすればいつかはお前にも、お前だけの希望おっばいが見つかるだろう。……ただし、あまり母親アルフィアに負担をかけてやるな」

それで、終わり。

先ほどアルフィアが殴りつけた際にゼウスが落とした神血イコル入りの瓶をさりげなく回収していたクレスは「用は済んだ」とそれを丁寧に懐にしまい込んで、寂れた村を後にしたのだった……。



懐かしい記憶が、少年の脳裏を駆け巡る。

——どうして今、それを思い出したんだろう？

分からないままに、少年は今日もオラリオの風を肩で切って、迷宮ダンジョンへ向かう。

『お前もいつか、望むのならば……』

そう言い残して先に家を発った家族の後を追いかけて。

『ベル、ハーレムを作れい！妻から雲隠れしたワシの夢は、お前に託したぞ！』  
崖下に落ちて死んでしまった祖父の理想を想って。

——全ての答えがそこ迷宮に待っているのだと、なんとなくしにそう思っ  
て。

『双花魔人譚（モンスターム・オラトリア）』編  
絶対至死領域ドウアト・アヌビウム

——深い紫紺の炎に燃ゆる大地。

その場は身が芯まで凍えるほどに寒く、『生』と隔絶された冷気に満ちていた。

生けとし生ける者の存在を許さぬ絶対零度の領域。

満ち満ちる冥府の大気が、転移によりこの階層に訪れたクレスの体温を瞬く間に収奪し——、

「っ——!?!」

驚きに目を見張るも、時すでに遅く。

クレスの足から、地面に立つ感覚が奪われる。

重度の酩酊に陥ったかのような、悪寒伴う謎の浮遊感に襲われる。

そのまま彼は……薄れゆく視界の奥に広がる、遠い闇の向こう側へと意識を手放させられた。

その感覚を、彼は知っていた。

長い冒険の旅路においても片手の指で数えるほどしか味わったことのない、身も心も闇氷の彼方に奪われるような感覚。

即ち、『死』。

今この時において、クレス・カタストロフは間違いなく息絶えたのだ——。

——迷宮第222層、『鏡面世界』。

そこかしこに露出した鏡面水晶という鉱石が煌びやかに輝く美しき階層だ。

出現する主なモンスターは動く鎧騎士こと《ポラー・ナイト》。

天然武器である光の魔剣を振るい、鏡面水晶に攻撃を反射させて敵対者の死角から斬りかかろうとしてくる習性に気を付ける必要が

ある。

その他《アルカンシエル・ドラゴン》、《ソーラー・リザード》、《ウィッチ・サモンバースト》等が放つ光線レイザーもまた気を払うべき攻撃だ。

迷宮ダンジョンの悪意の仕事ぶりがいかんなく発揮された鏡面水晶クリスタライズの配置は幾度となくモンスターの光線レイザーを乱反射させ、いつそ芸術的なほどに緻密な光の檻を構成して侵入者を切り刻まんとする。

クレスがそんな階層に降りたのは、偏にとあるモンスターの出現情報を掴んだからだだった。

種族名を『偽神』。

かつて迷宮内ダンジョンで下界における『死』を迎えた超越存在デウスデアが、その何層にも渡るぶ厚い天蓋によって天上界への帰還の路を閉ざされ、そのまま迷宮ダンジョンに魂を囚われた果てに魔石まくを与えられて迷宮まはに都合の良い下僕と化した元神モンスターであったモノ。

ウラノスからの情報提供討伐依頼を受けて、クレスは万全の用意の下にその偽神デミ・ゴッドの出現箇所デミ・ゴッドに足を踏み入れたのだが——それとほぼ同時に、彼は一切の抵抗を許されることなく死に至った。

その、あまりにも理不尽な画を描いたものの正体とは？

それこそが偽神デミ・ゴッドの最も厄介な特性——『神威顕現』アルカナム・リリスである。

今回の偽神デミ・ゴッドの素材もととなった超越存在デウスデアは、冥府の神アヌビス。

司る権能は『死』。

生ある者から命の熱を奪い、その魂を没薬と共に冥界へと連れていく一神話体系の死神。

それがモンスター化に伴い、地上に降りた神々の盟約など知らぬ迷宮ダンジョンによって強制的に天の力を解放される『神威顕現』アルカナム・リリスを与えられたことで、この第222階層は踏み入れたものを問答無用で死に至らしめる冥府の大地へと変貌していたのだ——いわば、『生命特攻』の領域。

そんな相手を前にしては、如何にクレスとて成す術なく『死』を迎えるのも仕方のないことではあった……。

——しかし、この程度で終われるほど冒険者は終わってはいない。前述した通り万全の準備を終えていたクレスは、「こんなこともあ

ろうかと」と秘策を残していた。

レベルアップに伴う魂の昇華により、ほんの僅かに残された『死』へ向かうまでの一呼吸。

その瞬間に、彼は懐から取り出した『薬』を呑み込んでいた。

主たる素材は、『吸血皇鬼』の処女血。

それと磨り潰した月精石、一角獣の銀血、青い彼岸花を混ぜ合わせ、

金星の光の下にことごとくじつくり煮込んだ特性の魔薬。

その効能はただ一つ——『呪魂創成』、即ち死にながらの死を迎え入れること。

とどのつまり、クレスは吸血皇鬼の眷属として。

不知 死の魔人として、この死の大地を歩む権利を今この瞬間手

に入れた——！

「——カハッ！」

かつ、と目を覚ましたクレスは倒れていた地面から素早く起き上が

り、周囲の様子を伺う。

——気を失っていたのはおよそ5秒ほど、か？

見渡せば、周囲は濃い紫紺色の鬼火に満ちた闇の燎原と化している。

『光の都』であった『鏡面世界』の面影は見るべくもない。

死して朽ちた極光騎士《ポラー・ナイト》の魔石が点々と、うず高く積もった黒塵の中心に墓標のように鎮座しており、鏡面水晶は鬼火の妖しい色を反射してちろちろと冷たい揺光を放っていた。

「……危ない所だったな」

あと少し薬の服用が遅れば、クレスは真の死を迎えていただろう。

一つ上げることにより神への階段を昇ると言われるレベルアップを20回以上積み重ねたこと、そして迷宮という魂すら天界に向かうことのできない隔離領域という空間の特性が功を奏した形だ。

しかし代償として——クレスが胸に手を当ててみれば、心臓の鼓動がまったく聞こえない。

脈がなく、体温もなく、よくよく呼吸してみれば肺が酸素を取り込

んでいないことも分かる。

鏡を見れば、今の彼の肌は間違いなく滑らかな石灰色に染まっていることだろう。

「まあ、良い。——さて、仕留めるか」

クレスは、この身体になって一層強く感じられるようになった『死』の気配の強まる方へと急行する。

その先に立っていた、犬頭がついた人型のモンスターこそが『偽神』アヌビス。

かつてクレスを「死の運命から逃れた異端者」と呼んで襲撃し、撃退・捕縛されて以降は数々の『破壊者』や『殲滅者』の召喚媒体として酷使され、最期には彼に加減を間違えられてぼっくり逝ってしまったという経緯があるのは……ここだけの秘密だが、それはさておき。

そんな過去もあつてか、かの神は当然の如くクレスを恨んでいるように、迷宮によって強く自我を縛られた状態にあつてもなお、彼の姿を認めるなり唸るような遠吠えを上げた。

『UruWooooooNunnnnn——!!』

「やかましい」

アヌビスの全身からはもはや隠す必要のなくなった神の力がオーラのように漏れ出ており、それが常に空間を侵食して、死の世界へとこの場を塗り替えている。

かの偽神が歩く度に『死』の足跡が迷宮に刻まれ、そこに残る残火が徐々にこの地を固有の領域へと上書きしていく。

『生』ある者は一瞬たりとも存在することを許されず、かの神に一瞥されるだけで死に至ることだろう。

この中で自由を許されるのは、正しく死後の世界の住人だけだ。

その一人と化したクレスは、この場に最も相応しい武器を取り出してかの神に斬りかかった。

「——【ネガ・ファトゥム】」

司るは運命属性。

只人が逆らうことを許されざる運命の奔流を切り拓くこの魔剣こそが、その実、かの神の遺骸を素材とした名実ともに神殺しの武器で

あることを知るのはクレスとカオスだけである。

クレスの所有する武器コレクシヨンの中でも数少ない、神に通用する刃。

その理を正しく理解したアヌビスは、己が遺骸尊嚴が凌辱あなされている眼前の事実あなたに打ち震え、また戦慄あなたきながら、怒りと共に千を超える紫の鬼火をクレスの下に解き放つ。

『UruWoooooNnnnnuu——!!』

「原初の火よ、人理の歩みを照らせ。大神より磔刑を受けし貴神あなたに敬意を捧ごう。精神こころ在る限り我が歩みは終わることなどなく、やがて英知の指し示す果てへと至らん——【プロメテウス】！」

対するクレスは、完全詠唱の【プロメテウス】で以てそれら死の絨毯爆撃を迎え撃つ。

爆ぜる紫と赤の連続花火。

『死』の冷気と『生』の熱が打ち消し合う神秘的な光景の中を、疾走するクレスは剣を振るう。

「ふっ！」

『Uruwoonhu!!』

振り下ろされるクレスの魔剣。

迎え撃つはアヌビスの死爪。

神の魂バを幽閉する檻としての役目も持つ肉体は相応の頑丈さを誇っており、確かな衝撃を以てクレスの斬撃を弾いた。

だが、そのまま彼は距離を取ることなく接近戦を選ぶ。

『死』の権能を畏れずに踏み込む彼の選択——肉弾ファイナル・ファイト戦。

そこにこそ彼は勝ち目を見出していたが故に。

「——っ！」

『UruWoo——nnnnuu!!』

始まるは魔剣と鋭爪、柔拳と剛牙、武術と暴力の応酬。

クレスの理を以て振るう武術と偽神デミ・ゴッドアヌビスの肉体スベックが激しくぶつかり合い、階層全体を揺るがす轟音が響く。

一挙手一投足が凄まじい衝撃を生み、上下10階層以内のモンスターは瞬く間に逃げ出した。

20階層以上離れたモンスターの直感にも警鐘を鳴らされ、それよ

り遠くのモンスターたちも、迷宮の中はでなにかしらの異常事態イレギュラーが起きて  
いることを察した。

そんなことはいざ知らず、【禁 忌】と偽神デミ・ゴッドはその渦中にある相手  
のみを意識してその命死を篡奪しあう。

獣頭の威を以て、アヌビス神が強靱な四肢と共に猛る。

黒ずんだ爪による引スラッシュつ掻き、涎でてらてらと輝く牙の噛みつき、千  
年大樹のように太い脚の蹴キックり突き。

その全てが大気の壁を突き破り、連続する破裂音を伴ってクレスを  
付け狙う。

只人と比べて一回りも二回りも筋肉の隆起した体格から繰り出さ  
れるそれらは、魂バの格の違いもあり、触れれば容易くクレスの身体を  
引き千切るは必至。

だが逆に、命中しなければどうということもないのもまた真理で  
あった。

触れれば死に至る冥府アヌビス犬の誘いを、クレスは悉く退ける。

相手が知ればまた怒ること間違いなしだろうが——彼は目前の  
偽神デミ・ゴッドの動きに見知った狼ウエアウルフ人の骨格を重ね合わせて、己の技を適合さ  
せる。

爪がくれば剣で切り結び、顎アキトがくれば顎下を拳で打ち抜いて強引  
に閉じさせ、後脚による蹴りがこようとすれば残る軸足を引つ掛けて  
転倒を狙う。

そうして相手の呼吸に合わせながらも、クレスはその間隙に的確に  
反撃を差し込んでいく。

爪を当てるために腕を伸ばさうものなら、戻されるタイミングで臍  
に傷をつける。

噛みつきを空振りにさせれば、その顎が完全に閉じきる前に僅かば  
かり側面を叩いて歯同士をうまく噛み合わなくさせる。

蹴りを繰り出してくるものなら、回避し擦れ違うと同時に肉を削ぎ  
取る。

堅実に、しかし着実に敵の力を削ぎ取っていく立ち回り。

それこそがクレスが師スカサハより賜った妙技の一つ、魔獣狩りの





——しかし、クレスは笑っていた。

「漸くか」

放たれる絶望の大技。

だが、彼は既にそれを識っていた。

およそ200年の周期で発生する迷宮の災厄の一つ……冥府神アヌビスの偽神を、彼は400年前に一度討伐している。

無論、クレスはそれつきりで考察を終わらせることを良しとしなかつた。

迷宮から与えられた魔石を核とした身体を壊され、今度こそ天上に還ろうとして——再び帰還を遮られ、迷宮に取り込まれ、意識を屈服させられて子供として産み直される。

その一巡の中で、彼は初見でなくなった偽神の倒し方を考えていた。

迷宮に大半の意識を封じられ、ただ無作為に神の力を振り撒くばかりの存在となった偽神。

それが有する切り札、『神威顕現』の最大開放——しかし、見よ。大技を放つ偽神は今、己が支配領域の中央で佇むばかり。

つまり、反動——圧縮した力の解放という一連の流れにおいて今のモンスターは動けないでいるのだ。

そう。

つまりは自らの存在すら危うい今こそ、かの神を屠る絶好の大隙でもある——！

「——堕ちたる神霊、なにするものぞ」

狙いを定めたクレスが、『ネガ・ファトウム』を投擲する。

元来アヌビスの身体であった魔剣は、それが作り上げた死の領域に刃を突き入れてなお崩壊することなく飛翔し、錨としてアヌビスの身体をその場に縫い留めた。

そして、クレスは本命の一撃を開帳する。

取り出したるは朱色の槍。

迷宮第200層の主『レヴィアタン』の遺骸から削り出された魔槍の柄を逆手にしつかと握りしめ、己が身体全体を弓に見立てて大きく

振りかぶる。

——ことこの場において、小細工アレンジは不要。

魔法の歪みバグを利用した空間ごとの大破壊をもたらす『奔り穿つ影葬の槍』ゲイ・ボルグ・アシッドなどやり過ぎにも等しい。

故に彼が選んだ、本家本流の絶死の一撃。

一撃目で敵を時間軸・空間軸ともにその場に縫い留め、本命の二撃目で確実に仕留める。

それこそが本来の、神スカサハより彼が継承した『投槍の妙技』。

「我が神殺しの妙技、とくと御覧じろ——！」

絶技、解放。

クレスの練り上げられた五体から、影を置き去りにした光の槍が解き放たれた。

ネガ・ファトゥム

魔 剣の斬り開いた軌跡を寸分変わらず、一直線に飛翔するその槍の

本領こそは——、

『貫き穿つ——死翔の槍』オルタナティブ！」

魔槍にして神槍の一撃。

その刃が、アヌビスの魂を封じていた魔石を穿つ。

巻き起こる光の爆発。

肉体の牢獄から解き放たれたかの神の魂が天上に還ろうと、光の御柱を形作って——そのまま迷宮ダンジョンの天蓋へと吸い込まれていく。

その、クレスがこれまでに何度も目にした光景が再現される。

そうして数百年の時を経て、再びあれは使い回されるのだ……他の

《偽神》デミ・ゴッドのように。

「……しくじったな」

濃密な『死』の気配が晴れていく中、手にした報酬を弄びながらクレスは不甲斐ない己自身に舌打つ。

哀れな神の末路などには露ほども同情せず、《デミ・ゴッドの神核》——入手手段がこれしかない、魔劍《ネガ・ファトゥム》の補修材——を懐に仕舞いつつ、彼は内心に詰問する。

既に完成されていた『死』の世界へみすみす飛び込んでしまった自らの不覚。

それが招いた代償は、クレスをしてそれなりに大きなものだった。『生』からの解放——裏を返せば、『死』という停滞に陥ったクレスの身体。

無論、死ぬ手段もあれば生き返る手段も彼は用意している。

しかし、そのためには『神の恩恵』に頼らない前時代的な——中々に面倒な儀式を年単位で幾つも執り行う必要がある。

しかもそれらのほとんどが『地上で行うことが求められる』となれば猶更、彼が顔を顰めるのも無理はなかった。

「カオスあたりは久方ぶりの長期休みだと大喜びするのだろうか……こうなつては仕方あるまい」

普段通りの一日の帰郷では済みそうにない今回の休みに、「致し方なし」とクレスは自戒する。

迷宮はいつだって、油断した者を悪意を伴って飲み干さんとしているのだから。

その慢心の罠に引つ掛かった己こそが一番悪いのだと分かっているからこそ、冒険の遅滞という未練を切り捨てて、彼は潔く地上へ戻ることを選択する。

——見渡す限りに残る、冥府神の残響。

骨より白く塗り潰された無味乾燥の『死』の砂漠。

それは、見る者の意識を遠く彼方へ吸い込んでいきそうなほどに——いつそ虚しくて。

兵どもが夢の跡、『生』ある者がいずれは還る虚無を、未だ『冒険者』であることを止めるつもりのないクレスは後にした。

向かうは地上。

最新最先端の冒険譚が紡がれる地である、迷宮都市オラリオ。

そこに待ち受ける、ある一つの眷属たちの物語——【魔人の神聖譚】の存在を、彼は未だ知らない。

## 恩恵封印

巨塔バベルの地下深く。ウラノスの坐する『祈祷の間』同様、迷宮に杭を打つかのよう<sup>ホーム</sup>に設けられた拠点『時空の狭間』へ帰還したクレスは、これでもう何度目になるか分からない主神からの抱擁<sup>ハグ</sup>によって出迎えられた。

身長差によつて彼の胸元から顔を出す形になったカオスへと、クレスはいつものように声をかける。

だが、平常と変わらないクレスの態度と比べて、彼女の様子は普段と幾分か違つていて——？

「ただいま戻つた、カオス。急な帰りですまない」

「おかえり、クレス君。それにしても——ふふっ、おかしなことを言うね？」「急な帰りですまない」だなんて、いやいや全然構わないに決まつているじゃあないか！ というより寧ろ全然ウエルカムさ？

だつて愛しの君が帰つてくるんだよ！ なら主神の私はいつだつて全力全開で大歓迎に決まつてるじゃあないか！ まつたく君つてやつは私たち神の『愛』というものを今一ツ理解し切れていないところがあるねエ、良いよ。何度だつて教えてあげようじゃないか——。

——例えば下界の子供たちは「海より深く山より高い」なんてよく言うけれど、天上の存在<sup>デウスデア</sup>たるところの私たちの愛はそんな矮小な表現じゃア到底図り切れないどころか下界の構造と比較できるほど矮小な感情じゃないことをいい加減理解すべきだと私は思うよウン。この『愛』つて感情はその他のものと比べて一線を画すどうしようもなく御し難いじゃじゃ馬なんだよ？ 古来「人は『愛』に生き『愛』に狂う」なんてよく詠み詩<sup>うた</sup>われていたかは君もよく知るところだろう。永い時を生きる神々<sup>私たち</sup>にとつてもそれは同じさ。

イヤ、むしろ下界の君たちが思うところの愛よりも、私たちの持つ所の愛<sup>これ</sup>はずつと強いと言えるねエ……。なにせウン千ウン万年が一瞬に等しい神にとつて、『愛』とは究極的に一義的な『指針』に等しい。ありとあらゆる娯楽や興味を消費し探求し尽くした先に残る唯一に

して無二なるもの。それが自己の他に存在する他人への『正』なる執着だからさ——『復讐』もそれに近しく真逆なる感情<sup>もの</sup>として有名だけれど、あいにく私たちは復讐者<sup>かれら</sup>ほど真面目で純粹な存在で在れないからねエ、君も幾人か具体例を知つての通りサ。ははっ、それは兎も角——だって、自分という存在や世界の法則<sup>ことわり</sup>はいくらでも哲学的に探究することは出来るけれども、『他人』ばかりは己の思考だけで完結させることがどうやったって出来ないんだもの。雑に言えば、いくら掘つても尽きない金鉱脈みたいなもの、それ一ツだけを追い求められればずっと自我を保つていられる拠り所……ウン、『生き甲斐』かな？ それ<sup>な</sup>が神々が君たちに見出す所の『愛』ってヤツさ。

なにせ自分<sup>かみ</sup>という一つの完成形として生まれながらも感性<sup>なかみ</sup>は下界<sup>きみ</sup>の子らに近い私たちは、意外と精神構造が脆くてね？ 並大抵のことはこの瞳一つで見透かしてしまえるのさ——子供たちの嘘偽りと同じように自分のことですらも。そう、君たち向けに括弧つけて言うところの『欲<sup>パラサイトシーイング</sup> 視<sup>デヒルアイ</sup> 力』改め『愚道者』だね。既に完成済で突き詰めるところのない私たちは自己探求を卵の殻を割るより易く済ませられるけれども、それはつまり自己の限界を早く認めてしまえるということなんだよ。

分かり切った神生つてのはそれ即ち終わり切った神生に等しい。だからこそ私たちは『未知』を、同じ『完成<sup>終わ</sup>』を持つ神々なんてポイツと捨てて下界に降り立つワケさ。私たちとは違って自己の内に留まりきる所を知らない傲慢で強欲な、羨ましい限りの可能性を持つ君たちに執着<sup>不</sup>したくなる。隣の芝が青く見えるように子供たちは私たちの完成<sup>不</sup>を羨むけれども、その実私たちこそ、君たちの未<sup>不</sup>完成<sup>滅</sup>をそれこそ宇宙を灼いてしまうほどに強く熱く恋焦<sup>滅</sup>がれるほどに『愛』しているんだよ？

確かに私は地上に降りてからこれまで他の女神たちのように——  
国一ツや大陸一ツ、あと星一ツなんてのもいたっけ？ まあいいや——  
ナニカを滅ぼしてまで君を手元に置いておこうなんて馬鹿げたことをしてかしたことはないけれどね。だって、本当にいい女神<sup>おんな</sup>つてのはそんな他人に迷惑をかけるようなのじゃあなくって、お家にドンと

構えて相手の好きな味付けのお味噌汁を炊いてお淑やかに待っているような良妻賢母だからって天照大神ちゃん家の分け御霊ちゃんを教えてくれたからねエ。

「だけどさクレス君？ だからと言って私の『愛』がそんな節操のない女神たちと比べて劣っているだなんて思われているんだとしたらそれは心外だよ？ 表に出さない分だけ、私は愛情をこの胸の内にたっぷり溜め込んでいるのサ。ほら胸を触ってみると良い、分かるだろう、私という女神の内に脈打つこの混沌が——熱く、甘く、重く……濃厚で、芳醇で、照って、硬くて祝いで滾って迸つてとめどなく狂おしくて透き通るほどに純粋な『想い』——それが私の、私なりの、普段は決して誰にも見せない『愛』なんだって、いい加減理解してくれても罰は当たらないと思うけれど、そこんところ君はどう思う？」

「長い。いったいどうした？ 三行で纏めてくれ」

「急に感じてた君の『神の恩恵』が変質したかと思えば珍しく3か月足らずで帰ってきたものだから、心配で心配でたまらないんだよ！」

「そうか、悪かった」

ギョウウウウつ、といっそう強く抱き付き始めた主神の身体を支えながら、軽く謝罪の言葉を述べたクレスは拠点のリビングまで足を運んだ。

そこで離れて対面へ座るように促すも、ちよつと魂の様子が変わった眷属のことを案じて決して離れようとしないう彼女と仕方なくソファーに隣り合わせで座って、彼は大まかに今回の経緯について語り始めた。

「ウラノスの依頼もあって偽神を倒してきた。素体は冥府を司る女神アヌビスだが、かの神固有の領域に不用心に脚を踏み入れたせいで死んでしまったな。仕方なしに『鬼化霊薬』を使った。一応治験は終えていたからな」

「そうかい、あの子の血を……そのせいなんだね、君の心臓の音が止まって聞こえるのは」

「ああ。全ては俺の気が緩み過ぎていたが故の過ちだ。しかし、こうして生きて帰れたんだ——次はない」

くつついたままのカオスは、クレスの胸にそっと恋人のように耳を添わせる。

普段ならばそこから感じられる、活火山のように激しい心臓の脈動はない。

まるで伽藍洞のように静かになってしまった眷属の身体。

——しかし、その奥には未だ確かに、燻る灰の如き魂の熱があることもまた彼女は感じ取っていた。

「俺自身の咎だ、今回のことは甘んじて受け入れよう。だが何度も同じ過ちを許せるほど暇ではない。次こそは必ずや、油断も隙もなく奴をこちらの意中に嵌めて討ち果たす」

そう語るクレスの顔に宿るのは、ただ偏に自らへの叱咤一色だった。

下界の者たちを侮っているが故の、上位存在の怠慢にして傲慢。

「そこをつけば恐れるに足らず」と判断してしまっていた自身の慢心をこそ、クレスは猛省していた。

次こそは、もうこのようなことがないように……一分一秒とて惜しい迷宮攻略の時間を奪われないためにも。ついで主神を悲しませないためにも、クレスは頭の隅で次へ向けて思考を練っている。

涙をクレスの胸元で拭う彼女の頭を撫で擦りつつ、彼がこれまで弑逆し、そして迷宮に取り込ませてきた神々の司る概念を反芻する——もう、彼らに何をもさせることなく、クレスの側から一方的に仕留められるような計画を考える。

「心配させたことは謝罪する。次からは最初から俺の持てる全てで以て奴らを迎え撃ち、滅ぼし尽くそう。だから泣き止んでくれ、カオス」  
「うん、うん、うん……」

「故に、今必要なのは現状確認だ。俺は今、どうなっている？」

「……ふー、分かったよ。ううん、ちよつと待っててね……」

シャツを脱いで横になったクレスの上に、カオスが「うんしょ」と馬乗りになる。

そこへ己が神血を垂らして恩恵の施錠を開放した彼女は、神々の持つ直感で察した眷属の異変をその目で直接観察した。



「っ、これは……」

「カオス」

絶句。

もう千年も付き合っただけの久しい眷属の見せる『未知』なる光景に主神が戦慄していると、ふと示し合わせるかのようにクレスがその名を呼んだ。

その声に含まれているのは——全福の信頼。

「我が主神ならば一切の嘘偽りなく自身の現状を開示してくれるだろう」という眷属の想いに応えて、彼女は己が瞳が告げるままに、眷属の背中の真実をその麗しい桜色の唇から説明することにした。

「……安心しなよ、クレス君。結論から言うかね、まあ、今の君の状態はそんなに悪いものじゃあない。今の君の中では私の力とサラちゃんのが相克している……打ち消しあっている、と言うべきかな。君とこの強靱な『器』の中で、私と彼女が呪いあつてて上手くバランスが整っている。イメージとしては、アー、太極図みたいなものかな」

「なるほど」  
自身の与えた恩恵を通じて、神眼を以てクレスの魂を観察するカオス。

彼女の視界に映るのは、白き神デウスデアの力と黒き魔モンスターの力が互いに鎬を削り合う光景だった。

互いに暴風の如き猛威を以て相手の力を削ぎ落とし、屈服させんとする祝福と呪詛しのの闘しのぎ合い。

なお恐れるべきは、その力の衝突を魂魄に収めながらも苦悶一つ浮かべないクレスの胆力か。

一つ誤れば内側から崩壊・爆発四散しそうなエネルギーの衝突を、本能的に御しながら『器』として機能している。

そんな自身の眷属の強靱さに、カオスは安堵半分呆れ半分の表情になる。

だが、こんな不安定な代物を「今は大丈夫だし、なにより面白そうだから」などと放っておけるほど彼女は神として真面目ではなかった。

カオスはすぐさま顔を引き締めて、自身の決定づけた神託を告げた。

「だけど、このままと言う訳にもいかない。……良いかい、クレス君。極めて残念だけど、今から君の恩恵を封じるよ。君の昇華レベルアップを一時的に全て対呪詛アンチ・カースに振り分ける。ただでさえ君の『神の恩恵』フェアルナは厄介なものを2つも抱えているんだ、それでもしないとサラちゃんハイ・カースの上位呪詛にその内押し負けてしまっただろうからね」

「そうか、了承した。貴神あなたが言うのならそうなのだろう。疾くやつてくれ」

カオスの授けた無慈悲な決定に、されどクレスは一切の異を唱えることなく頷いた。

これでまた迷宮ダンジョンが遠ざかる……その悔しさが彼に一粒もないと言え、嘘になる。

だが、その非が全てに自分にあることを彼は既に受け入れている。

それに、自分よりも恩恵の取扱いに詳しい神の言葉なのだ。

素直に受け入れるより迷宮ダンジョンに戻る道が近づくことはない——それを悟っているからこそその、素直な納得。

代わりにと己が不甲斐なさに恥じ入らんと拳を秘かに握りしめるクレス、その眷属の心中を見通しながらも、カオスは神アルカナムの力耀くその五指を躍らせた。

——蝶が繭へと戻るかのように、クレスの背中から恩恵の光が鎖されていく。

そこへ刻まれた膨大な歴史の力の潮流が、ベクトルを変えられて対呪詛アンチ・カースへと効力を変えていく。

念入りに十分ほどの時間をかけて、カオスは見事その目的を果たしたのだった。

地上に降りた最古の女神の石柱として、如何なる神々よりも恩恵フェアルナの扱いに詳しいと自負する彼女の手によって施された堅牢な施錠ロック。

百重千重の神意で以て形作られたそれは、確かに眷属の魂を蝕むハイ・カース上位呪詛を封じ込めることに成功したとカオスは見て取った。

「……ふむ。退いてくれカオス。今の身体の調子確かめたい」

「えー、どうしようかな？　だって今の君は久方ぶりに一般人くらいの力しかないんだよ？　このまま組み敷いちやつて愛を確かめなおすってのも私的にはアリかなーって、きやうん!？」

「馬鹿なことを言うな」

手をわきわきとさせながら急にヘンなことを言い出した主神の下からするりと抜け出し、改めて只人として地面に立ったクレス。

——嗚呼、その身体のなんと言うことを聞かぬことか。

ただ呼吸するだけで、灰が鉛のように重い。

腕や足は骨に棒を差し込まれたかの如く固く、視界も光が幾分か遮られたかのように暗く見える。

これが冒険者としての力を失った代償か——このような状態で『■の■■■』として戦っていたかつての自分が嘘であるかのように思えるほど、クレスは己の身体が己のものではないかのような感覚に襲われていた。

レベルアップ  
昇華の際に伴う全能感とは真逆の、倦怠感。

「これは慣れるまでに時間がかかりそうだ——そう思いながら、クレスはカオスから離れるようにして別のソファアへと改めて腰掛けた。

「暫くはこの身体との付き合い方を覚えるまで療養リハビリだな。解呪の儀式を始めるのはそれから、か」

現状のクレスの力量は軽く見積もって、レベル5から6程度。

物理法則すら突き破れない肉体の脆弱さを改めて噛みしめながら、彼はこれからの行動指針について、眷属に距離を取られて項垂れる己が主神に打ち明けた。

「さてカオス。御身のことだ、既に分かっていると思うが俺はこれから暫く地上で動く。サラの呪血を解くにあたっては、どうあっても日の光による『禊』が欠かせないからな」

「!! ——それじゃあー!」

「ああ。解呪の儀式を完遂させるためには、どうしても時間がかかる。その間に持て余す時間も出るだろう。その余暇は全て御身の意のままに使う」

そのクレスの宣言は、ずーんと遙か地の底へと向けられていたカオスの機嫌を180度転換させるに足るものだった。

「すぐさまびよこん！ とソファアの上で跳び上がった彼女は声を弾ませながら彼に向けて顔をほころばせた。

「やったあー！ うふふつ、それは嬉しいねエ！ ……いや、本来喜ぶべきことじゃないのは重々承知の上だけど、それにしても眷属の久々の長期休暇ともなれば主神にとってはこの上ない喜びだよー！」

「構わん。たまにはこんな主神おや孝行も良いだろう。最も、そこまで多くの予定を設けられるわけではないが」

「ふっふーん、なアに構わないとも！ その分一分一秒君の側にいる時間を噛み締めるだけだからね！ さーてどうしようか、こういうこともあろうかと色々計画を練ってはいたんだけど…：…そうだ！

知ってるかいクレス君、最近数年前からガネーシャ君の所で『怪物祭』なんて催し物を始めてね、そこが絶好のお出デーかけト機会チャンスと有名なんだ！

運よく直近のチケットもあるし、まずはそこへ一緒に行こうよ！」

『怪物祭』？ ……ああ、前に聞いたことがあったな。モンスターモンスターファイリアを使って行う調教タイム・ショー興行か。良いだろう、俺も調教はあまりしたことがない。興味がある。後学のためにも是非観覧させてもらおう」

なお、ここでいうクレスの調教とは、竜騎士ドラグナーの如くモンスターを相棒として颯爽と駆る英雄譚のようなものでは断じてない。

『ゴールデン・ワイアーム』の宝ストレージ・オーガン胃袋を無理矢理抉じ開けて金属精錬の道具にしたり、一つでも首が残っていれば他の首を無限再生させる『エイトヘッド・スネーク』に魔石を延々と食わせてその顔に宿る魔眼石を一度に大量に採取したりするような、彼らによる被害者でさえドン引きするような血生臭い『利活用』である。

その眷属の行いを少なからず知るところのカオスは、苦笑いでクレスの真剣そのものと言った顔を見ていた。

「そーいうんじゃないんだけどなー……」

「分かっている、もちろん御身を楽しませることが主目的だとも」

「あー、うん、まあ……よーし、ならまあいつか！」

だが結局、自身の楽しみが一番とばかりに彼女はクレスの勘違いを

訂正することを止めた。

よっぽど人道にもとる行いに手を染めているのでなければ、彼女はその他の神々と同じく眷属の行動を全肯定する女神色ボケであった。

「では当日を楽しみにしていてくれ。俺は暫し外へ出て、ロイマンに今回のことを話してくる」

「良いよー? と、そうだ。ちなみに食材の買い足しはいらないよ? ちやうど彼らが次の一週間分を買い込んできてくれ——あ、戻ってきたみたいだね」

そこへ、ガタゴトと玄関から荷を運び入れる音が響く。

本来であればクレスとカオスしか——ウラノスは言わずもがな、ロイマンは権限があるとはいえ好き好んで足を運ぼうとしない——踏み入ることのない『時空の狭間』。

彼らの前に姿を現したのは、見覚えのある二人の男女だった。

「——む。戻ってきていたのか? 随分と早いな」

「おう、おかえりクレスの旦那。なにかあったのか?」

姿と気配を絶つ『透明外套』イグノタスマンメントを脱いだ彼らの正体は、一方が黒き装束ドレスに身を包んだ女であり、一方が同じく漆黒の大兜と鎧に身を包んだ大男であった。

その正体こそはアルフィアとザルド。

前者は自ら墮ちようとしていた所をクレスによって導かれ、後者は何の因果かサラに目をつけられて死にかけていた所を救われた、前時代の遺物にして残響である。

クレスたちによって命を繋がれ、また捨て去っていた理想英雄願望を取り戻した彼らは、個人的な事情によって少しばかり辺境に離れていた後、このオラリオへと戻ってきて再び冒険者家業に身を賭していた。

とは言え、闇時代の象徴として一度君臨してしまった彼らの存在は依然として公に晒せるものではない。

表向きには凡百の一つに過ぎないカオス・ファミリアに一時の眷属として仮契約している二人は、実はこっそりとここに設けられている迷宮第77階層直結の転移用魔道具マジックアイテム（クレスの転移魔法を魔道具に落とし込んだもの、推計二兆ヴァリス）を利用して迷宮ダンジョンに出入りし

ているのだった。

「色々あってな。暫く地上こごに居ることになった」

「そりゃ珍しいこともあるもんだな。……ところで、今回はあの女は  
いないのか？」

「サラのことなら、今回は迷宮ダンジョンに残っているぞ。一応誘ったが、なん  
でも「面白い食材を発見したのじゃ」と言っただけで聞かずに済ませな」

普段はむしろ彼女の方から「地上に行きたい」と言っただけでやまないサ  
ラがクレスの誘いを蹴ってまで迷宮ダンジョンに残る理由——それはむしろん、  
『食』の探求のために他ならない。

厨房にて鍋の中身に真剣に目を凝らしたまま、まったく彼に視線を  
寄せさなかつたサラの語りがクレスの脳裏に鮮明に思い起こされる。  
『『ダークプリンガー』。お前たちの知る所で言うところ……ウオーシヤド  
ウの上位種だな』

「ウオーシヤドウ？ 食べるのか、あいつが？ いや確かに『食べる』  
だけなら出来なくもないが……？」

ザルドはかつて食べたことのあるその味を思い返し、顔を大きく顰  
める。

ウオーシヤドウの落とす『爪』は剣の代理にもなり得るように、鋭  
利で金属的な質感を持つ。

決して食べられない代物ではないが、それはその辺りに落ちている  
土を強引に水で流し込むことに等しい。あくまでも臓腑に流し込め  
るだけで、特別なスキルでもなければ消化されることなく排泄される  
だけの代物だ。

そんなものを食材と呼ぶことは到底受け入れがたいとばかりに渋  
い顔をする彼に、クレスはもう少し詳しく説明してやることにした。  
「らしいぞ。なんでも食べると「虚無っぽい味がするのじゃー」とか。  
俺も実際に喰ったわけじゃないから、具体的な味を教えることは出来  
んが」

「イヤ、虚無っぽい味ってなんだよ」

「俺に聞くな」

「そうか……」



だけのことだろう。それに……その昔、恩恵もなしに戦った英雄たちは『神の恩恵』<sup>フルナ</sup>がなくなるとも今で言うところのレベル5、6はあったそうだ。ならばこの御方がそうであってもなんら可笑しくはなからう」

「お、おう。そりゃそうだが、だからって一々殴んなよ……」

恨めし気なザルドの訴えを黙殺し、アルフィアはクレスに鋭い目を向けた。

彼らの関係性は変わらず、女王とその召使いのようなものであるらしい。

「それで？ なにがあつたかは知らないが、戻れるのだろうか？」

「もちろんだ。ただ、その為には幾分か厄介な手順を踏む必要があつてな。そのために地上に居ることが必要、という訳だ」

「そうか……なにか私たちに助力できることがあれば遠慮なく頼れ。この身体は御身によって救われた、迂遠ではあるがその木偶男もそうだ。返し切れないだけのこの恩を少しでも返せるのならば、惜しむことなどないにもない」

「おうともさ。俺だつて旦那には恩を感じてる。なにせ俺が喰ったベヒーモスの肉はほとんどアンタが取ってきてくれたって話だからな。ただ救われただけじゃなくて、今もこうして武装に拠点と、色々提供してもらってる。返せるもんはキツチリ返さなきゃ、元ゼウス・ファミリアの名が廃るつてモンだぜ」

そう協力を申し出てきた彼らに、クレスは「ならば」と遠慮なく頷く。

なにせこれから解呪の『儀式』を執り行うにあたり、少々の人手が必要だったからだ。

その中でも特に、元大派閥である二人の人脈は大いに活用できるだろうとクレスは踏んでいた。

「そうだな。欲しいものは色々ある……だが、その中でも最も欲しいのは『情報』だ」

「情報？」

二人と一柱が傾注する中、彼は今回の『要』となる最大にして最難の要素について厳かに告げた。



「そう、『精霊』の目撃情報だ。神々が盟約によって天上アルカナムの力を十全に振るえないこの下界において、それに次ぐ力を持つ奴らの力こそが今の俺には必要だ」